ギンガ団員、ガラルにて

レイラ(Layla)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やりのはしらの最終決戦、巻き込まれ時空の隙間に落っこちたギンガ団の少女。

落ちた先は並行世界のガラル地方。元の世界に戻るため、ジムリーダーとして暗躍する。

新世代のジムチャレンジャー、無敗のチャンピオン、近付くブラックナイト。ガラル地方はこれから時代の転換点。

彼女は成長しながら、元の世界に戻ろうと画策する。

３／１８追記

白川（@ｓｉｒｏｉｒｏ＿ｒｉｖｅｒ）様からイラストいただきました！

ありがとうございます！

目次

1―始動 1
2―ｖｓマクワ　入れ替え戦① 3
3―ｖｓマクワ　入れ替え戦② 9
4―じならし 15
5―ジム運営 21
6―ｖｓノマ　格付け 26
7―これから 32
8―スパイクタウンのパンク兄妹 38
9―ｖｓネズ　練習試合 42
10―宝物庫襲撃 50
11―開会式、ジムチャレンジャーたち 55
12―ターフタウン、邂逅 61
13―忘れられない日 66
14―翌日、それから 70
15―ラテラル遺跡襲撃 74
16―ジムチャレンジ① 80
17―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ① 85
18―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ② 92
19―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ③ 99
20―バウタウンでお食事 106
21―ｖｓルリナ　メジャージムリーグ④ 112
22―ｖｓルリナ　メジャージムリーグ⑤ 118
23―バウタウンでお食事（おかわり） 123
24―前夜 127

25―ｖｓキバナ　メジャージムリーグ⑥ 131
26―ｖｓキバナ　メジャージムリーグ⑦ 136
27―ｖｓキバナ　メジャージムリーグ⑧ 142
28―ジムチャレンジ② 146
29―ジムチャレンジ③ 152
30―ジムチャレンジ④ 157
31―ジムチャレンジ⑤ 164
32―後日　／　ＸＸ―迷子 175
33―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑨ 180
34―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑩ 186
35―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑪ 191
36―野蛮　ｍｅｅｔｓ　天才 202
37―ｖｓ■■■■感性ｖｓ理性① 209
38―ｖｓ■■■■感性ｖｓ理性② 214
39―ｖｓ■■■■感性ｖｓ理性③ 223
40―夜明けの歌 234
41―ガラル地方で考え中 238
42―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑫ 245
43―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑬ 250
44―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑭ 257
45―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑮ 262
46―サイトウという少女 277
47―ビューティフル 285
48―センチメンタル過剰 294
49―ｖｓヤロー　メジャージムリーグ⑯ 299

50―ｖｓヤロー　メジャージムリーグ⑰ 307
51―ｖｓヤロー　メジャージムリーグ⑱ 315
52―半透明少女関係 322
53―ヒミツガール・トップシークレット 327
54―幸福のしっぽ 332
55―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⑲ 337
56―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⑳ 345
57―ｖｓネズ　メジャージムリーグ☒ 352
58―ｖｓネズ　メジャージムリーグ☒ 358
59―ｖｓネズ　メジャージムリーグ☒ 368
60―罅 378
61―新しい、いのち 382
62―キルクスの母 389
63―決行 393
64―鋼の精神 399
65―徹底抗戦 403
66― 409
67―幻に??????よろしく 415
68―努力の果てに 422
69―それすらできない 429

1―始動

「カシワさん、今までありがとうございました」
廊下に少女の声が響く。声の主、ルリミゾはマイナーリーグ落ちしたジムの期待を背負う超新星ジムトレーナーだった。
ここガラル地方では、ジムリーダーは16人存在している。上位8人で行われるメジャーリーグと、下位8人で行われるマイナーリーグがあり、日の目を浴びるのはほとんどメジャーリーグの8人だ。ガラル地方で最も強いトレーナーを決する「チャンピオンカップ」の開催後、メジャーリーグの下位2人とマイナーリーグの上位2人の入れ替え戦が行われる。明後日はその入れ替え戦だ。ノーマルタイプのポケモンと心を通わせるカシワは、入れ替え戦に出場するマイナージムリーダーの1人だった。
「どうしたんだルリミゾ、まだ残っていたのか」
唐突な礼に意図が汲み取れない。
ルリミゾはシンオウ地方出身のジムトレーナーだ。彼女がシンオウで培った経験・戦術は、マイナーリーグで低迷していたカシワに大きな変化をもたらし、結果としてカシワはリーグ戦を11勝3敗で終え、2位で入れ替え戦に出場することができた。
練習試合ではなんとか勝ち越せてはいるものの、ほとんどカシワと変わらない実力を持った次期ジムリーダー筆頭候補だ。今日は調整のために手合わせをして、彼女は遅くなる前に帰ったはずだったのだが。
「隠れ蓑としてとっても便利でしたから、そのお礼です」
「そろそろあたしも動こうかなと思って」
「話すのもこれが最後ですし」
続けて放たれる言葉に、ますます理解が追いつかない。
「ボケっとしてないで、この子の目見てください」
少女の手元から出た存在と、目が合った。

「さよなら」

翌日、ガラル地方の話題は一色だった。

【ジムリーダー、入れ替え戦前日に意識不明で発見される】

マイナーリーグのジムリーダー、カシワがトレーニング施設の廊下で倒れているのが発見された。彼女は意識不明に陥っており、原因は不明だという。入れ替え戦に臨める状況ではなく、話を聞いたルリミゾが代理での出場を委員会に申し出た。顔を涙で濡らしながら訴える姿は多くの人々の記憶に新しいだろう。

委員会は審査の後、ジムトレーナーのルリミゾを代理で出場させることを許可した。彼女がバッジを8つ所有していること、ジム交流戦の成績、その他大会での成績を考慮しての例外処置だという。彼女にとって、カシワはシンオウから越してきた彼女を迎え入れた恩人だっただけにそのショックは計り知れない。

「突然のことで戸惑いを隠せません。本来出場すべきだったカシワさんの名に恥じないようゼンリョクで戦わせていただきます。彼女の意識が1日でも早く戻るよう、戦いで示します。」

と涙を流しながらコメントを残している。

2―ｖｓマクワ　入れ替え戦①

「ありがとう、ユクシー」

名を呼び、感謝を伝える。抱いた手元で撫でれば嬉しそうにしている。ジムリーダーに相応しい素晴らしい人間だったと思う。バトルはルリミゾが実力を隠していたため拮抗していたものの、人格面では非の打ちどころがない恩人だった。

カシワについて、ルリミゾはそう評価を下していた。シンオウからきた自分に住居を、そしてジムトレーナーの地位を与え、後任として指名していた。だからこそ、一時的に意識不明にした。自分がこの地方でジムリーダーを務められないことなどわかりきっている。

「必ずうまくやるわ。今は眠っていて」

この地方のジムリーダーは教育者であり、選手であり、模範だった。ジムの運営者であり、チャンピオンカップの挑戦者であり、大勢の観客の前で名に恥じない試合をしなければならない。社会と対立するような組織に属していた（今も属しているつもりではあるが）自分がそんな人間のフリをしていても、いずれボロがでる。名声を持ちながら裏で悪事に手を染められるような人間はごくひと握りだ。

だから、短期のジムリーダーの代理である必要があった。ジムリーダーはカシワであるべきなのだ。立場を利用するために引きずり降ろすことはしたくない。そして自分の実力ならば、このジムをメジャーリーグに昇格させられるとも確信していた。目的を達成するまで、彼女の代理としての立場を利用させてもらうつもりでいた。また、恩人に自分のなす悪事を見られたくないという気持ちの表れでもあった。

「テレポート」

万が一を警戒して、証拠を残さず即座にテレポートで家に戻った。先に帰ると伝えて、わざわざ家まで歩いて帰ったのもアリバイ作りのためだ。

翌日、世間には練習中の事故や、過労によるものという噂が伝わっているようだ。

「明日は入れ替え戦ね」
ひとりごちる。試合に使う手持ちは当然ジムトレーナーとしてのものだ。まだ完全な信頼関係は成り立っていない。とはいえ負けることはできない。メジャー昇格が果たされれば、専用のスタジアムと地位が手に入る。委員会のもつガラルのエネルギー源に近付けるはずだ。

入れ替え戦当日、スタジアムは熱狂に包まれていた。マイナーリーグ2位、『悲劇の代理』ルリミゾとメジャーリーグ7位、『ハードロック　クラッシャー』マクワの試合だ。
マクワは就任からだんだんと順位を落とし遂に今年は降格圏内だ。一説には就任からずっと続いている、母親であるメロンとの対立が原因と囁かれているが真相は定かではない。
そんな調子でも勝敗予想は当然、メジャーリーグのマクワ勝利が観客の8割だった。残りはバトルに興味のない人間や、カシワの熱狂的なファンである。「まあ、自分が観ていてもマクワ勝利を予想するだろうな」と他人事のようにルリミゾは考えていた。
「あたしは代理だしね」
とはいえ同情の視線が多い。自分が引き起こした事態ゆえにムズ痒い思いをしながら入口からスタジアムの中心へ歩いていく。歓声が近づいてくる。ジムリーダーとしての振る舞いを意識して、心に仮面をつける。
「悲しい事件でしたね」
「同情は結構です。自分の心配をしたらどうですか?」
優しい人間だ。しかし、丁寧な口調で挑発する。サングラス越しの目が見開かれ、すぐにキリっとしたものに切り替わる。
これから生活を、名誉をかけて戦うのに同情はいらない。自分が犯人なのだから。何よりも気を遣われてゼンリョクで戦えないことが

嫌だった。
「なるほど」
マクワが続ける
「では、さっさと終わらせましょう！」
ジムリーダーの　マクワが
勝負を　しかけてきた！　▼
ロトムカメラに向かってポーズを決め、体形とは裏腹にスタイリッシュにハイパーボールが投げられる。
十中八九、バンギラスかツボツボだ。確信しながらルリミゾはモンスターボールを投げる。バンギラスが出て「すなあらし」がフィールドに吹き荒れれば、慣れないノーマルタイプのポケモンは不利な状況を強いられるし、ツボツボならば「ステルスロック」「ねばねばネット」によりこちらの後続のポケモンに圧力をかけられるからだ。
「ツボォオ！」
出てきたのはやはりツボツボ。ほとんどの攻撃に対して強く、苦手な水や岩の攻撃もノーマルタイプのポケモン中心で固めたルリミゾには用意できない、と思っていることだろう。
「ツボツボ、ステルスロック！」
「チラチーノ、ロックブラスト！」
チラチーノが先手で「ロックブラスト」を散弾銃のように放つ。それらが全て命中した。ツボツボは想定外のダメージに苦しそうに呻く。想定外なのはマクワも同じようだった。
「スキルリンクか」
「当然。今日は負けられませんから」
「ステルスロック」を展開することは許したものの、ツボツボはこれ以上動こうとすれば先にチラチーノが次の攻撃で仕留めるだろう。仕事としては半分程度か。「ねばねばネット」を展開し素早さの遅い岩ポケモンのカバーまで見据えるはずだが、裏にいるノーマル／飛行ポケモンのウォーグルを警戒したのだろう。
「ぐふぐふ」
鳴く姿が愛らしい。チラチーノはこの日の為に用意した手札だっ

たが、ウォーグルはジム交流戦でも何度も「ばかぢから」で岩タイプのポケモンを葬ってきた。「ねばねばネット」は飛んでいるポケモンには効果がないのだ。そのためステルスロックを優先して撒いたマクワの判断は正解だったといえる。

「ロックブラスト！」

非常に鈍足なツボツボは飛来する岩の弾丸に為す術なく倒れ伏す。対策が完全に嵌っていた。

ジャッジが旗を上げるまでもなく戦闘不能と判断したマクワは即座にツボツボをボールに戻し、労りながら次のポケモンが繰り出される。

「オォオオオオオオ!!」

着地と同時、耳を劈く咆哮、砂嵐が吹き荒れる。バンギラスだ。残りのマクワの手札は、研究通りならイシヘンジン、ガメノデス、セキタンザンのはずだ。ルリミゾの残りの手持ちはウォーグル、イエッサン、バイウールー、カビゴン。チラチーノはバンギラスより身軽だから、あと1、2回はバンギラスに攻撃できると踏んでいた。

「ストーンエッジ！」

「タネマシンガン！」

ルリミゾのチラチーノは射撃の精度がとても優れている。ロックブラストやタネマシンガンはほぼすべて命中させることができるという珍しい特性だ。砂が吹き荒れる中でもしっかりと全弾をバンギラスに命中させる。しかしバンギラスは後から動いても勝てるだけの種族の強さがある。足は遅いもののそれを補って余りある筋力、そして体の頑丈さがウリだ。草タイプの技の集中砲火を食らうも、自慢の硬さで耐え抜き岩の山をぶつける。

「耐えて！」

砂嵐でほとんど状況が見えない中、祈るように叫ぶ。チラチーノは。

「チラチーノ戦闘不能！」

チラチーノは「きゅう」と目を回してしまっていた。観客が明らかに悲しそうな声を上げる。見た目こそ可愛いチラチーノだが、ツボツ

ボを無傷で葬り、バンギラスにかなりのダメージを負わせている。いい仕事っぷりだ。今の手持ちで最も親しくなれたポケモンだった。

「これはカレーを奮発しないとね」

心なしか嬉しそうな表情でボールに収まっていくチラチーノ。これで残りは四対四。戦闘可能な状態で行うポケモンの交換と違い、戦闘不能になったポケモンの交換は少しの猶予がある。

腰に括りつけたボールを二回、トントンと叩き出番を伝える。

「バイウールー、よろしく！」

メエェ、と鳴きながら登場したのはやや場違いにも思える羊。しかしその角は勇猛にも天に向かって大きく伸びている。マクワは判断を迫られていた。

このひつじポケモンは際立つ特性がある。それはその毛量だ。あまりに多いもふもふした毛は、バイウールーに対する直接攻撃の衝撃をほとんど和らげてしまう。マクワの選択肢は「ばかぢから」と「ストーンエッジ」だ。最初に撒いたステルスロックが多少刺さっているとはいえ、バイウールーはおそらく二度攻撃しなければ沈まないだろう。「ばかぢから」はとんでもない力を引き出して相手を殴りつけるが、その反動でとても疲労してしまう。これはバイウールーの毛のクッションを突破できないうえに、「コットンガード」を積まれてジリ貧になってしまうだろう。

その一方で、「ストーンエッジ」は大きな岩を投げつけるため命中率に不安がある。外せば「ばかぢから」と違って少しのダメージも与えられない。だが、バンギラスの親しんだ岩を使った攻撃であり、しかも急所に当たりやすい。しばしの逡巡のあと、マクワは指示を出した。

「ストーンエッジ！」

今まで使ってきた信頼、そして必ず当てる、という目でこちらを振

り向いたバンギラスとの絆に応えたのだ。
「そう来ると信用していましたよ、マクワさん」
バイウールーは動かない。ただただ毛量に埋もれ、攻撃を待つ。
「コットンガード」だ。一度コットンガードを積むことができれば、物理攻撃ばかりの岩タイプに突破する手段はない。完璧な対策だった。
岩の山が放たれ、次々とバイウールーを叩き潰そうと飛来する。砂嵐でただでさえ悪い視界が、衝撃で巻き上げられて更に悪くなる。

お互い張りつめて見る視線の先、バイウールーは少しも動かずにそこにいる。
ルリミゾは勝利を確信した。もはやマクワにバイウールーの突破手段はない。

「バイウールー戦闘不能！」

「……え？」
場違いな静寂の中にルリミゾの間抜けな声が響く。バイウールーは毛に埋もれたまま戦闘不能になっていた。
急所に　当たった！　▼
ふらり、と血の気が抜ける中、次のポケモンを出さなければとトレーナーとしての本能が告げる。三対四、描いていたプランが崩れる音がした。
砂嵐が吹き荒れている。

3―ｖｓマクワ　入れ替え戦②

予想外の事態にも関わらず、積み重ねたトレーナーとしての経験がルリミゾをかろうじて動かしていた。

「イエッサン」

相手がダイマックスを切っていない以上、こちらも切るわけにはいかない。ウォーグルは飛んでいるポケモンのため、ステルスロックによりかなりの痛手を負う。温存しておきたいポケモンだった。「ばかぢから」を使ってバンギラスを倒すことができても、疲れ果ててしまい残りのポケモンに対して圧力が無くなってしまう。一撃で沈めることができなければ岩の攻撃を食らい一撃で沈められてしまうだろう。もっと最悪なのは、一撃で沈められなかった後に「ロックカット」を積まれて加速した岩ポケモンに手が付けられなくなることだった。

「今しないといけないことは……」

少なくとも最後に控えているであろうセキタンザンまでにダイマックスを切らず、なんとかカビゴン以外の残りの2匹で相手の3匹を倒さねばならなかった。「キョダイフンセキ」によるダメージを考えても、フィラの実による回復と「キョダイサイセイ」によって体力を保てるだろう。こちらには「じしん」という有効打があるため、なんとかカビゴンとセキタンザンのキョダイマックス一騎打ちに持ち込みたい。

この試合はこれからの道程を考えれば、はじめの一歩もいいところだ。なにか自分の道を邪魔しようとする天の意志のようなものを感じながらも、次の一手を考えなければならない。

とにかく思考を巡らせてメンタルを回復する。体を傷つけて戦うポケモン達のためにも、狼狽えているわけにはいかなかった。

「マジカルシャイン」

「ストーンエッジ！」

通常の状態ならバンギラスを倒し切っていたであろう威力も、砂嵐によって高まった耐久力に阻まれる。ギリギリ踏ん張ったバンギラスはまたしても「ストーンエッジ」を命中させる。

サングラスの向こうの目は、ただこちらを見ていた。
驚異的な集中力だった。ここまで全ての「ストーンエッジ」が命中し、ひとつは急所に当たっている。メジャーリーグのジムリーダーの意地だ。イエッサンは特殊攻撃に対しての耐久はあるが、物理に対しては紙切れ同然だ。一撃で倒れ伏してしまう。
「ごめんね」
もしかすれば、「マジカルシャイン」で落とせていたかもしれなかった。イエッサンのパフォーマンスに影響が出たとすれば、自分の指示の頼りなさだろう。動揺のなかなんとか立て直した程度で信頼し合ったプレーが繰り出せるはずもなかったのだ。
「あ～～～もう！」
無理矢理大きく声を出し、チャンピオンを真似て頬を叩く。覚悟は決まった。こんな調子ではジムリーダーの代理は務まらない。本来の手持ちと違うポケモン達とはいえ、これから長い付き合いになるのだ。しっかりしなければ。
「ウォーグル」
「クァアアアア！」
ステルスロックに傷つきながらも、雄大に鳴き、しっかりと羽ばたいて、こちらを振り向いてうなずく。ゆうもうポケモンは、こんなにも頼もしい。
砂嵐は晴れ、太陽の光がスタジアムに差し込んでいた。

有利な展開に安堵せず、覚悟を決めた相手にマクワは展開を考える。恐らくバンギラスは「ばかぢから」を使わなくとも倒されてしまうだろう。その後、イシヘンジンとガメノデスでウォーグルを倒し、どれだけカビゴンを削れるかにこの勝負の行方はかかっている。出した指示は「ストーンエッジ」だがウォーグルに先制されバンギラスは力尽きる。
「バンギラス戦闘不能！」
大活躍してくれたバンギラスに礼を言いながら、イシヘンジンを繰

り出す。物理攻撃に非常に硬いことで有名なコイツなら、ばかぢからを1回耐えてくれると踏んだからだ。

繰り出されたのはイシヘンジン。可愛い顔だが、メジャーリーグへの壁として立ち塞がる。ここが勝負所だった。

「ビルドアップ！」

「ストーンエッジ！」

ルリミゾが指示した技「ビルドアップ」は自身の攻撃力と物理防御を高める技だ。もちろん隙だらけだが、次に撃つ「ばかぢから」でイシヘンジンを一撃で落とすための技だ。そして何よりもウォーグルの耐久力を「ストーンエッジ」で一撃で落とされるかどうかのラインに持っていくことができる。

イシヘンジンが岩を浮かせ、羽ばたくウォーグルに向けて放つ。

「ビルドアップ」したウォーグルはトレーナーの判断を信じ、避けようとせず防御の姿勢を取る。

「ばかぢから!!!」

ウォーグルが耐えるかどうかなんて考えていない、信じ切った指示だった。応えるようにウォーグルが渾身の一撃を放つ。

「イシヘンジン、戦闘不能！」

ジャッジが旗を上げた。

「よおおおおし！」

犯した罪も、これから為そうとしている計画も忘れて、ただただバトルに没頭していた。純粋な少女の笑み。

「ガメノデス！頼んだ！」

これでカウントは2対2、このマッチアップを制した側がダイマックス対決に有利を運ぶことができる。ルリミゾが指示したのは当然「ばかぢから」で、マクワは「アクアブレイク」を指示した。

ドォオオン、と観客の声をかき消すほどの衝撃が地面を揺らす。

ぶつかり合う2匹だったが、「ビルドアップ」により上がった攻撃力の分、ウォーグルは普段と同じだけの力でもう一度「ばかぢから」を撃つことができた。それにより両者お互いに攻撃を食らい、ともにダウン。

「ガメノデス、ウォーグル、戦闘不能！」

両者、キョダイマックスの最後の一匹を残すだけとなった。

ドラマチックな展開に、観客の熱狂は加速する。応援歌が聴こえてくる。

「「「オーオーオーオオオオーオーオー」」」

「あたしは！　もう後には退けない！」

「まだよ！　まだ　崩れさって　砂とは　なっていない！　戦う！」

「カビゴン！」

「セキタンザン！」

「「キョダイマックス!!」」

ズ……ズ……ズン、と空気が震え、互いの切り札が姿を変え巨大化していく。スタジアムを互いのポケモンの体が占める。

カビゴンは体を支えきれず仰向けに倒れ、腹には木や植物が生える。

セキタンザンは・・・そのまま立っている。

「カビゴン、ダイアース！」

「セキタンザン、キョダイフンセキ！」

カビゴンの「じしん」が変化した「ダイアース」がセキタンザンに突き刺さる。元よりカビゴンの「じしん」は強烈だったがキョダイマックスによりさらに強力なものとなっている。

返す刀の「キョダイフンセキ」はセキタンザンから発射される噴石でこちらのポケモンがジリジリと削られるというもの。いくらカビゴンといえど、負うダメージは相当なものだ。脂肪の厚いカビゴンがフィラの実を食べる。これでルリミゾもキョダイマックスワザが使えるようになった。

「キョダイサイセイ！」

「ダイバーン！」
　食べたきのみを再び生み出す「キョダイサイセイ」はどういう理屈かわからないが、カビゴンに再びフィラの実をもたらす。モシャモシャと腹の木から取ったきのみを頬張るカビゴン。セキタンザンから放たれる「ダイバーン」の熱量は、安全の為にスタジアム端に移動したルリミゾすら焦がさんとする勢いだ。
　相変わらず降り続ける噴石によってカビゴンが傷を負うが、美味しそうにフィラの実を食べて回復している。
　次の攻防で決着が付くであろうことは、２人２匹、そして観客の全員が理解していた。
「ダイアース！」
「ダイバーン！」
　ただただ技名を叫ぶ。
「「ワァァアアア!!」」
　観客の声援もピークに達する。
　とんでもない熱と砂埃で思わず顔を腕で隠す。とてもではないが耐えられない。
　ズン……という音と、スタジアム全員の静寂。

　砂埃が晴れた先に立っていたのはカビゴンだった。

「昇格おめでとうございます。おみごとでした」
「ありがとうございます」
　スタジアムの中心へ歩み戻り、握手を交わす。勝者と敗者、昇格と降格が決定した今、戦いを讃える言葉以外は何もこの場に相応しくない。噂通りなら、マクワはこの後インタビュアーを無視して控室に籠るのだろう。
　ルリミゾは勝者として、メジャーリーグへと昇格した。ジムリーダー代理としてやらねばならないことも増えるだろう。自分以外の

ジムトレーナーを増やさねばならないし、来シーズンのジムチャレンジでは挑戦者たちを導かねばならない。ジムリーダーをこなしながら裏で悪事の計画を練るのはあまりにも大変だ。まさか自分以外にジムリーダー以外の裏の顔がある人間などいないだろうな、と思いながらスタジアムを後にした。

4―じならし

マクワと交代する形で引き継いだスタジアムはキルクスタウンの北にある。キルクスタウンは雪の降る街で、田舎町であるスパイクタウンと、ジムチャレンジの最後のジムであるナックルシティと繋がっている。

何よりも特筆すべきなのはステーキハウス「おいしんボブ」の存在だろう。寒い街とはいえ、人々までも冷たいわけでもなく（マクワファンには恨まれるかもしれないが）さらにステーキが絶品なのだ。マルヤクデと主人が火加減を調節し、絶妙な具合に仕上がるステーキはジムチャレンジの際に何度も訪れた。メジャーリーグに参加できたことで、余裕もできるので通いつめたいところだ。

「もしかして、メロンさんやマクワさんがぽっちゃりしているのって・・・」

食生活には気を付けなければ。

「いらっしゃい！新任ジムリーダー代理！」

「ふぁふぁぶぁ！」

扉を開ければ、おいしんボブの店内はマルヤクデ共々歓迎ムードだった。まずは一安心だ。もしも店主が熱狂的なマクワファンで料理に毒なんて入れられた日には計画も終わりだ。現地の住民を味方に付けるべく、出来るだけ人当たりのいい振る舞いを心掛ける。

煉瓦模様の壁と、あちこちに張られたタペストリーはこちらの気分をどんどんとステーキに向けて高めてくれる。赤と黄色のストライプの机は目に痛いが、目立って異質というわけでもなく店内の雰囲気に馴染んでいる。雪の街にはやや異質な朗らかなおじさんのアイコンがトレードマークだ。トレーナーズカードの背景にしようかと一瞬悩むが、店内の熱気にやられてしまったのだろう、寒い外に出れば正気に戻るはずだ。

「この街にしばらく住むことになりますから、食事ついでに顔見せに来たんです。これからよろしくお願いします」
　ぎこちない笑顔になっていないだろうか。　店主から客に評判が伝わることを期待した来店だ。また今食事している客への礼儀正しい姿のアピールでもある。
　油でぬるぬると滑る床で転ばないように気を付けながらカウンターに座る。
「まだまだ若いのに偉いなあルリミゾちゃんは。量はどれくらいにする？」
「ありがとうございます、ダイマックス級で！」
　見た目とかけはなれた大食いで印象付ける。マクワやメロンに負けていられない。
「おおっ!?そうかい！意外と食べるんだねえ！焼き加減は？」
　カウンター越しに店主や店員と、そして周りに集まってきた人々と会話をしながら食事の時間は過ぎていく。
・・・
「ごちそうさまでした」
　カウンターから立ち上がり、ドアの前でお礼を言う。とんでもない量だったが苦しくならず、美味しく食べきることができた。マルヤクデも満足そうにこちらを見ている。撫でれば少し熱いが、外は寒いので丁度いいだろう。
「最初は食べきれないんじゃないかと思ったけど、ほんとうによく食べるんだね」
「ええ、マクワさんに負けてられませんから」
　あ。つい口に出してしまった。あまり良い発言とはいえない。代理としてコンプレックスを抱いているように感じさせてしまったかもしれない。すみません、と声を出そうとするが、先に店主が口を開く。
「そんなところで張り合わなくてもみんな認めているさ」
　新生活の不安がスッと消えた気がした。相変わらず外は雲で少し暗いが、雪は止み、雲間から少し光が漏れ出ていた。

「ちなみにマクワさんは大食いではないよ」
雪に顔を埋めたい気分だった。

「ルリミゾさん！よろしくな～！」
「いい試合だったよ！」
街中を腹ごなしに歩いていれば、声がかかる。足を止めずに、手を振って笑顔で返す。
「みんな出ておいで」
街の中心部には観光名所、英雄の湯があるのでポケモン達を労わることができる。この湯は英雄が疲れを癒した湯だというが、あまり英雄に興味はない。お湯にはポケモンだけが入れる。人間はキルクスの気候上湯冷めして体調を崩しかねないし、街の中心でしかも歴史的な遺産であるから改築や脱衣所も建てられないのだ。チラチーノ、イエッサン、バイウールーは気持ちよさそうに浸かっている。ウォーグルは水浴び程度に使うので今回はパスとのこと。カビゴンは流石にお湯が溢れてしまうので今回は我慢してもらっている。あとでジムにある大型ポケモン専用のお風呂で洗ってやろう。
「チラチーノちゃん、可愛いですね」
「ええ、試合に勝てたのは隠し玉のこの子の活躍も大きいですから」
野次馬が集まり声をかけてくる。答えながら湯冷めしないようチラチーノの体を拭く。そうなんですねぇ、と呑気に関心しているあたり、彼女はあまりバトルに興味はないのだろう。チラチーノと目を合わせて確認をとってから、撫でてあげてください、と抱きかかえて近付ける。チラチーノは人慣れしているし、ファンサービスにもなる。
「ぐふー」
「かわいい～！ありがとうございます、写真撮ってもいいですか？」
チラチーノが気にしてなければ、と答えれば、彼女はチラチーノを抱いたルリミゾに肩を寄せて自撮りを構える。
「え、あ、あたしも？」
パシャリ

「ありがとうございます～!!」
　驚く間もなく写真が撮られる。初めてのファンとのツーショット（と一匹）だった。
　チラチーノが誇らしげにぐふぐふと鳴いていた。

　英雄の湯でファンサービスと手持ちへの慰労を終えたあと、自宅へ向かう。昇格が決定してからナックルシティから引っ越してきたのだ。スタジアムと結びつけられがちなジムリーダーだが、年中スタジアムに住み込んでいるわけではない。練習場やジムチャレンジャーを試すジムミッションの調整はあれど、スタジアム自体毎日使って整備するわけにはいかないからだ。道路に出ているユキハミを、自転車に轢かれないように脇にどけてから歩く。ふんわ、とお礼を言うかのようにひと鳴きしてゆっくりとどこかへ消えていった。
　ガラル地方には靴を脱いで家に上がるという習慣がない。シンオウ出身のルリミゾは文化圏の差異にはじめは驚いたが、すぐに慣れることができた・・・わけではなくひとりで住む家をようやく持てたので、玄関に置いたマットの前に靴を脱いでから家に上がる。
　スリッパに履き替え、ジムリーダー代理としての圧から解放される。自ら無理やり背負ったものとはいえ、器の小さいルリミゾには重いものだった。バトルの才覚こそあれ、彼女は元下っ端で幹部に昇格したのも最終決戦ひと月前だった。現在の髪色はシンオウ人生まれ持っての黒色だが、水色に染めている。ギンガ団下っ端時代の思い出から水色を使っているが、流石に髪型まであの頃のおかっぱに戻る気はない。
「元の世界に帰るんだ」
　テンガン山頂上付近、やりのはしらにおける最終決戦。アカギが呼び出したディアルガとパルキアの降臨で歪んだ時空間の隙間に落ちたルリミゾは、気が付けば手持ちのポケモンとともにギンガ団の制服のままガラル地方ワイルドエリア最北西、げきりんの湖に倒れていた。そこでカシワに拾われたのだった。ボスのやることに興味はな

く、幼馴染の赤毛の彼女が心酔していたため参加したにすぎない。その結果こんな事態になってしまったのでひどく後悔していた。バトル以外に考える能のない彼女がひとりで考え始めたきっかけだ。

「なーんにも出てこないわね」

スマホロトムで調べたところシンオウ地方にはギンガ団のギの字もなく、アカギという人物は前の世界ではそれなりに有名だったにも関わらず何ひとつヒットしなかった。定期的に調べているが少しも変化はない。どうやら似たようで非なる世界に飛ばされてしまったと気付き、絶望したのは拾われて一週間が経ってから。ジムリーダー代理として、地位を得れば行動範囲は広がり、研究者と接触する機会も増えるはず。まずはジムチャレンジ開催と同時期にスタートするリーグ戦で好成績を残し、ジムの順位を上げることが目標だ。

「マーズ大丈夫かなあ」

幼馴染が気になって仕方がない。元の世界に戻れたとて、伝説のポケモンが降臨した後どうなっているのかわからない。アカギの企み通り、もはや世界は心を失っているかもしれない。

とはいえ、チャンピオンや新進気鋭の天才トレーナーたち相手にルリミゾ抜きでギンガ団が勝てるとも思わないが。ルリミゾのトレーナーとしての才覚は、無情にも自分抜きでの戦力差を正確に把握していた。今の心の支えはギンガ団だった頃の手持ちのポケモンたちと制服、記憶だけだ。

「よいしょー今日はえらい激しく動くわね」

部屋を狂ったように飛び回っているポリゴンZを捕まえて手元でいじる。ギンガ団の自称天才科学者が実験で自作したあやしいパッチを当てたところ進化（？）したポリゴンだ。ぐるぐるした目が可愛いので無理矢理奪って手持ちに加えた。元の世界から一緒に飛ばされてきた手持ちのポケモンは表では使うつもりがない。実力のあるトレーナーならば、普段からよく見る個体は同種のポケモンであっても差異を認識できるため、顔を隠して裏で使ってもすぐ同じポケモンだとバレるのだ。だから表向けのメンバーと、裏で活動するためのメンバーで分けている。

ギンガ団入団時に支給されたドーミラー、ズバット（いまはドータクンとクロバット）やワケアリで協力してもらっているユクシー。暗躍するにはもってこいだ。いざとなれば、制御できるかはわからないがキッサキ神殿での任務で捕獲した切り札もある。ポケモンをダイマックスさせ、街のエネルギーを補って余りある源はナックルシティの地下、エネルギープラントにあるはずだ。伝説のポケモンだと、トレーナーの直感が告げていた。力を利用して元の世界に帰る。

「ピー」

ポリゴンZが撫でられ飽きてまた飛び回る。大衆に対して、名のある人物として振舞うことに一切慣れていなかったため今日はドっと疲れた。また捕まえて抱く気力もなく、眠りに落ちた。

5―ジム運営

各スタジアムに所属するジムトレーナーは2種類存在する。

一つは、委員会傘下のジムトレーナー。これは委員会にその実力を認められ、ジムチャレンジャーをテストするのに相応しい人物として雇われている者達だ。ジムリーダーと手合わせし調整を手伝ったり、スタジアムで主催するイベントのスタッフをしたりする。基本的に人手の足りていないスタジアムを対象に派遣されるので、ジム所属というよりはリーグスタッフに近い。

もう一つは、ジムリーダーの弟子ともいえるジムトレーナーだ。実力を見出したジムリーダーが指名し、本人が同意すればジムトレーナーとして迎えられる。後継であったり、大会の出場権、ジムチャレンジの推薦状を得られる。だから当然、ジムリーダーが降格すればスタジアムとは関係がなくなる。ルリミゾは後者のリーグトレーナーだった。

ノーマルジムに所属していたのはルリミゾのみなので、キルクススタジアムには委員会からジムトレーナーが派遣される。今日は昇格から一ヶ月。そのリーグトレーナー達との顔合わせ日だ。

「ううううぅ」

ルリミゾはスタジアムのジムリーダー室で頭を抱えていた。机の上で呑気にチラチーノが動き回り尻尾がくすぐったい。

裏で動くためにはジムトレーナーの心を掌握しなければならない。カシワの元にいた経験から、ジムトレーナーはジムリーダーと頻繁に顔を合わせるため、ジムトレーナーに悪事を隠し通すのはよほど上手くやらねば不可能だとルリミゾは感じていた。そのためギンガ団のように盲信させる、とまではいかなくともこちらの言葉を信用する程度には信頼されなければいけないのだ。バトル以外に頭を使ってこなかったツケをこんな別世界で払わされるハメになるとは。

頭の中の悪の組織のカリスマ、アカギはどんな風に演説していたのか、どうやって部下の心を掴んだのか必死に思い出す。何の興味もな

く、幼馴染に熱心に勧誘されて入っただけなのであの岩のシワのような顔と逆立つ銀髪ぐらいしか思い出せない。演説中に寝ていたことで他の下っ端にバトルを申し込まれることもあったし、入団したての頃に間違えてタカギ様、と呼んだ時には生きた心地がしなかった。

アカギの真似をしようと必死に脳内でシミュレーションする。

「私はこの不完全な世界が憎い…！」

「世界とは完璧であらねばならない！心のない世界を！」

胡散臭くなってしまった。脳内のギンガ団はブーイング喝采だ。これでは委員会にチクられておしまいだ。いっそ今から弟子を取るのも考えたが、ノーマルタイプのジムはトレーナーからの人気が少ない。ましてやルリミゾはジムリーダー代理、肩書きからして弟子を取るには不適だ。

スタジアムへの集合は１３時と伝えてある。人数は６人。ジムバッジは多い者で７個、少ない者で４個だ。キルクススタジアムは４番目のジムであるから、最低でもバッジ４つ以上のトレーナーしか派遣されない。うー、うー、と唸っている間に時計の針は１２時と半分を指していた。

委員会所属のリーグトレーナー、ノマはひどく不機嫌だった。自分が派遣されたのがくそ寒いキルクスタウンだったのもあるが、何よりジムリーダー代理の小娘のところだったからだ。

ジムバッジ７つの自分はジムチャレンジを突破できなかったとはいえ、委員会所属ジムトレーナーのなかでは有能な方であると自負していた。それがマイナークラスから昇格したてのジムに配属された。それなりにジムトレーナーとしての強さに誇りを持っていた彼にとって、この配属は屈辱的だった。

１２時４５分、余裕を持ってジムのドアを開く。フロントには既に当の小娘ルリミゾが青い毛先を揺らしながら笑顔で立っていた。

「ようこそキルクススタジアムへ。ジムリーダー代理のルリミゾです。ジムトレーナーのノマさんね？」

予想外の先制攻撃にたじろぐものの、初対面で礼節を欠くわけにはいかない。
「あ、あぁ。初めまして。ノマだ。よろしく」
よろしく、と彼女は手を差し出してくる。不機嫌を隠しにこやかに握り返す。所詮は自分と同じジムトレーナー、初見殺しとガチガチの対策でマクワさんに勝ったのだろう、と手に力こそ入らなかったものの今の立場の違いに苛立ちが漏れそうになる。
・・・
舐められてるな、とルリミゾは察知した。人同士の駆け引きにはまったく疎い彼女ではあったが、野生的な勘でノマから漏れ出る態度、不快感に気が付いていた。
会話で心を掴むのは無理だと、キッパリ諦めがついた。
こめかみが歪む。
頭に血が昇る。
ダメ人間なのは自覚があったが、バトルにおいて下に見られるのは何よりも許せなかった。相手側に目に見えて非礼な態度は一切ないが、彼女の行動原理は彼女が感じたものが全てだ。
「あたしとバトルしましょう。もしあなたが勝てば委員会にリーグトレーナーの異動を申し出てあげる。不満なんでしょう?」
もちろん委員会へのコネなどひとつもないが、自分が勝つことに疑いのない全身バトル人間の提案だった。

集められたジムトレーナー達は、わけのわからないまま始まった試合を見せられていた。今日は顔合わせでジムの方針を話してもらう日だったはず。どうやらプライドの高いノマがルリミゾを怒らせたらしかったが、ノマが目立って暴れているのは珍しかった。
委員会所属のジムトレーナーはジムリーダーと委員会の評価が全てである。ここで健気に頑張っていると世間から評判の少女と揉めれば不利なのはノマのはずだが、聞けば先にキレたのはルリミゾだという。聞いていた礼儀正しく真面目だという評判とはかなり違う。

実は癇癪があるのだろうか。これから一年間やっていくジムリーダーに不安を覚える。

まさかの内心を見抜かれ、申し込まれたバトルにドン引きしながらも応じたノマは、フィールドへと移動した。

「他のジムトレーナーにもフィールドに来るように伝えたわ。見せしめってところね。あたしが一番強いってのを見せてあげる！」

ブチィ、とキレて怒りに身を焼くルリミゾはジムリーダー代理の仮面も忘れて言いたい放題だ。

「公式戦じゃないからダイマックスはナシね！」

目の前だが、声が大きい。完全にお怒りだった。

「ああ」

観客席に目をやれば、他のジムトレーナーが5名、不安そうな表情でフィールドを見ていた。彼らにしてみれば、初顔合わせで突然、怒るジムリーダー代理とジムトレーナーの試合を見せられることになったのだ。前情報と全く異なるルリミゾの豹変っぷりにただただ困惑するばかりである。

「優秀な上司を持てて幸せだぜ！俺は！」

吹っ切れたのだろう、皮肉を吐き捨てながらノマが繰り出したのはきつねポケモン、キュウコン。世にも珍しい事にこのキュウコンは通常と異なり、天候を晴れにする不思議な力を持っている。

「頼むぜ！」

そう叫べば振り返らずただ前を見て頷く。彼が初めてゲットしたポケモンであり、ナックルシティジムまで連れて行ってくれた相棒でもあった。先発で天気を晴れにし、手持ちのポケモンが有利な舞台を作り、自分の土俵に相手を引きずりこむ。キバナは同様に天候パーティの使い手だったためまったく歯が立たなかったものの、手合わせした8バッジ所持のジムチャレンジャーを何人も打ち倒してきた。

「眩しいわね。日照りの力を持つキュウコンね」

曇りがちなキルクスの空が青く澄んでいく。照り付ける太陽がま

ぶしい。水タイプの技は威力が半減され、ソーラービームなどの大技が予備動作無しで即座に撃てるようになる。足が速くなるポケモンもいれば、パワーの上がるポケモンもいる。手持ちは恩恵を得られるポケモン達ばかりだ。

カブさんのジムがよかったな、と思う。それは望み過ぎにしても、平々凡々なノーマルタイプも嫌いだし、寒いのも嫌いだし、自分と同じジムトレーナーでありながらジムリーダー代理であるぽっと出の少女に使われるのが気に食わなかった。ジムトレーナーは手持ちのポケモンのタイプと関係なくジムに配属される。ジムチャレンジの際にチャレンジャーに立ち塞がり繰り出すポケモンは貸し出されて仕事をするポケモン達だからだ。

このジムだけは嫌だった。ここで他のジムトレーナーの前で恥をかかせ、他のジムへと手配させた方が、黙って下につくよりマシだろう。委員会の印象は悪くなるだろうが、ノマにとってはここで働くことの方が耐えられないことだった。そもそも不満な態度は表面には出ていなかったハズだ。全てはこちらの心を読んだかのように突然キレてきたあの少女が発端だ。思い上がりを叩き潰してやる。

「捻り潰してあげる！」

同じような言葉を少し離れたところから叫ぶルリミゾ。あの脳筋女と同じ思考だったことに嫌気が差す。

彼女の代名詞が日差しの向こうでぐふっ、と鳴いた。

6―ｖｓノマ　格付け

「ここまで一方的とは・・・」
ただただ圧倒的な試合展開に、リーグトレーナー達は今日集まった目的を忘れていた。スコアボードが示す数字は４―０、圧勝だった。
「終わったわよ！降りてきてもらえるかしら！」
何事もなかったかのように、フィールドから声を張ってルリミゾが呼んでいる。ノマは起きたことが信じられないような面持ちでルリミゾを見ていた。

初手チラチーノは読み切っていたはずだった。だからキュウコンに「おにび」だけ撃たせて即座に引いてズルズキンを繰り出した。「おにび」は避けられてしまい、「ロックブラスト」によってキュウコンはかなりの痛手を負ったが、続けて「ロックブラスト」を撃ってくることは確実だろう。ズルズキンが威嚇することによりあの舐め腐った態度のチラチーノは怯え、「ロックブラスト」はズルズキンをほとんど傷つけることなく終わりノマが有利になると。チラチーノを起点として「ビルドアップ」して５匹全員を抜けると。そう、思っていた。
「ウォーグル！」
ノマがキュウコンを戻すと同時、チラチーノを戻したルリミゾから繰り出されたのはウォーグル。その特性は「まけんき」、相手に能力を下げられたとき、より攻撃性が高まるというもの。
な、と声を発する間もなくウォーグルがズルズキンを「ブレイブバード」で叩き伏せていた。自分の手持ちは知られていても、この考えてきた対策方法は知られていないはずだった。
「パーティのポケモンたちさえ資料で持っていれば、何をしてくるか手に取るようにわかるわ。降参するなら今のうちよ」
ますます小物臭い台詞を言うルリミゾ。無視して次のポケモンを出す。

ひざしが　つよい　▼

「エレザード！」

はつでんポケモン、エレザード。その大きなエリマキを広げて気持ちよさそうに太陽の光を受けている。ジムリーダー代理とはいえ、この晴天の下で出てきたエレザードが乾燥肌や砂に隠れるような特性ではないことぐらい当然ルリミゾも把握しているだろう。エレザードは本来、暑い地域にいたポケモンだ。生息域が変わるにつれて乾燥に弱くなったり、砂に隠れるようになってしまったものの、いまでも一部の個体は太陽の光を利用する力が長けている。

「サンパワーね」

ウォーグルが動く間もなく降り注ぐ電気に撃たれ戦闘不能になる。地面タイプですかされることも考えたが、他のジムリーダーと異なり本来はジムトレーナーのルリミゾにはあの５匹以外いないだろうと踏んでの１０万ボルトだった。特殊に強いカビゴンであっても、この晴天下のエレザードの技を食らえばただでは済まない。引いて他のポケモンで受けたとしても、素早いエレザードに先手を取られ続く攻撃で沈められる。戦闘不能での交換が最善手だ。ルリミゾはウォーグルを労わりながらボールに戻した。

代わって出てくるのはチラチーノ。速さ対決だ。どちらも打たれ弱いポケモンゆえ、一瞬の駆け引きで勝負が決まる。互いに素早く動き回り、牽制しながらスタジアムを駆ける。我慢が切れて先に動き出さないのはバトルの経験を積みトレーナーを信頼したポケモン同士だからだろう。

「１０万ボルト」

目を離さずに出した指示だったが、まばたきの一瞬でチラチーノの姿が掻き消えた。動揺するが、すぐに経験と知識から答えを導き出す。

「『あなをほる』だ！動きを止めるな！出た瞬間をカウンターして電気をぶち込め！」

チラチーノが地面に潜っている間、猶予があるため具体的に指示を出す。ルリミゾは一切チラチーノに指示を出していないようだった。

エレザードが周囲を警戒しながらフィールドを走り回り、ターンしようとしたその瞬間。真右の地面が盛り上がる。
「右だ！」
右に１０万ボルトを放つ。飛び出た影に光がはじける。チラチーノに１０万ボルトが直撃。エレザードはチラチーノ以外には捉えられない。チラチーノを落とした。ノマは勝利を確信していた。
しかしチラチーノは倒れず。意識を失わず。
驚き硬直しているエレザードのエリマキを掴んで「スイープビンタ」を顔に叩き込む。パパパパパ、と短い手からは想像もつかない威力のビンタが繰り出される。ゆさぶられ、はたかれ、エレザードは目を回し倒れた。
チラチーノは誇らしげにルリミゾの方を向いている。ナイス、とルリミゾは悪戯が成功したかのような笑みで褒めていた。
「何が起きた?どうしてチラチーノが耐えたんだ!?」
予想外の状況にジムトレーナー達は困惑する。
「そうか!!」
「『ひかりのかべ』だ！」
気付いたジムトレーナーが叫ぶ。
「いつだ?そんなタイミングあったか?」
「最初だ。ウォーグルに交代する前、鬼火を避けたときに貼っていたんだ。あまりにも晴天下のエレザードの火力が高いからウォーグルは落とされてしまったが、それが逆にノマの意識から壁の存在を逸らしたんだ。」
ノマと同じくジムバッジを７つもつジムトレーナーが答えた。確かにあの時チラチーノは「ひかりのかべ」を貼るだけの時間があった。
「ひかりのかべ」はエネルギーを放つ系統の、つまり特殊攻撃の技を防いでくれる壁を出す技だ。ポケモンを入れ替えても壁は残り、守り続けてくれる。
「一か月前の入れ替え戦と完成度が全然違うな・・・ここまで急に強くなるものなのか?」
「猛特訓したのよ!特にこいつの仕上がりは段違いよ!」

聞こえていたのか、チラチーノを指し同じようなドヤ顔で語り出すルリミゾ。カウントは4対3、キュウコンはまだ動けるため、再び繰り出せばこの日差しは試合が終わるまで続くだろう。しかし万全のポケモンはあと2匹だ。

「ドータクン」

繰り出し、「ウェザーボール」と指示を出す瞬間、憎たらしいチラチーノは光に吸い込まれ、繰り出されたのは脂肪の厚いカビゴンだった。

ドム、と腹で真っ赤な光弾を受け止め、ぼりぼりと少し焼けた痕を掻くカビゴン。「ひかりのかべ」と「あついしぼう」、そして生まれ持った耐久力でもはや無傷といえるレベル。画面越しに見た入れ替え戦よりも大きな壁に感じる。とはいえ「ふゆう」している個体を警戒すれば、カビゴン側に有効打は無いはず、余裕を持ってカビゴンの突破方法を考える。それが過ちだと気付いたのは耳を疑う指示が聞こえたからだ。

「じしん」

なんの迷いもないルリミゾの指示だった。ドータクンは宙に浮いているが、熱に強い個体と通常の個体で性質が異なる。熱に強い個体はその特殊な体の「たいねつ」金属で地面と同調して浮いており、「じしん」などの技の影響をモロに受けてしまう。一方通常の個体はまさに謎の力で「ふゆう」しており地面とは無関係にフワフワ浮いている。普通のトレーナーはキュウコンやエレザードの裏にいるコイツを見て「ふゆう」している個体だと思い地面技を撃たないはずだった。

「そのポケモンはワケあってよく知ってるてね、だいたい見極められるの」

効果は抜群で、ドータクンは一撃で目を回し落下した。マーズのドータクンは「ふゆう」しておりルリミゾのドータクンは「たいねつ」仕様だった。即座に撃墜されたノマの顔色がますます悪くなる。頭の中は真っ白だ。もう彼にパフォーマンスを最大まで引き出すことは不可能だろう。試合中にメンタルを修正できるかどうかが、上位トレーナーとの彼の差だ。だからジムチャレンジを7つクリアした後

の壁、キバナでポッキリ折れてしまった。
「キュウコン」
すがるような震える声で相棒を繰り出す。残るエースに託すため、雲が差してきたこの空を再び晴天に引き戻すためだけに出されたことは誰の目にも明らかだった。スタジアムに差し込む日差しは強いが、彼の心は曇りきっていた。
「じしん」
「おにび」
カビゴンの巨体によって引き起こされた衝撃がキュウコンに到達する直前、キュウコンがカビゴンをやけどにした。これでカビゴンの攻撃性能は大きく低下した。最後の一匹相手だがカビゴンでは落とし切るのは不可能だろう。
「頼む」
繰り出されたのはよこしまポケモンのダーテング。「ようりよくそ」と呼ばれる特性のおかげで、この日差しの下ではとんでもない速さで行動できるポケモンだ。彼のパーティのエース格のポケモンで、何度も窮地から彼を救ってきた。
「ダァア！」
ダーテングがまるで剣を持っているかのように舞いを舞う。「つるぎのまい」だ。ダーテング1匹でルリミゾの残り4匹を突破するにはこれしか残されていなかった。その隙を見て、ルリミゾはアタッカーとして完全停止したカビゴンを戻し、チラチーノを繰り出す。3度目の登場だがまだまだ気合を見せている。ぐふー、と鳴きこちらを見据える。
「ソーラービーム！」
本来なら大技「ソーラービーム」と同様に力を溜めるのに時間のかかる大技だが、この晴天下なら即座に発動できる高威力の技だ。リーフブレードと同じように、手に持つ葉っぱに力を集めたダーテングが葉を光らせ3倍ほどの緑の刃を作り出す。
「ダストシュート！」
ルリミゾが出した指示に観客席のジムトレーナーとノマは驚愕す

る。
「な、ダストシュートだと!?」
「何かまずいんですか?」
バッジ４つのトレーナーが質問する。
「ダストシュートはとても狙いが定まりにくい技だ。平常時ならともかく、この日差しの下とても素早いダーテングを狙えるとはとても・・・『とんぼがえり』なら接近して相打ちになる危険性がある代わりに確実に仕留められたはずだ」
７つバッジのトレーナーが解説する。
「そうしないのはたぶん・・・」
話ながら考えをめぐらす彼はなんとなくその理由に行き着いていた。
すこしの距離の詰め合いのあと、バシュン、という音とともに駆け回っていたダーテングが崩れ落ちた。毒の塊が彼の進路を予知したかのように飛来したのだ。
「力の差を見せつけるためだろうな」

7―これから

ポケモントレーナーとは誰であれ、戦いと強さに魅かれた者である。ジムチャレンジを突破できず、委員会に所属してジムトレーナーになった彼らも、職業としてポケモントレーナーの道を進んでいる。ジムチャレンジを何年も突破できず、推薦状が貰えなくなった者、心がポッキリと折れてリタイアした者。

それでもポケモンバトルと関わりたいと、委員会の下でジムトレーナーの職業を選んでいる。ジムリーダー直属ではない彼らは、ジムの順位と関わりがない。毎年どこかのスタジアムに配属される。メジャー1位になろうが、マイナー落ちしようが彼らの仕事にはほとんど関係がないからだ。彼らにジムへの帰属意識はない。

だが、それでも、

・・・

「あたしはメジャー1位を目指す。代理だろうが関係ないわ」

すこし上を見ながら、ジムトレーナーに向かって話す。故郷への想いが話に熱意を吹き込む。

ジムトレーナー達は一言一句聞き逃すまいと、やや大きめの声で語る少女に視線を集めている。彼女は代理という肩書を吹き飛ばすような、圧倒的なポケモントレーナーとしての力を示した。それが結果として、不安を感じていた彼らの心を大きく揺さぶったのだ。考えなしのバトルだったが、少女の「強さ」というただただ原始的なカリスマが観た者を魅きよせていた。アカギのモノマネを披露するのとは段違いに、彼女の初顔合わせは上手くいった。

「ナックルスタジアムにこのノーマルの印を刻み付けるの」

そして、絶対に帰る。口にこそ出さなかったが胸の中に再び火を灯した。

「力を、貸してくれるかしら」

少し不安げに、語りかける。ジムの運営にこんな大層な演説は必要ない。ジムトレーナーとの関係が悪くとも、彼らは仕事だからしっか

りと働くだろう。彼女の練習、特訓に付き合ってくれるかは別として。だからそれはサポートしてくれ、という頼み。ノーマルタイプのジムトレーナーとして彼女のサポートをし、1位にのし上がるために協力してくれと、そう言っているのだった。

長らくダンデのライバルを自称し、1位のトップジムリーダーに君臨しているキバナ。彼女なら、もしかすればキバナを。特に8つ目のバッジで躓いた2人は期待を抱かずにはいられなかった。そしてまた、無敗のチャンピオン、ダンデ。その覇権すら崩しうるのではないかと、偉業の一部に自分がなれるのではないかと、失った夢を彼女に重ねていた。彼らはこの日、委員会所属から変わったわけではないが、ノーマルジムのジムトレーナーとなった。

・・・

「さらっさらの毛並みねこのキュウコン!!毎日、いや1日に3回は手入れしてるのかしら!!」

「このうちわ、ワイルドエリアまで取りに行ってあげたでしょ!?この葉っぱ見たことあるわ!!」

ルリミゾがダーテングのうちわを触りながらこちらに大声で尋ねてくる。少しうるさい。

トレーナーとして行き詰った今でもポケモンの手入れと特訓は欠かさないでいた。それを見抜かれたことは嬉しくもあったが、敗北した今のノマにとってはただただ恥ずかしかった。恍惚の表情で解散したジムトレーナー達と違って、ノマは残るように指名されていた。

「その、」

「謝んなくていいわよ、ボコボコにして満足だわ」

悪かったな、と続けるよりも先にルリミゾが答えた。後先は考えないが人の機微には敏いらしい。言葉はほとんど交わしていなかったが、バトルを通じて共に認めたことはお互い理解していた。

「あたしが勝ったんだからここで働いてもらうわよ」

ああ、と返す。不満はどこにもなかった。キルクスの気温のせいで息が少し白んでいた。鼻を突きさす冷たい空気、それすら心地よかった。

「お前がキバナを倒すところが見たい」
苦い思い出を浮かべながら、この少女がキバナを倒し、ナックルスタジアムを職場にする日を夢想する。
暗い逆恨みだった。キバナを追い出し、自分は有象無象の一人としてそこで働くのだ。どれだけ気持ちが良いだろうか。キバナに大敗してから、推薦状を貰いに行くことをやめた。勝てるビジョンがまったく見えず、それからはリーグスタッフを経て今はジムトレーナーだ。ジムチャレンジャーの墓場において、何を目指すでもなく刀を日々研いでいた。
「嫌よ」
意味が分からず、間抜けな顔でルリミゾの方へ振り向いてしまった。
「アンタの恨みを私に背負わせないで。だからアンタはキバナに勝てないのよ。勝手に不満になって、黙って溜めてる。そうだわ、小さいのよ！」
小さいとかお前が言うのか、とは敗者だから言えなかったが、ノマにとって図星だった。
「もっと暴れればいいのよ。アンタのポケモンだってそれを望んでる。ホントはまだまだ上に行きたいくせに、すぐ諦めてぶつぶつ言ってる。アンタがしたいのはキバナを倒すことじゃない。ジムチャレンジを突破することでしょ」
奔放な物言いでもザクザク突き刺さる。
「あたしを倒せたなら、いつでも推薦状を書いてあげる。あたしは1位になるんだし、問題ないでしょ。」
なんなら明日挑戦してきてもいいわよ、と不敵に笑う。世間に見せてきたイメージとは違い、自分が代理なんて微塵も考えていない。ただ、ノマにとってはジムチャレンジ失敗以来、自分に期待してくれる人物が嬉しかった。
「お前が1位になってからだ」
お返しに先に意味不明な言葉を返す。はぁ?という表情をしている。わかりやすいな、と思った。

「キバナは関係ない。1位になったお前を倒して、ジムチャレンジをクリアする。その方がドラマチックだ」

続けて説明すれば、嬉しかったのか口元がニヨニヨしている。スタジアムから見える空は珍しく青かった。キュウコンのせいなのか、キルクスの気まぐれなのか、それともこの気持ちなのか、ノマにはわからなかった。

「こんなに上手くいくことがあるかしら！ねえ！」

自宅にて、ポリゴンZと一緒にくるくる回りながら喜ぶ。チラチーノが頭にくっついているため、少し重い。カッとなってバトルを始めてから、冷静になったのはダーテングを沈めた直後だった。嬉しそうに帰ってくるチラチーノを抱えながら、キルクスの冷たい空気に頭を冷やされ、ジムトレーナーと顔合わせだったことを思い出した。そこからは流れで熱意を語り、なんとか味方に付けられたようだった。ジムリーダー1位を狙っているのは嘘ではなく、ナックルシティジムが手に入れば地下の管理に関わることも増えるだろうと踏んでの目標だった。純粋にジムリーダーと戦いたい気持ちもあったが。

自分が本当にこの世界の住人だったなら、なんと素晴らしい状況だろうか。ふと我に返って虚しくなる。頭の中の記憶と、このポケモン達、部屋に掛けてあるギンガ団の制服。思い出して、また気分が沈む。胸が詰まる。暮らしには慣れたが、一人別世界の住人であるという自覚。この異物感はきっと帰るまで取り除かれないのだろう。ベッドに倒れこみ、ロトム憑き機械、スマホロトムでニュースを調べる。ロトムの研究はギンガ団が最先端で、ルリミゾがいた世界ではまだ実用化されていなかった。

「へぇ。ダンデって弟がいたのね」

次のシーズンから無敗のチャンピオン、ダンデが弟とその幼馴染にポケモンを渡すらしい。推薦状は成長を認めないと書かないつもりだという。身内贔屓しない公平さもチャンピオン人気のひとつだろう。大勢の観客が見守る中での敗北は、少年少女が味わう大きな挫折

となりうる。見込みがない者を参加すらさせないのは優しさでもある。

ジムチャレンジ開催まであと一ヶ月。メジャージムリーグの開始も同じだ。観客を楽しませ、ジムチャレンジャーを軽くふるいにかけるための仕掛け「ジムミッション」は基本的に前任からの流用だ。多少仕掛けや内装を変えることはするが、大幅な改造は問題が起きない限り行われない。これはジムトレーナーに任せてしまっていいだろう。

問題はメジャージムリーグだ。８人のジムリーダーがそれぞれのジムリーダー相手に2試合ずつ、計１４試合を行う。入れ替え戦のマクワがそうだったように、メジャーリーグ下位だからといって油断はできない。下位と上位で大きな差があるわけではないし、草・水・炎のジムリーダーは実力者だからこそジムチャレンジの序盤で加減を見極めてチャレンジャーを試している。

とくにカブは前年度3位でリーグ戦を終えている。リーグが始まればパーティは変更不可なので、幅広くどの相手にも戦えるパーティを組まなければならない。ルリミゾの手持ちはいつもの５匹だけだったが。

「他のプランも考えておかないといけないわね」

１位になることよりも元の世界に帰ることの方が重要だから、念のため（まあ当然1位になれると確信しているが）、しょうがなく、もしものために、ナックルエネルギープラントへの潜入を考えないといけない。面倒な相手を避けるため、どこを襲撃するにしてもチャンピオンやローズ委員長が離れている日を狙う。

それにしても、この地方はシンオウに比べてあまりにも伝説が少ない。伝わっていないだけなのか、ほんとうに少ないのかはわからないが神話のような力を持つポケモンの話をルリミゾは聞いたことがなかった。

「人間の英雄伝説なんてホントどうでもいいわ。異世界に飛ばしてくれるポケモンはいないからしら」

有名なのは厄災を退けた二人の英雄の伝説だが、ポケモンは登場し

なかったはずだ。伝説について調べながら、ナックルシティのエネルギープラントを狙う。目標が明確に定まった。リーグで1位を取り、ナックルジムを獲れれば達成されるが、リーグ戦は3ヶ月もある。その間ただ戦っているだけというのは我慢できなかった。

裏で顔を隠して遺跡や文献、資料を調べなければならないな、とギンガ団の頃の活動を思い出してふっと笑う。その時は故郷の世界からの相棒たちが活躍してくれるだろう。

8―スパイクタウンのパンク兄妹

『スパイクタウン　多くの店が雑然と並ぶどこかパンクな雰囲気の町』

そう紹介してある看板を読む。ルリミゾはキルクスタウン南東、スパイクタウンに来ていた。街の入り口にはコンテナや謎の木箱、ドラム缶が散乱し、何故かシャッターが付いている。少し寂れたこの町は、キバナに次ぐ実力を持つジムリーダー、ネズの拠点だ。

彼が特徴的なのは、何よりダイマックスを使わないという点だろう。そんなスタイルでありながら他のジムリーダーをなぎ倒し2位につける実力はとんでもない。何かのインタビューでは「ある意味で本来のポケモンバトルなんですよ」と語ったらしい。もともとダイマックスなんて関係のない世界でバトルをしていたルリミゾも共感したのを覚えている。

「疲れたしお店に入りたいわね、ウォーグル」

「クアァ」

舗装されていない入り江を道路と呼ぶのかは怪しいが、9番道路を下った先にある町だ。ガラルには「そらをとぶ」で自分のポケモンと空を飛んで移動する文化がなく、アーマーガアタクシーが主流だという。無免許での鳥ポケモンでの「そらをとぶ」は危険だと委員会が禁止を提案したらしい。ジムリーダーは飛行が許されているが、誰も飛んではいないようだった。

折角だから、とルリミゾは権力を行使し、ウォーグルに掴まって9番道路の入り江を越えて来た。水の上は寒く、正直ちょっと後悔したがウォーグルのウォーミングアップにはなっただろう。

そう、今日はネズに練習試合を申し込んでいたのだ。お互いリーグ戦用のメンバーから3匹で戦うという取り決めをしており、手持ちを全て晒さないための工夫だった。ルリミゾにとってはどうせメンバーが変わらないため得な条件だし、ネズは手札を晒すことをあまり気にしていなかったが、それでも3対3にしたのはここで決着をつけたくなかったから。ゼンリョクを出すのは当日で、と電話越しに声が

重なったのを覚えている。
「それにしてもなんっにもない町ね！」
歩けど歩けど続くシャッターに思わず言いそうになった。シャッターばかりでブティックもなければ美味しそうな店もない。おまけに似たようなパンクファッションの男女がうろうろしている。半袖でへそを出しているが寒くないのだろうか。キルクスとそこまで遠くはないから少し空気が冷たいのだが、町の雰囲気も合わさって余計にそう感じる。
どの街でも見つけやすいように統一された外観のポケモンセンターがめちゃくちゃ目立っている。街のネオンライトは負けじと輝いているが、その下にはシャッターが下りていた。ネズの試合まで少し時間があったので腹ごしらえをしようにも店が見つからない。10時にポケモンセンターの前に集合だ。
一旦外に出て、光を浴びる。雨避けに張られた天井はかえって町を暗くしていて息が詰まりそうだった。
「クァア」
普段から謙虚なウォーグルが珍しく隣で何かを主張している。見れば、視線の先にはきのみの木があった。

この町のジムリーダーであるネズの妹、マリィは9番道路に出てきていた。来シーズンからジムチャレンジに参加するマリィは、それに備えて兄のバトルからたくさんのことを学ぼうとしている最中だ。
「きのみ見分ける練習にもなるけんね」
練習試合の後、疲れた兄のポケモンたちを労わるために今のうちからきのみを用意しておこうと思ったのだ。スパイクタウン入口近くに生えているきのみの木は、ジムチャレンジ期間を除けばスパイクタウンを訪れる人は少なく、誰も取る人がいないため、ポケモンが採っていなければたっぷりときのみを蓄えているはずだった。
・・・
「な、なんばしよっと・・・?」

目に入ってきたのはヨクバリスと張り合ってきのみを取り合う少女。放しなさいよ!と声を上げて、浅葱色の毛先を振り回しながら必死に戦っている。
「あっ」
こちらに気付いたのか、集中が切れてヨクバリスにひったくられてしまっていた。
「い、今見たのは内緒にしてくださいね・・・?」
恐る恐るこちらを振り向く。キルクスタウンジムリーダー代理、ルリミゾだった。
・・・
「これはキーのみね?」
「いや、それはオッカですね、ポケモンが食べると不思議なことに炎に強くなります」
「ポケモンはすごかとね・・・」
「私たちにはちょっと硬くて辛いですから、料理しないと食べにくいですね」
キーはまだぶにっとしていて柔らかいんです、と笑顔で教えてくれる。先ほどの野蛮な行動からは考えられないほど丁寧な物腰の人だった。お互い軽く自己紹介をして、3ヶ月後にジムチャレンジに参加すると言えば、きのみの見分け方を教えてくれるという。先に彼女が揺らして落としていたきのみを二人で拾いながら話をする。
「試合後のポケモンのためにですか?偉いですね~!あ、カムラの実だ」
面と向かって褒められると恥ずかしい。モルペコはロゼルの実が気に入ったらしく、マリィの鞄に2つ詰め込んできた。
「キルクスからこの子が運んできてくれたので、ご褒美にきのみをあげようと思って」
ウォーグルの口にきのみを運びながらそう説明された。なるほど、だから必死だったのかと勝手に納得する。どうやら噂よりも情熱的らしい。
「そういえば今何時ね?」

はっとして見つめ合う。二人で覗き込んだ時計の針は１０時のちょうど5分前を指していた。
「「あ!!」」

９番道路で知り合ったネズの妹、マリィと話し込んでいるうちに集合時間ギリギリになっていた。二人で走ってスパイクタウンのポケモンセンターを目指す。
「まさかとは思いましたが、マリィと出会っていたんですね。おれはダメだから約束を破られたのかと思ったんだよね」
息をきらしながら１０時ちょうどに到着すれば、ネズから声がかけられる。噂通りネガティブだ。別行動していた（先に出発して置いてきた）ノマが非難の視線を向けていた。
「お待たせして申し訳ないです。本日はよろしくお願いします」
「よろしくね」
外面（そとづら）モードにノマが「うげぇ」とでも言いたげな顔をしたので足を踏んでおく。
「いってぇ！」
「？、どうかしましたかノマさん、フィールド行きますよ」
ネズたち兄妹を追ってフィールドに向かう。

9―ｖｓネズ　練習試合

「ダイマックスがなくても、真に熱い試合はできるんだよね」
あくまでおれの考えだけど、と補足しながらネズが語る。マリィから聞いた話では、その考えをマリィに押し付けることはせず、自分で貫き通しているだけだという。
この切り出し方は賛同してもらおうというより、これから熱い試合をしよう、そう言っているのだと解釈してルリミゾはボールを構える。
薄暗く、ネオンの光で怪しく照らされるのはバスケットコートのようなフィールドだ。観客席はなく、金網の向こうでマリィとノマが見守っている。パンクファッションの人たちはジムトレーナーだったらしい。金網の向こうでブブゼラを鳴らして応援している。
「あたしもダイマックスのない試合に慣れています、いい試合をしましょう」
そう返せば、こちらを見てネズが頷いた。
「ふぅ・・・」
肩を揉み、マイクスタンドを取り出し突然叫ぶ。
「おれは！　スパイクタウン　ジムリーダー！　悪タイプポケモンの天才、人呼んで『哀愁』のネズ!!」
「代理で頑張るおまえのために！　見守るマリィたちと共に！」
「行くぜー！スパイクタウン!!」
エレキギターの音が聴こえそうな勢いで口上を述べている。バトルで気持ちを高めるためにやるらしい。惚れ惚れするくらいのいい声だ。マリィは少し恥ずかしそうに顔を赤らめていた。
ジムリーダーの　ネズが
勝負を　しかけてきた！　▼
「まずはこいつだ！いくぜ！ズルズキン！威嚇だ！」
歌うように繰り出されるズルズキン。ノマの個体より心なしかノリノリだ。
「バイウールー！」

メエェ、ともふもふの塊が着地する。ズルズキンを見て少し怯んでいる。攻撃に力が入らなくなっただろう。初手からかなり悩まされる対面だった。ズルズキンはあまり動きが速くないため、バイウールーが「コットンガード」を先に積むことはできるだろうが、おそらく裏にいるであろうストリンダーに交代された場合は大きく不利になってしまう。

ストリンダーは毒／電気タイプの特殊アタッカーだ。「ばくおんぱ」や「オーバードライブ」といった音、振動系の技が得意でとんでもない火力を誇る。バイウールーは特殊方面には強いというわけでもなく、ストリンダーに有効打もないのでなるべく対面させたくない相手だ。しかし、ストリンダーの着地に有利なポケモンを出すことを読み、ズルズキンで居座って「とびひざげり」を撃たれれば苦しい展開を強いられるだろう。

「ごめんねバイウールー。ウォーグル！」

それでもやはりバイウールーとストリンダーの対面だけは避けたいのでウォーグルと交代する。

「シビれる音を聴かせてくれ！ストリンダー！」

やはり交代。寒色のローなストリンダーが現れる。あまり速さに差はないので殴り合いだ。

「オーバードライブ！」

「ゴッドバード！」

ジャアアアン、と雷を纏った音波がウォーグルに迫る。ウォーグルはこちらを見て頷き、空高くへと飛翔する。初撃は避けることができたものの、「オーバードライブ」の攻撃範囲はとても広い。ストリンダーの反応よりも先に攻撃を叩き込み、あまりの威力にひるんで動けなくさせるための指示だった。空を旋回しながらストリンダーを狙うウォーグル、そして片時も目を離さず迎撃の準備をするストリンダーとネズ。

「今！飛び込んで！」

先に口火を切ったのはルリミゾだ。風を切る音がここまで聞こえてくるほど加速し、弾丸となって飛来する。ストリンダーはネズを信

じ、攻撃のタイミングを待ち続ける。
「まだだ…待てよ…」
　影がどんどん大きくなり、音はさらに近付いてくる。ネズの額に汗が垂れる。
「今だ!!放て!!」
　まさにドンピシャ。落雷のような爆音が周囲に響く。フィールドにいた人間は全身を揺さぶるビリビリとした感覚に包まれていた。爆音による痺れなのか、ネズの鮮やかな撃墜を見た痺れなのかはわからない。
　オーバードライブ最大の火力を最適な距離でヒットさせ、ウォーグルは力なく地に落ちた。あと1秒遅ければストリンダーが倒れていたし、あと1秒早ければウォーグルは倒れていなかっただろう。
「ありがとう、ウォーグル」
　努めて冷静にイエッサンを繰り出す。心はとんでもない絶技に震えていた。すぐに切り替え、状況を分析する。特殊アタッカー対決だ。
　ストリンダーは無傷であるものの、技を二回撃っただけとは思えないほど疲弊している。あの神業はそう簡単にできるもんじゃない、ちゃんとウォーグルの動きが効いている。信じて指示を出す。
「サイコキネシス!」
「ぼくおんぱ!」
　フィールドの中心でお互いの技がぶつかり合う。ただウォーグルを落とし切って一度集中の切れたストリンダーをイエッサンが押し込んでいく。
「もっと震わせろ!」
「あたしを信じて!イエッサン!」
　トレーナー達も負けじと叫ぶ。中心で爆発が起こり、風に耐える姿勢をそれぞれ取る。
「ストリンダーが!」
　先に様子が見えたのか、観戦者の声が上がる。ネズの足元まで吹き飛ばされ、倒れたストリンダーがいた。

立っているのはイエッサンだ。
「明日はポフィンにしましょう！好きなだけ作るわ！」
こちらを見て嬉しそうに飛び込んでくる。感情を察知するイエッサンは喜びも悲しみも共有してくれる。マクワとの戦いで、揺らいだ心で力を引き出せなかったのは当然だった。あれ以来心を通わせようと努力した結果がついに出たのだ。
「この甲高いうなり声を聴け！タチフサグマ！」
ネズの声とともに臨戦態勢のイエッサンがフィールドに戻る。現れたのはタチフサグマ。知識にあるマッスグマと異なりやたら悪そうな見た目のマッスグマには驚いたし、まさか進化までするとは思わなかった。大きくなった体躯で立ち上がり、何者も通れぬほどの圧でこちらを見ている。
イエッサンは爆風で多少傷を負ったものの、押し勝ったおかげでまだまだ戦えるようだ。エスパータイプの技は悪タイプに通じないので、効果抜群のフェアリータイプ技「マジカルシャイン」を指示する。ルリミゾの心の機微と戦闘経験から予想して準備していたのだろう。技を言い終わるまでにすでに光が放たれていた。
「防げ！『ブロッキング』！続けて『じごくづき』！」
タチフサグマ固有の技「ブロッキング」で「マジカルシャイン」が防がれ、イエッサンを突かんと迫って来る。後退しながら「マジカルシャイン」を撃つが、ネズのエースは段違いに速く全て避けられてしまう。
想定外のスピードだ。だが見ているだけのルリミゾではない。経験と天性の勘で打開策を見つけ出す。
「ワンダールーム！」
イエッサンが光った瞬間、突きがクリティカルヒットして吹き飛ばされる。ドラム缶に当たり、ボゥ！と音を上げながら缶がひしゃげる。
「ワンダールーム」は周り一帯のポケモンの防御と特防を入れ替える技だ。物理攻撃に対しての防御力と、特殊攻撃に対しての防御力を交換する。特殊攻撃に対して強いイエッサンは、ワンダールーム下で

は物理に強くなるのだ。パラパラと砂が落ち、埃が舞うなかイエッサンは立ち上がる。
「マジカルシャイン！」
　物理に強いタチフサグマはワンダールーム下で当然特殊に強くなってしまうのだが、イエッサンが「じごくづき」を耐えて再び距離を取れたことの方が大きい。一矢報いんと放たれた「マジカルシャイン」は遂にタチフサグマを捉えた。効果は抜群だ。落とすまでには至らなかったが、次で確実に倒し切ることができるだろう。
「追いかけろ！」
　再び間合いを詰める戦いが始まる。イエッサンは後ろを一切振り返らず、ただタチフサグマだけを見ながら後退。「マジカルシャイン」で牽制しながらネオンの照らすフィールドを駆け巡る。
「後ろにドラム缶！右に避けてそのあとジャンプ！」
　イエッサンが壁に追い詰められないよう指示を出す。完璧な分担だった。全体を見渡せるトレーナーが目となり、頭脳となりポケモンに情報を伝える。ポケモンは戦闘を自分の判断でこなしながらトレーナーの意図を汲み取り勝利のための最善手を共に目指す。ちらりとも後ろを見ないでトレーナーの指示通りに障害物を避けていく。
・・・
　一種の完成形とまで形容できるほどの連携は、金網越しにノマとマリィの心を震わせていた。
「とんでもねえな、うちのリーダーは」
「すごか…」
　彼は委員会所属だが、もう意識は完全にノーマルジムの一員だった。
・・・
「こわいかお！」
　ネズとて黙って逃げ回られるだけではない。突然緩められた攻撃の手にイエッサンが意識を取られた瞬間、的確な指示を出す。捕食者のような恐ろしいタチフサグマの表情はイエッサンの足をすくませ、動きを鈍らせる。ルリミゾへの負担が大きくなる。もはやこれは1

人1匹同士の戦いではなく、一と一の戦いだった。
その影響は顕著に現れる。だんだんと距離は縮まっていき、ついにイエッサンが壁際に追い詰められたのだ。
「じごくづき!!」
散々打った後だったが、これで終わらせるという気持ちを言葉に込めて改めて叫ぶネズ。
「マジカルシャイン!!」
逃げられないのはタチフサグマとて同じ。回避と守りを捨て、全ての力をこの一撃に込める。

ドッ、と鈍い音がして同時に2匹、崩れ落ちた。

「最後だわ!バイウールー!」
「二回目の登場だ!みんなも名前を呼んでくれ!ズルズキン!」
即座に交代し、ズルズキンが現れ威嚇する。バイウールーは少し怯えて攻撃に力が入らなくなった。が、構わず「コットンガード」で相手の攻撃に備える。ますます膨らむ毛にもはや物理攻撃は通用しない。
それを見てズルズキンはバイウールーの前で目を閉じ気合を溜め始める。「きあいパンチ」だ。集中を阻害されてしまえばうまく決まらないが、もしかしたら一撃で持っていかれるかもしれない、という不安すら覚えかねない気迫だった。
「ボディプレス!」
だが発動を邪魔する線は即座に切り捨て、迷いなく時間のかかる攻撃技を指示する。バイウールーは膨れた毛と共に飛び上がり、ズルズキンを潰す準備を整える。
「ボディプレス」はポケモンが物理に強いほど威力が上がる技だ。
「コットンガード」でとんでもなく物理に強くなったバイウールーは、威嚇されたことと無関係に凄まじい威力が出せる。やけにスローに感じる数秒間、ルリミゾはバイウールーを信じてただ見つめていた。
「打て!」

グググ、と音が聞こえそうなほど捻られたズルズキンの小さな体がブレる。
ボ、とそれだけ音がして、毛玉は動かなくなった。
そしてまた、もう一匹は毛玉の下で気絶しているようだった。
・・・
「引き分け…」
マリィが呆然と呟く。あまりにレベルの高い勝負にまだ理解が追い付いていなかった。
「ありがとうございました」
「おれのポケモン達も、おれも満足していますよ。ありがとうございました」
「あたしもです。やっぱり決着はリーグ戦でつけましょう」
自然と笑みがこぼれる。フィールドの中心にお互い歩み寄り、握手を交わして練習試合は終わりを迎えた。
・・・
マリィがネズのポケモン達にきのみを配る。
「アニキも、ルリミゾも凄かった」
今度はキルクスジムであたしが挑むけん、待っといてよ。憧憬と期待の眼差しで見つめられる。思わぬ新規ファンだった。未来のジムチャレンジャーにエールを送る。
「待ってます！マリィならキルクスまできっと辿り着けます！」
くぅぅ、締まらない音がルリミゾのお腹から聞こえた。
「「・・・」」
一瞬の静寂のあと。
「では、ラーメンを食べにいきますか。お腹が空いてるんだよね」
「ス、スパイクタウン一押しのラーメンばい！」
兄妹の誘いを断るわけにはいかないので、決してお腹が空いているわけではないが、別にこのままキルクスに帰ってもよかったが、案内に従って路地を進んでいく。ネズが言うのでしょうがなく、付いて行くだけだ。顔が赤いのはバトル後だからだ。少しひんやりとした空気に心地良さを感じながら後を追う。

・・・

濃厚でまろやかな、不思議な白いスープのラーメンだった。ネギのさっぱりした風味と合わさって細硬い麺が進んでたまらない。不意に視線を感じて横に目をやれば、ネズがこちらを見ていた。少し怖い顔なので麺を噴き出しそうになるのを抑えて首をかしげる。何か、と。

「悩みがあれば言うんですよ」

う、と箸が止まる。見抜かれていた。

「ジムリーダーとして先輩だから言うよ。今の立場は大変だと思うけど、無理はいけないね」

代理という立場のおかげで、根底にある悩みはカモフラージュできているが、それでもやはりバトルから伝わるものがあったらしい。暖かすぎる気遣いに救われたような気持ちになる。

「ありがとうございます。あたしは大丈夫です。少し故郷が恋しくて」

シンオウ地方出身ですから、と続ければ納得したような表情で頷いてくれた。

「辛くなったら、休みを取って帰ればいいんだよね。おれは故郷から出ていないからその苦しみはわからないけど、自分の身体が一番だよね」

できるならそうしている！行き場のない言葉は胸に留めた。ネズに当たることは何一つ意味がないし、ありえない。この世界に来て一番夢中になったバトルだったが、また水をぶっかけられた気分だ。

「そうします」

短く答えてから、キルクスに戻るまでどんなやりとりをしたのかはあまり覚えていない。

１０―宝物庫襲撃

『ナックルシティ　中世の城壁を活かした歴史ある街』

人通りのなくなった深夜、看板を読む。周囲をクロバットが静かに飛び回り警戒している。ルリミゾはこの日、ギンガ団の制服に身を包みナックルシティに来ていた。狙いは宝物庫。ガラルに昔訪れたという厄災についての情報と、保存されている宝が目的だ。宝物庫と名前が付いているんだから、ポケモンに関係するレアなアイテムもあるだろう、と特に深く考えることなく走る。

ローズ委員長とチャンピオンは海の向こう、イッシュ地方のポケモンリーグを視察に行っている。ニュース記事を見た日の夜の決行だ。

歴史ある城を改築してできたスタジアムを中心に街が広がっているナックルシティは、８つ目のジムということもありかなり栄えている。ポケモンセンターは3軒あり、電車も通っている。街の西、いまは真っ暗なポケモンセンターの隣に宝物庫はある。トレーナーとポケモンのためにポケモンセンターは２４時間営業だが、この街ほど大きく何軒もある場合は時間帯をずらしてそれぞれ営業している。

宝物庫周りは需要があまりないので深夜は休業中だ。普段、宝物庫は許可を得た人物しか入ることができない。表向きに訪れることもできるが、記録が残るし、突然訪問するのは不自然だ。撮影は禁止されているし何より面白そうなものも盗めない。

「上から」

並走するドータクンに指示を出し、手を借りて壁を駆け上がる。入り口には警備員とガマゲロゲが立っており、さらに見せつけるように監視カメラが設置されていた。どうせバレて戦闘になるとしても上から入ったほうが楽なのは明白だ。

「でんじは」

着地の寸前、ボールからポリゴンZを出し周囲のカメラを停止させる。久しぶりの潜入だったが、三匹とも全く衰えていない。すぐに不審に思った警備員がここに来るだろうから、鍵の掛かった扉を「ラスターカノン」で破って侵入、辺りに警報が鳴り響く。この瞬間がたま

らないな、と思えば口元がニヤついてしまう。
「フラッシュ！」
　ガラルでは誰も知らない技だったが、シンオウ地方では日常の技だ。ポリゴンZに照らされた部屋の中には四枚のタペストリー。厄災の伝説に関わるものらしい。
「これは・・・」
「いたぞ！何をしてる！」
　読もうとした瞬間、ライトを手に持った警備員とリーグスタッフが合わせて三人、階段を駆け上がってくる。
「ゆっくり読もうとしてる観光客の邪魔しないでくれる？」
　一人はルンパッパを連れており既に戦闘態勢だが、残りは対峙してから腰のボールに手をかけている。
「遅い」
　背後からクロバットが意識を刈り取る。もう一人はドータクンの「ラスターカノン」で吹き飛ばされ、ぐっ、という呻き声と共に下に落ちていった。これで一対一。ポケモンを出させることなく二人消せたのは幸運だった。出されても簡単に潰せていただろうけど、と考えながら。
「死んだかもね？彼。仕事だっていうのにチャンピオンのおかげで平和ボケしてるわ」
　対面のリーグスタッフに語りかける。クロバット奇襲の瞬間、ルンパッパはルリミゾの足元に「くさむすび」を放ち、なおかつトレーナーを守るように動いていた。リーグスタッフはその間に追加でヌオーを繰り出し態勢を整えている。
　場慣れした動きだ。足元の草を人間離れした脚力で引きちぎりながらルリミゾはそう思った。水ポケモンが多いのはもしもの火事の消火のためだろう。
「そのセリフはチャンピオンが居るときに襲撃してから言うんだな」
　リーグスタッフがそう返すと同時、ヌオーの「あまごい」によって雨が降り、ルンパッパがその陽気な姿からは想像もつかないほどの速さで迫る。ルンパッパは雨天時に動きが速くなるポケモンだ。すい

すいと水の中を泳ぐかのように距離が縮まる。
来る。そう身構えたルリミゾの予想を裏切るようにルンパッパが奇妙なダンスを始めた。
「『フラフラダンス』だ」
「くっ」
やられた。平衡感覚が失われ、ぐにゃりと頭が右にもたれる。バランスを保とうと右足に力を入れれば後ろに倒れそうになってしまう。
「フラフラダンス」はその奇妙な踊りで見たもの全員を混乱させる。攻撃を見切らんとルンパッパを見つめていたルリミゾは完全に策に嵌められた。が、視界の端から緑の光線がヌオーを吹き飛ばす。
「そう簡単にはいかないか」
ポリゴンZの「ソーラービーム」だ。こういった複数体のポケモンで戦う遭遇戦では、ポケモンも状況に応じて自らの判断で動く。雨天下のソーラービームは本来の威力を発揮できないが、ヌオーに対して効果は抜群だ。リーグスタッフを狙った攻撃だったが身を呈して守ったようだ。倒れたままピクリとも動かない。
下からガマゲロゲが飛び上がってくる。どうやら見回りに一匹出していたらしい。
「あいつは無事か?」
ゲコ、と頷くガマゲロゲ。落下した警備員を受け止めて救ったようだ。ヌオーをボールに戻しこちらに向き合う。
状況は変わらず三対二。クロバットが闇に紛れ静かに首を狙う。ドータクンは混乱しているもののじきに立ち直るだろう、傍で護衛をさせている。ポリゴンZは健在だ。
「とっ捕まえられたらいくらでもカレー作ってやるよ」
数的不利にもかかわらず、リーグスタッフは慌てることなくポケモン達に指示を出す。おそらく8つのバッジを所持している実力者だ。ザアザアという雨の音で何を指示したのかは聞き取れなかった。
が、どうでもいい。捻じ伏せるだけだ。
「はかいこうせん」
特性により雨天下で加速したルンパッパとガマゲロゲが重なる一

瞬の隙。
　リーグスタッフが反応する間もなく、その真横をルンパッパとガマゲロゲが消し飛んだ。ボチャン、と少し離れた堀に落ちた音が二回聞こえた。衝撃でスタッフ支給品のサングラスが吹き飛び、それを認識した後に初めて気付く凄まじい風に体勢を崩すリーグスタッフ。
　ポリゴンZの恐ろしさはその火力だ。ポリゴンZは技に自らを最適化して最大の威力を引き出す。「はかいこうせん」においてポリゴンZの右に出るものはいない。
「クソッ、化物かよ」
「ま、そこそこ有能だったけどあたしを止めるのは無理ね！あたしはギンガ団幹部のロベリア！」
　覚えておきなさい、と守るものがいなくなったリーグスタッフの意識をクロバットが刈り取る。つい高揚してギンガ団での名まで名乗ってしまった。そこそこ有能なトレーナーを一方的に叩きのめすのはまたバトルとは違う爽快感があった。普段のバトルであればポケモン達を褒め、撫でたり抱きしめたりしているところだが、襲撃中にその余裕はない。再びポリゴンZに「フラッシュ」をしてもらいタペストリーを読む。
「ふむふむ、厄災と英雄ね・・・」
　後で確認するために写真も撮る。厄災に剣と盾で二人の若者が立ち向かったのだという。「ねがいぼし」の描かれたタペストリーもあるから、厄災と無関係ではないのだろう。もしかすると厄災とはダイマックスしたポケモンなのかもしれない。ダイマックスでこの地方を滅ぼしかねない程の力を秘めたポケモン。見えた希望に心が少し軽くなる。
「それほどの力があれば時空を歪めて元の世界へ帰ることも…」
　想定よりも警備たちに時間を取られてしまった。他の宝物を探す時間はないだろう。有象無象が何人集まろうが止められることはないが、撤退を見られるのは困る。クロバットでキルクスタウンに帰るからだ。逃げる方向は知られたくない。一旦街の南のワイルドエリアに抜けてから隠れて「そらをとぶ」でキルクスに帰るルートに決め

た。

ドタドタと階段を駆け上る音が聞こえてきた。追加の警備員やリーグスタッフだろう。階段真横の柱に隠れ、奇襲の準備をする。

「宝物庫の扉が！」

破られた扉が目に入り、状況を叫ぶリーグスタッフ。だが敵はそこにはいない。階段を登りきる直前に真横から蹴りを叩き込めば、声すら出せず後ろの数名を巻き込み階段を落ちていく。突然の出来事に立ち竦む残りをポリゴンZとドータクンが一掃すれば、階段には倒れ伏す弱者しかいない。

「あはは！」

マーズやジュピターと異なり、戦闘がメインのルリミゾは機能性重視の制服だ。ベレー帽を被り、髪は後ろでまとめ、口元には黒いマスク。胸にはギンガ団の象徴、黄色のGが書いてある。制服共通の胸から下に広がる白色は隠密の為にすべて黒色で統一してもらっている。

背後にドータクンとポリゴンZを従え、倒れたリーグスタッフや警備員を踏みつけながら階段を歩いて下りた。久しぶりの蹂躙に心が躍る。ただ純粋な力で破壊し、屈服させるのはギンガ団に入ってから知った喜びだ。正々堂々バトルで相手と高め合うことも大好きだったが、力で有象無象を蹴散らすことも大好きだった。

くるくると踊り、監視カメラに姿を映しながら夜の闇に消えていく。

11―開会式、ジムチャレンジャーたち

ワアアアア、と歓声がやまないエンジンシティのスタジアム。いまルリミゾがジムリーダーたちと待機している控室まで震わせるほどの声量だ。用意されたモニターにはローズ委員長とオリーヴ秘書が映し出されている。

『レディース　アンド　ジェントルマン！わたくし、リーグ委員長のローズと申します！』

この動画はガラル全土、いや世界へと配信されているからか、やや大層な文句から始まった。今日はジムチャレンジの開会式。ローズはジムチャレンジについて簡潔に説明している。８人のジムリーダーを倒したトレーナーのみが、チャンピオンの待つ「チャンピオンカップ」へと進むことができるのだという。ルリミゾは代理として他のジムリーダーと肩を並べて入場、紹介される予定だ。

控室では様々なジムリーダーから声をかけられた。代理として慣れないジムリーダー業を務めるルリミゾを気遣う者、相談に乗るよと言ってくれる者、あるいは単純に代理でもジムリーダーと認めていると後押ししてくれる者。多くの人に尊敬されるトップトレーナー達は人格すら素晴らしく、まさにジムリーダーとしてジムチャレンジャー達を導くのにふさわしい。そうルリミゾは感動していた。声をかけられている間に考えていたことは戦いたいなという事だけだったが。

『それではジムリーダーのみなさん！姿をお見せください！』

出番のようだ。行くぞ、と先頭を歩くキバナに続いて、左右に分かれながら入場していく。アンタが先頭歩くのは今年が最後ね、と不敵に笑いながら。

・・・

歓声が一段と大きくなる。通路からフィールドに出たからでもあるが、スターであるジムリーダーの入場に観客がさらに興奮しているからだ。

「ファイティングファーマー！草タイプ使いのヤロー！」

広い肩幅が軽く手を上げながら挨拶する。
「レイジングウェイブ！水ポケモンの使い手ルリナ！」
優雅に歩く褐色の美女が投げキッスすれば、さらに野太い声が大きくなる。
「いつまでも燃える男！炎のベテランファイター　カブ！」
白髪交じりのグレー、渋い表情と共に肩から手首まで一直線に伸ばしてキリっと歩く。
「悲劇の代理！ノーマルトレーナー　ルリミゾ！」
自然体で歩き、軽く微笑みながら観客席に手を振る。ノーマルタイプのユニフォームは驚くほど特徴のない白いユニフォームなのであまり気に食わないが、それでも観客たちは大声援を送ってくれる。キルクスでジムトレーナーから聞いた話によれば、ノーマルタイプユニフォームのレプリカはなかなか売れているらしい。
あたしの魅力ね、とドヤ顔すればノマはこの世の終わりみたいな表情をしていた。
・・・
「一人来ておりませんが…ガラル地方が誇るジムリーダーたちです！」
あたしは代理だけど、と心の中で呟きながらも笑顔で横一列に並ぶ。面倒だ。来ていないネズが羨ましい。だがジムとキルクスの評判は落とせない。ジムチャレンジの紹介はまだまだ続く。
「ジムチャレンジャーたちは、この８つのジムリーダーの待つスタジアムへと旅をします！まず最初にターフタウンの・・・
もしかして一から紹介するのか？と絶望した。
・・・
「・・・そして、ジムリーダーとチャンピオンがいる限り、ギンガ団を名乗る犯罪者にも負けはしません！」
話が長い。今ギンガ団と聞こえた気がしたが気のせいだろう。慣れない微笑みを続けていたせいでそろそろ表情筋がプルプルしてきた。まずい。ローズの話はもはや意味を持った言葉として耳に入ってこなかったので、まだ終わらないのかと気を取り直して再び耳を傾

ける。
「・・・ですから、ジムに訪れたジムチャレンジャーたちにはジムミッションが課されます！」
　どうやらまだ続きそうだった。限界を迎えた表情筋をほぐすため下を向く。むにむにと両手で顔全体をマッサージする。他のジムリーダーたちはまだ立っていて姿勢を崩さない。隣を見る。ポプラは今年で８８歳のはずだ。ポプラの腰のためにもジムリーダーは帰らせるべきではないだろうか。
「へばってるのはあんただけだよ」
　小声で笑いながらそう言われた。
　うるさい！

　なんとか無事？開会式を終えた後、ユニフォームを着たまま軽く変装して受付近くでジムチャレンジャーを観察する。ジムリーダー格のトレーナーはサインや写真をねだられて人ごみができてしまうから、帽子を被り、メガネをかける。これでもうかなり知的だ。年齢的にもそう変わらないので、ジムチャレンジャーの一人に見えるだろう。
　なにか楽しそうに話しているダンデの弟と、おそらくその幼馴染？、それとスパイクタウンのジムトレーナーに歓声を送られながら歩くマリィ。化けそうなのはこのあたりだろうか。とくにダンデ弟の幼馴染は、シンオウのあの少年と同じ雰囲気がある。
「ってところね」
「そんなのわかるのか？漫画のキャラじゃあるまいし・・・」
「あたしにはわかるのよ」
　ノマと話しながら入口付近でチラチーノを抱いて撫でる。ぐふぐふ、ときのみを食べながら嬉しそうにしている。ジムチャレンジャーたちは開会式の熱気から解放され、思い思いに雑談をしたりポケモンと触れ合ったりしている。そろそろ邪魔になるだろうからキルクスに帰ろうか、とノマに話しかけようとした時だった。

どいてください、と声がしたので身体を向ける。
「ぼくは委員長に推薦状をもらったいわばエリートオブエリートなんです。無駄な時間を使わせないでください」
邪魔です、と付け加えられる。明るいグレーの髪をふぁさっと手で梳き、自信満々のピンクの少年がこちらを見ていた。クソ生意気で眉間に少し皺が寄るが、ここで暴れるほど愚かではない。溢れ出る知性で怒りを抑えて立っていると、さらに続けて
「だからはやくどいてください。チラチーノですか、凡人にふさわしい地味なポケモンですね。トレーナーもポケモンも凡庸ですけど、せいぜい頑張ってください」
「・・・」
「あ?」
やめろ、たのむからやめろと横から声がする。これはわからせてやらねばなるまい。今日がこの少年のジムチャレンジ最終日だ。ちょっと表に出ましょうか、と口を開こうとした瞬間。
ばしゃあ。
突然飛んできた水がクソ生意気なピンクの少年に直撃した。
「あ~~~~~!ごめんなさい!ほらメッソンも謝って!」
「~~~~ッ!!」
頭からつま先までずぶ濡れになってしまった少年。思わず笑いがこみ上げてきて、噴き出さないように下を向いて必死で我慢する。声の主はどうやらダンデ弟の幼馴染だ。
「ごめんなさい!濡れてませんか?この子がなにかに突然怯えて『みずでっぽう』を撃ってしまって…あ、私ユウリっていいます!ジムチャレンジャーです!」
とっても臆病な子なんです。そう言いながら抱き上げたメッソンをこちらに向ける。メッソンはルリミゾと目を合わせるなり白目を向いて気絶した。失礼な。
ユウリからはメッソンの顔が見えないのか、気絶したメッソンを抱えてそのまま話しかけてくる。
「お姉さんもジムチャレンジャーですか?」

「ま、まあそんなところよ」
あたしのことよりメッソンとこの水浸しピンクを気にしなさいよ、と思いながら答える。実際年上でも一、二歳しか変わらないのだが、きっとこの知的なメガネのせいで大人びて見えたのだろう。
「おーいユウリ！誰と話してるんだ？」
「ホップ！」
ユニフォームのレプリカの買い物でもしていたのか、袋を携えたダンデ弟がこちらに寄って来る。ホップという名前らしい。だんだんと人が増えてきた。あまり話し込んでまじまじと見られてしまえば、変装がバレてしまうかもしれない。そろそろ用事を思い出す必要があった。
「あ、あたし用事を思い出したから行かなきゃ！メッソンには気にしないでって伝えておいて！」
むしろ大活躍だ、とノマは思いながらルリミゾの後を追う。これで未来あるジムチャレンジャー一人の尊い命が守られた。
「なんかどこかで見たことあるような人だったな～」
後ろ姿を見送りながら、ホップはそう呟いた。手に提げている袋にはユウリに頼まれて購入したノーマルタイプユニフォームが入っているのだが、彼らが気付くことはなかった。

ノマとルリミゾは電車に揺られながらナックルシティを目指す。ジムチャレンジ開会式の帰りだ。アーマーガアタクシーはどこからでも乗れるのが利点だが、その揺れと狭さは今日一日中外面モードでいたルリミゾには許容しがたいものがあった。
「電車で帰るわよ！」
そう宣言されればノマに拒否権はないので、ノマも電車に乗っている。キルクスへの交通の便は悪いから、徒歩かアーマーガアタクシーしかない。エンジンシティからアーマーガアタクシーを使わなかったということは、今日はもうナックルシティに泊まるつもりらしい。
「あのピンクはどうなんだ？」

直情的とはいえ、根に持つような暗い性格ではないのでメッソンの件で水に流したと判断して聞く。隣にはイエッサンが座っており、その表情は穏やかだ。ということはルリミゾも今は穏やかなのだろう。

「あいつはダメね。せいぜい4バッジあたりで限界が来るわ」

良い師匠を見つけない限りね、と付け足しながらスマホロトムをいじっている。

「師匠がいれば伸びるのか？」

ふ、今日は質問ばっかりね、と笑いながらスマホロトムを机に置きこちらを見つめるルリミゾ。しがみついていたチラチーノも頭と一緒に動いているのがなんだか面白い。

「ポケモンに好かれる才覚はあるわ。でもそれだけ。自分が人にどう見られているのかすこしも考えていないし、当然ポケモンにどう見られているかも考えていない。そんな状態でパートナーと心を通わせることなんてできないわ。見えているのは自分のことだけよ」

やけに詳細な分析が返ってきた。

「それを理解させて導く師匠が必要なわけか」

そゆこと、とだけ返事して再びスマホロトムを触り始めた。

ナックルシティまではあと10分ほどだろうか。あの場所で夢と希望に満ち溢れていた3年前の自分は、ルリミゾの目にどう映るのだろう。「んー、まあまあね。7バッジあたりで躓いて腐るわ」なんて予言されるのだろうか。

ふっと笑い、思い出しながら窓の外を眺めていた。

「何よ突然笑い出して。きもちわる」

スマホロトムを見ていたんじゃなかったのか。少しは空気を読んでほしい。

12―ターフタウン、邂逅

「あの人、生で見たらやっぱりカッコよかったな～」

はやく挑戦したいな、と笑う。そのためにはまず草・水・炎という前半3タイプのジムを攻略しなければならない。ターフタウン、バウタウン、エンジンシティは道路が円く通っていることから、よく前半の街と言われている。8つあるのに3つが前半、というのは3つめのジム、炎タイプのカブで躓くトレーナーが多いのが理由だ。

ユウリは今、ガラル鉱山で絡んできたビートを倒したところだ。この道を抜ければターフタウンはもうすぐそこだと聞いている。

「でもまずは目の前のジムに集中しないとね！」

「めっそん！」

メッソンが傷を負いながらも頷く。鉱山で働く人たちや野生のポケモンと連続でバトルした後に、同じジムチャレンジャーと戦うのはなかなかハードだった。

はやくノーマルタイプのユニフォームに袖を通したい。開会式でホップに買ってきてもらったこのレプリカは、自分の番号をプリントしてもらっているのでジムチャレンジで使うことが出来る。ユウリはジムチャレンジに元々乗り気ではなかったが、半年前にテレビで見た試合でとあるトレーナーのファンになっていた。

「あたしは！もう後には退けない！」

そう叫びながらカビゴンをキョダイマックスさせ、マクワと互角の勝負を繰り広げたトレーナー、ルリミゾだ。試合二日前に突然意識不明で運ばれたジムリーダーに代わり出場したその少女は、ユウリとほとんど変わらない年齢にもかかわらずメジャージムリーダーに勝利し、メジャー昇格を果たしていた。

この人と同じ舞台で戦ってみたい。気付けば食い入るように画面を見つめていた。幸運なことに隣の家の幼馴染、ホップの兄であるダンデはユウリにジムチャレンジへの参加を望んでいた。身近すぎて憧れというよりは親近感のあるチャンピオンよりも、テレビで見たあの強い心の少女に憧れたことはホップには内緒だ。

「ホップとライバルになってくれ。競い合う相手がいれば、きみもホップもどんどん強くなる！」

そう言われてしまえば断る理由はない。なにより言われずとも内側から燃え上がる熱情に突き動かされていた。

ターフタウンに到着したユウリは、ソニアと合流し地上絵についての意見を求められていた。

「黒い渦がガラル地方を覆い、巨大なポケモンが暴れ回った・・・」

ブラックナイトって何なんだろうね、ソニアが地上絵を眺めながら伝承を語る。いつもの癖で垂らした髪をくるくる弄っている。

「地上絵にして残すくらいだから、きっと凄い厄災だったんだろうね」

「ダイマックスと関係があるのかな・・・」

ふり絞って答えたが、考えモードに入ってしまっていて聞いていないようだ。しばらく考えたあと、ソニアはありがとね、と感謝してヤローのリーグカードをくれた。あまり歴史に興味はないが、ソニアの研究がうまくいくことを願うばかりだ。

去っていくソニアを見送ってから辺りを見渡せば、イシヘンジンとヨクバリスの顔に穴が開いた記念撮影用パネルがある。しまった、一緒に撮ればよかった。と思ったがもうソニアの姿は見えなくなっていた。

・・・

「お姉ちゃん、知ってる?ターフタウンのどこかにお宝が埋まっているんだって！」

「ほんとに!?すごいね!!」

「石碑を調べたらいいんだって！」

ソニアとの会話を近くで聞いていたのだろう。女の子が面白そうな話を聞かせてくれる。もしも歴史の解読に繋がりそうなものが見つかれば、ソニアの助けにもなる。売れそうなものだったら旅の資金にしてしまおうとも考えていた。

「ありがとう！ちょっと探してみる！」

「頑張ってね～！」

・・・

「ダメだ、全然見つかんない・・・」

女の子と別れて小一時間、何も発見できなかった。目的はジムチャレンジなので探索はほどほどにして宿で休む。明日、ヤローの待つターフスタジアムを訪れるつもりだ。まだ夕方だが、休憩がてらベッドで横に・・・

・・・

「はっ」

完全に眠ってしまっていたようだ。深夜に目を覚ました。気分転換にメッソンを連れて散歩に行く。ターフタウンは治安も良いし、このジムチャレンジの時期に悪い人はいないだろうと判断した。

「どこかに強いトレーナー落ちてないかしら」

はあ、と溜息をつく。熱いバトルも襲撃も最後にしてからしばらく経っている。ルリミゾは溜まっていた。

スマホロトムで眺めるニュースではダンデがまたキバナとエキシビションマッチを行うという。試合は明後日、シュートシティで行われるらしい。ダンデのライバルを自称するキバナは何かと試合の機会を与えられている。ズルい。何度負けても諦めない姿勢だけは見習いたいものだ。

「そうだ、今ならチャンピオンがいないじゃない！」

エキシビションとはいえ無敗記録をさらに伸ばすためにチャンピオンは調整に入った。治安維持のために深夜に駆り出されることはないだろう。どこかの管理されている遺跡や石碑を狙いに行こうと決めた。

ジムチャレンジ期間、ジムリーダーの業務はとても忙しい。メジャージムリーグの試合とジムチャレンジャーへの試練の両方をこなさなければならない。まだジムチャレンジャーは旅立ったばかりなので来ないだろうが、明後日はメジャージムリーグでポプラとの試

合だ。前半の3ジムのリーダーは、ジムチャレンジ開始直後でとても忙しいため今月の試合はほとんどない。その代わりに後半のジムリーダー同士が当たるカードが多いのだ。

「ジムリーダー代理になったのに、こんなに忙しいとあんまり意味がないわね…」

考えることをやめて着替える。ターフタウンには石碑や地上絵があるらしいので見に行きたいと思っていたが、連日ジムトレーナーたちとの特訓の予定が入っていた。明日はステーキハウス「おいしんボブ」で記者からの取材を受ける。それは楽しみなので別に構わないのだが、キルクスに拘束されてしまう。

「クロバット、行くわよ！」

行き先はターフタウン。ジムチャレンジャーも早ければ到着しているだろうが、慣れない旅で今はぐっすり眠っているだろう。

・・・

スタッと降り立つのはターフタウンの町のはずれにある丘だ。観光地だが今は静寂に包まれている。夜で地上絵が見えないのにわざわざ訪れる人はいない。イシヘンジンとヨクバリスの顔に穴が開いた写真撮影用パネルを見て、次は観光で来ようと思う。

「少し離れて飛んでいて」

指示を出し、近くを警戒させる。ドータクンやポリゴンZは出していない。今日調べたい石碑は住宅の横だったり、街の真ん中にあるので人と鉢合わせて即座に「ギンガ団だ！」と騒がれるのも面倒だ。服装もジャージにマスクと帽子で、不審者とも言えなくもない程度の変装にしている。積極的に一般人を巻き込みたいわけではない。

「まずここね」

「飛行」「毒」と向かい合った石碑に文字が書いてある。あまり厄災と関係はなさそうだ。少し離れたところには「水」と書いてある石碑があった。噂通りなら宝が埋まっているらしいが、破壊して探すのは全て回ってからでもいいだろう。

「草、悪、と」

花屋の近くに「草」、ジムの前に「悪」があった。位置関係をメモし

ておこうとペンを取り出す。その時だった。
「石碑の謎解きですか?」
「え、ええ。気になって眠れなくて」
声をかけられた。相手の姿は暗くてよく見えないが、咄嗟の返答で誤魔化し会話を繋げる。これから石碑を破壊するかもしれないのに、絡まれると面倒だ。やれ、と即座に視線でクロバットに指示を送る。
「うわ!びっくりした!」
避けられた。クロバットが失敗するなんてありえない。体調は万全のはずだ。後ろからクロバットが迫ったため人影はこちらに駆けてくる。
「何かいます!気を付けてください!」
「ッ!?」
近付いて明らかになったのは声の主がユウリということ。こちらの心配をしながら走ってくる。性格の優しさがこの状況でも発揮されているようだ。横にメッソンを連れているが、完全に怯えてしまって使い物になっていない。とすれば静かに近付くクロバットに気付いて避けたのはユウリだけの力だということになる。才覚と反射神経に驚きながらも、ポリゴンZとドータクンを繰り出しクロバットと挟む形を作る。
「あの奇襲を回避したのはアンタが初めてよ」
「ポリゴンZにドータクンって・・・ギンガ団のロベリア!?」
よく知ってるじゃない、と笑いながら対峙する。
ユウリにとってはジムチャレンジが始まっていきなりの、あまりにも過酷な試練だった。

13―忘れられない日

「石碑と地上絵に関して知ってることを吐きなさい」
ロベリアと並んで歩く。怯えて動けないメッソンと自分の命を守るためにも、ユウリはすぐに降伏した。後ろにポリゴンZが付いて来ている。逃げようとすればすぐに撃たれてしまうだろう。人間相手にポケモンの技を撃って宝物庫を襲撃するような組織だ。大声で助けを呼ぶこともできなかった。
「私も宝は見つけられませんでした。でも、ヒントは『最初は草、強いから弱いを二回追え』だと聞いています」
「地上絵については？」
「わ、わかりません。でも『ブラックナイト』って呼ばれる厄災が昔にあって、黒い渦がガラルを覆い、巨大なポケモンが暴れまわったと…ダイマックスに関係あるんじゃないかって…」
へぇ、良い情報持ってるじゃない、と褒められて安堵する。痛めつけられることはなさそうだ。と思ったとき。
「それは誰から聞いたの？」
「地上絵について、一般にそんな情報は流れていないわ」
しまった。ソニアが狙われる。
「じっ、自分で、考え、ました…」
がしっ、と後ろから、肩を組むようにしてユウリの首に腕が回される。すこし冷たい指がユウリの動脈に触れる。抑えられて、ドクン、ドクン、と跳ねるのが自分でも感じられる。長身の彼女の方へ、ぐいっと引き寄せられて耳元で囁かれた。
「嘘はあたしに通用しないわ。今、どういう状況かもう一度考えるチャンスをあげる」
次はないわよ、と告げられ血の気がまた引く。少しでも騙せると思った自分が甘かった。
「はやく。アンタの命はあたしの手のひらの上よ」
「……ソニアという、マグノリア博士の孫から聞きました…」

涙が出る。命惜しさに友人を売ってしまった。無力な自分が、何より憎い。

「ダイマックス研究者のマグノリア博士とその孫のソニアね」

「はい…」

「あはは！思いがけない収穫だわ！」

よく言ったわね、と首に回されていた手が下から頬を撫でる。こんな状況なのに心が揺れる。慌てて気を取り直す。が、もう抵抗の意思もへし折られてしまっていた。

・・・

炎、と書かれた石碑の前で足が止まった。解放されるのかな、と期待してしまう。

「これが炎の石碑ね。ヒントでわかったわ。この下に宝があるはずよ！」

（いい匂いがする…）

ジャージ姿のロベリアが動くたび、お風呂上がりのいい香りがする。まさかお風呂上がりにターフタウンを襲撃しているのだろうか。緊張で大きくなった呼吸で余計にそれが知覚される。ドクン、ドクン、と高鳴る心臓の鼓動は恐怖によるものだと思いたかった。

ユウリから手を離して、石碑の下に歩いていくロベリア。ユウリの背後には変わらずポリゴンZが待機しており、ロベリアがこちらを振り向いて言う。

「わかってると思うけど、逃げようとすれば…」

コクコクと必死に頷く。どうして離れた瞬間に寂しさを覚えたのかはわからなかったが、はやく無事に解放されたいと一切の抵抗を諦めて待つばかりだ。

「あった！これね！」

ロベリアが手に持っているのは武道で見るような黒い帯、それと掌大ほどの白い宝石だ。

「『たつじんのおび』と『ノーマルジュエル』ね。ブラックナイトに関連するものではないけど、ハズレよりはマシね」

「あげるわ、次はもっと強くなってあたしを楽しませて」

そう言ってユウリに投げ渡されたのは『たつじんのおび』、効果抜群の技の威力を高めてくれるアイテムだ。

「あたしは使わないし、ジムチャレンジャーへのプレゼントよ」

誰がお前なんかに貰うか！と普段なら捨てていたのに。

ユウリは下を向いて『たつじんのおび』を見つめていた。夜風が顔を撫でる。火照っているのを自覚してますます自己嫌悪に陥る。

「警備員やリーグスタッフなら殺してたかもね」

将来有望だし見逃してあげる、と続けながらクロバットに掴まるロベリア。

「どうすれば」

声を上げてから、我に返る。犯罪者に何を聞いているんだと。ロベリアは振り返り、続く句を待っていた。

「強く、なれますか」

自分を止められなかった。自分を脅し、友人を売らせ、殺してたかもしれないとすら言った女に質問していた。早く解放してくれ、とあんなに思っていたのに。

「あはは！あたしにそれを聞くの？」

馬鹿にされるんだと思った。

「この日を胸に刻みなさい。悔しさを、無力さを糧にするの」

いつまでも、いつまでもよ。と返ってきたのは真摯な言葉。それから周囲を見渡して、誰もいないことを確認してから、ロベリアはすこし白んだ夜に消えていった。

「助かった…」

その場にへたり込む。メッソンは隣で気絶していた。

ギンガ団幹部、ロベリアことルリミゾは上機嫌だ。厄災、ブラックナイトについての情報が得られたし、ノーマルジュエルも手に入った。そして何よりも、素晴らしく才能のあるトレーナーが開花するキッカケになったかもしれないのだ。

「泣かれたら情が移っていけないわね」

覚悟を決めて戦っているトレーナー、警備、スタッフはともかく、まだまだ旅の始まり、成長途中のジムチャレンジャーを叩き潰すことは楽しくない。友人を守るために一度嘘をつき、脅されて泣きながら話すような優しい少女はいずれ伸びるだろう。

「あの表情…ふふ」

動脈を抑えた時の顔、殺してたかもね、と言った時の顔。どれも嗜虐心を刺激する。全く殺すつもりはなかったし、情報を聞き出せればそれで満足だったが、面白いものが見れた。彼女がキルクスジムに来るのが楽しみだ。もしかしたらまた会うかもしれないな、と運命めいたものすら感じていた。

「何度でも捩じ伏せてあげる」

未来で戦うことを夢想する。きっと強敵になるだろう。それこそ何度も自分たちの邪魔をしたあの少年のように。

翌日、寝不足でノマに負けそうになったのは秘密だ。

１４―翌日、それから

翌日、ユウリは委員会から聞き取りを受けていた。
「君は脅されて、マグノリア博士とその孫のソニアさんの情報を言わされたんだね？」
「はい。地上絵と石碑について調べているようでした」
「ナックルシティの宝物庫も盗まれたものはなかった。タペストリーに記された厄災の伝説を調べていたようだったが、３０００年前の厄災を何故今調べているんだ…」
御伽噺だろう、と言うリーグスタッフ。ガラルを滅ぼしかねないほどの厄災は御免だが、語り伝えられるほどの英雄が架空の存在というのはなんだか寂しかった。
「ありがとう、このことはローズ委員長にも伝えておくよ。怖かっただろう。部屋でゆっくりお休み」
そう気遣われたが、ジムチャレンジに行きたかったので別れてからターフスタジアムに向かう。ソニアから心配するメッセージが来ていたが、心配なのはこちらも同じだ。ソニアこそ気をつけてね、と返信してスマホロトムをポケットにしまった。
「ジムチャレンジ頑張れよ！お嬢ちゃん！」
「ありがとうございます！」
「期待してるからな～！」
町は昨日の出来事など知らないように穏やかだ。委員会はジムチャレンジャーが襲われたという事件を隠したいらしく、お詫びに「でかいきんのたま」を二つ貰った。換金しろということらしい。それでもきちんとマグノリア博士の研究所には警備の人員が派遣されると聞いた。町の夜間の警備にはジムトレーナーも駆り出されるらしく、彼らが過労で倒れないか心配だ。委員会はことが大きくなる前に捕まえるつもりだと、スタッフは零していた。
「ガーディ、気にしなくていいんだよ？」
「クゥーン」
昨日、ボールから飛び出せなかったガーディはそのことをひどく気

に病んでいるようだ。いくら言っても落ち込んだまま、尻尾も垂れ下がっている。絶対に敵わない相手に飛び出すことは勇敢ではなく蛮勇だ。

ユウリは昨日、降伏するときにガーディのボールをロックしていた。その判断がガーディの自尊心を傷つけることも理解していたが、相手は犯罪者、下手に逆らえば何をされるかわからない。

「じゃあ、今から行くジムで活躍してみせて！そうすれば自分を許せるでしょ？」

「ガウ!!」

嬉しそうに吠える。初めてのジムに少し緊張するユウリだったが、昨日の出来事により吹っ切れていた。

ジムで休憩中、リーグ委員会からスマホロトムにメッセージが届いた。ピロン、という通知が鳴ったので開けば、先にメッセージを読んだらしいノマが話しかけてきた。

「ジムチャレンジャーがギンガ団に襲われたらしいぞ」

「何目当てよ、強盗？」

「石碑と地上絵について聞かれたらしい。石碑の謎解きをしようと夜中に出歩いてたら出会ったんだとさ」

危機感のかけらもないわね、と言いながらメッセージに目を通す。

ターフタウンにてギンガ団幹部、ロベリアを名乗る女にジムチャレンジャーが襲われ、マグノリア博士とその孫ソニアについての情報を聞き出された。石碑と地上絵についての情報を得ようとしていたこと、ナックルシティの宝物庫を襲撃したことと合わせると、ブラックナイトやそれを退けた英雄の剣と盾について調べていると思われる。

「まあ、当然そうなるわね」

続きを読む。

各街に存在する歴史的な遺産や資料の警護に力を入れてほしい。

要点をまとめればそういうことらしい。キルクスには歴史を語る温泉があるが、襲われることはないだろう。何故なら当の襲撃犯は温泉

を毎日見ているから。
「ウチのジムもジムトレーナーを見回りに出さないといけないのかしら。面倒ね」
アンタ行きなさいよ、とノマに雑に振る。
「ジムリーダー様が立ってりゃ誰も襲わないだろ、お前が行けよ」
「嫌よ、面倒臭い」
「俺だってそうだ」
当然警察も動いているが、ガラル全土に人員を割くわけにはいかない。ナックルシティやエンジンシティの見回りを強化しているらしい。キルクスには誰も来ない。田舎町の悪いところだ。
「温泉の壁画なんて誰でも見れるし来ないでしょ～」
「じゃあ何もしないのか？」
「盗る物もないのに襲われるわけないわ。あと襲われそうなところといえば8番道路ぐらいじゃないかしら。遺跡みたいだし。でもあっちはナックルシティの警察が見てるらしいから私たちの出番はないわ」
「もし来られたら知らねえぞ、責任問われるんじゃねえのか」
（毎日飽きるほど見てるから襲わないわよ…）
ひらひらと手を振る。
「じゃ、そろそろインタビュー受けてくるわ。鍵閉めとかよろしくね」
「ああ」
足取りは軽やかにジムを後にする。
・・・
相変わらずキルクスは今日も雪が積もっている。はー、と息を吐けば白くなって消えていく。待ち合わせにはまだ早いが、遅刻して悪印象を与え、変なことを書かれるよりはマシだ。
「うぅ～、寒いわね」
寒さに慣れているとはいえ平気なわけではない。どんな立場でも何を書かれるかわからない以上、丁寧に接さなければいけない。「もし挑発的な質問されても抑えろよ！」とノマに念押しされていたが、寛容なルリミゾはそんなことでは怒らない。

「余計な心配ね」
　呟いた時、相手の記者らしき人が来た。
・・・
　ノマの心配と裏腹に、完璧にインタビューを終えたルリミゾはステーキも食べてご機嫌だった。そういえば「おいしんボブ」にはカレーも置いてあるが、そんな逆張り注文をする輩がいればジムリーダー代理として粛清しなければならないだろう。
　帰り道、ユキハミを蹴らないように歩く。ダルマッカがぴょんぴょん跳ねて雪に跡を残している。家に置いてきたポリゴンZは家具を壊していないだろうか。
「あえてナックルシティに行って警察と委員会のメンツを潰すのも面白いわね」
　そうすれば更に警備が厳しくなり、本命のエネルギープラントに手が出しにくくなってしまうと考えてすぐに取り下げる。
「箝口令が敷かれるなんてよっぽど信用を落としたくないのね」
　それもそうか、と笑う。ジムチャレンジャーが襲われたとなればジムチャレンジ開催にも懸念の声が上がるだろうし、リタイアする者も現れるだろう。偶々目撃されたから襲っただけなのに、と思いながら次の狙いを考える。
「キルクス近くだと集合かけられて不在がバレるし8番道路はダメね」
　思考の熱で湯気が出る。こういうのはサターンやアカギが指示していたので苦手だ。残りでまだ訪れていないのは…
「ラテラルタウンの遺跡にしましょう！」
　決まりだ。ターフタウンではジムチャレンジャーと遭遇したので、まだジムチャレンジャーが到着していない街を狙う。バトルをある種神聖視している彼女にとっても、ジムチャレンジの開催が危ぶまれることは避けたかった。

１５―ラテラル遺跡襲撃

『ラテラルタウン　古代の芸術を中心に栄えてきた山間の町』

深夜、剣と盾らしきものと花？の素晴らしいセンスの絵の前でギンガ団の制服を着たルリミゾは呆然としていた。

「へったくそな絵ね・・・剣と盾が描かれてる以外なんにもわからないし、無駄足だったかしら」

ただスマホロトムで調べた通りの壁画がある。周囲には文字もそれらしき遺跡もない。なんだかイライラしてきた。リスクを負ってわざわざ来たのにへったくそな絵を見せられただけ。スマホロトムで見た町の紹介ではガラルの歴史に触れられるとの話だったのだが。キルクスの温泉の方がまだ歴史に触れられる。

「はかいこうせん」

壊してしまおう。ポリゴンZに指示を出せば、光を集めて絵を破壊せんと照準を定める。

誰も止める者はいない。ルリミゾの周りには警備員とリーグスタッフが五、六人倒れている。警備を強化しようと有象無象では相手にならない。この程度の人員で捕まえられると思われていること自体も不愉快だ。

・・・

五分ほど前、ラテラルタウンに到着したルリミゾは遺跡を調べるプランを練っていた。遺跡はちょうどジムから一本道になっている。建物の陰から様子を覗けば、例の如く警備員とリーグスタッフたちが点々と配置されている。なぎ倒しながら遺跡に向かうのはなんだかゲームのようで楽しそうだと思い、正面から走る。

「好きなように暴れなさい！」

手持ちの三匹を開放し、ルリミゾ自身も蹴りを叩き込んで通路を開けていく。

「ロベリアだ！俺たちの手に余る！サイトウさんを呼べ！」

サイトウが来ても面白そうだな、と思いながらも遺跡を調べること

が最優先だ。素早く意識を奪う。
　五分もすれば、立っているのはルリミゾだけになった。余韻に浸りながら遺跡を見れば、きったない壁画があるだけ。だから腹いせに壊す。それが今の状況だった。
・・・
　光をチャージしきったポリゴンZがこちらを見る。やれ、と声を出そうとした瞬間。
「ッ！」
　背後から蹴りが飛んできた。咄嗟に左腕を立ててブロックし、返しに右拳を突き出す。しかし体の外側へ向けて払われ、バランスを崩しそうになるがそのままの勢いで回転して肘打ち。攻撃の主は一歩退いて衝撃を和らげた。
「お相手いたす！これ以上あなたの好きにはさせません！」
「いいじゃない！最ッ高だわ！」
　ラテラルタウンジムリーダー、サイトウだ。
　右拳、左下突き、そのまま後ろ回し蹴り。熟練した技が風を切りながら迫る。上半身を反って蹴りを避け、着地を狙いローキックを放つ。ドム、と入ったものの体勢を崩さない。
「な!?」
「その程度では倒れません！」
「ぐぅッ！」
　正拳突きがモロに入る。制服でなければ危なかった。よろけるも少し距離を取り、ポケモンを含めた戦闘へとシフトする。さすがはガラル空手の申し子。近接戦闘ではやはり分が悪いらしい。認めたくはないがルリミゾは冷静に判断する。後ろに控えているドータクンに指示を出す。
「ラスターカノン！」
「カイリキー！」
　割り込んできたカイリキーが鋼の弾丸を腕ではじく。かなり鍛えられているな、と久しぶりの強敵に心が躍る。伝説に関する情報は何も得られなかったものの、この相手なら満足いくまで戦えそうだ。嬉

しくて、嬉しくて笑いがこみ上げる。
「あはは！」
「何がおかしいのですか」
「楽しくってしょうがないのよ！収穫はなかったけど――」
良い遊び相手が来たからね！と続けて「ラスターカノン」を撃つ。が、ローブシンを出し、守りを固めるサイトウ。ローブシンは手にコンクリートを持っておらず、機動力を重視しているらしい。こちらがトレーナーを狙いうるというのは想定済みで、野外での乱戦にしっかり備えているようだ。ますます気持ちが昂る。
「爆裂パンチ！」
カイリキーがその四腕を存分に活かした連撃を放つ。ドータクンに「リフレクター」を指示して盾にする。ノーガードで戦いたがるカイリキーは双方に回避しない戦いを強制する。あまりのパンチの衝撃にドータクンは混乱してしまったが、防げたなら十分だ。ポリゴンZに反撃の指示を出す。
「サイコキネシス！」
「ガァア！」
頭をおさえふらつくカイリキー。ほぼクリティカルにヒットしたにもかかわらず、ポリゴンZの超火力でも落ちないことにルリミゾは驚きながら。しかし、あと一押しで沈むだろう。追撃の指示を――
「ルチャー！」
「なっ!?」
突然の衝撃に地面を転がる。何者かに抑えつけられて動けない。
「ルチャブル！ナイス！」
ルチャブルだ。ルリミゾの背後から「フライングプレス」で急襲してきたらしい。拘束は固く、自力で抜け出すのは不可能だ。
「クソッ、ドータクン！」
動け、と願いながら呼ぶ。思いは通じて、混乱の中でもちゃんと動いてくれたようだ。こちらに鋼の弾丸が飛来する。
――ボッ、という音の直後。
ルチャブルにヒットした「ラスターカノン」はルリミゾを巻き込み

炸裂。一人と一匹が吹き飛ぶ。ルチャブルは動かなくなり、地面をバウンドしたルリミゾはよろよろと立ち上がる。
「拘束が甘いわね」
咳き込みながら強がる。全身がビリビリと痛む。いつもやっていた奇襲をまさか再現されるとは思わなかった。全く気付けなかった自分に勘の鈍りを感じる。長らく身を焦がすような戦闘の中に身を置いていなくて忘れていた。
「まさか自分を巻き込んで技を撃つなんて・・・」
「絶対に捕まれないの。のうのうと故郷で暮らしてるアンタたちと違ってね」
何を、とサイトウが言うよりも早く、クロバットが襲い掛かる。練習通りに反応したローブシンが迎撃態勢に入るが、「れいとうパンチ」はクロバットを捉えられない。予想よりも速い動きに戸惑うローブシンだったが、サイトウは状況を把握してすぐに指示を飛ばす。
「マッハパンチ！」
切り替え、より速度の出る技で撃墜を狙う。その直後にバシィ！と小気味良い音が響き、クロバットが落ちる。これで二対二。
「対策は万全ってわけね」
とはいえまだまだ余裕がある。カイリキーは一撃さえ入れられればすぐ倒せるだろうし、ローブシンは特殊攻撃に対して弱いはずだ。この距離と体力の差をどう縮めるのか。何を仕掛けてくるのかワクワクしながらサイトウと目を合わせた。
「ここまでの実力を持っていながら……」
刑事が語り掛けるように。
「どうして、悪事を働くんですか。」
何か事情が、と続けかけたサイトウが固まった。
「・・・は？」
期待外れの言葉にロベリアは。
――指示はどうした。自分を倒して捕まえるのではなかったのか。
シミュレーション通りに一匹落としたことで気が緩んだのか。
「目の前に犯罪者がいるでしょ・・・今にも壁画を壊そうとしていた犯

罪者が・・・!」

全身にみなぎっていた熱が冷めていく。

「止めるために全力でかかってきなさいよ・・・!」

まるで冷や水をぶっかけられたような。

「何上から目線で戦いの最中に質問してるのよ・・・!」

この戦いを楽しんでいたのは自分だけだったのか、と裏切られた気分だった。技の応酬、互いの誇りを賭けた戦い、命の奪い合い。それが今ではないのか。呑気に質疑応答する時間などではないはずだ。

血沸き肉躍る戦いができると、そう思っていたルリミゾの心が急速に冷える。

そして、すぐさま怒りに変わり沸騰する。

「黙って戦ってりゃよかったのに!」

ムカつくなあああああ!とロベリアが叫べばドータクンとポリゴンZが光る。

「カイリキー!ローブシン!」

サイトウの下へ戻り守るように立つ二匹。だが関係ない。

「消えろ!!はかいこうせん!!」

倒れたクロバットを「げんきのかけら」で回復させ、痛む身体に鞭打って「そらをとぶ」でキルクスへと帰る。ガラルの西にあるラテラルタウンからなら、どの方角に飛んでも足がつくことはないだろう。

「ありがとうクロバット。今日は大変だったわね」

「待て!まだ私は、」

振り返ればあまりの圧にサイトウは言葉を失う。傍らにはローブシンとカイリキーが倒れている。

「逆に聞いてあげる。這いつくばって今何をしているの?何が目的

？」

「・・・っ！」

クロバットの後ろ足を掴む。強打した胸と腕が痛いむ。ジムトレーナー達に隠すのは骨が折れそうだ、なんて思いながら。もうすでに骨は折れているかもしれないが。

・・・

「もしも他の応援が到着していたら危なかったわ」

空でひとりごちる。「はかいこうせん」はあまりの威力に撃った後しばらく反動で動けなくなる技だ。もし他のトレーナーが隠れていたりすれば今頃ルリミゾは捕まっていただろう。二匹に耐えられていても同じだ。怒りに身を任せた判断だった。

「反省ね」

すべてのトレーナーが狂気に身を委ねて戦ってくれるわけではない。優れた人格者であるジムリーダーがスタジアムの外で、初めて対峙する悪人の相手に集中できるはずがない。特にサイトウはまだ若く、野外戦闘の経験もほとんどないだろう。

「こんなに全身痛めたのに手ぶらかあ・・・」

それにしても、今回は何の収穫もなかった。残っている何かありそうな場所は8番道路と、南のド田舎にあるまどろみの森ぐらいだろう。ジムチャレンジを中止させないためにも、しばらく伝説について裏で動くのはやめよう、と考える。表で「ギンガ団の襲撃場所を調べたいんです！」という言い訳もできた。とんでもないマッチポンプだ。

ガラルの夜はまだ明けない。

16―ジムチャレンジ①

ターフスタジアムの中心、歓声とスポットライトが集まるなか、ユウリはヤローと向き合っていた。これからジムチャレンジの最後、ジムリーダーとの直接対決が始まるのだ。

「きみが襲われてしまったのは僕の責任です」

すまない、とヤローは言う。続けて、

「何かあればすぐ駆け付けられると思っとりました」

後悔を全面に、下を向いて振り絞るように話す。

「いえいえ、そんな。私は無事でしたし」

「何かあってからでは遅いのです」

「は、はい」

広い肩幅で圧があるヤローが力を込めて発言すれば、ユウリは少しおびえる。

「僕は未熟者を叩き潰すのが怖かった。心を折るのが嫌だったんです。でも、危険が迫っている以上、やらなきゃいかんのです」

「これから先、旅を続けられるかどうか、僕が確かめます」

「僕が守れなかったのに勝手な話ですが、自分の身を守れないなら旅をやめた方がいいこともあるんです」

どうやら難易度が上がったのかもしれない。冷や汗をかきながらユウリはボールを構えた。

にこやかに微笑んだヤローがサイドスローでボールを投げる。

ジムリーダーの　ヤローが

勝負を　しかけてきた！　▼

「ガーディ！君の力を見せて！」

「ヒメンカ！」

腰に帯を巻いたガーディが吠える。威嚇だ。ヒメンカは攻撃に力が入らなくなった。

「ほのおのキバ！」

「まもる！」

ガーディが炎を口にヒメンカに噛みつくが、上手く守られたよう

だ。
「『たつじんのおび』ですか。ええ選択ですね」
褒められた。少し嬉しい。が、気を取り直してすぐに指示を出す。
狙いは弱点を突いて大ダメージだ。
「かえんぐるま！」
「やどりぎのタネ！」
火を纏い回転しながら迫るガーディにヒメンカは慌てることなく冷静に種を植え付ける。吹き飛ぶヒメンカだが、まだ立ち上がる。ガーディはまだ無傷だ。どうやらダメージはないらしいが、まだバトルを勉強中のユウリは「なんだっけこの技？」と必死に記憶を探る。
「あ！じわじわダメージを与えて回復する技だ！」
「そうです。ようわかりましたね」
「かえんぐるま」にぶつかってもヒメンカはなんとか耐えている。
「たつじんのおび」で普段以上にダメージを食らったが、ヤローのために耐えたのだ。今日は大事なチャレンジャーだとヤローから聞いていた。自分が壁となってこの子を試さねばならない、と理解していたのだ。
「がんばれヒメンカ！『こうごうせい』！」
「ほのおのキバ！」
ヒメンカが全身をスタジアムの上、太陽に向けて広げる。ところどころ焼けていた傷が癒えていく。「やどりぎのタネ」も相まって回復のスピードはかなり早い。回復しきられる前にトドメを刺そうと走るガーディ。
「いっけえええ！」
ボウ、とひときわ激しく炎がはじけ、ヒメンカは倒れた。これであと一匹。最初のジムなのでヤローの手持ちは二匹だけだ。盛り上がり所をわかっている観客の声がどんどん大きくなる。とはいえまだ見守るような暖かい声援だ。
「「オーオーオーオオオオーオー」」
「ウオオオ！僕たちは粘る！農業は粘り腰なんじゃ！」
ワタシラガを繰り出すヤロー。完全に試すというより熱が入って

いる。
「ワタシラガァ！ダイマックスだ！根こそぎ刈り取ってやる！」
ヤローがワタシラガをボールに戻し、ダイマックスバンドから力を注ぐ。あまり違和感のない大きなボールとの絵面にユウリは少し笑いそうになる。
「このまま押し切ろう！ガーディ、いけるね？」
「ガウ！」
ガーディもボールに戻し、ダイマックスバンドのスイッチを押す。音声認証のやり方を後で聞いておこう、と思った。ジムリーダーたちが叫びながらダイマックスしているのがカッコいい。
ボールが大きくなり、両手でなんとか投げる。
「「ダイマックス！」」
ズ・・・ズ・・・ズン！と空気が震え、着地で地面が揺れる。
「オオオオオオ！」
普段は可愛らしい二匹も、大きな鳴き声でスタジアムを揺らす。それに応えるように観客の声も一層大きくなる。
「いっけええ！ダイバーン!!」
「アオオオオオオオン！」
大きくなったガーディが吠える。炎がパチパチとはじけて輝いた。

「なんというジムチャレンジャーじゃ！」
汗を拭きながら嬉しそうにヤローが言う。フィールドの中心へ歩み寄り、少し話をする。
「ジムチャレンジにおいて、ジムリーダーに勝った証として「草バッジ」をお渡しするんだわ！」
「ありがとうございます！」
ガシッと握手をして、ニッコリと笑い合う。

「君ならだいじょーぶだ!もっと強くなって、いつかアイツを返り討ちにできる!」
「ほんとですか!?がんばります!」
・・・
「やったねガーディ!」
「ガゥ!」
尻尾を振り回し、全身で喜びを表現するガーディ。立ち直ったようだ。と、横を見ればいつの間にかボールから飛び出したメッソンがこちらを見ている。
「・・・」
「も~~~可愛いな~!!よしよし!!」
「めっそん!」
メッソンもわしゃわしゃしてやる。ガーディはそれに嫉妬することなく、穏やかに見ている。どうやら二人の中は悪くないらしい。こんなに小さくて可愛い二匹ですら、仲を気にして、食べ物を用意して、平等に接しないといけない。五、六匹連れているジムリーダーやチャンピオンはパーティをどうまとめているのだろう。
「ルリミゾさんはカビゴンを連れているけど…」
食費はリーグ委員会から出ているのだろうか。あの可愛いチラチーノは手がかからなさそうだな、などと想像する。バイウールーやイエッサンは大人しそうだし、ウォーグルは戦い方からして利口だ。
「カビゴンの食費ぐらいかな?」
ソニアとポケモン研究所から支援を受けているとはいえ、カビゴンのように大食いなポケモンは避けようと思うユウリだった。

一方その頃、キルクスジムでは。
「ぬわあああああ!!離れなさい!!」
もごもごと、顔面にチラチーノを貼り付けたまま暴れるルリミゾ。さらさらしたチラチーノは掴みにくく、巧みにルリミゾの手を躱し抱きついている。

「どんな悲鳴だよ…」
「見てないで剥がしなさいよ!!」
わかったから暴れるな、と近付いてチラチーノを後ろから捕まえるノマ。
「最近ますますやんちゃだな」
「アンタをボコボコにしてからずっとこの調子よ」
そうかい、と適当に返す。ポケモンに懐かれる分には鬱陶しくないのか、チラチーノを叱るわけでもなくニコニコしている。不気味だ。
「何よ」
「なんだその笑顔」
「懐かれたら誰だって嬉しいわよ」
気まぐれな野蛮人だと思っていただけに、驚いた。いつもこんな感じならいいのに。
「今なんか失礼なこと思われた気がする」
「き、気のせいだろ」
やはり野蛮人だ。
「誰だって色んな面があるわ。戦いを好むのも、ポケモンを愛でるのも、ファンと会って喜ぶのも、短気なのも、全部含めてあたし。完全な善人、完全な悪人なんていないのと同じよ」
妙に説得力のある言葉に、何も返せずただ黙ってキュウコンを撫でていた。

17―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ①

「さぁて、まずは初戦、あのババアを軽く捻るわよ！」
「ぐふ！」
　ポプラに対して敬意がないわけではなく、強敵として認めたゆえの軽口。控え室でポケモンたちと触れ合い、名前が呼ばれるのを待つ。
「ルリミゾさん、お時間です！」
「今行きます」
　ラテラルタウンで負った傷が痛む。体調は万全ではないが、それは歳を重ねた相手とて同じ。ポケモンたちをボールに戻し、通路からスタジアムのフィールドに向かう。今日はアラベスクタウンでの試合。腰の曲がったポプラを気遣ってルリミゾがアウェイに出向くかたちだ。
「相変わらず凄い歓声ですね…」
　本性を隠し、ジムリーダーらしく振る舞う。通路から一歩、また一歩とフィールドに近付くたび、歓声が大きくなる。一位を獲るためには一敗もできない。少し身体が硬くなるが、ただ故郷へ帰ることを想って力をもらう。
ワァァアアアア
「代理だからって手加減はしないよ」
「年配だからと手加減はしませんよ」
「なかなか言うじゃないか。口だけじゃなく振る舞いで見せな」
　少し本性が漏れ出てしまったようだ。どちらからともなく後ろへ向いて距離を取る。気持ちを切り替え、最初に出すポケモンを選ぶ。ポプラは老いて歩幅が小さく、ゆっくりなためそれに合わせてルリミゾもゆっくり歩く。
「それじゃ、よろしく頼むよ」
「よろしくお願いします！」
　閉じた傘を地面につきたて、両手を持ち手の上に置いた。少し手首でリズムを取ってから、下から軽くハイパーボールを投げるポプラ。
　ジムリーダーの　ポプラが

勝負を　しかけてきた！　▼

「あたしぐらいの歳になれば、若者みたいな投げ方はできないね」
「気にすることないと思いますよっ！」
猫を被り答えながらモンスターボールを投げる。今更だが構わない。
「バイウールー！」
光と共にもふもふが降り立つ。今までの試合の傾向からして、おそらく最初に繰り出すのはクチートやマタドガスだろう。ポプラの繰り出したポケモンは・・・
「トゲキッス!?」
「あんたの試合、見させてもらったよ」
「ウォーグルを出されちゃ厄介だからねえ、クチートは温存さ」

「これはどういう対面なのでしょうか？解説のカキタさん、お願いします」
「えー、ルリミゾ選手を研究したポプラ選手が読み勝ったという感じですね。バイウールーは物理で攻撃するポケモンで相手をすると非常に面倒ですから、上手くトゲキッスを当てた形になっています」
「どうしてバイウールーが面倒なのですか？」
「彼らにはもふもふの毛がありますよね。それがクッションとなって、バイウールーに直接攻撃でダメージを与えるのは至難の業です。ですから、特殊攻撃や遠距離からの物理攻撃で沈める必要があるんです」
ここは実況席。ガラル全土に放送されるメジャージムリーグはとんでもない視聴率を誇る。普段バトルをしないトレーナーや、駆け出しのトレーナーにもわかりやすく状況を実況・解説するのが彼らの役目だ。実況のミタラシ、解説のカキタというコンビは特に人気のキャスター。そんな二人が担当するほど、新しく昇格したルリミゾの戦いは注目を浴びていた。

・・・

バイウールーに風の刃が迫る。トゲキッスの十八番「エアスラッシュ」だ。当たったポケモンは風で動きを封じられることがあり、うまくいけば不利なマッチアップすら完封して勝利することができる凶悪な技として知られている。

「ワイルドボルト！」

電気を纏い、バイウールーがトゲキッス目掛けて駆ける。ルリミゾ達に打開策がない訳ではなかった。トゲキッスは電気に弱く、攻撃を当てることさえできれば大ダメージを与えられる。

問題は「エアスラッシュ」がトゲキッスの十八番と言われる理由だ。

「突っ張った！」

「ルリミゾ選手、交代せず『ワイルドボルト』で反撃に出た！風の刃が迫るなかバイウールーは走ります！」

カキタが驚き声を上げる。状況を精細に伝えるミタラシ。

ゴウ！とバイウールーにまず一発ヒットし、続けて飛来した残りの刃が入り乱れバイウールーや地面を叩く。

「衝撃で煙が上がっています！バイウールーどうだ!?動けているでしょうか!?」

「エアスラッシュ」が着弾し、土煙を上げるスタジアム。しかしいくら待てど雷を纏ったバイウールーは飛び出さない。

「おぉーっと!?バイウールー動けません！ひるんでいます！エアスラッシュがハマりました！」

「これですねー。トゲキッスの『エアスラッシュ』の凶悪さは」

「と、いいますと?」

「トゲキッスは技の扱いが非常に器用なポケモンです。技でダメージを与えるだけでなく、火傷や麻痺、ひるみ、そういった追加での影響を起こしやすい、天からの恵みを受けたようなポケモンなんです」

（クソッ。運だけはいいわねあのババア…）

「もう一回、今度こそ『ワイルドボルト』！

あと二発ほどなら受けられるだろうが、大きな不利に変わりはない。バイウールーを切り捨てる筋も考えねばならないだろう。これぱかりはトレーナーとポケモンの問題ではない。トゲキッスを相手にした多くのトレーナーはただ上手くハマらないことを祈るばかりだ。

「メエェ!!」

見た目にそぐわずバチバチと光り、音を立てるバイウールー。

「もう一度だよ。わからせてやりな」

「フウウウウン!」

当然、ポプラは同じように「エアスラッシュ」を指示する。交代しようが、突っ張ろうが「エアスラッシュ」の当たる限りポプラが有利だ。

が、相手はルリミゾ。戦闘に関して天賦の才がある。

「見えた!右に二発、上から一発、遅れて左から二発!」

「な!?」

「メエエエエ!」

バイウールーは叫びながら見事にステップして全ての風の刃を回避、トゲキッスへと突撃する。

「当たった!よくやったわ!」

バチン!と空中で輝き着地するバイウールー。反動で少しダメージを受けたが、トゲキッスは体のあちこちを焦がしフラついている。

「どうやって見切ったんだい?まさか土煙の揺らぎかい?」

「ええ。一発目が大きく巻き上げてくれましたから」

驚異的なトレーナーとしての才覚。常人は考えもしないことをルリミゾはやってのけた。ポケモンの目、頭脳としてのトレーナーの極致だ。

「と、とんでもないことをしたルリミゾ選手!今の見ましたかカキタさん!彼女指示して全部避けましたよ!」

「とんでもないですね・・・土煙に生じた僅かな揺れで、風の刃を全て

見切ったようです」
「これはわからなくなってきたんじゃないですか?」
「そうですねぇ、ポプラ選手は『エアスラッシュ』を撃ちにくいですよこれは」
　次の一手が分岐点です、と解説するカキタ。彼はポケモントレーナーとしては3バッジ止まりだが、必死に努力して知識を付けこの席に座っている。今では彼の右に出る解説はいないほどだ。
「やってくれるじゃないか」
　ポプラが笑う。これで状況はイーブンに戻った。今度はバイウールー自ら土煙を巻き上げ、ルリミゾが指示を出しやすいような状況を作り出し「エアスラッシュ」を牽制する。トレーナーとの信頼、連携からきた行動だ。
「ちまちま戦うのはやめにするよ。『だいもんじ』!」
　トゲキッスが羽を大きく広げ、等身大の炎を放つ。
「ポプラ選手、勝負に出ました!『だいもんじ』でバイウールーを仕留めにかかります!」
「『エアスラッシュ』はもう通じないとルリミゾ選手をリスペクトしての判断ですねー。老いても衰えませんね」
「ギガインパクト!」
　それは「ワイルドボルト」よりもさらに威力を求めた指示。絶対に一撃で仕留めるという判断。
「対するルリミゾ選手、反動を覚悟で『ギガインパクト』!真っ向からぶつかり合います!」
「もちろん『だいもんじ』は彼女ほどのトレーナーならば予想できていたでしょうから、『あついしぼう』のカビゴンで受けながら交代する選択肢もありました。それでもバイウールーで戦ったのは信頼と場の流れでしょう」

「あなたなら耐えられる!」
　これまでの特訓、そして試合、何より培った信頼関係から火中へと

飛び込む指示をする。あえて自分から火に飛び込もうとする生物はいない。ましてや他人の指示でだ。

「メエェエエエエ！」

それでも信じて突っ込んでくれる。「だいもんじ」が迫り、ルリミズも焼かれるような気持ちでバイウールーを見つめていた。その熱量は呼吸するたびに喉を、鼻をカラカラにする。張り付くような乾燥が気持ち悪い。視界の向こうが熱でゆらぐ。

「バイウールー！」

「トゲキッス！」

ドゴォ！とおよそ生物同士がぶつかったとは思えない音を立てて空気が震えた。

「バイウールー、トゲキッス共に倒れています！戦闘不能！戦闘不能です！まさかの引き分けだあ～！」

声が響く。ミタラシは一匹目からハードだな、と思いながら試合の熱狂を伝えるべく言葉を紡ぐ。

「一匹目から壮絶な殴り合いです！これは今何が起きたのでしょうか、カキタさん」

「先ほど説明した通り、バイウールーはもふもふです。それゆえ炎にはとても弱く、草ポケモンでもないのに大ダメージを受けてしまいます。ですから『エアスラッシュ』で受けたダメージ分と『ワイルドボルト』で食らった反動と合わせて耐えられなかったんですねー。ただトゲキッスが圧倒的な有利な状況でよく1―1交換にまで持ち込みましたよルリミゾ選手」

「ギガインパクト」の指示が効いていました。とカキタは続ける。どうやら興奮して熱が入ったようだ。

「はじめから、バイウールーは自分が相打ちになってでもトゲキッス

を落としきり、試合を有利に運ぶと覚悟を決めていたようです。まさにトレーナー、チームのための献身。一流の試合でしか見れないプレーですよ今のは」

　長年の経験から、ここで止めるように隣のカキタの肩を抑えて伝えるミタラシ。このままだとカキタが一人で話すだけになってしまう。視聴者を意識してリードする。

「トゲキッスが落ちるとどうなるのでしょうか?そこまでして落とす必要があったんですか?」

「ええ。これでルリミゾ選手がかなり有利になりましたよ。何せ彼女にはトゲキッスによって出せなかった・・・」

「カビゴンが控えていますから」

18―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ②

「カビゴン！」
「クチート」
　カキタの予言通り、大きな音を立てながら着地するカビゴン。対するクチートは後ろ顎を使って威嚇している。少しだけカビゴンが怯えるも、指示に従い攻撃に出る。
「カビゴン、ここで地面を激しく揺らします！『じしん』です！しかしクチート、大きく飛び上がった！」
「動きの遅いカビゴンの弱点ですねー。有利な技を持っていても、先に動いて当てるのが難しい。相手の攻撃を待ってからでないと」
　空中で攻撃の姿勢を取るクチートにポプラが指示を飛ばす。対策は万全。この試合は引退の見えてきたポプラにとって残り少ない試合のひとつだ。目の前の相手がおそらく上位に相当するであろうことも見抜いていた。
「グロウパンチ！」
　故に、ゼンリョク。
「決まりましたが・・ダメージをあまり受けていませんカビゴン！少し拍子抜けといったところでしょうか」
「いや、これで合っています。『グロウパンチ』は威力こそ低いですが、同時に攻撃力を高める技です。今の一回でクチートの力がかなり高まりましたよ」
「では一発で倒すのではなく時間をかけてでも確実に倒すと？」
「そのようですね。しかしカビゴンには体力を回復するきのみがあります。どう立ち回るのか、気になりますね」

「悩みどころね・・・」
　カビゴンの攻撃力は下げられ、クチートの攻撃力は上がった。それでもまだ種族の差が埋まるわけではないが、常に先手を取られるぶんルリミゾが不利だ。クチートの使う「アイアンヘッド」は「エアスラッ

シュ」のように食らった相手をひるませることがある。もちろんトゲキッスには及ばないが、先に攻撃され続けると面倒なのは確かだ。

「まあいいわ、『あくび』！」

指示したのは攻撃技ではなく相手を眠りに誘う技。これならば先に動いても避けられることはない。欠伸をうつされたポケモンは眠気を誘われ、いずれ眠ってしまう。即座に何かを起こす、ということはできないものの、眠ってしまったポケモンは叩きたい放題。交代するか、眠るかを強いらせるいやらしい技だ。

「絡め手とはやるじゃないか」

既にクチートは走り出している。欠伸をしながらも勢いは衰えず、攻撃を叩き込まんと距離を詰めた。後ろ顎を振り乱し、硬質化させて叩きつける。

「アイアンヘッド」

ドム、という音とともにダメージでカビゴンが仰け反る。効いている、とポプラは思った。あと二発ほどでカビゴンを沈められるだろうが、きのみが厄介だ。とはいえまずは「あくび」への対処が必要だ。

「交代だよ。マタドガス」

繰り出されると同時、足元に霧が立ち込める。

「これは・・・！」

「クチートをマタドガスと交代しましたポプラ選手！ピンクの霧が立ち込めます！」

「この個体は普段ポプラ選手が使っている個体と違います！『ミストメイカー』のマタドガスだ！」

興奮するカキタ。視聴者がついていけるようフォローするミタラシ。

「どう違うのでしょうか？何かこの試合で違いが役に立つのですか？」

「普段であれば、『ふゆう』しているマタドガスを使っているのですが、今回は特殊な個体です。あのマタドガスが出す霧の中では、麻痺、火

傷、眠り、毒といった一切の状態異常にポケモンがならなくなるんです」

「ではカビゴンの『あくび』が実質無意味に・・・！ここでも奇策を用意していたポプラ選手！」

しかもですよ、とカキタは続ける。

「もしマタドガスがカビゴンに勝てなくても、もう一度クチートを繰り出せば、また威嚇されてカビゴンはもうほとんど攻撃に力が入らなくなるでしょう。そうなればクチートは『つるぎのまい』をします。誰にも止められませんよ」

「く・・・」

してやられたな、とルリミゾは思う。ジムリーグでは登録した手持ちが公開される。ポプラの手持ちの顔ぶれに変化はなかったため、今までと変わらず、同じ個体だと思わされていた。魔術師に引っ掛けられた。

（マタドガスを簡単に倒せるのはイエッサンね。だけど後出しじゃ柔らかいイエッサンはすぐやられちゃう。でもカビゴンの攻撃をこれ以上下げられるわけにはいかない。クチートへの交代を牽制しつつマタドガスと戦えるのは・・・）

「ウォーグル！」

カビゴンを交代し、「まけんき」のウォーグルを繰り出す。ここで撃ってきたのが「ヘドロウェーブ」や「マジカルシャイン」だとしても耐え、反撃に出られるだろう。そう考えながら繰り出したウォーグルを目で追えば、やけに辺りが暗くなっていることに気付いた。

不意に暗くなったフィールドを疑問に思い、空を見上げれば黒雲が立ち込めている。

バリバリバリ！

鼓膜を劈く轟音が聞こえた後、黒焦げになったウォーグルが落ちて

きた。
「想定済みさ」
雷が落ちた。

「なんだその読みはぁぁあ!?ウォーグル戦闘不能!一撃です!一撃で落とされました!」
「まるで未来が見えていたかのような『かみなり』でしたね・・・しかも命中させた。今期のポプラ選手、とんでもないですね」
「後継者が見つかればいつでも引退すると公言していたポプラ選手ですが、後継者が見つかったのでしょうか。あるいは見つかる確信があるのでしょうか」
「どちらにせよ凄まじい気迫です。今年８８歳とは思えないプレイングですね」
ジムリーダー歴７０年。その重みは伊達ではない。ミタラシ、カキタが生まれる前から。ルリミゾが生まれる前から彼女はジムリーダーなのだ。
「ルリミゾ選手、下を向いたまま動きません!次のポケモンを出すのに３０秒以上かかってしまうと反則が取られますよ!」
「彼女にとって初めてのジムリーグ戦、それでこんな絶技を見せられれば・・・彼女が受けた衝撃は相当ですよ」

「そんな・・・」
ルリミゾは、
「なんて素晴らしい!こんなに心が躍るバトル久しぶりよ!」
歓喜していた。「これがジムリーダーの実力か」と。四天王、あるいはチャンピオンにまで迫らんとする読み、戦術だ。前シーズンでポプラの順位が六位だったのが信じられない。
「ますます楽しくなってきたわ!もっともっと戦いましょう!カビゴン!」

再び着地する巨体。あのマタドガスに「じしん」が当たるかはわからないが「ヘビーボンバー」が抜群に効くだろうと直感していた。

「ヘビーボンバー！」

カビゴンが飛び上がった瞬間、マタドガスが引っ込み再びクチートが現れる。クチートの「いかく」を最大限活かした戦法だ。同時にマタドガスの苦手な「ヘビーボンバー」をクチートが代わりに受けるという意味もある。

「関係ないわ！押し潰しなさい！」

威嚇されながらもクチートの何倍もある体躯が真上から押し潰す。が、あまりダメージは通らない。肉を押しのけるように下から這い出てくるクチート。まだピンピンしている。

「ルリミゾ選手、立ち直りカビゴンを繰り出しました！対するポプラ選手は交代、またしてもカビゴン対クチートの構図です！」

「最初と違うのは、もうカビゴンが『あくび』を撃てない点、そしてルリミゾ選手のウォーグルが何もすることなく落とされたという点です」

「これで手持ちの数は三対四、ポプラ選手がリードしていますね」

「ただ気になるのは、ルリミゾ選手がいつもダイマックスさせていたカビゴンを早めに繰り出し、ここまで消耗していることです。他のポケモンでダイマックスを狙っているにしても、残りはチラチーノとイエッサン。あまりダイマックスが効果的ではありません。ウォーグルでダイマックスする予定だったのが崩されてしまったのでしょうか？それともカビゴンをこのまま使うのか・・・」

その持ち前の考察力でルリミゾのプランを推測するカキタ。彼の思考を追うような解説はこのキャスターコンビの人気の理由の一つだ。

「ただ、ポプラ選手サイドもカビゴンの突破はまだまだ難しいです。クチートで攻撃力を下げたものの、カビゴンの耐久力はフェアリータイプではなかなか突破しにくいですし、『ヘビーボンバー』や『じしん』

が突き刺さっています。どう突破するのかが見どころですね」

「さあ、下準備はできたよ。出ておいで」
　また交代。今度こそクチートとの殴り合いが始まると踏んでいたルリミゾは意表を突かれた。
「ヒヒィイイン！」
「ギャロップ！そういうことね！」
　指示していたのは「じしん」。揺れがギャロップに襲い掛かるが、ほとんど効いていない。ガラル地方のギャロップはピンク色でフェアリー／エスパータイプだ。例にもれず弱点は鋼タイプなのでカビゴンが「ヘビーボンバー」を二回ほど当てれば沈むだろう。普通の攻撃技で殴り合えばカビゴンが絶対に勝つ。
「さあ、戦おうじゃないか」
　ルリミゾを挑発するようにしわくちゃの顔を歪めて笑うポプラ。まるで魔女だ。
「乗りませんよ！」
　が、狙いが完全に読めた。ルリミゾはカビゴンを戻し、イエッサンを繰り出す。左右にステップしながら、パカラ、パカラと小気味いい音を立てて迫るギャロップ。角をカビゴンのいた場所に向け輝かせている。
「つのドリル」
　空振り。
「読まれてたかい」

「まさかの『つのドリル』だぁあああ！が、外しました！一撃必殺ならず！イエッサンが降り立ちます！」
「なるほど！これが狙いか！」
「カキタさん、解説をお願いします」
「今までクチートを交互に繰り出して丁寧に、丁寧にカビゴンの攻撃

力を下げたり、ウォーグルを引き出したりしていましたよね。それはカビゴンとギャロップの対面を作りたかったからだったんです」

「というのはなぜ？」

ミタラシもそれなりに長く実況を務めているため、今の状況を見ただけでも当然理解できる。しかしそれを説明するためにわからないふりをして解説に振るのも仕事だ。目くばせをし、互いの役割を果たす。

「今見た通り、『つのドリル』です。当たれば一撃でどんなポケモンでも戦闘不能にする大技ですが、リーグの統計では1／3ほどしか当てられないと出ています。カビゴンの『ヘビーボンバー』と殴り合いつつ、ギャロップが『つのドリル』を当てられるまで耐えるためには、クチートの『いかく』でカビゴンの攻撃を下げる必要があったんですね」

「しかしルリミゾ選手はイエッサンと交代しましたよ、ルリミゾ選手はそれを読んでいたと？」

「信じられない予測判断ですが、仰る通りだと思います。ポプラ選手、『ミストメイカー』のマタドガスに続いて、あのギャロップが『つのドリル』を公式戦で使ったのは初めてですよ。ルリミゾ選手、ギャロップが『つのドリル』を覚えることをよく知識として知っていましたね。そしてそれを使ってくると今までのポプラ選手のプレイングから推理した。これはとんでもない試合ですよ。」

今期のリーグは荒れるかもしれません、と締めくくりフィールドに目をやる。満面の笑みのルリミゾと苦々しい顔をしたポプラ。中堅や下位になるだろうと予想されていた二人だったが、どうやらその予想は外れそうだ。

１９―ｖｓポプラ　メジャージムリーグ③

対峙するイエッサンとギャロップ。三対四と数的有利こそ渡したものの、ポプラの詰めの「つのドリル」をすかしたことで形勢はルリミゾ有利に戻っている。高火力低耐久のイエッサンを無傷で着地させられたことは、ルリミゾに大きなアドバンテージをもたらした。

「両者睨み合っています！」

「イエッサンには『シャドーボール』があります。当たり所が悪ければギャロップは一撃で落ちますよ」

「ポプラ選手が不利に変わったと仰っていましたが、ポプラ選手はここからどう動くべきなんでしょうか？」

「ここでギャロップを落とされてしまえば、カビゴンの突破手段がなくなってしまいます。ですから、残る選択肢はひとつ。交代して――」

マホイップを繰り出すことです。

そうカキタが言い終わった瞬間、フィールドが揺れ、巨大な影がふたつ、降り立った。

「腹を括ったかい？ちょいと楽しませてもらうよ」

マホイップに交代すると同時、即座にボールに戻しダイマックスバンドから力を注ぐポプラ。両手で持ち、下からひょいと投げる。やはり他のジムリーダーのように全力投球はできないらしい。

「あたしは十分に楽しんでます！もっともっと見せてください!!」

ただただ、玩具をねだる子供のように。戦闘への欲求は留まることを知らない。驚異的な冴えでマホイップへの交代を読み切り、イエッサンからカビゴンに交代。ダイマックスバンドから力を注ぐ。

「マホイップ！」

「カビゴン！」

「「キョダイマックス!!」」

ゴウ！と風が吹き荒れる。

「両者ともにダイマックスだぁあ！示し合わせたかのように交代してからのダイマックスです！」
「ポプラ選手がマホイップに交代するであろうことは先ほど示唆しましたが、まさかダイマックスまで読んでダイマックスを切るのは予想外ですよ！」
「ということは、ルリミゾ選手が上回ったのでしょうか？」
「ええ。カビゴンの『ヘビーボンバー』はダイマックスしたポケモン相手に効果がありません。しかし、ダイマックスして『ダイスチル』に変化すればダイマックスしてても大ダメージです」
　カキタが話している間に水を飲むミタラシ。二人とも実況席にいながら、立ち上がってキャスティングしている。試合の熱量をそのまま伝えるために辿り着いたスタイルだ。

「キョダイダンエン！」
「ダイスチル！」
　マホイップがクリームをまき散らし、カビゴンも微量ながらダメージを食らう。反撃の「ダイスチル」もマホイップを傷付けるが、揺らぐことなくその大きなケーキの頂上に座している。
「回復してる・・・あの技の効果ね」
　まき散らしたクリームがマホイップに戻り、マホイップの傷が癒えていく。カビゴンも負けじときのみを食べるが状況は膠着している。どちらも有効打がない。
「もう一度、『キョダイダンエン』だよ」
「キョダイサイセイ！」
　きのみを再生させるため「キョダイサイセイ」を指示する。そこそこのダメージがマホイップに入るが、変わらず「キョダイダンエン」で回復しつつこちらにダメージを与えてくる。ルリミゾがダイマックスをあまり好きになれない理由の一つだ。ダイマックスしたポケモ

ン同士の殴り合いは、大迫力で死闘になることもあるが、カビゴンの性質上、耐久型のポケモンとダイマックス対決になった時に駆け引きが消滅するのだ。

「キョダイダンエン」

「ダイアース！」

マホイップの攻撃に対して強くするため「ダイアース」で特殊防御を高める。また「キョダイダンエン」だ。三連続で同じ技。とはいえこれがポプラにできる最善手だとルリミゾも理解していたので苛立つことなく次の一手を考える。

「何も状況は変わらず！双方ダイマックスを使いましたが振り出しに戻りました！」

「お互いに回復と防御力があったのでこうなってしまいましたねー。たいていの場合は巨大化したポケモンが殴り合って大迫力になるんですが、両方耐久型のポケモンの場合は地味なものになってしまいます。」

「お互いダイマックスが解除されましたが、どうなるんでしょうか」

「マホイップもカビゴンも消耗はしていますから、カビゴンより先に動けるマホイップにポプラ選手がどんな指示を出すかですね。隙を見せれば『ヘビーボンバー』が待っています。」

「ここまで対策したからねえ、サクっと勝たせてもらうつもりだったんだけど。一筋縄じゃあいかないね」

そう言うと、またしてもマホイップをボールに戻しクチートを繰り出した。徹底的にカビゴンに当て続けるつもりだ。既にカビゴンは飛び上がっている。

「あたしに同じ手法は通じませんよ」

散々やられたことだ。もう完全にポプラの傾向は把握した。

「じしん！」

「なに!?」
　驚きで傘を取り落とすポプラ。飛び上がっていたのは「ヘビーボンバー」をするためではなく「じしん」を直接当てるため。
　ズン！とフィールド全体を揺らす衝撃でポプラが地面に膝をつく。
「クチート戦闘不能！」
　見上げた先にはクチートを踏みつぶしたカビゴンがこちらを見て勝ち誇っていた。

「決まったあああああ！カビゴンの『じしん』でクチートが倒れました！これでカウントは三対三！」
「ルリミゾ選手はもうこの試合のポプラ選手の傾向を読み切ったようですね。恐ろしい才能です」
　カキタはそう解説しながら、ルリミゾの勝利を予想していた。
「おそらくここでギャロップが出てきますから、注目すべきはカビゴンを交代するかどうかですね」
「というのは？」
「カビゴンを残すことを気にするあまり、交代したポケモンが『つのドリル』に被弾して倒されてしまえば、少し雲行きは怪しくなります。『つのドリル』を撃つ回数が増えれば増えるほど、ポプラ選手が有利になりますからね。カビゴンが倒されるのを覚悟したうえで突っ張るのか、それとも外すことを願いながら交代するのかということです」
「それはいわゆる――」
「心の戦いですね。少しでも気持ちのブレた方が負けます」
　ふたりのキャスターは両者とも、今までの経験から、この試合が単に1／3の確率で決まるとは思っていなかった。

「ギャロップ。やってやろうじゃないか」
　傘を支えにして立ち上がったポプラ。投げたボールから現れたのはやはりギャロップ。

「つのドリル」
「ヘビーボンバー！」
散々繰り返したヘビーボンバー。カビゴンの気力は衰えることなく、再び高く飛び上がる。ルリミゾは一切カビゴンを交代する気がなかった。ここで退いてしまえば、なにか気持ちで負けてしまうような気がしたし、不思議とポプラが「つのドリル」を当てるような確信があった。
ボ、という音とともに巨体がギャロップと衝突した。衝撃で風が起こり、腕で顔を隠す。
煙が晴れ、その姿が明瞭に見えるが、いつまで経ってもカビゴンは起き上がらない。
「カビゴン戦闘不能！」
ワァアアアアア！という観客の歓声が初めてルリミゾの耳に入った。はぁー、とため息を一つ吐き、興奮しきっていた頭を冷やす。巨体の下からギャロップがボロボロになりながらも這い出てくる。
勝った。
強がりでも妄想でもなんでもなく、ルリミゾはこの瞬間に勝利を確信した。カビゴンの「ヘビーボンバー」がギャロップにダメージを与えたことを確認した瞬間に。空を飛ぶ厄介なトゲキッスが倒れ、「いかく」でこちらの攻撃力を下げてくるクチートも倒れた。物理攻撃に対してかなり硬いギャロップもカビゴンを倒すためにかなりの痛手を負った。ポプラのエースのマホイップは体力を半分近く削られ、ダイマックスも使い切った。
「ぐふー！」
チラチーノを止められるポケモンはもう誰もいない。

「何が・・・起こったのでしょうか。カキタさん、解説を、お願いします」

絞り出すように発された声は、それなりにポケモンバトルを観戦してきたミタラシの理解が追い付いていないことを示していた。
「チラチーノが、ポプラ選手の残っていた三匹を連続で倒しました。しかも無傷で。・・・ありえないことです。ジムリーダー同士のバトルで、しかもメジャージムリーグですよ?」
カキタの声も震えていた。当然ルリミゾの勝利は予想していた。ただそれはカビゴンが生き残った場合の話。カビゴンを守るために他のポケモンに「つのドリル」を受けさせ、チラチーノかイエッサンが倒されたとしてもギャロップを突破し、カビゴンと残った一匹でポプラの手持ちを倒し切ると予測していた。
「確かに残りの三匹は全て体力を削られていました。彼女のチラチーノは別格に強いです。が、技すら出させることなく全て一撃で葬り、一気に試合を終わらせるほどとは思いませんでした・・・」
「どうしてここまで綺麗にチラチーノにポプラ選手はやられてしまったのでしょうか?」
「ダイマックスを使わされたのが大きいです。ギャロップの『つのドリル』をすかしてイエッサンを繰り出し、マホイップとの交代を余儀なくされたシーン。あそこでルリミゾ選手がダイマックスを切ったのは読みではなく誘いだったんですね」
「誘い、ですか」
視聴者のための質問ではなく、ただ目の前で起きた出来事を知ろうとする者の相槌だった。
「はい。ポプラ選手がダイマックスを切ろうが、切るまいが、カビゴンのダイマックスに対抗するためにはポプラ選手もダイマックスを切るしかありませんから」
「なるほど、だから示し合わせたようにお互い同時にダイマックスしていたんですね」
「ダイマックスしたポケモンを相手取るにはチラチーノは少し火力不足なところがあります。ダイマックスしてもチラチーノは打たれ弱いままですしね。だからチラチーノが止められないよう、状況をコントロールしていたんです。」

ギャロップが『つのドリル』を撃ってくることを推理した瞬間から。そうカキタが締めくくったのを確認してから、ミタラシは気を取り直し試合の結果を繰り返し伝える。

「ノーマルジム、ルリミゾ選手　対　フェアリージム、ポプラ選手は2―0でルリミゾ選手の勝利です！」

ガラル地方恒例の、最後の一匹で観客が歌う応援歌が流れる隙もなく、ただ一瞬で三匹が倒されて試合は終結した。これがルリミゾの快進撃の始まりだった。

２０―バウタウンでお食事

『バウタウン　市場やレストランに多くの人が集まる港町』

「潮風の匂いね！海鮮料理食べるわよ～！」

　明後日のルリナとのリーグ戦にそなえて、ルリミゾはバウタウンに来ていた。町の雰囲気、気温にポケモンたちを慣れさせるという目的もあったが、何より観光目当てである。ルリナの試合はジムチャレンジ序盤であることも合わさって、今月はほとんど組まれていない。組まれた試合はルリミゾやサイトウなど若手の下位組だ。

「わかっていてもムカつくわね」

　多くのジムチャレンジャーを捌くのはとても大変なので、リーグ委員会のこの試合組みには何一つ異論のないルリミゾだが、形式上でも下位相当と判断されて試合を組まれているのが何より気に食わない。リーグ委員会に一泡吹かせてやる、と意気込んでいた。

「ノマに聞いた話じゃ『防波堤』ってレストランが美味しいらしいけど・・・」

　時間はもう夕飯時。朝からジムトレーナーたちと手合わせしたルリミゾは、終わった後そのままアーマーガアタクシーでバウタウンを訪れていた。疲れている時に揺られるのは好かないが、美味しい料理が待っているのなら話は別だ。

　バウタウンは港町で、駅もあるため、市場やレストランも多くなかなかに発展している。明日は市場を見に行こうと決めているので、目当てのレストラン「防波堤」を探して歩くルリミゾ。ポケモンセンターの近くらしいのでそう遠くはないはずだが・・・

「委員長～！」

「どいてくれ！よく見えねえ！」

「一緒にいるのはジムチャレンジャーか!?」

　・・・なんだか人だかりができている。看板には「シーフードレストラン　防波堤」という文字とともにシェフの顔が描かれているので間違いないだろう。有名人の貸し切りだろうと、絶対にここで食べる

と決めていたルリミゾはチラチーノを出し武力行使の準備をする。
「あたしは誰にも邪魔できない。誰がいようとここで食べるわよ」
「ぐふぐふ！」
・・・
中に入れば一組の客以外は誰もおらず、やはり貸し切りらしい。あたしは負けない、と強気で店員に案内させようと話しかけたが、
「お客様！現在ローズ委員長がお忍びで来られていまして・・・！」
他のお客様の入店はお断りしております、と言い切られる前に声が掛かった。
「おや？君はキルクスのジムリーダー、ルリミゾ君じゃないか？」
「ルリミゾさん!?」
ローズがこちらに気付いたらしい。同席していたのはまさかのユウリだ。隣にはマグノリア博士の孫もいる。名前は確か・・・ソニアだっただろう。
「丁度いい！君もこちらへ座るといい！」
「しかし委員長、」
「いいんだよ。折角の機会じゃないか」
秘書が軽く制すが、構わずローズは席に着くように言う。この瞬間にルリミゾは、リーグ委員会の試合組みも悪いもんじゃないな、と思った。
ありがとうございます、とローズにお礼を言いながら席に着く。
「初めまして、キルクスタウンでジムリーダーを務めているルリミゾと申します」
「ジ、ジムチャレンジャーのユウリです！」
「ソニアです。歴史の研究をしています」
ソニア君はマグノリア博士の孫なんだよ、とローズが補足すると嬉し恥ずかしそうにしている。ユウリはどうやら緊張しているようだ。もしかしてロベリアだとバレたか？と疑うがそういった敵意ある緊張ではなさそうだ。
「ユウリ君は今日ジムバッジを獲得してね。そのお祝いに私（わたくし）が招待したんだ。ええと、何の話をしていたかな」

「私のおばあちゃんの話ですね」
「ああ、そうだったね！マグノリア博士がダイマックスバンドを開発してくれたおかげで、ジムでダイマックスを使った戦いができていますからね！」
「でも、まだわからないことが多くて、不安だと言っていました・・・」
「不安。それはよくないね・・・私にできることが何か――そうだ！ナックルシティの宝物庫に足を運ぶといい！私が許可を出しておきます」
　宝物庫、という言葉にドキっとするルリミゾ。宝物庫についてニュースで聞いたことのあるユウリが会話に参加する。
「あのギンガ団に襲撃された宝物庫ですか？今はキバナさんが警備を厳重にしたって聞きました」
「ええ。彼はナックルシティを守ることに使命を感じていましたから。襲撃されたときはとても自分を責めていましたよ」
「自撮りばかり上げている印象がありますが、しっかりした人ですよね」
　ノマから聞いていたキバナの話でなんとか会話についていく。料理に夢中で話に参加するのを忘れかけていた。
「歴史にダイマックスの秘密を紐解く鍵があると私はにらんでいてね。宝物庫の資料が研究の手掛かりになることを願うよ」
「わかりました。ローズ委員長。見学の手配しておきます」
「ありがとう、オリーヴくん」
「・・・ですがそろそろお時間です」
「えー、本当かい？」
　まだユウリくんもルリミゾくんも話を聞けていないのに、と惜しがりながらも立ち上がるローズ。
「それではみなさん、御機嫌よう！」
　席を立ち、オリーヴに急かされながら去っていく。ユウリとソニア、そしてルリミゾ。初対面ながら残されてとても気まずい。
「・・・嵐のような人だったね」
「彼はワンマンで成功しているらしいですね。エネルギー事業にも手

を出していますし、リーグ運営も彼が基礎を作ったとか」
　ルリミゾは必死にかき集めて頭に詰め込んだ知識を並べる。毎晩火事になりそうなほど頭から熱を出して覚えた成果を見せるときだ。
「それにしても、マグノリア博士のお孫さんとは・・・歴史について研究をされているんですね」
「うん、英雄やブラックナイトについて調べてるんだ」
「ブラックナイト・・・ですか？」
　知らないふりをして答える。偶然接触できたチャンス、何か引き出せないかと奮闘する。
「大昔、黒い渦がガラル地方を覆い、巨大なポケモンが暴れ回ったらしいの。それがブラックナイトって呼ばれているの。まだまだわからないことだらけだけどね」
「そうなんですか！なんだかカッコイイですね」
　ターフタウンでユウリから聞き出した以上のことはあまり得られなかった。ジムリーダーという立場を利用して連絡先を入手しようと、会話を続ける。
「あたしも歴史について知っておきたいので、スマホロトムの連絡先を教えてもらってもいいですか？ギンガ団から町を守るためにも、やつらの襲撃先を予測したいんです」
「あいつら、宝物庫やターフタウンの石碑を狙ってたもんね。なにか分かったことがあれば連絡するね」
「ありがとうございます！」
「お互い研究とジムリーダー、頑張ろうね！」
　はい！と笑顔で会話を終える。ずいぶんソニアとだけ話しこんでしまったが、ユウリはどうしているだろう、と顔を見ればこちらのスマホロトムをじっと見つめていた。
「ユウリさんも、連絡先交換しますか？」
「えっ⁉いいんですか？」
「ええ。以前襲われたこともありますし、緊急時に掛けてくれれば助けに行きます」
　ジムミッションのヒントはあげませんよ、と冗談めかして言えば嬉

しそうにしていた。
「ふつう、ジムチャレンジャーとジムリーダーが過度に関わるのはよくないですから、内緒ですよ」
「・・・・！」
恥ずかしそうに顔を赤らめて下を向いてしまった。まじめな子なのだろうか。だとすれば申し訳ないことをしたな、と思いながらも演技を続ける。
「キルクススタジアムで待ってますよ、絶対に来てくださいね」
これでもう素晴らしいジムリーダーを演じることができただろう。ユウリはブンブンと首を縦に振りますますガチガチになっている。やはりあまりジムリーダーとの会話になれていないのだろう。そう理解して席を立つ。
「では、あたしはそろそろ宿に戻ります。また機会があればお話ししましょう」
「またね～！」
「ぜっ、絶対に会いに行きます！」
やや大きめの声で宣言される。もう歩き始めていたとはいえ十分に聞こえる声量だ。店中に響いていた。

「ファンだったんでしょ？話せてよかったね」
「緊張して全然喋れなかった・・・」
「またジムで会えるよ！このあとルリナと会う約束があるから、ちょっと会って来るね」
ルリミゾが去ったあと、レストラン「防波堤」に残された二人も立ち上がり店を後にする。
「わかった！またね！」
「またね！」
ユウリは三つ目のジムバッジを取るためにガラル第二鉱山を抜けてエンジンシティへと向かう予定だったのだが、明後日のためにもう少しだけこの町に留まることにしていた。

「人脈は広がったけど、あんまり味わえなかったわね・・・」
「ぐふー」
ローズが退席してから、会話するのにゼンリョクだったため、どんな味だったのか覚えていない。
「明後日、帰る前にもう一度食べてから帰るしかないわね」
「ぐふぐふ！」
肩のチラチーノと話しながら夜道を歩く。明日は市場の観光と試合に向けた調整だ。

21―ｖｓルリナ　メジャージムリーグ④

「ルリミゾさん、お時間です！」
「はい」
ドアがノックされる。短く答えてから、ポケモンたちをボールに戻してフィールドへ向かう。いよいよルリナとの対決だ。存分にバウタウンを観光できたから、今日は快勝してレストラン「防波堤」で気持ち良く食事がしたい。
「毎度アウェイは気にならないけど少し気まずいわね」
勝ってしまうから。そう自信満々にボールに語り掛ければ、カタカタと揺れて同意している。と、思う。たぶん。ソニアとルリナは親友だとスマホロトムのチャットで聞いていた。この試合に勝ったからといってソニアとの関係が悪化することはないはずだが、少しだけ気にかかる。
「ピンクババアのお陰で珍しい特性まで予習済みよ」
相手の手持ちは把握した。エースのカジリガメを温存しながら戦うスタイルだろう。

スタジアムの中心に立てば、気持ちがただ戦うことだけに集中される。ルリミゾとルリナの試合は、「ルリルリ対決」とくだらない見出しで報道されていた。モデルとしても活動するルリナと、じわじわと人気を上げつつあるルリミゾ。観戦のチケットは即座に売り切れたという。
（ババアの時より熱気が凄いわね・・・）
観客席を見渡せば、様々な顔が――
「ユウリ!?」
目が合って思わず声に出してしまった。向こうもこちらを見たまま固まっている。すぐに気を取り直してスタジアムの中心へと歩く。エンジンシティへ向かったと思っていたが、どうやら観戦のために残っていたらしい。

「先週の試合、ビデオで見たわ。ポプラさんも、あなたも凄かった」
「ありがとうございます」
「でも、負けるつもりはないわ。私と自慢のパートナーが全て流しきってあげる！」
「うちのポケモンたちはなかなかしぶといですよ」
お互い意気込んでから、所定の位置につく。モデル歩きのルリナを見て真似しようかと思ったが、クネクネした変な動きになりそうだったので普通に歩く。
ボールを握った拳を前に突き出し、その柔軟な身体を活かして右脚を天高く振り上げてからボールを投げるルリナ。
ジムリーダーの　ルリナが
勝負を　しかけてきた！　▼
ルリミゾも負けじと脚を振り上げる・・・ことはせずいつも通り投げる。もしかしたら独特の投げ方を考案しなければならないかもしれない。
「チラチーノ！」
最初を任せるのはルリミゾのエース、チラチーノ。ルリナの手持ちのドヒドイデ以外のポケモンに対して「タネマシンガン」と「ロックブラスト」で弱点を突くことができる。
「タネマシンガン！」
やるべきことはタネマシンガン一択だ。

「ルリミゾ選手、やはりチラチーノから出してきましたね」
「カキタさんが先ほど解説した通りですね。ルリナ選手が出したのは・・・おおっ!?」
ミタラシが驚いて実況が中断された一瞬。ルリナはポケモンをボールに戻し、ダイマックスバンドから力を注いだ。
「カジリガメ！」
「スタジアムを海に変えましょう！キョダイマックスなさい！」
大きくなったボールを抱え、一瞬祈るように目を閉じた後、振り回

して投げる。
「いきなりダイマックスだあああああ！まさかの展開です！」
「チラチーノがダイマックスしても柔らかいことを理解して取った策ですね。これは素晴らしい・・・！」
　解説が話している最中にも巨大化するカジリガメ。開幕からとんでもない試合展開に観客のボルテージは絶頂だ。
ワァァアアア!!
　実況解説のマイクに音が入り込むほどの声援。
「ここまで聞こえてくるほどの声量ですよカキタさん！これはどういう選択なのでしょうか？」
「カジリガメは草タイプの技に非ッ常に弱いですから、普通は動く間もなく『タネマシンガン』でやられてしまいます。しかしダイマックスすればなんとか一発は耐えることができます。そうすればルリミゾ選手のチラチーノを一発で落とすことができますし、キョダイマックスしたカジリガメにはあの技があります」
「あの技、ですか」
　ええ、あの技です。とカキタが返事すると同時、マイクがルリナの指示を拾う。
「キョダイガンジン！」
　巨大な岩がフィールドに向かって倒れこむ。あまりの攻撃範囲にチラチーノの逃げ場はない。それと同時、「タネマシンガン」が着弾し体のあちこちに傷を負うカジリガメ。
ズゥウウウン
　倒れた岩が辺りに砕けて飛び散り、「ステルスロック」のようにルリミゾの近くを侵す。
「チラチーノ戦闘不能！」
「ダイマックスしていなければ倒されてた・・・よく耐えたわカジリガメ！」
　もうほとんど瀕死のカジリガメだが、まだ戦闘不能にはなっていない。満身創痍ながらもまだ立っている。
「一撃でチラチーノ戦闘不能！初手ダイマックスという戦法が完全に

突き刺さっています！」
「これです。『キョダイガンジン』は相手の場に『ステルスロック』と同じように岩を残すんです。交代をすればするほど、ルリミゾ選手のポケモンは傷ついていきますよ」

ルリミゾの予想を上回る一手。これだからポケモンバトルはやめられない。次のポケモンを出すまでに与えられた３０秒を使ってフルに思考する。
（初手ダイマックスでチラチーノを落とされたものの、こっちにはダイマックス権が残ってる。カジリガメはもう瀕死だし、おそらくドヒドイデ辺りでこっちのダイマックスを耐え抜く算段ね。その後は毒とステルスロックでじわじわと削る。なるほど、モデルのくせにやらしいスタイルに切り替えてくるじゃない）
今までのシーズンでは、雨を降らせるペリッパーなどで場を整えたあと、どっしりとキョダイマックスしたカジリガメが一掃するという戦い方だったが、どうやら新しい戦術に手を出したようだ。交代戦を挑んできたルリナだが、ルリミゾはポプラという交代戦の鬼と戦った。どう対応すればいいのか把握している。
「イエッサン！」
尖った岩が食い込む。が、カジリガメの動き出しよりも先にイエッサンが技を出して倒せるだろう。
「サイコキネシス！」
念力の波動がカジリガメを内側から揺さぶり、巨体が爆発し倒れる。おそらく相手のカジリガメが使おうとした技は「ダイストリーム」だろう。雨を降らせるほどの水量で攻撃する技だが、イエッサンのスピードで遠距離から先に倒すことができた。
「カジリガメ戦闘不能！」
ひと安心だが、相手のプランはここからのはず。恐らく出てくるのは――
「オニシズクモ！お願い！」

やはりオニシズクモ。特殊に対して耐性のあるオニシズクモは、水／虫タイプだからイエッサンに対して強い。物理で攻撃できて飛行タイプのウォーグルならば有利だ。イエッサンをボールに戻し――

「今日はアンタが活躍する日よ！ダイマックス！」

ダイマックスした。

「こちらも二匹目でダイマックスだぁ！試合展開がとんでもなく速い！」

「ルリナ選手が指示したのは『ねばねばネット』でしょう。ウォーグルへの交代を読んでの指示でしたが、それをさらに読んでいたルリミゾ選手がダイマックスを切りました」

「オニシズクモは特殊に対して強いんでしたよね？そのままイエッサンで戦って大丈夫なんですか？」

視聴者に代わって疑問を提供するミタラシ。ポケモンバトルに深く関わる人間でありながら、バトルをしない一般人の目線に立てることが人気の秘訣だ。

「ここで重要なのは、イエッサンを止められるポケモンがオニシズクモ以外にいるかどうか、ということです」

「カジリガメは倒されましたから、残りはドヒドイデ、グソクムシャ、ペリッパー・・・」

ミタラシは提出されていたルリナのポケモンリストを読み上げる。なるほど、グソクムシャ以外誰もイエッサンを止められない。

「グソクムシャ以外止められませんね!?」

「そうなんです。手持ちの四体で交代しながら戦うのではなく、イエッサン一匹で全員ぶち抜いてやろうということだと思います」

「交代しながらの戦いを想定していたルリナ選手からすれば、これは意表を突かれた形になったと」

「ええ。場には『ステルスロック』が撒かれています。わざわざルリナ選手が作り上げた土俵に乗ってやるものか、という意志を感じますね」

周囲に「ねばねばネット」が撒かれるが、ダメージはなく、交代しない限りポケモンに絡まることはない。交代したポケモンに絡みつき、動きを阻害してくる技だ。予想通りね、とルリミゾは笑う。ウォーグルに「かみなり」を命中させたポプラもこんな気持ちだったのだろうと思いながら。

「ダイサイコ！」

イエッサンの得意技「サイコキネシス」が変化した「ダイサイコ」でオニシズクモを攻撃する。辺りに不思議な感じが広がる。サイコフィールドという状態だ。オニシズクモを沈めるのには至らなかったものの、これで裏にいるグソクムシャが動けなくなった。サイコフィールド下では、相手の不意を突くような技が察知されてしまう。不意を突こうとする思念が何故か相手にも伝わるフィールドなのだ。

「アクアジェット」「ふいうち」「であいがしら」という強力な先制技をもつグソクムシャも、このフィールドでは無力だ。

「もう一度、『ダイサイコ』！」

しかもサイコフィールドでは、エスパータイプの技の威力がかなり上がる。オニシズクモは耐えられず倒れた。

「オニシズクモ戦闘不能！」

ワァァアアア!!

観客たちの声援が聞こえる。

キルクスで待つと言った以上、ユウリに恥ずかしい姿は見せられない。

２２―ｖｓルリナ　メジャージムリーグ⑤

オニシズクモが倒されたが、グソクムシャで「であいがしら」を撃てばカバーできる。そう考えたところで、ルリナは自分の致命的な見逃しに気が付いた。

「サイコフィールド・・・！」

先制技が、撃てない。

「おぉっと?ルリナ選手次のポケモンをなかなか出しません！迷っているのでしょうか!?」

「いや、ここはグソクムシャを出せばイエッサンに有利を取れるはずですよ・・・いや、待ってください――そうか！サイコフィールドか！」

一人で納得しているカキタに解説を促すミタラシ。

「先ほどイエッサンが撃った『ダイサイコ』でサイコフィールドと呼ばれる状態になりましたね、それがどうしたんですか?」

「サイコフィールド下では、相手の不意を突いて攻撃することができないんです。ボールから飛び出てそのまま奇襲するグソクムシャの得意技『であいがしら』や『ふいうち』『アクアジェット』といったすべての技が相手に気付かれてしまうフィールドなんです。グソクムシャは本来非常に足の遅いポケモンです。相手の不意を突くことで相手より速く行動しているように見えているだけなんです」

「と、いうことはグソクムシャでは今のイエッサンを止められないと・・・?」

「そうなります。これは非常にまずいですよ。サイコフィールドの下ではエスパー技の威力が上がります。あと一回はダイマックスした状態でイエッサンは技を撃てるでしょうから、誰で受けるかですね。おそらくは――」

ドヒドイデ。そう言うと同時に３０秒ギリギリ、ルリナはドヒドイ

デを繰り出した。
「ドヒドイデを繰り出したあ！これはどういう選択になるんでしょうか？」
「ドヒドイデには『トーチカ』という『まもる』と同じ効果を持つ技があります。他の追加効果は今は置いておいて、ダメージを低減して時間を稼ぐことができます」
「そうすればダイマックスが解けますねぇ！」
ドヒドイデが足を下ろし、本体を守る。イエッサンが念力で揺さぶり、ドヒドイデが吹き飛ばされるがまだ耐えている。
「やはり『トーチカ』ですね」
「スタジアムを揺るがす『ダイサイコ』のとんでもない衝撃！しかしドヒドイデ耐えています！」
即座にドヒドイデをボールに戻し、交代先のポケモンを繰り出すルリナ。イエッサンのダイマックスは解け、ルリミゾの横で目を閉じている。
「そしてルリナ選手・・・交代です！交代しました！繰り出されたのはペリッパー！」
「あのドヒドイデ、『さいせいりょく』を持っていますね。またしても珍しい特性です。どうやら今シーズンはどのジムリーダーも変化が見られそうですよ」
「『さいせいりょく』というのは？」
「一度ボールに戻って裏に引いた時、傷が癒えやすい個体のことを指します。おそらく『ダイサイコ』で負った傷は今頃ほとんど回復しているでしょう」
徹底した時間稼ぎ。今までの優雅なイメージ、モデルとしてのイメージからはかけ離れた泥臭い戦い方にカキタは驚いていた。

ペリッパーが雨を呼び、ルリナの気持ちを語るかのように雨が降る。
「ハイドロポンプ！」

今シーズンこそは上位に。モデル業を兼ねながらのジムリーダーだからといって下位で甘んじていいハズがない。相手を交代戦に誘い込み、自分の有利な土俵で戦う新戦術。上手くチラチーノを倒すことができたために浮かれていた。暗い気持ちを切り払うように、雨天下で威力を増したハイドロポンプが放たれる。

ドパァン！

当たった衝撃で水が舞う。

しかし、フィールドで倒れているのはバイウールー。

「バイウールー戦闘不能！」

「な!?交代をしていたの・・・！」

足元の　不思議感が　消え去った！　▼

「バイウールーで受けました！戦闘不能です！」

「次にはふつうカビゴンを出すでしょうが、交代戦になるとルリナ選手の作った土俵ですよ。ここで交代して出てくるであろうドヒドイデにもう一度イエッサンを当てるのが狙いでしょうか」

そう解説したところで繰り出されるカビゴン。しかし即座に戻し、イエッサンを繰り出すルリミゾ。ドヒドイデに交代されることを読んでの交代だ。

が、ルリナが繰り出したのはグソクムシャ。

「グソクムシャをイエッサンに当てたぞルリナ選手！これは読み勝ったといえるのではないでしょうか!?」

「ええ。足元のサイコフィールドも先ほど消えました。『であいがしら』が突き刺さりますよ。とんでもない威力ですから、この状況、まず間違いなく一匹は持っていかれますよ」

イエッサンか、カビゴンか、ウォーグル。大きく試合が動こうとしていた。

「・・・よし！」

試合のペースを再び取り戻し、サイコフィールドの切れ目にちょうどグソクムシャを当てることができた。既にボールから飛び出したグソクムシャは凄まじい勢いで突撃している。「であいがしら」だ。カビゴンはグソクムシャに対して一切有効打がない。ウォーグルは「ステルスロック」が突き刺さり、「であいがしら」を耐えられないだろう。

「ウォーグル！ごめんね」

クッションとしてルリミゾが出したのはウォーグル。「ステルスロック」によりダメージを受け、「であいがしら」でフィールドの端まで吹き飛ばされる。

「ウォーグル戦闘不能！」

勝った。

ルリナがそう思った瞬間、ドサ、という音が聞こえ、そのあとすぐに耳を疑う審判の声が聞こえた。

「グソクムシャ戦闘不能！」

フィールドの向こうで、ルリミゾが笑っていた。

「何が起きたんだ!?グソクムシャ戦闘不能だあああ！」

何が起きたんですか、カキタさん、と聞こうとするミタラシだったが、リプレイを再生し血眼で見つめるカキタを見て時間稼ぎを決意した。

「ウォーグルが『であいがしら』で何もすることなく倒れたはずです！なのに！どうして今！グソクムシャが倒れたんでしょうか!?」

カキタさん！と振れば、信じられないといった表情のカキタが口を開く。

「『みらいよち』だ！こんなことがあっていいのか!?」

「『みらいよち』ですか!?」

「ルリナ選手がドヒドイデをペリッパーと交代した時に、イエッサンが何もしていなかったのが気になっていたんです！『めいそう』を積んでいたのかと思いましたが、それならバイウールーと交代したのは

おかしいですよね」
「ええ、ということはあの瞬間に」
「はい。『みらいよち』を撃っていたんです。グソクムシャを今、このタイミングに繰り出させることを狙って」
開いた口がふさがらない。画面の向こうの視聴者も、このキャスターたちと同じ表情をしているだろう。
「どこから狙っていたのでしょうか・・・？」
「私にはもはやわかりません。ただわかるのは、今までずっと不動だった一位は、もしかしたら交代するかもしれないということです」

「ドヒドイデ戦闘不能！」
ワァアアアアアアアア
歓声がやまない。たったワンプレー。「みらいよち」ひとつで試合を逆転してみせた新人に観客の興奮は最高潮だ。フィールドの中心に歩み寄り、握手をして会話を交わす。
「ありがとうございました」
「私の想定以上だったわ。次戦った時はもっと洗練してリベンジしてあげる」
「ええ。また戦いましょう」
ユウリがいた客席を見れば、呆然としていた。もしかしてルリナのファンだったのだろうか。それなら申し訳ないことをしたな、と思いながらスタジアムを後にした。

あれが、ジムリーダー。いずれ越えなければいけない壁。あれが彼女のゼンリョク。雲の上とすら感じられるバトルにユウリはただ呆然としていた。
「あんな戦いをしてみたい・・・！」
すぐに席を立ち、エンジンシティへ向かうための準備をする。追いつくためにはさらに努力しなければいけない。

23―バウタウンでお食事（おかわり）

レストラン「防波堤」に来たルリミゾは、店の給仕のイエッサンを撫でながら困惑していた。
「ル、ルリミゾさん、どうも・・・」
リーグ戦勝利おめでとうございます、そう話しかけられた。ドアを開けたら目の前にユウリがいたのだ。ルリナに快勝して気分よく海鮮を味わうつもりだった。まさかまた出会うなんて。
「一緒に食べますか?前はあまり話せませんでしたし」
「いいんですか!?」
「はい」
よくない。だが誘わないわけにもいかない。ソニアと良好な関係を維持するためにも、ソニアと友人であるユウリには丁寧に接さなければならない。それと少しだけ、自分に強くなる方法を求めた少女が気になっていた。
・・・
「へえ、旅立ちの日はそんな感じでメッソンを選んだんですね」
「そうなんです。その後まどろみの森で――あっ、あんまり言わない方がいいんだった・・・」
「まどろみの森がどうかしたんですか?」
(ルリミゾさんなら・・・大丈夫かな。いい人だし)
「まどろみの森で、不思議なポケモンと出会ったんです」
内緒ですよ、と付け足すユウリ。どうやら海鮮料理を味わうことを犠牲に、何かを得られるようにこの世はできているらしい。毎日通いつめよう、とルリミゾは思った。
「攻撃が当たらない・・・幻影だったんですかね」
「だと思います。気付いたら私もホップも倒れてたんです」
「森の中でですか!?危ないですね・・・」
そもそも森の中へ戦闘経験のない未熟なポケモンと駆け出しのトレーナーで入ること自体が自殺行為だ。ありえないな、と思うルリミ

ゾ。面白い情報が得られたが、それとこの無鉄砲なジムチャレンジャーへのお説教は別だ。
「いいですか、ワイルドエリアでも同じです。自分の力量を超えた物事には絶対に首を突っ込まないこと」
死にますよ、あなたもメッソンも。そう脅せば、効いたのか顔を青くしている。
「ごめんなさい、気を付けます・・・」
「身に染みたなら大丈夫です。食事中に暗い思いをさせて謝るのはむしろあたしの方ですよ」
(今の怖さ、迫力どこかで・・・)
料理を食べるルリミゾを見つめるユウリだが、どうにも思い出せない。
「エンジンシティには向かわないんですか?」
「ルリミゾさんの凄い試合を観て、私も頑張ろう、って思って向かおうとしたんです。でももう一度食べてから行きたくて・・・」
「あはは、あたしと同じですね」
顔を赤くするユウリ。
「じゃあ、明日にでもエンジンシティに?」
「はい、カブさんに挑戦しようと思ってます」
「頑張ってくださいね、カブさんで躓く人も多いらしいですから」
相談なら乗りますよ、と伝えれば、ぱあっと目を輝かせて嬉しそうにしている。心の支えになれたならそれでいい。
「します!躓かなくてもします!」
それは困るなあ、と笑った。

店を出て、別れの挨拶をするルリミゾ。
「それでは、次はキルクスで会いましょう。また会う気もしますけどね」
冗談めかして言う。意図せずこれほど縁があるのは珍しい。きっとこれからも会うことになるのだろう。

「楽しかったです!・カブさん倒して会いに行きます!」
「あ、そうだ。これ昨日市場で買ったんですけど、丁度いいですしあげます」
さざなみの御香を渡す。丁度メッソンを連れているし、いいプレゼントになる。
「メッソンに持たせれば、水タイプの技が調子良く撃てるみたいですよ」
「いいんですか!?」
ありがとうございます!・とまた少し耳が痛くなるくらいの声で喜んでいる。ジムトレーナーへのお土産で買ったものだったが、ノマの分を減らせば全員に行き渡るので大丈夫だろう。
(あんまり一人に入れ込むのはよくないんだけどね)
少しだけ、襲撃に巻き込んだことへの罪悪感があった。
「さよなら~!」
「ええ、さよなら」
ホテル「スボミーイン」へと向かうユウリと、自分で予約した宿へと向かうルリミゾ。どちらの足取りも軽やかだった。

「おみやげよ!」
ジムトレーナーたちに御香を配っていく。ノマの前で御香がなくなる。
「おい、俺は?」
「アンタは第二鉱山で拾ったなんか熱い石よ」
「・・・そうか」
手渡せば、思っていたよりも熱かったらしく「熱ッ!?」と落としそうになっている。赤い水晶のようなものを含んだ石だ。
「あはは!・落とさないでよ!・あたしのお土産なんだからね!」
心にもないことを言う。
「それ、『あついわ』じゃないですか?」
「え?」

ジムトレーナーが心当たりのあるアイテムらしい。二人して間抜けな声を出してしまった。
「天気を晴れにするポケモンが持っていると、晴れの時間が長くなるアイテムですよそれ！」
「え!?そんな良いアイテムなのこれ!?」
「やっぱり一番働いてるからな～ご褒美もしっかりしてるな！流石はジムリーダー代理のルリミゾ様だな」
厭味ったらしくノマが言う。ただ単に「熱ッ!?」と言わせたいがためだけに持って帰って来たのに、想定外に良い贈り物となってしまって気まずい。返せと言う訳にもいかないので、バトルで発散しよう、と決めたルリミゾ。
「じゃあ早速試しにバトルしましょう！フィールドに出なさい！」
「おいそれ完全に仕返しだろ！放せ！あああああ！」

２４―前夜

ジムにて練習後、雑談をするルリミゾとノマ。「あついいわ」はノマの戦術にかなりの変化をもたらしたが、未だにルリミゾに土をつけられずにいる。ルリミゾはジムトレーナーでは飽き足らずワイルドエリアにまで足を運ぶ始末だ。

「しっかしワイルドエリアでの特訓ってどんなことしてるんだ？」

ワイルドエリアで鍛えに行くトレーナーは多いが、試合形式とは異なり野生との対決だ。あまり練習にならないというトレーナーも多い。

「最近物騒だから、襲い掛かって来る野生のポケモン相手に野外戦の訓練よ」

「野外戦？」

「バトルじゃなくてルール無用の戦いよ。トレーナーだって狙われかねないんだから」

この前もサイトウがやられてたでしょ、と補足すれば顔をしかめるノマ。

「バトルだけじゃなくてそんな戦いも想定しなきゃいけねえのか。ジムリーダーは大変だな」

「アンタも襲われたらどうすんのよ。私は守らないわよ」

「ワイルドエリア行くか～！」

ジムトレーナーも警備に駆り出されるため、実際に鍛えておくことに損はない。ルリミゾはジムトレーナーとの訓練のメニューに入れておこうと決めた。

「明日、ついにキバナとだな」

「ええ。アイツ今期は砂嵐で戦うみたいよ」

「直接対決を勝たなきゃ一位は見えないな。頑張れよ」

「ま、見てなさいよ。先に倒し方をレクチャーしてあげる」

そう自信満々に告げてから片付けを始める。明日の為に今日は午前で切り上げて家へ帰る。三戦目にしてやっとホームでの試合だ。

ルリミゾは観客の声援が耳に入らないタイプなのであまり気にしないが、それでも自分のファンが多いことは嬉しかった。とはいえキバナはファンが多い。キルクスにも一定数いるだろう。
「俺たちは――お前に夢見てんだ。勝ってくれ」
「言われなくともあたしは勝つわ」
任せなさい、そう言ってジムから出た。ジムトレーナーたちと十分に特訓し、天候を変えるパーティの対策も考えてある。飛び出てきたダルマッカを蹴らないように回避し、転ばないようにバランスをとる。滑ってしまうとなんだか縁起が悪い気がしたのだ。
「明日、楽しみね」
腰のベルトに結んであるボールたちが揺れた気がした。

「ボッコボコにしてナックルジムを奪い取るわよ！」
「ぐふ！」
大きなポケモンたちを除いてほとんどのポケモンが出ているため、家がとても狭く感じる。
「提出されているポケモンは、と・・・」
ギガイアス、こうあつポケモン。砂嵐を引き起こし、キバナが得意な土俵を作り出す。攻撃力、防御力ともにとても高く、砂嵐下では特殊防御も上がるため突破するのはなかなか面倒だろう。相手のポケモンに有効打がない場合、「ステルスロック」を展開することもある。交代戦のためではなく、後続のドラゴンポケモンの強さをより引き立てるための土台作りだ。ただでさえ種族として強力なドラゴンポケモン相手に体力を削られた状態で向かい合わねばならないのはなかなかに厄介だ。
フライゴン、せいれいポケモン。砂嵐のなかでもダメージを負わず、活躍できるポケモンだ。素早く、そして攻撃力が高い。ただしドラゴンポケモンの中では一歩劣る性能だろう。それでも上手くキバナと連携して戦ってくるのが強いのだが。
ヌメルゴン、ドラゴンポケモン。ただただ特殊攻撃に強い。イエッ

サンに当てられることだけは避けなければならない。草タイプの技を食べて攻撃力を上げるという特性だが、あまり草技を撃つ場面がないので想定する必要はないだろう。

ジュラルドン、ごうきんポケモン。防御力があり、そして特殊攻撃がとても強い。「りゅうせいぐん」や「ラスターカノン」といった技を持ち、生半可なポケモンでは一撃で葬られてしまうキバナの代名詞だ。キョダイマックスも可能なので注意すべきだろう。

ジャラランガ、うろこポケモン。今回から投入された最も警戒すべきポケモン。格闘技が得意なため最優先で潰さなければならない。フェアリータイプや飛行タイプの技に弱いため、お互い弱点の突きあいになるだろう。怖いのはバイウールーを起点に「はらだいこ」や「ソウルビート」といった積み技を積まれることだ。

「だいたいがっしりしたポケモンばっかりね」

フライゴン以外は速いポケモンがいない。その分耐久力があるため殴り合いになるだろう。そうなればチラチーノやイエッサンがかなり苦しい。適切に有利なポケモンに繰り出し、タイプ相性や長所の押し付けを活かせる指示を出さないと種族としての戦闘能力の格差は埋められない。

「ぐふー?」

自分の出番はあるのか、とパソコンを触っているルリミゾの手元に飛んでくるチラチーノ。

「前回は一発でやられたものね、見せ場があるといいわね。残念ながら先発はもう決めているの。アイツよ」

「ぐふぐふ!」

尻尾でぱさぱさと抗議されるが、勝利が目標だから仕方ない。画面も見えない。

「こら!ちょっと・・・ああもう!」

こうなると、好みのきのみを渡すまで落ち着かない。チイラの実を冷蔵庫から取り出す。辛味と甘味の何とも言えないバランスの味だ。ルリミゾはあまり好きではないが、チラチーノがよく食べるため用意していた。明日の試合前にでも、もう一つあげようと思っている。控

室で精神統一してるときに顔に張り付かれたらたまったものではない。
「ぐふー!!」
嬉しそうに齧りつくチラチーノ。少しだけ、帰れなくてもいいかな、なんて思ってしまう。ジムリーダーとして慕われ(?)、ジムリーダー達と全力でバトルができる。
「ああ、でも、この気持ち悪さは」
孤独は。きっと帰るまで消えないのだろう。自分だけが異物であるという自覚、違和感。どれだけ戦っても、どれだけ有象無象を蹴散らしても、満たされない。
「誰か、この気持ちを――」
そっと近付いてくるユクシー、ポリゴンZ、ドータクン、クロバット。抱き合って分かち合う。
「ひとりなら、狂ってたわね」
ポケモンたちが一緒にいるから耐えられる。
「ありがとう。チラチーノたちも、ポリゴンZたちも」
明日こそが本当の戦いだ。

25―ｖｓキバナ　メジャージムリーグ⑥

フィールドの中心で向かい合うルリミゾとキバナ。どちらも自然体で、ただ目の前の相手だけを見据えていた。

「一位の座を貰いに来ました。ナックルスタジアムの掃除、ちゃんとしておいてくださいね」

「言うじゃねえか、今年もチャンピオンへ挑戦するのは俺サマだ」

スマホロトムで自撮りをして、ドラゴンポーズを決めるキバナ。いよいよルリミゾにもポーズと投げ方を考える日が来たようだ。勝てばポーズを考えよう、と決めた。スマホロトムはキバナの周囲を漂っている。

サイドスローで投擲するキバナ。事前に公開されていた手持ちは砂嵐のパーティだった。おそらくギガイアスだろう、と考えながらルリミゾはウォーグルを繰り出す。

ジムリーダーの　キバナが
勝負を　しかけてきた！　▼

「ギガイアス！頼んだぜ！」

やはりギガイアス。砂嵐が吹き荒れる。

砂に慣れているポケモンでなければ傷を負うし、パフォーマンスも低下してしまう。ルリミゾはあらかじめ用意していたゴーグルを付けて目を守る。

「ウォーグル!?」

別室で観戦しているジムトレーナーたちは困惑に包まれていた。

「ギガイアスは岩タイプで、ウォーグルは飛行／ノーマルタイプですよ!?ギガイアスのあの硬さはウォーグルじゃ一撃で突破できないし、逆に一撃でやられますよ！」

「ああ・・・だけど無策でウォーグル出すような奴じゃねえ、何か考えてるんだろ」
　種族としての差を埋めるような奇策。期待と困惑半分にジムトレーナーたちは見守る。

「ウォーーーーーグルですか!?」
　予想外の選出に声が伸びるカキタ。
「ええ、予想外の選出です!・またしても奇策!・これから何が始まるのでしょうか!?」
　ミタラシの実況と同時、スタジアムが吹き荒れた。

　ジムリーダー1位、ドラゴンストームのキバナは思考を巡らせる。
（何を考えている・・・？『インファイト』で先に倒すつもりにしても火力が足りないハズ・・・対してギガイアスは『ストーンエッジ』、いや命中率を考えて『いわなだれ』でも一撃で倒せる）
　と、汗が流れたところで気付く。
（ダイマックスすれば『いわなだれ』を耐える!・最初に『ダイナックル』で攻撃力を上げ、『ダイジェット』で加速するつもりだ!・あえてギガイアスに出して起点にするつもりか!）
　ルリミゾがウォーグルをボールに戻すと同時、キバナもギガイアスをボールに戻す。ダイマックスバンドから力を送り、ボールを巨大化させる。
「荒れ狂えよ俺のパートナー!・スタジアムごと奴を吹き飛ばせ!!」
　熱が入り、両手を握りしめて叫ぶ。巨大化したボールを構えて一枚自撮りをパシャリ。投げた先でギガイアスが巨大化していく。
「あはは!・流石ですキバナさん!・信じてました!」
　既に指示を出したギガイアスが「ダイロック」を放った先にいたのは
「カビゴン!・耐えてくださいよ!」

ダイマックスしたウォーグルではなく
カビゴンだった。

「どうしたキバナ選手!?突然初手からダイマックスだ!!巨大な岩がカビゴンに倒れて襲い掛かります!」
「なぜだ!?何が起きている!?」
　必死に状況理解に努めるカキタ。解説としてこの展開の理由を紐解かなければならない。ミタラシが時間を稼ぐ。
「カビゴン、それでもまだ余裕がありそうです!流石の耐久力です!あと一、二回は耐えられるでしょう!」
　またしても隣で呆然としているカキタに解説を振る。
「なぜこのような形になったんでしょうか?」
「これは・・・ルリミゾ選手がキバナ選手をリスペクトしていたからこそ起きたことです」
　頭の中で言うべきことを整理するために一瞬間を置くカキタ。試合が動く前に伝えなければならない。
「ウォーグル対ギガイアス。このマッチアップは普通に戦えばギガイアスの後出しの一撃でウォーグルが落とされてしまいます。しかし、ウォーグルがダイマックスした場合話が変わってきます。ダイマックスすれば『いわなだれ』を耐え、おまけに『ダイナックル』で攻撃力を上げ、そのあと『ダイジェット』で加速しギガイアスを倒し切れます。すると攻撃力・素早さともに上がった状態で体力を半分以上残したウォーグルが誕生してしまう、というわけです」
　一呼吸おいて続きを話す。
「それを想定したキバナ選手が、最悪の展開を避けるためにダイマックスしました。しかし、ルリミゾ選手はここまでキバナ選手が読むことをリスペクトしていたんです」
　とんでもなく長い解説。普段から淡々と語るスタイルのカキタだが、今回は息が上がっている。
「それがカビゴンへの交代ですか」

「ええ。カビゴンはあと一回『ダイロック』を受けても耐え、きのみで回復するでしょう。そうすればどんどんキバナ選手のダイマックスは・・・」
「ほぼ無駄打ちになってしまう！」
「ええ。おそらくここでルリミゾ選手はダイマックスを切って、『ダイスチル』で物理耐久を上げにいくでしょうね」
とんでもない策士です、とだけ続けてキャスター二人は試合を食い入るように見ていた。

「行くわよ！カビゴン！」
マイクで拾われたルリミゾの声がスタジアムに響く。観客がテンションを上げていく。ここはキルクススタジアム。ルリミゾのホームだ。マクワが大人気だったとはいえ、しっかりと活動し、町の人々と関わってきたルリミゾのファンは多い。
「「「ハイ！ハイ！ハイハイハイハイ！」」」
やけに観客の声が聞こえるな、とルリミゾは思った。普段以上に集中しているのに、やけに五感が冴えている。ゴーグル越しにスタジアムを見渡せば、すべてが自分の味方とすら思える。
「あたしは！もう後には退けない！」
ダイマックスバンドが光る。胸に火が灯る。
「キョダイマックス！」
スタジアムを揺らす、歓声と巨体。気持ち良くてたまらない！
「あはは！」
堪えきれずに笑う。両手を広げて天を仰ぐ。ずっと裏で戦ってきたルリミゾにとって、スタジアム全体を味方に付けて戦うのは初めてだ。今までの試合は全てアウェイで、加えて集中で歓声が聞こえていなかった。
「「「オーオーオオオオーオーオー」」」
空気を震わせる歓声が、肌に突き刺さる砂嵐が、その向こうの突き

抜けるような青空が、立ち塞がるギガイアスとキバナが。
全てが鮮明に感じられる。
「ダイスチル！」
この壁をぶち抜いてくれと叫んだ。

26―vsキバナ　メジャージムリーグ⑦

「ダイスチル！」
　金属がギガイアスに襲い掛かる。対するギガイアスも「ダイナックル」で応戦するがカビゴンの方がダメージを与えた状態だ。ルリミゾは気を抜かずに次の展開を考える。
（あと1回でダイマックスが切れる。そのタイミングでおそらくカビゴンはきのみを食べて回復する。そうなれば『ダイスチル』で防御を二段階、次に『ダイナックル』を撃てば攻撃を一段階上げた状態でカビゴンを残すことができる…！）
　お互いダメージはほとんど無いが、ダイマックスが先に切れるだけギガイアスが不利だ。
「ダイスチル！」
「ダイナックル！」
　再び拳と金属が交差する。

「ギガイアスのダイマックスが解けた！カビゴンはきのみで回復します！」
「ここからキバナ選手がどう返すかですね。いきなりこれほど追い込まれているのは初めてかもしれません」
　カキタはルリミゾの思考を追って解説を試みる。
「ただ、気になるのはカビゴンの攻撃力の低さです。どんな工夫で補うのか見ものですね」
　ルリミゾなら「れいとうパンチ」を覚えさせていそうだな、と思うカキタ。実際にその通り、ルリミゾは「れいとうパンチ」を今日のために準備していた。

「ダイナックル！」

まだダイマックスしたままのカビゴンの拳でギガイアスが沈む。
時間切れでダイマックスが解除されたが、カビゴンは攻撃力を高め、次のポケモンに備える。
「少し硬いが頼む！ジャラランガ！」
「来たわね」
格闘／ドラゴンタイプの新戦力。格闘タイプの技でカビゴンを仕留めに来ていることは明白だ。
（ウォーグルに交代したいけど、高火力高耐久相手に交代戦は無益ね・・・『インファイト』ならカウンターで『れいとうパンチ』を叩き込んで殴り合えるはず。外れるリスク的に『きあいだま』は・・・）
ルリミゾの思考を遮るようにキバナの指示が響く。
「きあいだま！」
ドム、という音と衝撃、ルリミゾは巨体が吹き飛んできたのを躱す。
「カビゴン戦闘不能！」
（この局面で迷うことなく『きあいだま』を・・・！しかも命中させてくるなんて・・・）
普通「きあいだま」は技の出し方と弾速の都合上、命中率が低い。もしも外せばカビゴンの「あくび」でルリミゾがほとんど勝利に近付いていただろう。今、このタイミングで撃ってなおかつ一撃で仕留める実力。
「無敗のチャンピオンがいると強さの基準が狂うからダメね」
ありがとう、とカビゴンに一声掛けてからボールに戻し、既にうずうずと震えるボールに手をかける。準備は万端らしい。
「さあ、一気に畳みましょう。今回のために覚えた『アレ』やるわよ！」
「ぐふぐふ」
先にエースを繰り出したのはルリミゾ。チラチーノは準備万端だ。身構えるジャラランガとキバナ、試合の大きな転換点が訪れようとしていた。
「さあ、『じゃれつく』！」
「ぐふ！」
飛び出すチラチーノだが、キバナは動じず指示を出す。

（何人のトレーナーが俺サマのジャラランガ相手に『じゃれつく』を撃ってきたと思ってんだ）
「ばくおんぱ！」
ゴォ！
辺りの砂を吹き飛ばすほどの衝撃、振動、音。ドラゴン使いだからこそ可能な弱点への対策。「じゃれつく」に苦しめられたからこその対策方法だ。
「近付けない！」
「ぐふ!?」
音系の技が得意なジャラランガだからこそできる戦い方だった。
「じゃれつく」ためには近付かなければいけないが、「ばくおんぱ」を撃たれる限り近付けない。
（ここまでの威力だなんて想定外よ！チラチーノじゃ近付けない・・・！）
「ロックブラスト！」
なんとか遠距離から攻撃を狙うが、頑丈で分厚い鱗に阻まれ思うようにダメージが通らない。ルリミゾたちに今できることはひとつ。
「ひかりのかべ！」
が、ジムリーダー1位は隙を見逃さない。
「今だ！『ソウルビート』！」
しまった、とルリミゾが思うよりも先、咆哮と共に鱗を震わせ、力を漲らせるジャラランガ。特殊を含めた攻防、素早さのすべてを上昇させるジャラランガの専用技だ。
（まずいまずいまずい！）

「チラチーノ、まさかの『じゃれつく』ですが流石ドラゴン使い、対策を用意していました！ジャラランガが吠えます！」
「これは『ソウルビート』ですねぇ！1位らしい真正面から相手を叩き潰す戦法です。よくあのチラチーノ相手に発動させましたよ！」
ジャラランガの専用技「ソウルビート」は自らを激しく震わせ能力

を上げる代償に、体力を大きく消耗してしまう。隙も大きいため発動させる機会はそうない。
「これ、ルリミゾ選手にジャラランガを止める手段はあるのでしょうか？」
「正直これは・・・厳しいかもしれません」
連勝が止まるかもしれませんね、というカキタ。そして観客席から実況席へと伝わるどよめきで視線をフィールドに戻した。

（『ひかりのかべ』は貼れたけど、『じゃれつく』をとにかく当てないと残りのポケモンではジャラランガが止まらない・・・！）
「落ち着いて相手の攻撃を待つわよ」
「ぐふー・・・！」
ルリミゾの声が届く距離へ戻り攻撃に備えるチラチーノ。ジャラランガは既にこちらへ走り出しており攻撃態勢だ。
（『インファイト』？それとも『スケイルノイズ』？命中率の低い『きあいだま』はチラチーノ相手に撃たないはず・・・）
ルリミゾが思考した一瞬の間。急加速したジャラランガはチラチーノの目の前にいた。
（そんな!?速すぎる！）
「じゃれ――」
「遅い」
パリィン
チラチーノが吹き飛び、「ひかりのかべ」が割れた。
「『かわらわり』・・・！」
バウンドして動かなくなったチラチーノを戻し、３０秒をギリギリまで使って打開策を考える。
（バイウールーは特殊攻撃相手に出せない！能力が上昇したジャラランガ相手にイエッサンで撃ち合いはしたくない・・・！）
「ウォーグル・・・！お願い！」
空に舞い上がるゆうもうポケモン。ルリミゾの窮地を何度も救っ

てきた。ネズの時のリベンジだ。相手は再び音波の技が得意なポケモン。ルリミゾとの連携が試される。

「さあ、相手は違うけどリベンジよ」

「クァアア!!」

頼もしいな、と思いながら指示したのは「ブレイブバード」。技の反動でダメージを負うものの、今のジャラランガを一撃で落とせる可能性があるのはこの技しかない。

「飛べ！高く！高く！」

ただひたすらに叫ぶ。それ以外の指示を知らないかのようにひたすら。残された逆転の手はこれしか残っていない。

「迎撃だ」

それだけ言って、ジャラランガと共に空を見つめるキバナ。砂嵐は未だに吹き荒れている。

――まるで一秒にも、十秒にも、一分にも、十分にも感じられるような極限の集中のなか、一言も発さずに空を見るキバナとルリミゾ。

「やれ！」

風を切る。砂嵐の合間、わずかに見えたジャラランガ目掛けて突撃する。すべてはルリミゾを信じて。

（噂ではネズが撃ち落したらしいが・・・俺サマにもできるはずだ）

「まだだ・・・」

待ち構えるキバナとジャラランガ。

「クァア・・・！」

近付く。スタジアムが、観客が、壁の広告が、ジャラランガが。

「スケイルノイズ！」

あまりの爆音にスタジアムの観客が耳を塞ぐ。遅れた者は砂嵐の音も歓声も一時的に聞こえなくなるほど。

ルリミゾは呆然としていた。情報を得るために視覚、聴覚ともに全開で機能させていたから。今、何も聞こえない。

そして何よりも――

「ウォーグル戦闘不能！」

相棒が墜ちた。

27―vsキバナ　メジャージムリーグ⑧

「ああ」
手が震える。たった一手。それも積み技ひとつ。有利に運んでいたはずの試合が一気に不利、どころかほぼ詰み。
「イエッサン」
ルリミゾの感情を察知したのか、あまり良い表情ではない。
「マジカルシャイン」
イエッサンが光り、それ、それから――

―――――――――――――――――

・・・
「ん・・・もう19時か・・・」
目が覚めたのは夜。すっかり暗くなったカーテンの向こうに意識を向けるも、すぐに布団に潜る。試合から二日、ルリミゾは家から出ていない。たかが一敗、されど一敗。町の期待を、ジムトレーナーたちの期待を、自身の未来を背負って戦うという初めての経験、そして敗北して初めて感じた重圧。
（好き勝手暴れている時にはこんな気持ちなかったのに）
シンオウで少年に負けた時。ただ良い勝負ができたという楽しさで笑っていられた。道を開けて、素直に退散したのを覚えている。
（勝ってる時には何も感じてなかったけど、何かを背負って負けることがこんなにも・・・）
苦しい。
自分が倒してきたジムリーダー、警備員、リーグスタッフ、それぞれ何かを背負っていたのだろう。ルリミゾ自身も故郷への帰還とい

う目標が懸かっていたものの、負けたことがないから自覚していなかった。
（お腹すいた・・・でも動く気にもなれない・・・）
二日も暗い部屋で過ごしている不摂生、それと敗北の傷心、どちらもルリミゾを絞めつけている。またスマホロトムが光って震えた。ノマやジムトレーナーからの連絡だろう。真っ暗な部屋で目が慣れていないためやけに眩しい。閉め切った部屋の空気が気持ち悪い。
（何が悪かった・・・？ポケモンたちはベストを尽くしてくれた。勝ちに導けなかったのは）
夜が更ける。そうしてまた、少しの覚醒のあとに眠りについた。それの繰り返し。
・・・
三日目。ついに結論に辿り着いた。
「焦燥が足りない・・・！こんなにも故郷に餓えているのに！」
帰ることが果たされなければ、真に生きることなどできないというのに。思わず笑う。
「どうして去る世界に情なんて感じていたのかしら！あたしが背負ってるのは帰る使命だけなのに！」
町の期待も、ジムトレーナーの期待も、最後には関係なくなるというのに。
「これが挫折！知らなかった！」
もっと強くなれる。そんな気がした。

コンコン、とドアをノックする。今日で三日目。ノマはただルリミゾが立ち直ることを信じて毎日家を訪れていた。
「待たせたわね」
ガチャリ、とすぐに開いたドアから出てきたのは、ぼさぼさの髪と隈を作ったルリミゾ。やけに恐ろしく見える笑みを湛えながら。
「すぐに準備してジムに戻るわ。悪かったわね。もう大丈夫よ」
想像よりも憔悴した姿に言葉が出なかった。最速のジムチャレン

ジャーはちょうどカブを突破したところだと聞く。タイミングとしては丁度立ち直ってくれて良かったと感じているが、ここまで思い詰めているとは予想すらしていなかった。ジムにいない理由も、ワイルドエリアに訪れたり、何か他の事をして発散しているのだと思っていた。町の誰もルリミゾを見ていないということを知ってから、部屋に籠っているのだと気付いたのはキバナとの試合から二日目。

「眩しいわね、珍しく晴れているなんて」

「ああ」

一昨日も晴れていた、とは言わなかった。自分より強いトレーナーが味わう敗北、その想像はノマには全く不可能だった。だからその精神がどう立ち直ったのか、今どういう状況なのか、量りかねている。負けたルリミゾにどう言葉をかければいいのかわからなかった。今こそ言葉を何かかけるべきだろう。

「その、今回お前がキバナに負けても俺たちジムトレーナーは――」

「いいのよ、気にしてないわ」

いつかの出会いの日のように遮られる。ノマはなんだかそれを思い出してふっと笑う。

「何よまた急に笑って。きもちわる」

「三日も引きこもって、俺ら全員大変だったんだぞ!?」

「だから悪かったって！ジム着いたらバトルするわよ！」

ボコボコにしてあげる！と少し大きな声で言うルリミゾ。それがいつかを思い出しておかしくて、また笑う。キルクスのジムリーダーは完全復活したようだった。

ずれていく。確実に、少しずつ。

その夜、ルリミゾはひとりでキルクスの入り江を歩いていた。冷たい風が凍みるが、まだ少し傷の癒えていない心にはちょうどよかった。

「あの試合、対策に固執しすぎていたわね」

勝ちたいがために、自分本来の戦い方とは違う戦い方をした。その

結果、想定外のワンプレーで完全に崩された。しばらく冷静に振り返れなかったが、この夜風と凍てつくような雪の中でなら落ち着いていられた。

「交代戦は悪手に変わりないけど、一体ずつ倒す仕方ならまだわからなかったはず」

種族の差をあれほど強く意識するということは、ポケモンを心の底から信じられていなかった証拠。よほど相性が悪くない限り、一対一なら勝負できたはずだった。それから逃げ、対策に拘っていたのはルリミゾの落ち度。そして不慣れな応援、高揚に浮かれていた。今ならただ冷静に戦える。

「二周目で絶対に倒して優勝決定戦に持ち込む」

まだ一位が絶たれたわけではない。ルリミゾが全勝すれば、あるいはキバナがどこかで負ければ優勝決定戦に持ち込める。少なくとも直接対決を制さなければ道は開けないだろうが。

「ジムリーダーとしての顔、ね」

この世界の住人でもないのに、まるでジムリーダーになったかのように錯覚していた。あくまで帰還するという目的のための手段だったのに。

「いずれ別れるんだから、情を移してはいけない」

声に出して、自分に言い聞かせる。見上げた月は返事をするかのように明るかった。

28―ジムチャレンジ②

「やったぁ！インテレオン！」
クールに佇むインテレオン。臆病なくせに、こういう時だけカッコつけている。昔の、泣いては「みずでっぽう」を乱射していた姿を思い出して口元がゆるむ。ユウリは今、キルクスジムで最後に立ち塞がるジムトレーナーを倒したところ。
「アイツの目は本当だったんだな・・・」
「どうかしたんですか？」
キツめの目をしたジムトレーナーの独り言に反応してしまったユウリ。ジムトレーナーは微笑みながら親切に答える。
「あぁ、いや、うちのジムリーダーが君のことを『あの子は伸びそうですね』と言っていたんだ」
「本当ですか!?」
かなり柔らかい口調に翻訳されてるが、言っていた内容は同じだ。
「ああ。俺とその話をしたからね。次はうちのリーダーとの試合だ。回復施設を使うといい」
「はい！ありがとうございます！」
ずいぶん親しいジムトレーナーらしい。案内されて出口へついていく。少しの緊張と、憧れたトレーナーと戦える嬉しさが八割だった。
「ジム、綺麗だな・・・」
「そうだろ？俺たちがちゃんと掃除してるからな」
こちらの独り言も聞こえていたらしい。ここでの勤務に誇りをもっているようだ。
「ルリミゾさんは優しいですか？」
「いや、ぇーっとな、ああ、優しいよ、うん」
少し吃りながら答えてくれた。気恥ずかしいのだろうか。きっとルリミゾさんは優しいに違いない。
「ジムミッションの仕掛けはどうだった？挑戦したのは君が最初だか

らね、感想を聞かせてくれ」
　調整を任されているんだ、と少し遠くを見つめながら言うジムトレーナー。なかなか苦労しているらしい。
「楽しかったです！」
「ああ、いやそういう感想じゃなくて、難易度の話だ」
　顔に熱が昇るのを感じる。慌てて難易度について考える。
「あっ、えっと、ちょっと簡単だったかな？いや、やっぱり普通だったかも！」
「そうか、ならこのままにしよう」
　キルクスジムのジムミッションは、ダウジングマシンを渡される。それを使ってノーマルタイプの無機質なデザインの床に設置された落とし穴を避けながら進むのだ。ユウリが落とし穴に落ちたのは三回ほど。濃霧が発生させられていて視界が悪く、ジムトレーナーと鉢合わせればバトルを強制される。毎年一人は上手く落とし穴とジムトレーナーをすべて避け続けるチャレンジャーがいるので、このジムトレーナーが最後に待ち構えて試すらしい。
「調整ってどんなことするんですか？」
「あまり詳しく言えないが、ジムトレーナーと鉢合わせしやすいように落とし穴の場所を変えたり、ジムトレーナーのポケモンを強くしたりだな」
「大変なんですね・・・」
　雑談しながらポケモンの回復を待つ。

・・・

　三十分と少し、回復装置が音楽を鳴らし回復が終わったことを告げる。おかげで心の準備は万端だ。ジムトレーナーに案内されてフィールドへ向かう。心臓から手の先までが知覚感覚で貫かれているような、冴えわたる緊張。程よい緊張はパフォーマンスを向上させる、なんて聞いたことがある。それなら今の自分の状態は結構いいカンジなんだろうな、とユウリは思った。

「まあきっと、君なら大丈夫だろう。健闘を祈るよ」
「ありがとうございます！頑張ります！」
通路に着けば、案内は終わり。ここからは自分で歩いてフィールドに入場しなければならない。既に熱気が通路にまで入り込んで空気を震わせている。この先に憧れたトレーナーがいる。昂りが抑えれなくて口元が弧を描く。
「さあ、行こうか」
腰のボールたちに語り掛ける。揺れることはないが、頷いていることは絆でわかる。一歩、一歩と踏み出すたびに暗い通路から明るいフィールドへと目が慣れていく。歓声が近づく。
ワァアアアアアア
徐々の明暗から一転、フィールドに足を踏み入れた瞬間にハッキリと聞こえる声、声、声。そして、何よりも――
「やっとキルクスで会えましたね」
声の主、ユウリの対面で立っているのはキルクスタウンジムリーダー、ルリミゾ。
「バウタウンからずっと、待っていましたよ」
「待たせすぎないように一番乗りで来ましたから！」
と、答えたユウリのユニフォームを見て固まるルリミゾ。エンジンシティで買ったレプリカなので、番号以外はまったく同じだ。ルリミゾの８８０を真似したかったが、ホップに止められた。本人にファンであることを打ち明けるのは少し勇気がいるな、なんて思いながら。
「ファンです。マクワさんとの入れ替え戦からずっと」
これに勝ったらサインください、と伝えた。

自分のバトルで人を惹きつけることが、こんなにも嬉しいなんて。
――ああ、どうして自分はこの世界の住人ではないんだろう
答えは出ない。だからルリミゾに出来ることは、この世界に何も未練を残さないこと。何も背負わないこと。敗北からずっと、苦しんでいる。自分が異世界から来た確かな証拠は、頭の中の記憶だけ。ポケ

モンたちは言葉を話さないし、相談することもできない。何が足りないのか、何が最善なのか。わからないことを、慣れない頭でひとりで考えるのは気が狂いそうだった。

（あたしはこのスタジアムの全員、そしてジムトレーナー、ファンも騙して元の世界に帰らなければならない。帰り道には誰もいない）

「あたしのでよければ、書いてあげますよ。でもまずは勝ってみせてくださいね」

今までなら上手く笑えたのに、笑顔を作れない。気持ちに揺られて演技ができない。

（クールでカッコいいなあ）

なんて思いながら背を向けて所定の位置へ向かうユウリ。ルリミゾから離れるにつれて、インテレオンのボールが震えていたのが収まった。ユウリと同じように高揚しているのだろうか？

「どんなポケモンが出てくるんだろう・・・」

ジムリーグとは違って、ジムチャレンジャーを試すためのポケモンたちが繰り出されるはずだが、ユウリは一番乗りのため一切情報がない。ノーマルタイプのポケモンだろうことは予測がつくので、頭の中で一番手を決めた。

「さあ、戦いましょう」

白い息を吐きだしながら、抑揚のない声でルリミゾが言う。

「よろしくお願いします！」

ジムリーダーの　ルリミゾが
勝負を　しかけてきた！　▼

俯いて一度、深呼吸。それからボールを捨てるように、上に向けた手のひらから投げるルリミゾ。繰り出されたのはキテルグマ、ノーマル／格闘のごうわんポケモンだ。

「ウインディ！」

「ガウ！」

吠えて威嚇するウインディにキテルグマが怯える。ノーマルタイ

プは物理攻撃の得意なポケモンが多いから、一番手に選んで正解だった。ユウリのポケモンたちはあまり耐久力に優れているわけではないので、少しでも対面で有利なマッチアップを作ることが重要だ。キテルグマは、バイウールーと同じように「もふもふ」していて直接攻撃のダメージが半減されるが、炎技のダメージにとても弱い。

「さあ、行くよ！『おにび』！」

「じしん！」

相手を火傷にする特殊技「おにび」はエンジンシティを突破した際にカブから貰った技マシン。バトルに関して全くの素人だったユウリも、前半三つの街を抜けてもう一般的なトレーナーよりも上のレベルに達している。事前に考えておいた策だ。

「これで耐えられるよね？ウインディ！」

「アウ！」

威嚇され、さらに火傷を負ったことでキテルグマは攻撃にほとんど力が入らない。ウインディに効果抜群の「じしん」だったが、まだまだピンピンしている。

「ターフタウンから本当に成長しましたね」

ルリミゾが小さく言ったのを聞き逃さなかったユウリだが、ターフタウンで会った記憶がない。

「え？ターフタウンですか？」

「えっ!?あ、んんっ、バウタウンですね、近いから間違えてしまいました。ジムチャレンジの様子を見ていましたから」

「本当ですか!?」

やけに言い間違いに動揺しているルリミゾだが、ユウリは自分の戦いを見てもらっていたことの嬉しさで気付かない。

「ええ、きっと強くなると信じていましたよ」

ルリミゾがそう言い切ると同時、キテルグマが走り出す。攻撃力も下げられ、火傷を負っているはずなのに。ユウリは不審に思いながらも、自らの優勢に乗って攻撃の指示を出す。

「フレアドライブ！」

炎を纏ったウインディが一体となって駆ける。対するキテルグマ

も大きく拳を振りかぶって――
ボッ
　ユウリの真横をオレンジが吹き飛んだ。遅れて炎の熱と風で髪が揺れ、緑の帽子が落ちる。気味の悪いほど静まり返ったフィールドにルリミゾの声が響く。
「『からげんき』、不利な時ほど強い技です。ノーマルタイプだからといって器用貧乏なわけじゃない。殴り合いならうちのキテルグマはとても強いですよ」
　なんとか起き上がったウインディを撫でて戦闘続行できることを確かめる。壁にぶつかったりしていないおかげで、体勢を立て直せたようだ。
「想定外だね…まだいける?」
「ガウ!」
「よし!がんばろ!」
　ルリミゾとキテルグマを見据えてウインディと共に立ち上がる。
「かなりダメージが入ったと思いましたが、よく耐えましたね。搦め手を混ぜた良い戦術でしたが、あたしが見たいのはあなたの才覚。想定してた手を潰された時、どう動くのか、どう足掻くのか、見せてもらいますよ」
　それでこそ憧れ、それでこそ目標。今までのジムチャレンジと全く違うバトルの展開に冷や汗をかきながらも、ユウリは目の前の壁に言い表せない安堵、尊敬を感じていた。隣でウインディの炎が揺れている。空の色は白、雪がはらはらと舞い始めた。

２９―ジムチャレンジ③

（吹き飛ばされたとはいえ、さっきの『フレアドライブ』は当たってたはず）

体のあちこちが焦げているキテルグマ。あまり表情の違いはわからないが、きっとかなりのダメージを負っているだろう。お互い次の攻防で倒れてもおかしくない。しかしユウリにそんな選択をする必要はない。なぜなら――

「ロトム！」

厄介な「からげんき」を躱せるロトムが裏にいるから。直接対面すれば、何の電化製品にも入っていないロトムは「ＤＤラリアット」の一撃で沈んでしまう。ウインディに威嚇され、火傷を負った今だからこそ繰り出す最高のタイミングだ。

「くー!!」

実体のないロトムをすり抜ける拳。やはり「からげんき」を撃っていた。今更悪タイプの技、「ＤＤラリアット」を撃ってもほとんどダメージは通らないだろう。今こそ、悪巧みのタイミングだ。

「ルカリオ！」

あえて「わるだくみ」を積まずに更にルカリオに交代する。正義の心を持ったこのルカリオは、悪タイプの技を受けることによって攻撃力を高める。キテルグマは既に腕を水平にして「ＤＤラリアット」の体勢、今更変更は間に合わない。

「ルオオオオ！」

吠えるルカリオ。全くといっていいほどダメージは通っていない。手持ちのポケモンの情報を知られていないのはユウリも同じだ。ルカリオはエンジンシティを抜けてから仲間になっている。手持ちの四匹、全てを知られてしまったものの、攻撃力の上がったルカリオを場に出せたことで完全にユウリが主導権を握っている。

「インファイト！」

「ばかぢから」

ルカリオの拳とキテルグマの拳が交差――せず。キテルグマはもはや非力、とてもルカリオとは打ち合えない。一撃ごとに、一方的に、大きな体がブレ続け、もふもふを貫通して拳が突き刺さる。
「キテルグマ戦闘不能！」
「・・・・・・・」
ラッシュの最後の一撃で吹き飛ぶ。ドサ、と鈍い音とともに地面に落ちたキテルグマ。目を回して気絶している。ルカリオは防御に隙ができたものの疲れなく立っている。
「・・・・・・素晴らしい！あたしの目に狂いはなかった！」
狂気の入り混じったようなルリミゾの笑顔にたじろぐ。今までのクールで落ち着いた印象からはかけ離れた表情、両手を仰ぐかのように持ち上げた大げさなポーズ。

「何やってんだアイツ・・・」
観客席で戦いを見ていたノマはただただ困惑していた。折角これまでずっと落ち着いたジムリーダー像を演じていたのに、突然ジムチャレンジャー相手に本性を剥き出しにしている。昂ったのか、全身から溢れ出る野蛮さでジムチャレンジャーも硬直している。
「あのルカリオ、『たつじんのおび』を巻いてますね」
隣のジムトレーナーが言う。確かに腰に黒帯が巻いてある。攻撃力を高めた状態のルカリオが放つインファイトは、ルリミゾの手持ち全てに効果抜群だ。「たつじんのおび」によって効果抜群の技が普通よりも上手く撃てる以上、ルリミゾの今の手持ちではかなり厳しい展開だろう。
「アイツの残りは確か、ペルシアンと、ケンホロウと、カビゴンだったよな？」
「ええ、カビゴンはジムチャレンジ用の個体ですが・・・」
「にゃあ」
席の後ろをペルシアンが通った。
「「え？」」

「アンタを試すのには一工夫しないとね！あたし最高に楽しいわ！ねえ、ユウリ！」
「は、はいっ!?」
突然名前を呼ばれて心臓が跳ねる。ルリミゾがこのジムチャレンジを心から楽しんでいるのが伝わる。ユウリも心の底から楽しかった。教えの上手い先生に導かれるような感覚。
「楽しいです！とっても!!」
「サイッコーね！」
叫ぶルリミゾから繰り出されたのはピンクのぐにゃぐにゃ、メタモン・・・
「メタモン!?」
「そいつは『かわりもの』よ！本来の手持ちとは違うけど、ユウリなら突破できるでしょ？」
「ルオオオオオ！」
あっという間にルカリオの姿を真似たメタモンが力強く咆哮する。攻撃力の上昇や防御の低下まで真似ているようだ。メタモンを相手にすることなんて当然初めて。最善策は知らない。得られる情報を最大限に探す。
（『ＤＤラリアット』で受けた傷がコピーされてない、ということは――①ルカリオの万全の体力をコピーしている②体力はコピーされない――のどちらかのはず。技はコピーされるって聞いたことがある。道具は見た感じ持っていないからコピーされない。攻撃力や防御を『今』参照してコピーするなら、体力のコピー時も傷をコピーするはず・・・！それなら体力はおそらくコピーしない！なら撃ってくる技は――）
予測を立てて、指示を出した。
「メタモン、しんそく」
「やっぱり！ルカリオ、今！」
瞬間、ルカリオの目の前に現れるメタモン。しかしルカリオは右拳

を溜めて、左手は上段でガードを構えている。
「カウンター！」
反撃が炸裂した。

「惚れ惚れ・・・いや、嫉妬すらしそうな程の才能ね」
これほどとは。ルリミゾは興奮が一周回って落ち着いていた。おそらく初見であろう「かわりもの」メタモンへの対処。メタモンは体力をコピーできないため、完全なミラーマッチにはならない。殴り合いをすれば不利だ。だからこそルカリオの「インファイト」の大振りを避けるために「しんそく」でヒットアンドアウェイを狙った指示だったが、ユウリはこの一瞬でメタモンの特性を見抜き、「カウンター」まで指示していた。
「メタモン、まだいける？」
「メ・・・ルオ！」
「鳴き声まで無理して真似なくていいのよ・・・」
かろうじて戦闘不能にはなっていないが、次の指示で上手くやらなければ一方的に倒されてしまうだけになる。残りの手持ちは場に出ているのを除いてあと二匹。対してユウリは三匹、しかもダメージを負っているのはウインディとルカリオだけ。
「倒されることが役目ってのもツラいところね。もう十分バッジを手にする実力はわかりきっているのだから、ゼンリョク出しちゃダメかしら」
ユウリのトレーナーとしての成長に昂って完全に本性を晒してしまった。どうせ去る世界だ、どうにでもなれ、と取り繕うことをやめた。人気を得たからといって元の世界に帰れるわけでもないし、嫌われたからといって帰れないわけではない。これまではクイズのように、回答を迫るバトルを行ってきていたが、もう十分にユウリの実力は示された。バッジ４つ程度の力ではない。ルリミゾも楽しませてもらおう。
「ま、受け入れられなくても上等よ。『――――』」

メタモンに指示を出した。ここからはジムバッジ取得の試練ではない。ルリミゾの戦闘欲求を満たすためだけの戦いだ。ユウリの気持ちは一切考慮していないが、きっとわかってくれると何故か確信していた。情を捨てると決めたのに。

「雰囲気が変わった」

ユウリを見て、微笑むルリミゾ。しかし発される空気は張り詰めている。さっきまでは生徒を導く教師のような雰囲気だったのが、今にも襲わんとする野生の圧がある。これから始まるのは「試練」ではなく「戦闘」だとユウリは直感していた。

「さあ、戦うわよ。準備はいい？」

「・・・！はい！」

答え合わせのように言葉をなぞるルリミゾ。ユウリは意味を理解して頷いた。ジムリーダーの義務を投げ捨てて、相手として認めてくれたことが何よりも嬉しい。ユウリは自分が他のトレーナーよりも卓越していることは薄々勘付いていた。わからないほど愚かでもないが、確信するほど自惚れているわけでもなかったから、普通のつもりで戦ってきた。

――それが今、原体験に認められて戦いが出来る。自らの天賦の才に感謝した。

３０―ジムチャレンジ④

ユウリの額に汗が流れる。眉に感じる水滴を手で拭って、視界に支障がないように。目の前の相手が今から全力で倒しにくることは理解している。

「メタモン、行け！」

ルカリオの姿を真似たメタモンが走り来る。何を指示したのか思考を巡らせる。「インファイト」を指示していたならば、撃ち合いで絶対に勝てる。メタモンはほぼ瀕死、対してルカリオは全快の半分ほど。だから「インファイト」ではなく削るための「しんそく」が考えられる。しかし先ほど「カウンター」を見せたから迂闊には撃てないはず。ここから切り替えて逆転を狙ってくるとすれば、何か起死回生の一手が・・・

（そうか、『きしかいせい』・・・！）

瀕死に近ければ近いほど、威力の出る大技「きしかいせい」だ。ユウリはルカリオに使わせたことがなかったが、進化した時に図鑑で確認したことがある。当たればルカリオは一撃でやられてしまうが、凌いでしまえばもう相手は虫の息だ。

「まもる！」

だからガード。腕をクロスさせ、衝撃に備えるルカリオ。メタモンは右の大振り、拳が光ってすさまじいエネルギーを感じる。やはり「きしかいせい」。「まもる」越しでもダメージを受けたとしても、そこまで痛手にはならないはずだ。そう思っていた。

――次の瞬間、エネルギーを霧散させ、ルカリオの背後で裏拳の姿勢を取っているメタモンを見るまでは。

「フェイント!?」

背中からの衝撃に仰け反りながら吹き飛ばされるルカリオ。

「大丈夫!?」

「ルオオ！」

フェイントの指示。それが意味するのは、こちらの思考が完全に読

まれていたということ。ルカリオは体勢を立て直しているが、体力の差を縮められてしまった。メタモンにこれほど圧を感じるのは、人生において今日が最初で最後だろう。

「経験の差、っていうとなんだかあたしが年寄りみたいで嫌ね」
「メタ！」
ルカリオが「きしかいせい」を使えることを、ユウリは導き出すと確信していた。だから「フェイント」に切り替えて正解だった。まだ追いついたわけではないが、体力の差はほとんど僅差だ。
「色んな手が思い浮かぶから、いざ対人になると大変よね」
混乱している様子のユウリを眺める。頭の中にあらゆる可能性が思い浮かんで、相手を観察する余裕がないようだ。才能があるがゆえに、対人で相手の動きを知ることができていない。ルリミゾの癖や傾向を把握できていればこの勝負はとっくにルリミゾが負けていたはずだった。
「がんせきふうじ」
フィールドの地面を叩きつけ、岩石を吹き飛ばすメタモン。距離を詰めての殴り合いは絶対に避けたいので、絡め手で攻める。
「砕いて！」
後手に回ったユウリはルカリオが被弾しないよう指示をするが、ルカリオは飛んできた岩石を砕くのに手間取っている。
「さあ、今よ」
「メタァ！」

「消えた・・・!?」
メタモンが「がんせきふうじ」を放った直後、姿を消した。辺りに散らばる人ほどの岩石と、立てられた砂埃。淀みなく、テンポを見出さないように次の指示を出さねばならない。ルカリオは疑うことなく真っ直ぐにユウリの方を見ている。応えなければ。

「『あなをほる』だよ！下から来る！」
「ルオ！」
地面に気を配りながら駆けるルカリオ。「あなをほる」への対処はただ走り抜けること。直下から食らえば大ダメージは免れないので、返しの攻撃を狙うために走って距離を取る。
「どこだ・・・」
少しも動かない地面に不安になる。ルカリオのカバーができるよう最大限、土の盛り上がりを探す。地面に目を向けて、少しのヒントも見逃さないように。
「時間稼ぎ・・・？にしても理由がないし・・・」
と、不意に、観客の声が大きくなって思わず顔を上げる。
「メタアァァ！」
そこには大きく飛び上がったメタモンの姿が――

「『とびひざげり』か！」
ノマが納得したように叫ぶ。歓声は最大、スタジアムが揺れる。観客の興奮でノマの声がかき消されるほど。
「『がんせきふうじ』で目眩ましをして、その岩の裏に隠れていたのか」
ジムチャレンジャーのあの才能なら、すぐに「あなをほる」が思い浮かんだであろうことは容易に予想できる。そこで上からの奇襲。地面を注視していたユウリとルカリオは完全に意表を突かれたことだろう。相手の実力を見極めたうえで、その裏をかくのはルリミゾの十八番。ノマが「ひかりのかべ」でやられたのも同じ手法だ。
「本当に・・・」
奇策が上手いトレーナーだな、と思うノマ。何を考えているのかわからない。同格や、それ以上のトレーナーには策が破られることがあるものの、格下にはハマることが多い。
「ルカリオ戦闘不能！」
ジャッジの声が歓声の中でかすかに聞こえた。背中に「とびひざげり」がクリーンヒットしてルカリオはダウン。正面からの殴り合いを

徹底して避ける、メタモンを活かした戦法が完全に刺さっている。
「誰を出すんでしょうかね、僕の予想だと――」
――インテレオン、そう隣のジムトレーナーが言うと同時、細長い影が繰り出された。

「うーん、綺麗にハマると気持ちいいわね」
愉快そうに笑うルリミゾ。ユウリが目指すべきだったのは「がんせきふうじ」の迎撃ではなくメタモンとの真っ向からの殴り合い。相手が何をしてくるかわからない状況、というのは基本的に避けるべき状況だ。本来ユウリが優勢で主導権を握れていたのに、ルリミゾのプレッシャーで後手に回っていたのが大きな原因だろう。
「試練じゃないけど、良い学びにはなったかしらね」
「メ！」
わかっているのか、わかっていないのか、相槌を打つメタモン。上手く作戦を実行してくれたので頭を撫でる。他のポケモンに変身するということは、全く違う身体を得るということ。その上で一度も使ったことのないような技を使ってオリジナルの相手と戦わなければならない。バトルにおけるメタモンの使用率が低いのは、そういう戦いの才能を要求されるからだ。
「あと三匹、こっちもあと三匹だからイーブンよ。さあ、楽しい戦いにしましょう」
「メタメタ！」
もはや鳴き声を真似る余裕はないらしい。あと少し、頑張ってもらおう。ルリミゾの隣から岩に向かって駆けるメタモン。次のポケモンが来る前に姿を隠す。
「インテレオン！」
苦々しい表情をしながらも、楽しそうなユウリが繰り出したのはインテレオン。ルカリオをコピーしたメタモンのスピードを上回り、遠距離から被害なく抑えるつもりなのだろう。
「ねらいうち！」

「そう甘くはないわよ『はどうだん』！」

接近しても引きながら遠距離で撃たれるなら、撃ち合いをするまで。繰り出されたばかりで平地に着地したインテレオンと異なり、メタモンは既に「がんせきふうじ」で積みあがった岩々に隠れている。メタモンは今、生き物の波動を察知するルカリオをコピーしているため、インテレオンの場所がわかる。一方インテレオンは岩ごと貫通するように狙いを定める、もしくはメタモンが姿を現したところを後手に回って撃たなければならない。一瞬の逡巡のあと、おおよその位置をユウリが叫ぶ。

「右の岩、大きいやつの左側！」

「連射しなさい！回避は任せるわ！」

インテレオンが指先から細く鋭い水を噴射、岩は砕け、メタモンの頬を掠める。が、既に発射の体勢に入っているメタモンの集中は途切れず、バレーボール大の弾を放つ。続けて纏った波動から二発、三発と身を翻しながら連射。

（避けさせる方向がわからない・・・！とにかく指示を出さないと！）

「右！それから――」

ボッ！

吹き飛ぶインテレオン。指示が遅かった。ポケモンに任せるべきだっただろう、とルリミゾはユウリの未熟さを見抜く。一流のトレーナーは指示とポケモンの自己判断のバランスを熟知している。回避の得意なポケモンや、狙いを付けるのが上手なポケモンにはあえてポケモン任せで大まかな指示を出すときもある。例えば、チラチーノは自分で判断することができるからルリミゾはフォローに回る。大局を見据えた複雑な動きや、相手の奇策への対応をルリミゾが行い、回避や狙いをつけるのはチラチーノ自身が決めるのだ。

（ポケモンだって相手の攻撃は見えてるし、避けるべき方向はなんとなくわかってる。最善を選んであげるのがトレーナーの仕事ね）

左に避けようと思っていた時に、「右に避けろ」と指示されれば一瞬の戸惑いが生じるし、指示を待っている時に指示が来なければ動きは止まる。あまりにも息が合わなければ、野生のポケモンが本能のまま

に戦う方が強かったりする。もちろんユウリはその程度のレベルではないが、今の被弾は息の合わなさに由来するとルリミゾは確信していた。ポケモンを信じていないわけでもないし、ポケモンがユウリを信じていないわけでもない。ただ、どこからどこまで指示を出すのかが掴み切れていない。

「メタモン、『いわくだき』！」

意図を汲んだメタモンが岩を飛び散らせるように砕き、インテレオンの視界を狭める。これでまた隠れて「はどうだん」が撃てる。そう思ったルリミゾだったが、その瞬間、インテレオンがボールに戻っていく。ユウリがボールに戻したようだ。ルリミゾはすぐに行動の意味を理解して、小さく、小さく、呟いた。

「そうやってすぐ修正できる才能が羨ましいっってんのよ」

この岩だらけの舞台を作り出し、活用しているのは当然ルリミゾ。なので、何をされたら一番ルリミゾが苦しいかも理解していた。

「私がすべきことは、この状況を変えること。迷ったり悩んだりは今すべきじゃないね」

相棒をボールに戻してダイマックス。ダイマックスバンドが光るのを見て観客がさらに歓声を上げる。ユウリへの応援がほとんど、それも当然でこの試合はジムチャレンジだから。マイクで拾われた会話を聞いても、まさかルリミゾが勝負しているなんてわかった観客は少ない。ジムチャレンジは立ち塞がるジムリーダーを倒すのが目的であって勝負とは言いにくいのが普通だ。少し本気でメタモンに指示を出しただけで、この追い上げ。ほぼ無傷でキテルグマを倒したにもかかわらず、もう数的有利は追いつかれ、ダイマックスを切らされている。

「いつか、自分の力でこれくらいの歓声を浴びたいね」

手に持ったボールが震える。光る。そして巨大化、両手でなんとか投げる。ルリミゾの土俵を壊して、ユウリが戦えるフィールドへと戻さねばならない。ルリミゾの手のひらの上では絶対に勝てない。ポ

ケモンたちは同じくらいの強さのはず。ならばユウリの得意な土俵に持ち込むしかない。今までジムチャレンジでやってきたあの戦法へ――

「全部吹き飛ばして！『ダイジェット』！」

迷いも、あの邪魔な岩も、メタモンも、すべて。

31―ジムチャレンジ⑤

風が、もはや嵐のように岩々を吹き飛ばしていく。爽快だな、なんてユウリは思った。メタモンも耐えきれずに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて瀕死。インテレオンが光り、ダイマックスのエネルギーによってより素早くなる。ダイマックスのメリットのひとつだ。技を撃つごとに何かしらポケモンが強化されたり、天候を変えたりすることができる。

「メタモン戦闘不能！」

変身が解け、ぐにぐにしたピンクがボールに戻っていく。

「やるじゃない」

悔し気に汗を流しながら笑うルリミゾだが、目は笑っていない。次の手を考えているのだろう。それでも楽し気なのは伝わるが、少し怖い。

「カビゴン！」

繰り出されたのはカビゴン。ユウリの予想だとおそらく――

「ダイマックスだな、ケンホロウじゃ加速したインテレオンには分が悪い」

状況を分析するノマ。ダイジェットによってルリミゾの土俵が崩された。変化技や、一芸のできるポケモンはルリミゾの手持ちにはもういない。

（天候や地形、その他諸々をなんとか変えたいと思っているところだろう・・・いや、あの顔は真正面からぶつかり合うつもりか）

ユウリの土俵に立つようだ。ポケモンとの緻密な連携を避けて、トレーナーの読み、プラン立てで勝負しに来たユウリに正面からぶつかるつもりらしい。

「あたしは！　もう後には退けない！」

そう叫んでいるのがここからでもわかる。大きくなったボールを

両手で投げるルリミゾ。とても楽しそうにしているのが羨ましい。いつか自分も、あの場所でルリミゾにリベンジを。そう初心を思い出した。

「グオオオオオ！」

並び立つダイマックスしたポケモンたち。辺りを見渡せば、観客、それにジムトレーナーたちも興奮して叫んでいる。

「「「オーオーオー!!オオオオーオーオー!!」」」

先手はインテレオン。「ダイストリーム」で極太の水流を発射、ズズズ、と押されるカビゴンだったがさほどダメージはない。空に目をやれば、今放たれたばかりのインテレオンの「ダイストリーム」で雨が降り始めている。それにもかかわらず、肩を組んでそれはそれは楽しそうに応援する観客たち。びしょ濡れでも笑顔だ。ジムチャレンジにしてはあまりに盛り上がっている。当人たちの熱量がそのまま観客に伝わっているようだ。熱いバトルは全ての人を魅了するらしい、とノマは思った。

「ダイアタァァァァック!!」

観客席まで聞こえるルリミゾの声。素早さを下げることを狙った「ダイアタック」だ。ダイマックスの解けた先のことを見据えている。先ほどメタモンに「はどうだん」で負わされた傷が響くものの、お互いダイマックスしているためダメージはあまり通っていないだろう。カビゴンは特殊に厚いうえ、ジムチャレンジ用のあのカビゴンは攻撃力が高いわけではない。お互い傷は浅い。ダイマックスしても迫力ある決着が付きにくい、とルリミゾが愚痴っていたのを覚えている。

ズズズ、と凄まじい地響き、それと揺れるカビゴンの巨体。雨の音、歓声、地響き、すべてが合わさって全身を揺さぶる。耳が聞こえなくなる心配をするくらいにスタジアムは音で満ち溢れていた。

「さあ、カビゴンは硬いわよ」

ルリミゾはニヤリと笑う。メタモンは突破されたものの、カビゴンが完全にインテレオンのストッパーになっている。このまま撃ち合

えば先にインテレオンのダイマックスが解け、大ダメージを食らうだろう。このまま殴り合えばルリミゾが勝つ。それを避けるためにユウリが何をしてくるのか推測する。

――カビゴンを突破できる可能性があるのはウインディ。「インファイト」で効果抜群を狙ってくるだろう。しかし、キテルグマから受けたダメージがかなり入っているため、威嚇込みでもカビゴンのタイプ一致技「ダイアタック」を耐えられない。だから「ダイアタック」をすかせるロトムにどこかのタイミングで入れ替える可能性がある。(すかされるかもしれない「ダイアタック」や「ダイアース」を撃つよりも「ダイアーク」を撃ち続けたほうがロトムを牽制できる)

「ダイアーク!」

――その瞬間、ダイマックスの時間をまだ残していたはずのインテレオンの姿が掻き消え、炎が躍った。

「ウインディ!」

ダイマックスしたカビゴンと、平常のウインディ。とんでもない体格差にも関わらず威嚇でカビゴンは怯み、威力が落ちる。が、すぐに黒いオーラを纏った拳が迫り、傷だらけのウインディを吹き飛ばし――

「ウインディ戦闘不能!」

耐えなかった。威嚇を入れ、ダイマックスのターンを使わせるための受け出し。耐えると想定していたのだろうか?それにしても交代のタイミングが不審だ。カビゴンは先ほどの時点であと二回、ダイマックスした状態で技を撃つ余裕があった。インテレオンもあと一回はダイマックスを維持して技を撃てたはずだ。ロトムが出てくるならまだしも、ウインディが出てくる理由がわからない。これでカビゴンを突破できるポケモンはいなくなったはずだ。あと一回、ダイマックス技を撃つ余裕がある。

「不自然だ」

観客席のノマも首をかしげる。ユウリがウインディを犠牲にして

繰り出したのはまたしてもインテレオン。カビゴンの攻撃を耐えられないだろう。カビゴンを突破できる技があるとも思えない。と、考えたところでインテレオンが妙な動きを始めた。まるで壁を貼るような――

「あれは・・・リフレクター!?」

ダイマックスしているカビゴンの黒いオーラを纏った拳がインテレオンに迫る。「ダイアーク」だ。リフレクターを貼っても当然――

「インテレオン戦闘不能!」

これで残りはロトムのみ。と考えたところでノマは気付いた。カビゴンの攻撃がほとんどロトムに通らなくなっている状況に。

「リフレクターと威嚇、そして今ダイマックスが解けた・・・!『かみくだく』でもほとんど通じないんじゃないか!?」

とはいえ特殊に厚いカビゴンを突破するのは簡単ではない。「１０まんボルト」では腹の表面が焦げる程度だろうから、特殊攻撃力を高めるために「わるだくみ」を積む必要があるだろう。

「やっぱりな」

いかにも悪そうな笑顔を浮かべて光るロトム。「わるだくみ」だ。対するカビゴンは――と、ルリミゾの側へと視線を向けた時、目に飛び込んできたのは

ドン!ドン!ドン!

腹を全力で叩き、太鼓のようにして自らを鼓舞するカビゴン。

「はらだいこォ!?」

徹底的に真っ向から戦いに行くつもりらしい。勝利よりもただただ熱い勝負が欲しいらしい。「はらだいこ」とは自らの腹を全力で叩いて鼓舞し、生物としての限界まで攻撃力を高める技。代償は体力の半分。カビゴンはかなりゼエゼエと消耗しているが、きのみを食べてある程度回復したようだ。

「噛み砕けえええええええええ!」

雨に濡れながらルリミゾが叫ぶ。勝負は単純。ロトムの「１０まん

ボルト」でカビゴンが倒れなければルリミゾの勝ち。今のカビゴンの「かみくだく」はリフレクターすら貫通して一撃でロトムを葬るだろう。もしロトムに牙が届くまでにカビゴンが倒されれば、ユウリの勝ち。「わるだくみ」した状態での「１０まんボルト」はかなり痛いが、カビゴンなら――

バァン

スタジアムが爆発したと思った。少なくともルリミゾは。固まっている観客たちを見るに、同じことを考えているだろう。ゆっくりと倒れていく黒焦げのカビゴンを見つめながら、心当たりのある技に行き着いた。この威力は「１０まんボルト」の威力ではない。

――雨が降っている。これが全てだった。「１０まんボルト」などではなかった。命中率が低いため選択肢から勝手に外していた技。雨天下ならば必中の高威力の技。

「かみなり！」

「カビゴン戦闘不能！」

ワアアアアアアアアアアア!!

ダイマックスの時間が残っているインテレオンを下げてウインディを出したのも、リフレクターを貼ったのも、全てはロトムに「わるだくみ」をさせて必中の「かみなり」を撃たせるため。インテレオンの「ダイストリーム」で降らせた雨が止む前に、決着を付けるつもりだったのだろう。カビゴンが突破されれば、残りはケンホロウ。ゼンリョクで戦うが、相性があまりにも悪すぎる。かなり厳しいだろう。

「修正力、とんでもないわね」

ケンホロウをボールから出しながら、戦いを振り返る。インテレオンのダイマックスを最大限活かし、天候、壁、特性、タイプ相性のすべてを活用して勝ち筋を作り出した。とてもジムバッジ４つのトレーナーの器ではない。ポケモンとの連携が未熟なことを悟り、すぐさま連携以外の勝負に持ち込んだこと。これも試合中に簡単にできることではない。もちろん最初から全力であれば勝っていた自信があるルリミゾだったが、ハンデ付きとはいえ突破されたのは事実だ。

素直に勝者を讃える準備をする。もうすぐ後ろまで才能が迫っていることに冷や汗をかく。

成長したユウリと戦いたい気持ちはあれど、最優先目標は帰ること。それでもどこかで、きっと戦うことになる予感がしていた。

ジムチャレンジの決着がついて少し、ルリミゾはステーキハウス「おいしんボブ」へ足を運んだ。はらはらと降る雪、雲に隠れて太陽は見えないが、だいたいちょうど真上だろう。風はほとんどなく、寒いけれど凍えるほどではない。朝からジムチャレンジャーの対応を終えた自分へのご褒美だ。といってもノマからは「ジムバッジ渡す気あんのか!?」と怒られたが。

(私もユウリも楽しんでたし、渡せたし結果オーライよ)

なんて考えながらドアを開く。金属の取っ手が冷たくなっていて凍みる。開いていく隙間から店の温かい空気、それと肉と油の匂いがして思わず涎が出る。

「いらっしゃい！一人かい？」

「ひとりで――って、ええ!?」

「ルリミゾさん!?」

ここにいる理由はわからなくもないものの、昼からここに来ているのは予想外。まさかの先客に驚く。とはいえドアを開けっぱなしにしてしまうわけにはいかないので店内に体を滑り込ませながら挨拶をする。

「こんにちは。さっきぶりね」

「「こんにちは！」」

中にいたのはユウリと、ソニアと、ダンデ弟。名前は確か――ホップ。三人とも席に着いたところらしく、カウンターの上は皿だけが載せられている。ユウリはジムバッジを獲得して嬉し気だが、ホップは少し暗い様子。何かあったのだろうか。と、この三人に思考を巡らせ

るのはここまでにして空いている席を探す。三人でいるところを邪魔するわけにもいかない。それに一人でゆっくりしたい気分だった。
「悪いなルリミゾちゃん、カウンターしか空いてねえんだ。その子らの隣で頼むよ」
「わ、わかったわ」
「ジムチャレンジ見たよ。その口調が素かい？」
「ええ」
何か？とでも言いたげな表情をしてしまった。
「その方が楽なんだろ？ならそれでいいじゃないか」
「――そうね」
ふっ、と笑いがこみ上げて小さく口を歪めた。その方が楽、その通りだ。
「三人でいるところ悪いわね」
「いえいえそんな」
ユウリの隣に座る。バウタウンといい、本当によく出くわす。今回はナックルシティの宝物庫を見学したソニアから何か情報が聞けそうで丁度いい。しかし後から座ったルリミゾが話題を切り出すことはできない。成り行きに任せて、タイミングを探る。
「ルリミゾさんは知ってた？あのタペストリー」
「タペストリー？」
（店内のタペストリーなんてどうでもいいわよ）
なんて思いながらソニアが指さす方向を見れば、いつも掛かってあるタペストリー。言われてみればどこかで見たことが・・・
「ナックルシティの宝物庫にあったタペストリーの続きなんだ。すごくない!?」
「ええっ!?そんな凄い物だったの!?」
言われてみれば全く同じ絵柄、まさに続きだ。ルリミゾが切り出すまでもなく伝説についての話題を振ってくれて助かった。表向きには一度もナックルシティの宝物庫を訪れたことがないので、それとなく聞く。
「宝物庫にはどんなタペストリーがあったの？」

「ガラルに王国が出来たときの話を伝えてたよ。厄災に立ち向かった二人の若者と剣と盾が描かれたんだ」
「二人？英雄って一般には一人って言われてなかったかしら」
「うん。でも二人いたみたいなんだ。それにこの絵・・・」
絵を見れば、剣と盾が描かれた墓を前に悲しむ若者二人。剣と盾を失って悲しむことはあれど、墓を建てるのは不自然だ。
「墓・・・？」
「墓を建てて弔うってことは、剣と盾は――」
「生き物、つまりポケモンか人だったかもしれないってこと？」
「あいお待ち！」
話の途中だったが、ソニアの料理が出てきた。切り上げて自分の料理を待つ。宝物庫のタペストリーはルリミゾも見たのであまりソニアからの情報には期待していなかったが、予想外に良い情報が得られた。
（それにしてもこの町に住んでいながら指摘されるまで気付かなかったなんて・・・）
つくづく向いてないな、と思う。一人で行動するというのは存外大変なものだ。身近にあった手掛かりひとつすら気付けない。
（サターンの皮肉ですら恋しいなんて末期ね）
「――――ですか？」
「考え事してたわ、もう一度言ってくれる？」
悪いわね、と軽く謝ってから聞き直す。料理のまだ来ていないユウリが話しかけて来ていたのに気付かなかった。
「メタモンは使う予定なかったってホントですか？」
「そうよ。普通あんなクセの強いポケモン、ジムチャレンジの試練に使わないわよ」
じゃあどうして？と言わんばかりの表情に少し笑いながら続ける。
「ユウリは強そうだし、その方が楽しめると思ったのよ」
ローズにはチクらないでね、と。ユウリは、ぱあっと笑顔を咲かせながら喜んでいる。読み合い、勝ち筋を作り出す能力はとっくにバッジ８つレベルだが、それをそのまま伝えて成長に支障が出ても困るの

で、過度には褒めない。
「最後、飛行タイプがいるって予想でロトムで二匹を抜くルートに切り替えたのよね？」
「そうですっ！ノーマルタイプの試練なら、格闘タイプに強い飛行タイプが一匹はいるんじゃないかと思って・・・」
「でもウインディを切ったのはリスクがあったでしょ、そこはどう考えてたの」
「ウインディでカビゴン突破を狙うのはあまりにも明らかで、バレバレだから交代戦で勝てないと思ったんです。ルリミゾさんの意表を突けるような戦法じゃないと」
それで納得がいった。カビゴンの裏に飛行タイプが控えてると賭けてのロトムにリソースを割いた戦い方。一か八か、とまではいかなくとも勝つためにユウリはかなりのリスクを背負っていたのだ。
「徹底してあたしに負けてる部分での勝負を避けたのね。素晴らしいわ」
「ありがとうございます！」
と、今度はキリの良いところで料理が届いた。ふとホップの皿を見れば・・・
（カレー!?ここステーキハウスよ!?ふざけてんの!?）
ジムチャレンジャーはカレーを作ってポケモンと一緒に食べる文化がガラルにはあるが、それでもここのステーキを食べずにジムチャレンジへ来るのは許さない。ホップがステーキを食べるまでジムチャレンジを突破させないことすら脳裏に浮かんでいる。
流石ユウリ、ちゃんとステーキを頼んでいる。昼からとか関係なくここではステーキを食べるべきなのだ。自分の分の山盛りのステーキを食べながら思う。ユウリがちらりとルリミゾの皿を二度見した気がするが気のせいだろう。
・・・
食事を終えて、ユウリたちはキルクスの観光へ行くのだという。ルリミゾはキルクスタウンのジムリーダー。当然案内を買って出て、まずは英雄の湯へと向かう。ソニアの考察が聞けるかもしれないので

一石二鳥だ。

太陽はまだ高く、雪は変わらずはらはらと降っている。店の内と外の温度差に身を竦みながらも、行先に目を向ければ店を飛び出したホップが英雄の湯の手前で手を振っている。少し距離が取れたので、ユウリと歩きながらホップについて聞く。

「店では落ち込んでいるように見えたけど、彼どうしたの？」

「ここに来るまでに、ビートっていう同期のジムチャレンジャーにコテンパンに負けたらしいんです。それで『ダンデの名前に泥を塗っていますね』って言われたらしくて」

「へぇ、そのビートってやつは強いの？」

「結構強いです。グレーの髪にピンクの服で生意気な奴です」

「あー・・・そうなの、殻を破れるといいわね」

思い浮かぶのはエンジンシティでユウリに水をかけられたあの生意気ピンク。恐らくアイツだろう。生意気なのは確かだが、ホップに放った言葉も的外れではない。ダンデの弟というアイデンティティに生きるなら、ホップが弱いことは許されない。あくまでダンデの弟として生きるなら、の話だが。

「ホップはホップだから、ダンデの名前なんて気にしなくていいのに・・・」

ユウリの言う通りだ。「ダンデの弟」という生まれに引っ張られすぎて、迷っている。チャンピオンの弟を羨む声はよく聞くが、実際は苦しい立場だろう。ホップとは縁もなく、有益な情報も得られなさそうなのでルリミゾから接触することはない。ジムチャレンジで戦うくらいだろう。ルリミゾも三日後にカブとの試合が控えているから深入りするわけにもいかない。

「ユウリ！バトルするぞ！」

「ええっ!?」

「うまいカレーライス食ったらやる気がドバドバ出てきた！」

単純なやつだ。しかしそういう人間ほど、自分の力量が正確に見切れていることが多い。今もずっと、ユウリとの差に悩んでいるのだろう。それはそれとして。

「ステーキも食べなさい」
「え？」
一瞬の静寂。
「おいしんボブでステーキを食べるまでジムチャレンジには来させないわよ」
「わ、わかったぞ・・・」
雪が降っている。

32―後日　／　XX―迷子

ユウリたちの案内を終えた次の日、ルリミゾはジムに戻りトレーニングをしていた。といってもジムチャレンジャーの相手をして疲れているので軽いものにしている。ジムチャレンジャーを試すためのポケモンたちとの連携の確認を一通り済ませてから、カブ戦に向けてポケモンたちとカブの試合の動画を観ている。

対策を固めていくとか、そういうことを考えるのはやめた。相手の動きを知っている程度に留めて、あとはその場で自分とポケモンの判断を合わせて戦うのがルリミゾにとって最善で最大のパフォーマンスが出せると身に染みて理解したからだ。モニターを見つめていれば肩で動くふわふわ。

「ぐふー！」

肩に乗ったチラチーノがくすぐったい。ルリミゾはカビゴンの腹を背もたれ代わりにしてもたれている。控室にある大きめのモニターを使っているからカビゴンも見られているのだ。大人しいイエッサンは元より、バイウールーもウォーグルも武人気質なので本当に手がかからない。

問題児は肩のコイツだけだ。もう既にそわそわしている。いつ視界を塞がれるかわかったものではない。集中が切れた時のためにチイラの実をタッパに入れて持って来てある。カバンの中に入れていたはずだが・・・

「もぐもぐ」

「ってなんで食べてんのよ!?」

カバンは既に中が荒らされ、ぐちゃぐちゃになっている。賢い奴め。あとでウォーグル辺りがシメてくれるだろうからルリミゾはこめかみに皺を作ったまま何も言わない。

それはともかく、寒いキルクスだから当然ジム内は暖房が効いている。そんな中で肩にチラチーノ、背中にカビゴン、そして寄って来るバイウールー、イエッサンというもふもふたち。良心はカビゴンの肩

に留まっているウォーグルだけだ。ポケモンたちは暑くないかもしれないが、中心にいるルリミゾはとにかく――

（暑い!!）

「あったかそうじゃねえか」

「燃やすわよ」

ドアの向こうから出てきたのはノマ。例の如く妙にイラっとする煽りを挟んでくる。一瞬でこの状況を察してルリミゾが暑がっていることを的確に突いてくる頭の回転。バトルに使えばもっと上を目指せたのではないだろうか。キリのいいところまで見終わったので今日はここまでにして立ち上がる。片付けをしていればノマが口を開いた。

「どうして外面を繕うのをやめたんだ？」

「さあ、どうしてかしらね」

観客の目がどうでもよくなったから。と答えればどんな顔をするだろうか。仄暗い感情を抑えて平静にはぐらかす。ユウリとのバトルで熱くなって、つい素の自分で叫んでしまっていた。どうにも自分のことがよくわからない。ユウリだっていずれ別れる異世界人。自分の行動の矛盾に気持ち悪さがこみあげてくる。

「好評でよかったじゃねえか。『最初は戸惑ったけど前より親しみやすい』だってさ」

「やっぱり人格者は口調が変わっても尊敬されるわね」

「ははは」

びっくりするくらい適当な笑いで無性に腹が立つ。何一つ面白いと思っていない笑い方だ。

「だから言ってるじゃねえか。とっくに町のみんなも魅かれてんだ。今更口調ひとつで変わりやしねえよ」

「――そうね」

今更口調ひとつで何も変わらない。その通りだ。両肩から外したはずの物が戻りそうになって、慌てて心を持ち直す。去る世界の有象無象に揺られてはいけない。それはきっとルリミゾを変えてしまうから。ギンガ団戦闘員だったルリミゾに背負って戦う余裕はない。

「変わらないわ。きっと」
　素の口調を曝け出したルリミゾに対する反応は、ルリミゾの予想に反して好評。なんと町で声をかけられることが多くなった。
「前の口調の方が好き」という人はいても「今の口調だから嫌い」という人はひとりもいなかった。それは面と向かって言われるはずもないので当然なのだが、雰囲気としてそう感じている。
「なんかもっと『ルリミゾ正体現したり！野蛮な裏の顔とは!?』みたいな記事でも書かれるのかと思ったけど記事にすらならなかったわ」
「野蛮な自覚はあったんだな・・・痛えッ！」
　ノマの脛を蹴る。未練を残したくないのに、ここの人たちはただただ温かい。針の筵で殺すか殺されるかの世界の方が、上手くやっていけるような気がしていた。
「ま、そういうことであんまり気負いすぎるなよ。応援してるぜ」
「嬉しいこと言ってくれるじゃない」
「じゃないと俺はとっくにパワハラで訴え出てるしな」
「一言多いのよ！」
　足を振り上げれば即座に距離を取られる。慣れてきたらしい。行き場を失った足を下ろしながら話を続ける。
「で、アンタは調子どうなのよ」
「俺は『あついいわ』を手に入れてから絶好調だぜ？やるか？」
「いいわね、岩ごと粉砕してあげる！」
「それはやめろ！」
　なんだかんだ大切にしてくれているようで嬉しい。
（今なんて思った？嬉しい？）
　揺られてはいけない。帰るまで利用するだけなのだから。ずきり、と胸が痛んだ。

ＸＸ―迷子

「見つけたぞ！追え！」

走る。どうしてこんなことになったのか。ただ帰りたいだけだったのに。

「ハンサムさん！右に逃げました！」

「では二手に分かれよう！私は先回りして奴を待ち伏せする！」

追手が何かを言っている。何を言っているのかはわからなかったが、捕らえようとしていることだけは確かだ。この世界で好き勝手に振る舞うことはあったが、そうしないと生きられなかったのだ。

「止まれ！――ぐああっ！」

立ち塞がる者に蹴りを叩き込み、道を開く。邪魔者がどうなろうと知ったことではない。元の世界に帰るために、絶対に捕まるわけにはいかない。

・・・

違う世界で暮らしていたはずだった。突然発生した空間の裂け目に落ちて、こんな場所にいる。この汚い世界に。

「さあ、追い詰めたぞ。観念してもらおうか」

またしても奴らが立ち塞がる。

「背後は海、これだけポケモンとトレーナーに囲まれているんだ。大人しく捕まってくれ」

「語り掛けるだけ無駄ですよハンサムさん。こいつは違う世界から来たんですから」

故郷を想い、こんなところで終われないと力を振り絞る。周囲から様々な攻撃が飛んできた。

ただここではない場所へ行きたくて、穢れた世界の海へと飛び込んだ。

――

「クソッ！まさか海に飛び込むなんて！」

座り込んで地面を殴りつけるハンサム。危険な存在を取り逃して

しまった。バトルでは歯が立たず、こうやって取り囲むことでやっと追い詰めたというのに。

「生きたままどこかへ流れつかないよう祈るばかりですね」

後輩が慰めるように言う。あまり気分のいい話ではないが、その通りだった。人が被害に遭うよりはずっと。

「ＵＢ０２・ＢＥＡＵＴＹ・・・これで被害が出なくなると良いんだが」

海へと逃げた危険生物のコードネームを呟いた。

33―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑨

晴天のエンジンスタジアム、カブへの応援が鳴りやまない。もうアウェイでの試合は慣れたものだな、なんて思いながら通路を歩く。と、なんと通路出口、フィールド手前にいたのはカブ。

「集中するのに少しルーティーンがあってね」

ルリミゾが疑問を呈する前に声をかけられた。どうやら雰囲気から疑問に思っていたのが伝わっていたようだ。普通、ホームのジムリーダーは先にフィールドで待機する。まさかまだ通路で立っているとは思ってもみなかった。

「ふぅ……」

カブが右手を胸に当て、目を閉じる。試合前に必ず行っているらしい。少しの呼吸のあと、首に巻いたタオルを両手で掴み、小走りでフィールドに駆けていく。各トレーナーがボールの投げ方を固定するのと同じように、試合前にする行動を固定することでパフォーマンスを引き出しやすくする、と聞いたことがある。

「あたしは昔っから行き当たりばったりね」

懐かしみながら、フィールドへと歩く。既に中心に着いたカブが待っている。

・・・

「君ほどのトレーナーに持論を語るつもりはないよ。僕の努力を示すだけだ」

「そうね、戦えばすべてわかるわ」

互いに集中が高まっている。ならば会話を続ける理由は無し。お互いに所定の位置へ向かい、ボールを構える。後ろを向くときに、小走りのカブの姿が視界の隅に映った。

「なんで常に小走りなのよ……」

位置に着いたカブが右手を胸において一瞬、目を閉じて――カッと開く。完全に試合へと意識が切り替わっていくのが伝わる。

ジムリーダーの　カブが

勝負を　しかけてきた！　▼

ボールを持ち、両手を天高く振りかぶってから全力投球、そして一歩下がって中腰。カブの独特なスタイルだ。

「ウインディ！」

初手はウインディ。カブは前シーズンと大きく戦い方の変わったトレーナーの一人だ。以前までならコータスを先頭に繰り出し、天候を「日差しが強い」状態にして戦っていた。しかし、今シーズンはコータスを中盤に繰り出している。理由はエースがもう一匹増えたから。

「バイウールー！」

「メェエ！」

読み通り。絶好の展開に歯の裏を舌でなぞる。バイウールーに攻撃力は必要ない。新戦術を披露する時だ。

「コットンガード！」

毛に埋もれていく。「もふもふ」は炎タイプの技に弱くなる、とはいえ直接攻撃の威力はやはり半減する。ウインディの「フレアドライブ」も抜群に効くが、ダメージ半減だから痛手にはならない。そして「コットンガード」を積んだのなら尚更。

「耐えろ！」

ゴォ、と炎がはじけて打撃の鈍い音がする、しかしほとんどの衝撃を毛で吸収し、跳ねて転がるバイウールーにダメージはほとんどない。

「バトンタッチ！」

バイウールーがボールに戻っていく。

「バイウールーを引きました！何を繰り出すのでしょう！」

「これは……厄介なプレーですね」

ルリミゾの「コットンガード」からの「バトンタッチ」を見たカキタが呟く。

「今のはただの交代ではありません。『バトンタッチ』という技で防御力の上昇を後続に引き継いだんです」

「と、いうことはカビゴンに交代ですかね!?」
「いえ、威嚇された攻撃力の低下も引き継ぐので――」
イエッサン、と答えた瞬間、答え合わせのようにルリミゾはイエッサンを繰り出した。
「これで柔らかいイエッサンでも殴り合いができますよ」
「これにはどういった意味があるんでしょうか?」
「イエッサンはカブ選手のパーティに対して役割を失いがちでした。硬いポケモンや、特殊技を使うポケモンに対して強いのがイエッサンだったんですが、カブ選手のポケモンはほとんどが物理・高火力です。しかし『コットンガード』を貰えたのなら話は別です。これで舞台に上がることができました」
なるほど、と相槌を打とうとしたミタラシだったが、状況の変化に即座にマイクを握る。イエッサンの着地を狙ってウインディが走る。
「フレアドライブ」だ。
「カブ選手、冷静に崩しにかかります!『フレアドライブ』だぁっ!」
吹き飛ぶイエッサンだが、ただそれだけ。吹き飛んだだけ。ダメージがほとんど入っていない。
「『コットンガード』にしてもおかしいぞ……?ダメージが少なすぎる」
「ええと、見間違いでは?」
「いや、明らかにおかしい!」
原因を探すカキタになんとか状況を掴もうとするミタラシ。例の如くまたリプレイを再生している。なんとか場を繋ぐのがミタラシの役目だ。
「今の『フレアドライブ』ですが、何かイエッサンが仕掛けてダメージを低減したようです!詳細をお待ちください!」
「あるとすれば接触の一瞬……何が……」
そうか!と気付いたカキタだったが、試合は進行中。次の行動がもう始まっている。
「明らかに攻撃の勢いが落ちていますウインディ!イエッサンにされた何かが効いている!『サイコキネシス』を突破できません!どんど

ん削られていきます」
　念波を越えられず、炎を纏ったまま距離が縮まらない。まるで威嚇されたかのような――
「『パワースワップ』だ！実戦で使われるなんて！」
「なんですかその技は!?」
　イエッサンが行った「何か」、その正体は「パワースワップ」。相手と自分の攻撃面の能力変化を入れ替える。つまり、威嚇されたバイウールーから引き継いだ攻撃力の低下を、そのままウインディに押し付けたのだ。ウインディが威嚇された時のように力が入っていないのはそのせいだと、カキタが解説した。続けて、
『フレアドライブ』がヒットする寸前、『パワースワップ』で攻撃力を下げたんです！とんでもない発想だ！」

「あのキャスター陣ならわかるかしら」
　何をされているのかわからない状態。一番実戦で苦しい事態だ。ルリミゾはカブの心中を想像しながら次を考える。
（ウインディはもう機能停止、次に出てくるのはおそらくマルヤクデね）
　仕掛けている側のルリミゾには余裕がある。策を見破られたとしても、もう抜け出す術はない。カブとしてはウインディを切って、次のプランを考えていることだろう。
「まだだ！燃え上れウインディ！燃え尽きろ！」
「アオオオオオオオオオオオ!!」
「なっ!?」
　予想外。「もえつきる」はあまりの反動に炎が扱えなくなる技だ。超高威力・超リスクの大技で、使用するにはポケモンの強い意志と、トレーナーとの信頼が不可欠。一時的とはいえ生物としての機能を失うほどの負担、それを自ら捨て身で行うことは並大抵のことではない。カブはそういった無理をするトレーナーではないと読んでいたルリミゾは完全に意表を突かれた。

「押し返せ！『サイコキネシス』！」
しかし、もう今まで通りのルリミゾではない。揺れない。心を落ち着かせて不測の事態で動揺しないように。あの暗い自室での自問自答、その成果がバトルにも表れていた。
感情を察知したイエッサンがその最大のパフォーマンスで技を放つ。

「ウインディ戦闘不能！戦闘不能です！イエッサンには届かなかったァ！」
「しかし、意外ですね」
「というのは？」
「カブ選手は勝ちに拘るトレーナーですが、あまりポケモンに無理をさせるイメージはありませんでした。マイナー落ちしていた際はあらゆる手段を使っていましたが、現チャンピオンとのあの名試合から『もえつきる』のような技は使っていないはずです」
それほどまでにあの少女が強敵なのか、と長年リーグを見てきた二人は冷や汗をかいた。
カブが次に繰り出したのはマルヤクデ。エンジンシティジムの代名詞だ。
「早くも切り札の投入です！タイプ相性からでしょうか？」
「その通りです。虫／炎タイプのマルヤクデはイエッサンに非常に相性が良いんです」
解説が終わると同時、歓声が響いた。

「マルヤクデ！燃え盛れ！キョダイマックスで姿も変えろ！」
渾身の叫び、それと共にボールに戻っていくマルヤクデ。首に巻いたタオルがバサバサと揺れる。歓声が更に大きくなる。一瞬、カブの目に炎が灯ったような錯覚さえ覚えた。
「うおおおおおおおお！」

大きくなったボールを片手で投げるカブ。
「「「オーオーオオオオーオーオー」」」
スタジアムのあちこちから観客が叫ぶ応援歌、それに混ざってかすかに、しかし確かに聞こえるルリミゾへの応援。だがどちらもルリミゾには関係ない。関係ないのだから。
「あたしには関係ない！」
叫びながらイエッサンを戻しカビゴンを繰り出す。マルヤクデが出た時点でダイマックスするのは読めていた。マルヤクデの鳴き声が響く。
「ふぁふぁばぁぁ！」
キョダイマックスして、まるで龍のように長い胴体、体のあちこちで燃え盛る炎。カビゴンは厚い脂肪を持っているため、炎タイプの技に対しては耐性がある。しかしダイマックスしていない今、虫タイプの「ダイワーム」を食らってしまえばただではすまない。
「耐えなさい！カビゴン！」
ただ叫ぶのみ。バトルにおいて相手の攻撃を受ける瞬間、その瞬間だけはトレーナーに出来ることは何もない。ただポケモンを信じて、耐えてくれと願うのみだ。だからルリミゾはこの瞬間がバトルで一番嫌いだった。
「ダイワーム！」
虫の形をとったエネルギーが飛来する。それとマルヤクデの巨大な身体を振り回した鞭のような攻撃が。
ドォ！
比喩でなくまさにスタジアムを揺らす衝撃――
「よくやったわ！全然いけるじゃない！」
しかしカビゴンは中心で立っていた。上手く腹で衝撃を吸収したのだろう、まだ余裕がある。ダイマックスしても戦えそうだ。

３４―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑩

エンジンスタジアムに叫び声が突き抜ける。
「あたしは！もう後には退けない！」
カビゴンをボールに戻してダイマックスバンドから力を。ボールが震える。ルリミゾと同じように昂っている。
「……！」
ボールを両手で抱え、投げようと目線を上げれば視界に映る人、人、人。そのどれもがルリミゾを期待、羨望、熱狂の眼差しで見つめている。声を上げながら、手を振りながら。
「関係ない……！あたしには関係ない……！」
すべてを振り払うかのように。
「キョダイマックス！」
巨大化したカビゴンへと指示を飛ばす。先にダイマックスの切れるマルヤクデを叩き潰せれば大きく形勢がルリミゾに傾く。このまま殴り合いがベストだ。
「キョダイサイセイ！」
「ダイワーム！」
お互いのダイマックス技が交差する。歓声、そして遅れて訪れる衝撃、エンジンシティが揺れていた。
「毎度のこと地味ね。ま、長期戦は得意でしょ？」
「オオオオオオオ！」
いつもより野太い返事が返ってくる。指示を出すまでもない。再び両者の力と力がぶつかり合った。

「おおっと！また殴り合いです！両者一歩も退きません！」
「ルリミゾ選手のカビゴンは非常に硬いですから、毎度ダイマックスで決着が付くことは本当にありませんね」
カビゴンで相手のダイマックスをやり過ごすのは恒例の戦術だ。

この点はダイマックスを嫌うネズと似ていて、ダイマックス無しのバトルが得意だからこそだろう、とカキタは推測していた。ジムリーダーは基本的にダイマックスを前提に戦略を立てるが、ルリミゾはどうにも相手のダイマックスをいなすためだけにダイマックスを切っている節がある。

「シンオウ出身のトレーナーとのことですから、ダイマックスをお互い切った後の戦略の深さは目を見張るものがありますねー」

「ええ、本当に一年目とは思えない強さです」

マルヤクデのキョダイマックスが先に解けた。キョダイマックスが続いているカビゴンに対して、カブはどう動くのか。

「ここでマルヤクデが元に戻りました！改めて凄い体格差ですねぇ！」

「ええ。しかしカブ選手も先にダイマックスを切ったということは、この状況も想定していたはずです。動きに注目ですね」

（このまま殴り合えば『キョダイサイセイ』でマルヤクデが倒れるはず。何か仕掛けてくるにしても続けるしかないわね）

マルヤクデが這いながら接近、カビゴンの腹を登っていく。虫ポケモン特有の動きに、本能的な気持ち悪さがある。

（ちょっとキモい……）

「むしくい！」

先手を取ったマルヤクデがカビゴンに噛みつき――

「ちぃっ！そういうことね！」

行動の意味を理解して舌打ち。フィラの実を奪い取られた。マルヤクデは傷を癒し、ふんす、と鼻息ひとつ。「むしくい」は攻撃ついでに相手のきのみを奪い取って食べる技。奪われてしまうため当然「リサイクル」も叶わない。完全にカビゴン対策だ。

「キョダイサイセイ！」

返しで技を放つも、きのみによる回復で計算がズレた。戦闘不能には至らない。これでカビゴンのダイマックスはタイムリミットだ。

体力の回復を織り交ぜた長期戦。とすれば次に狙ってくるのは「きゅうけつ」だろう。近付けない立ち回りへとシフトする必要がある。

「じしん！」

即座に切り替え、距離を取ることを狙う。

「対応が速い！すぐに『じしん』で近付かせません！」

「カブ選手、まさかの『むしくい』でしたがルリミゾ選手本当に冷静ですねー」

跳躍して揺れを避けながらカビゴンへと「とびかかる」マルヤクデ。だが、ルリミゾの指示かそれともカビゴンの自己判断か、接近した瞬間に「かみくだく」をモロに食らってしまった。力なく崩れ落ちるマルヤクデ。

「まるで未来が見えていたかのような『かみくだく』！マルヤクデ戦闘不能です！」

「今の一瞬、攻防がありました。カブ選手は回復を狙って『きゅうけつ』を撃ちたかったはずです。それを読んだルリミゾ選手が『じしん』で拒否しました。が、当然そこを想定したカブ選手は『とびかかり』に切り替えたんです」

「しかしそれすらも読んでの『かみくだく』ですか」

ええ、とカキタ。もはや常に期待の上をいくルリミゾに慣れつつある二人だ。

「カブ選手が次に繰り出したのは……コータスです！空が青く、更に日差しが強くなっていきます！日照りのコータスでしょう！」

「パーティを支える土台のポケモンですね。晴れにしたということは始まりますね、今シーズンのカブ選手のエースによる逆転劇が」

日差しが強い。

「来た」

今期のカブの新戦術。カウントは現在五対三でルリミゾ有利。しかしバイウールーはかなりの傷を負っているし、カビゴンもおそらくあと一撃で倒れてしまう。

「相性的に、これでもイーブンくらいかしらね」

カブの新エースとルリミゾの手持ちは圧倒的に相性が悪い。場を整えられてしまえば五タテすらありえる。

「ソーラービーム！」

カビゴンが動くより前に、一瞬でエネルギーを集めきった緑の閃光が貫いた。この日差しの下では「ソーラービーム」のチャージに時間を要しない。髪をかき上げ、頭の中でプランを立てる。

「ふー……」

深呼吸して、一投。繰り出したのはウォーグル。「きりばらい」で「ステルスロック」の展開を拒否できる上、後続に対しても強いからだ。

「ブレイブバード！」

正面からの殴り合い、動きの遅いコータスという的へ加速しながら突撃するウォーグル。コータス側は反撃狙いでただ待つのみ――

ドカン！

瞬間、静まり返る客席、ルリミゾ、そして。

「ウォーグル、コータス戦闘不能！」

「嘘でしょ……？『だいばくはつ』なんて……！」

自らのエネルギーを集め、自爆する技。またしても危険な技。戦闘不能となる代わりに、その威力は至近距離で食らえばほぼ確実に戦闘不能になってしまうほど。しかしやはり自爆技、好んで使う人間はいない。ましてや公式戦で。

「これは僕がコータスと決めたことなんだ。今年は何かが起きる。みんなそれを肌でヒリヒリと感じているはずだ。僕も、君も、他のジムリーダーたちも。だから全力で勝ちに行く」

ありがとう、とコータスをボールに戻すカブ。そして試合開始時の

ように両手を高くで合わせ、全力投球。現れたのは。
「燃えろおおおおおお!!」
「バシャアアアアアアアアアモ!」
ホウエン地方御三家が一匹。バシャーモ。
日差しが　強い　▼

３５―ｖｓカブ　メジャージムリーグ⑪

カウントは三対二。ルリミゾが繰り出したのはバイウールー。やるべきことは、後続へ向けて舞台を整えること。ポケモンバトルとは、五匹の勝ち抜き戦ではない。トレーナーという一（いち）の下へと集まった五匹の統一だ。これから行うのはバトン。最後に控えるチラチーノへと、バトンを繋ぐ。

「まずは時間稼ぎ……！」

天気を変えるトレーナーに対して時間を稼ぐことがどれだけ重要なのかはよく知っている。散々、晴れを主軸にしたトレーナーと戦ってきたからだ。

（残りはイエッサンとチラチーノ。チラチーノは無傷だし、イエッサンはほとんどダメージを受けていない。それでも……）

土台作り要員でしかないコータスにウォーグルを持っていかれたのが痛い。

ルリミゾの正面、フィールドでこちらを睨みつけているバシャーモ。格闘／炎タイプであるバシャーモに対して相性の良いウォーグルは、一騎打ちできる可能性のある唯一のポケモンだった。しかしウォーグルが落とされたからといって負けに直結するわけではない。勝ちを諦めず、努めて冷静に。

「コットンガード」

当然、「コットンガード」からの「バトンタッチ」を狙う。バトンを繋ぐ隙が無くとも、時間を稼ぐために。

「またしても『コットンガード』！バトンを狙っているのでしょうか!?」

「それもありますが、メインの目的は時間稼ぎにあると思います。『にほんばれ』に対する一つの解答ですね、時間稼ぎは」

カキタが解説を挟んでひと呼吸、する間もなくバシャーモが飛び上

がる。
「これは……『とびひざげり』です！バイウールに突き刺さります！カブ選手の指示なしで動いています！」
「『フレアドライブ』には反動がありますから、後続との戦いに備えて温存しましたね。遅いバイウールーには当てやすいですからリスクも小さいです」
「カキタさん、どうしてルリミゾ選手は時間を稼ぐ必要があるんでしょうか？一体ずつ戦ってはいけないんですか？」
　視聴者の疑問を代弁する。三対二というルリミゾ有利に見える状況にもかかわらず、どうしてルリミゾが守りに入ったのか。ポケモンバトルの面白さを、熱さを伝えるのが彼らの仕事だから。
「まず前提として、あのバシャーモはとても強いです。かなり鍛えられていて、バトルの経験も豊富でしょう。今、カブ選手の指示なしに動いたのがその証拠です。信頼関係が深いのでカブ選手が一から十まで指示しなくていいんですね」
「そんなに強いんですか!?カブ選手はホウエン出身ですからおそらく……」
「ええ、向こうでトレーナーになった頃からの相棒でしょう」
　まさにカブというトレーナーの人生と同義の一匹。実況席からでも、遠く向こう、ガラス越しのフィールドに立つその佇まいから隙の無さが見て取れた。
「ですから、一匹ずつ戦えば間違いなく全抜き、つまり一匹ずつ全員倒されてしまいます。ダメージの蓄積はありますが、それでも速く、鍛え上げられたあのバシャーモに相性の悪いノーマルタイプのポケモン達で戦うのはかなり厳しいでしょう」
　対してバイウールーはもうほとんど瀕死でフラフラ。あと一撃で倒されてしまうだろう。それでも――
「やはりバトン！『バトンタッチ』でバイウールーが戻っていきます！」
「しかしもうほとんど瀕死です、一撃で持っていかれる体力ですから、繰り出すことはもう無いでしょうね」

着地したイエッサンの眼前には迫る膝、「とびひざげり」がもう既に繰り出されていた。

「速い！あまりにも速い！先ほどより技のキレが上がってませんか!?」

「そうです。あのバシャーモはどんどん加速しています。戦闘中、身体が熱くなるほど速くなるんです」

一撃を入れて吹き飛ぶイエッサン、だが更に追撃を入れようとバシャーモが追う。二回も技を撃てばもう誰にも止められないほど速くなっている。

イエッサンは一撃でかなりの体力を持っていかれた。次に被弾すれば戦闘不能になってしまうだろう。この追撃を許せばルリミゾに勝ち筋は無い。

加速していくバシャーモ。加えてカブが一切指示を出していないことで、指示による動きの予測が立てられない。しかし経験則と獣のような感性から攻撃に踏み込む位置を予測する。

「左後方『サイコキネシス』！」

吹き飛ばされたイエッサンへと指示。移動のためではなく、追撃のためのバシャーモの踏み込みを見逃さない。重心の移動、呼吸のタイミング、そして積み重ねてきたバトルの経験。

すべてから導き出した答えは大正解。ドンピシャで左後方、まさに炎を纏った拳が迫る直前。

「フレアドライブ」を撃たせない。自らの内側から溢れるサイコパワーを集め、ピンク色に光るイエッサン。バシャーモは即座に炎を解除、無理に体勢を変更して被弾を避けようと動く。が、繰り出されたのは――

パァン！

猫騙し。目の前で光と音が弾け、視聴覚が一瞬真っ白になる。

「サイコキネシス」が来ると思い、下がりながら防御の体勢を取っていたバシャーモはその大きな音と光に怯む。

バシャーモが一瞬で攻撃態勢を解除して下がったため、ダメージは与えられなかった。しかし両者の間に大きく距離が開く。

「はぁ……はぁ……」

心臓が跳ねる、鼓動に合わせて身体が揺れるほど大きく脈打っている。一手でも読み違えば即敗北の瞬間だった。山場を乗り越えて、集中が研ぎ澄まされていくのを感じる。強い日差しと試合の熱量で汗が止まらない。目に入りそうになる水滴を拭いながら、勝利を確信する。あの技の発動タイミングだ。

「バシャアアアアモ！」

だんだんと感覚が元に戻り、大きく叫び特性は加速。更に速くなるバシャーモ、いよいよ追えない領域へと足を踏み入れつつある。バシャーモは距離を詰めんとスタートの体勢。鍛え上げられた腿が膨れ、グググ、と音を立てているように錯覚しかねないほどの姿勢。そして

「アンタは本当に速くて強い。でもね――」

逆に言えば。そう、言い換えるならば。追撃を回避したことで、勝ち筋が生まれたということ。

「それも終わりよ」

発動に時間のかかる変化技。バシャーモが距離を取って怯んで一瞬、発動できるのは「ねこだまし」が成功したこの唯一の瞬間だけ。イエッサンは指示を出す前に、もう既に発動している。空間が歪んでいく。フィールド全体を包み込む。

ルリミゾはその正体を告げるだけ。

全てを覆す一手の正体を。そしてフィールドの全ての空間が歪み

「――トリックルーム」

世界が完全に逆転した。

「これだ。発動を許せば状況が完全に逆転する」

憎らしげに、しかし誇らしげに語るノマ。いつも自分がやられてい

る戦術を見て呟く。
「どうだ、うちのリーダーは強いだろう」
「トリックルーム」は本来、重量級のポケモンを活かすための技。自分の勝ち筋を通すために使うのであって、相手の戦術への対処として使われることはまずない。まさかカブも、ルリミゾが「トリックルーム」をイエッサンに覚えさせているとは思わなかっただろう。
「『パワースワップ』も、『トリックルーム』も、俺が散々やられてきたことなんだぜ」
ズルズキンの威嚇をそのまま「パワースワップ」で押し付けられた。
「ようりょくそ」で加速したダーテングをトリックルームで機能停止させられた。積み重ねたジム内戦で、毎度その場でルリミゾが編み出して来た戦術だ。
「何食ったら実戦でいきなりそんな技の使い方ができるんだか」
発想の柔軟さと、ポケモンに迫る勢いの野性的な観察眼。普通、トレーナーは手札をギリギリまで狭めて判断の迷いを減らす。つまり、自分の器に合わせて技をカットしていく。「こんな技使う機会ないな」というように。
ルリミゾはそれをしない。あらゆる技が頭の片隅にあって、ありえないような限定的な場面でもそれを活用してくる。普段の言動がアレなのは、その反動かもな、とひとりで小さくノマは笑った。

「トリックルームだ！なんで覚えてるんだそんな技!?」
普段は冷静なカキタが大声を上げる。イエッサンは足が遅いポケモンではないし、ルリミゾのエースのチラチーノはむしろ速いポケモンである。重量級のポケモンを好むトレーナーが採用する以外で、こんな限定的な場面で使われることは初めてだ。しかし今、「トリックルーム」はカブとバシャーモに突き刺さっている。
「バシャーモを戻しましたカブ選手！繰り出されたのはファイアローです！」
「柱であるバシャーモを温存しました。時間稼ぎする立場が入れ替わ

りましたよ」
　今度はカブが「トリックルーム」の切れる時間を待つ番だ。交代の隙にイエッサンが技を放つ。足元が不思議な感じになっていく。
「イエッサン、どうやら追撃はしません！変化技でしょうか!?」
「これは……『サイコフィールド』です。徹底的に『トリックルーム』を活かすつもりですね」
「ええと、どうして『サイコフィールド』を展開したんでしょう？『トリックルーム』と繋がらないんですが……」
　実況のミタラシの中でもある程度答えは出ているが、詳しい解説へと繋ぎやすくするための振りだ。
「ファイアローは万全の状態のとき、非常に素早く飛行タイプの技を撃つことができる、という特性があります。カテゴリとしては『アクアジェット』や『ふいうち』と同じです。ですから、『サイコフィールド』下では通用しなくなってしまうんです」
　どういう仕組みかはまだ研究が進んでいませんが、とカキタ。
「もともと、ファイアロー自体速いポケモンですから、トリックルーム下では後手になってしまいます。しかし、疾風（はやて）の翼――特性のことです――によってトリックルームを無視して行動できるはずだったんです。それすらも潰したのがこの『サイコフィールド』の展開です」

　ここからは殴り合い。髪をかき上げ、些細な動きも見逃さないように。ルリミゾはひと呼吸おいて集中し直す。試合後半にもかかわらず、未だに中腰のカブ、そしてこちらを睨むファイアロー。
「サイコキネシス」
「フレアドライブ！」
　燃やせ！とカブの声がこちらまで聞こえてくる。一方、ルリミゾからイエッサンに言うことは何もない。なぜならイエッサンはその角で感情を察知するから。
「伝えたいことなんて――」
　とうに伝わっている。今、トレーナーとポケモンでひとつ。

ゴウ！

と、炎とともにファイアローが躍る。イエッサンはトリックルームの効果で先に動く。念力が放たれ、ファイアローを内側から揺さぶる。

「耐えろ！僕も一緒だ！」

スタジアムに響く声、そして伝わる熱。声に出すことで伝わることもある。ハッとしたルリミゾも気が付いた時には叫んでいた。気持ちは十分に通じているはずなのに、叫ばずにはいられなかった。

「墜とせ！アンタなら――！」

できる、そう続ける前にイエッサンが吹き飛んだ。ファイアローが耐え、イエッサンを貫いた。炎の軌道が残って、フィールドを焦がしていた。

「イエッサン戦闘不能！」

ジャッジの声が聞こえたときには、もうイエッサンをボールに戻していた。少しの後悔と、バシャーモを完璧に抑えてくれたイエッサンへの感謝。

「ありがとう……！よく頑張ってくれたわね……！」

伝わっているからと、自分から伝えるのを怠ってはいけない。また一つ、学ばされたな、なんて思いながら気持ちを立て直す。

最後の一匹。バイウールーはもう戦うには削られすぎている。チラチーノを繰り出す。

「さあ、出番よ。ここまで繋いだバトン、最後に決めてやろうじゃない」

「ぐふ！」

並び立って、空を見上げる。太陽は雲に隠れ、薄ら明るい白一色がエンジンシティの空を覆っている。いつの間にか日照りの効果時間も終わっていたようだ。

「キルクスの空みたいね」

「ぐふぐふ！」

これで炎タイプの技が強化されることも無くなった。ホームの天気を思わせるような雲に、親しみを感じながら戦いに臨む。

トリックルームで先に行動できるチラチーノが「ロックブラスト」を当てて即座にファイアローを撃墜。
「ファイアロー戦闘不能です！少しも行動させることなく一瞬で仕留めました！」
「イエッサンから『サイコキネシス』の大ダメージを貰っていましたから、これは仕方ないですね」
歪んだ空間が元に戻った。
「たった今、『トリックルーム』の効果が切れたようです。このタイミングすら見えていたのでしょうか。加速していないバシャーモはチラチーノやイエッサンより遅いです」
そして再び繰り出されるバシャーモ。
「最後の一騎打ちです。バシャーモとチラチーノ、勝った方がこの試合の勝者です」
「雲が、空を覆っています。このエンジンスタジアム、いよいよ決着が付こうとしています！」
カキタとミタラシ、両者ともが実況になったかのように各々喋っていた。
「コータスの『ひでり』、ファイアローの時間稼ぎ。そしてバイウールーの『バトンタッチ』、イエッサンの『トリックルーム』。戦いに影響のある要素はすべて時間切れで消えてしまいましたが、彼らの意志、想いは繋がっています。両パーティのエースにへと確かに繋がっています」

「今ならアンタの方が速いわ！」
駆けるチラチーノ、対してバシャーモはその場に留まり迎撃の姿勢。
「スカイアッパー！」
リーチの短いチラチーノが距離を詰め切る寸前、カブが声を上げ

た。即座に応じるバシャーモ。腰を落とし、拳を引いて、天に届くような一撃狙う。どこからどこまでがトレーナーの領分なのか、ポケモンの領分なのか、すこしの疑いも、認識のズレもない。

「電磁波！」

瞬間、帯電してバチバチと光るチラチーノ、手札の多さがまさにルリミゾの戦法と一致するポケモンだった。突然の身体の麻痺に膝から崩れ落ちるバシャーモ。

「やるじゃない！次で決めるわよ？」

ちらりとルリミゾを一瞥、目があえばそれで疎通は十分。近接戦闘でバシャーモの拳や脚をいちいち見切って叫ぶのは不可能だ。チラチーノを信じ、最後の一手を考える。

加速しようとも、しばらくはチラチーノの方が速い。一撃でも貰うことが、即座に戦闘不能に直結するようなマッチアップだ。「でんじは」によってしばらくは先手で動けるものの、カウンターで「かわらわり」や「スカイアッパー」を貰ってしまえば意味がない。かといって遠距離から「ロックブラスト」や「タネマシンガン」では決め手に欠ける。バシャーモが素早さを取り戻す前に、勝負を決めなければいけない。

「正面からぶつかり合う？」

「――ぐふ！」

ならば信じるのみ。

「あのバシャーモは右利きよ、右拳できっと反撃を狙うわ」

「ぐふー！」

チラチーノが駆ける。四匹とルリミゾに信じられて。

バシャーモが振り返る。痺れ、老いながらも勝利へと、カブの指示を仰いでいる。

「勝とう。そのために出来ることは全部やってきた」

「シャアアモ！」

飛び膝蹴りは撃てないだろう。麻痺している上に的があまりにも

小さい。ならば全て、一撃に賭ける。
「『フレアドライブ』で行こう。僕たちなら勝てる」
コクリ、と頷いた。ホウエンの記憶が蘇って懐かしくて、試合中だというのに少し笑った。

たたたた、と小さな音で駆けるチラチーノがスピードを上げていく。
バシャーモはただ片膝を立てて姿勢を低く、左手を縦に、右手を引いて炎を集める。
声が重なる。ルリミゾとカブ、叫んだのは同じだった。観客も、キャスターも、映像で見ていたノマも。そして当のポケモン達も同じように思った。

「「今だ！」」
「――ギガインパクト！」
「――フレアドライブ！」
ぶつかり合った轟音、それと衝撃、遅れてだんだん大きくなる固唾を呑んで見守っていた観客の声。
そして、
そして。
「チラチーノ、バシャーモ、両者戦闘不能！」
心なしかジャッジの声も大きく、震えていた。
「――勝った、のね」
バイウールーが戦闘可能であることを示すため、念のためボールから出して確認しなければいけないが、ルリミゾの勝ちだ。
「喉痛い……」
汗でユニフォームがびしょびしょだ。試合後に自覚するととても気持ち悪い。
中心へと歩いてお互いの健闘を称える。
「ありがとうございました」

猫を被るのはやめたはずなのに、丁寧な礼が自然と口から出た。この試合に対して、誠実でありたかったのかもしれない。

「本当に、強かった。次はリベンジするよ」

「もう『だいばくはつ』はやめてほしいわね」

「今期だけだよ。今年、時代が変わる予感がするんだ」

おそらくジムリーダーたちが薄々感じていたこと。はっきりと口に出したのはカブが初めてだった。

「強かったわ。本当に。また戦いましょう」

振り返って出口へ向かおうとしたカブに後ろから同じ台詞を送った。どうして去る世界のトレーナーを呼び止めて、わざわざこんな言葉を送る意味があるのか。頭ではわからなかったが、口が勝手に動いていた。

「ああ、また戦おう」

出口へ向かう足取りは軽やかだった。それがどうしてなのか、ルリミゾにもわからなかった。

ただ、バトルが楽しかったことだけは確かだった。

36―野蛮　ｍｅｅｔｓ　天才

試合の翌日、自室のソファ。カーテンの隙間から差し込む光がやけに眩しくて目を覚ました。時刻は昼過ぎ、ムンナを形どった時計が可愛らしく時間を刻んでいる。ファンミーティングで貰った。生活にまで入り込んだこの世界の人間関係に、少しだけぼーっと時計を見つめていた。

「しんど……」

喉から声のようなざらざらした振動が流れ出た。原因は叫びすぎだろう。カブに乗せられて熱くなってほとんど叫んで指示を出していたから。

起きて人間としての生活をする気力もなし。ぐでっとそのままもう一度背中から倒れて、ソファの上でまた横になる。どうせ一日中休みだから、何度寝ようと変わらないことだ。

・・・

「ぐふ！」

頭上の声で目を覚ませば、チイラの実を持ったチラチーノ。どうやら半分くれるらしい。無邪気な目でこちらに差しだしていた。

「ふふ」

まるまるひとつではなく、半分だけ。それがチラチーノらしくて笑う。食べれば甘辛さが口の中に広がって、起き抜けの口には少し刺激が強かった。それでもなんだか暖かくて、普段よりも美味しく感じた。

「ありがとね」

「ぐふ」

チラチーノは、当然、と言わんばかりに胸を張る。頭を撫でて、スマホロトムを取って起き上がる。

「ニュースはなさそうね」

謎の高速で移動するポケモンが見つかっただとか、ワイルドエリアの天気だとか、ありふれたニュースばかり。新種のポケモンと思われ

たものは、見間違いがほとんどだ。テッカニンやアギルダーを目で追えなくてそう言っているだけだろう。

伝説に関して何も情報は得られず、ソニアの研究が進むことを期待する日々。長い目で見ればナックルシティジムを狙うのは安全で確実な方法だが、目に見えて何かをするわけでもなく、リーグ戦だけしているのはもどかしい。短気さが限界を迎えようとしていた。

「うずうずしてきた……」

戦って何かを得ること。単純明快で分かりやすい方法だから大好きだ。ジムリーグで勝っても目的のモノが得られるのは数か月後なので、実感として不満足だった。相手を蹂躙し、強さの実感を得ながら戦利品を獲る。野生的で最も自分の気質に合った方法だとルリミゾ自身思っている。

「でも今は我慢……」

帰るために最善を。燃え上りそうになるほど知恵熱を出している頭で衝動をなんとか押し留めていた。

「発散するしかないわね」

気分転換してワイルドエリアへ。時刻は十二時、既に真っ暗だ。夜のワイルドエリアは昼に比べて危険ではあるが、ある程度強ければ対処可能だ。

ウォーグルに運んでもらって降り立ったのは逆鱗の湖。崖と湖に挟まれたこの場所で、時空の歪みに落ちたルリミゾは初めて目を覚ました。円状に並ぶ八つの岩の中心に倒れていたのだ。何か手掛かりを探すために、定期的に訪れている。

「あれは……人？」

先客がいたらしい。逆鱗の湖の陸部分へと入れるということは、そこそこ強力なトレーナーだ。この辺りに生息するポケモンは強く、並みのトレーナーでは足を踏み入れることすらできない。ポケモンを進化させる不思議な石や、イーブイの進化系のポケモンたち、それに強力なポケモンとのバトルを狙っているのだろう。

「研究者っぽいわね」
人影が顕わになっていくにつれて、見えてくる正体。長い白衣を着た、妙な髪形の男性。こちらに気付いたようで、操作していたパッドから目を離して不審そうにルリミゾを見つめている。不審なのはお前の髪型だ、とは言わずにジムリーダーらしく行動する。
「こんな時間にここで歩いていて大丈夫なの？」
ポケモンも出さずにひとりで何かを調べている。もしも後ろから野生のポケモンに襲われでもすればひとたまりもないだろう。
「ええ、私はこう見えてそこそこ腕が立ちますから。オーベム！」
ポン、と光と共に現れたのは、ガラルでは珍しいオーベム。かなり鍛えられているのが一目でわかる。ここらのポケモンでは太刀打ちできないだろう。どうやら強さについては杞憂だったようだ。
「その実力なら大丈夫ね。研究者なの？」
とはいえ、不審なことに変わりはない。もしも何かを企んでいるのであれば、ジムリーダーとして振舞っている以上、見過ごすことはできない。
「そうです！私は『ポケモンの力は何によって引き出されるのか』について研究しています！このガラル地方にはダイマックスという現象があると聞きまして、いてもたってもいられず調べに来たのです！」
やけにハイテンションで、大きな声で語り出す。ソニアといい、研究者は自分のテーマのことは熱く語ってしまう習性があるのだろうか。
「あなたは――ポケモンの力は何によって引き出されると思いますか!!」
突然の質問に、すこし引きながらも答える。人柄を知るためには会話を続けなければいけない。
「……人と組むことよ」
「それは――信頼関係、つまり絆と？」
「……ええ、そうよ」
実際、人間との信頼関係によって力を引き出せるとルリミゾは考えている。しかしギンガ団にいた科学者のように、好かれてもいないの

に無理矢理従わせ、力を引き出している人間がいるのも確かだった。
そのことが頭をよぎって、すこし返事が遅れた。
「私もそう思っています」
男も同様の答え。けれども男の目はそう告げていない。調べ足りない、と。
「しかし、まだ試していない方法はいくらでもある！」
よく見れば手に握っているのは「ねがいぼし」。ポケモンをダイマックスさせるエネルギーを持った隕石だ。怪しい科学者に対して良い印象のないルリミゾにとって、この何をしているかわからない変な髪形を放置しておくわけにはいかない。まともな人間か確かめるまで、ワイルドエリアで好きにさせたくはなかった。
「――それは、無理矢理力を引き出すのも含まれているのかしら？」
核心に迫る。この男の目は、それをやりかねないと直感が告げている。力を引き出すためにポケモンと関わっていくならば、トレーナーという関係が普通の選択だ。にもかかわらず、わざわざ科学者という道を選んだということは。つまり。
「そうです！」
まるで当然のように。
「私にとって、力を引き出す方法は何でもいい！」
――この男は危険だ。今ここで拘束して、警察に引き渡さなければいけない。
「機械で無理矢理引き出しても」
男は続ける。
「トレーナーとの絆の力で引き出しても」
まるで子供が夢を語るように。
「果てには、ポケモン自体を改造したとしても！」
無邪気に、純粋に。知りたくて仕方がないと言わんばかりに。
「ダイマックスはどう作用するのか！ポケモンとダイマックスの関係とは！調べないわけにはいかないでしょう！」
「野生のポケモンがダイマックスすれば、力を制御できず暴れ回るわ。その『ねがいぼし』を使って何をしようとしていたのかしら。ねえ？」

「おや、お気付きでしたか。あなたは強いようですが、離れていた方がいいですよ。これからダイマックスさせるのですから！」
ガラルの外から来たとあって、ルリミゾのことを知らないらしい。実力行使で止めるまでだ。
「それはジムリーダーとして見過ごせないわ。拘束して警察に引き渡させてもらうわよ」
「おっと、強そうだとは思っていましたがジムリーダーとは。私も運がありませんね」
どの口がジムリーダーを名乗るのか。自嘲しながらも互いに腰のボールに手をかけたその時。
邪な考えが浮かんだ。周りには誰もいない。
「待って？」
「アンタ、科学者なら異世界に移動する方法に心当たりは？」

この狂人を上手く捕まえれば帰還が早まるかもしれない。

「……ほう！そんなことが！」
「あたしが狂っていないなら、本当よ」
重要な部分をぼかしながら、この純粋な科学者の興味を引くように。
「赤い鎖、ですか。そのアカギというボスはなかなか秀でた才をお持ちのようですね」
「……まあね」
他人事、それもどうでもいいボスの話だったが、今となってはなんだか懐かしくて、誇らしく感じた。
「シンオウ地方でその状況を再現するためには、人手や設備が必要不可欠でしょう。かなり時間がかかってしまいますね。他の方法で私に心当たりがあるのは、ウルトラホールです」

「ウルトラホール？」
「異世界へと繋がる穴のことです。詳しく調べたことはありませんが、そこから未知のポケモンが現れたりしているとか。そして記憶喪失の人間がそこから降ってきたり……」
　まさに求めていたもの。
「それ！それよ！どうやって開くのよ！」
「それは調べないとわかりませんが……私はポケモンの強さを引き出すことを調べてますからねえ……」
「――なら、あたしが力を引き出して見せるわ。機械によってだとか、そういう手段で力を引き出されたポケモンも全て打ち倒してあげる。だから協力しなさい」
　ここでこの科学者を逃す手はない。
「ガラル地方には無敗のチャンピオンがいますね。ダンデ、でしたか。彼はポケモンとの絆を説いているトレーナーですが、私の研究への協力はしてくれないでしょう。あなたは協力してくれたとして、どれくらい強いのでしょうか」
　目に見えた挑発。もっともルリミゾが燃える瞬間だ。
「あはは！言ってくれるわね。戦えばわかるんじゃない？二度とその口開けないようにしてあげる」
「ほう！では早速バトルしましょう！私はある知り合いから組織への参加を勧誘されています。そこでは研究ができる！人員も、設備も揃っています」
「……確かにあたしは何も提供できないわね」
　そう言われてしまえば詰まる。しかし！と大声で続ける男。
「私はその知り合いがキライ！です。嫌いですが、私よりも強いのです。ポケモンを無理矢理従え、その力を引き出しています。少なくとも私を倒せなければ、絆でポケモンの力を引き出せるとは言えませんよね？」
「望むところよ。ボコボコにして何が何でも従わせてやる」
　単純明快な条件だ。ルールを決めてから離れて準備をする。６ｖｓ６、道具アリ。双方準備を終えてから、互いに向かい合う。

「直結してイイじゃない！発散させてもらうわよ！」
「さあ、見せてください！あなたとポケモンたちの力を！」
野蛮と天才が衝突する。

37―ｖｓ■■■■　感性ｖｓ理性①

ワイルドエリア、野生の世界は電灯などなく、ただ月と星の光だけが薄く地上を照らしている。少し闇に溶けたような距離で、奇抜な髪形の男が語る。

「申し遅れましたね。私の名前はアクロマ！世界を旅して『ポケモンの潜在能力はいかにして引き出されるか』を研究しています！」

離れていて表情は見えないが、あの無垢な瞳が知識欲に輝いていることは容易に想像できた。これはバトル前の挨拶のつもりなのだろう。礼儀として、ルリミゾもボールに手をかけながら自らを語る。

「ギンガ団幹部、ロベリア。帰るための方法を探しているわ」

果てしなく長い帰路の手掛かりは逃せない。倫理観を無視できるこの男ぐらいしか、自由に動いて協力してくれる人間はいないだろう。そう考えたルリミゾの髪が風で揺れる。遠くで鳥ポケモン達が飛び立った。バサバサという音の合間、どちらともなく場の雰囲気が戦闘に変わった。

理科系の男の　アクロマが
勝負を　しかけてきた！　▼

ガラルのトレーナーのように熱意のある投げ方はしない。アクロマはただ下手（したて）から軽くボールを投げた。

ルリミゾも合わせて力を抜いてボールを投げた。

「ぐふ！」

本人の希望によって一番手はチラチーノ。対してアクロマが繰り出したのはレアコイル。

（あいつの言ってる内容からして何かしらの道具……まあ進化の輝石ぐらいは持ってるでしょうね）

進化の輝石は、ポケモンの進化するエネルギーを全て溜めこむ石。進化しない代わりに、その種としての力を全て防御力に変換する。チラチーノならどう対処すればいいか理解しているはずだ。

「任せるわ！好きにしなさい」

「ポケモンに任せるのですね。『エレキネット』！」
　レアコイルが電気の網を放った先、既にチラチーノの姿はなく、盛り上がった地面があるだけ。「穴を掘る」だ。即座にそれを察したアクロマは淡々と指示を出す。
「出てきたところに『放電』しなさい！」
　地面タイプの技である「穴を掘る」をまともに食らってしまえば、いくら頑丈なレアコイルとはいえ大ダメージだ。素早いがリーチの短いチラチーノへの解答は自分を中心とした広範囲攻撃。
「ロックブラスト」
　しかし、チラチーノが飛び出したのは少し離れた背後。ロベリアの指示はまるで常にチラチーノの位置を把握していたかのよう。硬いレアコイルの体に岩石がぶつかり、ガンガンと音が鳴る。効果はいまひとつだが、この戦いは道具アリだ。
「右後ろ４５度、『チャージビーム』」
　レアコイルからチラチーノは離れていて「放電」するには負担が大きい。無理矢理範囲を広げて「放電」で攻撃することもできたが、あえてしなかった。一匹目相手に全力を使い果たしてしまえば、後続に控えているかもしれない面倒なエースのポケモンに積みを許してしまうかもしれないから。
　耐久力の高まっているレアコイルであれば、「チャージビーム」で能力を上げるほど得になる。またチラチーノの位置さえ割れていれば近付けさせない牽制ができる。
　しかし、レアコイル動けず。地面にごとりと落ちて体を揺らすことしかできない。
「詰めなさい！」
　それを確認するよりも早く、まるでレアコイルが動けないのを予知していたかのように指示を飛ばすロベリア。
「レアコイル!?何が……」
　と、チラチーノの頭に着けられた道具を見て理由を察した。夜闇で遠く、繰り出した時には確認できていなかった。
「『王者の印』。あたしにピッタリな名前ね」

「どうして怯むことを？確実ではないでしょう」
「だって、怯みそうだったじゃない？わからないかしら？」
勘ではなく直感。当然本人以外に伝わるはずもないが、ロベリアは総合的な経験から判断していた。今まで怯んだ敵、怯まなかった敵、そしてチラチーノのコンディション、本人に自覚がなくとも、それらを「流れ」として把握していた。
「動けませんか、仕方ないですね」
レアコイルは再び距離を取るために動こうとするが、わずかしか体を動かすことができない。そうして一瞬、ゴン！と鈍い音が鳴った。チラチーノが怯んでいるレアコイルに「はたき落とす」を使った音だ。
「やっぱり持ってたわね」
地面に転がったのはピンク色で掌大ほどの石。進化の輝石だ。これを落としてしまえば、もうレアコイルに異常な硬さはない。

面倒な相手だ、とアクロマは思った。リスク承知で、経験を基に異様な領域まで踏み込んだ判断をしてくる。「もしも裏目に出たら……」というような危険な選択肢を「アドバンテージが取れる！」と突っ込んでくる。
（こういう動きに対してはいかに咎めるかが大切ですね）
無理矢理突っ込んでくるのを上手くいなせれば、相手は自滅する。問題はその勢いを殺し切れるかどうかだ。
「ロックオン」
あちこち動き回るチラチーノは想像以上に厄介だった。スピードに加えて指示なしでの自由な動きとそれをサポートする指示。多少手間をかけてでも削る必要がある。
「距離を取って『リフレクター』、詰めさせないように」
物理に対して強くなる壁を張らせた。チラチーノもレアコイルを追いながら「光の壁」を張ったようだ。
（長引くほどこちらの被弾が増える。そうすれば怯む可能性も高まって……相手の思う壺ですね）

「一撃で決めましょう」
　声を合図に、レアコイルが下がりながらエネルギーを集める。チラチーノは技を撃たせまいと近付くが、狙いは既に定まっている。チラチーノが辿り着いて攻撃をするよりも速く。命中率は五分五分。一般的にはロマン技、とも呼ばれるそれをアクロマは実戦で用いていた。「ロックオン」してしまえば必中。気付いたロベリアが叫ぶがもう遅い。
「待って！『守る』！」
　チラチーノが反応するよりも先に。
「電磁砲」
　極太の雷が放たれた。

　吹き飛ぶチラチーノと、冷静に追撃の指示を出すアクロマを交互に見て、ロベリアは笑った。
「派手なことするじゃない」
　チラチーノは全身がビクビクと震え、痙攣している。思う通りに動かせないもどかしさから、苛立ちを込めてレアコイルを睨みつけている。麻痺だ。
「光の壁がなかったらヤバかったわね」
「ぐふ」
　返事も短く、苛立っているのがわかる。やってくれたな、とでも思っているのだろうか。
「『投げつける』、そこから『蜻蛉返り』」
　近くで小さく指示を出した。十分に役目を果たしてくれた。動きが鈍くなったとはいえ、道具を『投げつける』動作に影響が出るわけではない。振りかぶった手に持つのは王者の印。
「いけ！」
　ゴチン！と金属同士が音を響かせる。再び技を放とうとしていたレアコイルがゴトッと落ちた。動けなくなったレアコイルへと加速

しながら駆けていくチラチーノ。
「ぐふ！」
仕返しとばかりに強烈な蹴りを叩き込み、そのままボールへと戻っていく。
「相性不利だったけど……本当に良い仕事したわね」
チラチーノは一人で進化の輝石をはたき落とし、「光の壁」まで張ってくれた。そして麻痺しているにもかかわらず指示を完遂し、手元に帰って来た。ボールを指でピン、と弾いて褒めた。バトルが大好きな性格だけあって、こなせる仕事量が本当に多い。大ダメージこそ与えられなかったものの、レアコイルはもう機能停止したと言っても差し支えない。
「クロバット！」
交代先はギンガ団としての奇襲係、クロバット。バサバサ、と小さく羽音が聞こえた後、夜の闇に紛れて姿が消えた。羽ばたく音すらも聞こえなくなった。夜の闇はクロバットが最も力を発揮する状況である。タイプ相性を超えた蹂躙が始まる。

38―ｖｓ■■■■　感性ｖｓ理性②

（暗闇に紛れて……）

完全に闇に紛れて消えたクロバット。アクロマの眼鏡越しの視界ではもう捉えられないので、攻撃が来る前に対応の策を打たねばならない。

「フラッシュ――」

レアコイルが集中し、辺りを照らそうとすると同時、目の前にクロバットが現れた。レアコイルを馬鹿にしたような表情で、軽く額に蹴りを入れて再び闇に消えていく。

「挑発……！」

先ほど見せた「放電」を警戒して、迂闊に接近してくることはないだろうと踏んでいたアクロマだったが、ロベリアは攻めっ気しかないらしい。

クロバットが消えて暫く、攻撃が来ない。時折かすかに羽音らしき音や、草の揺れる音が聞こえるが、ヒトであるアクロマの耳にはそれが本当にクロバットの立てた音なのか、風の音なのかわからない。

（居座るべきか……）

タイプ相性からして、レアコイルが有利なのは明らかだ。チラチーノに攪乱されたとはいえ、まだまだ戦える体力。加えて「光の壁」まで貼ってある。

（――いや、『すりぬけ』を考慮すべきですね）

物理技や特殊技の威力を大きく軽減してくれる「リフレクター」や「光の壁」だが、それらをすり抜けるように攻撃してくる個体が存在する。クロバットにも稀にそういう個体がいる。ことごとくアクロマの予想を外してくる相手がわざわざ繰り出したクロバットだ。何かあることを警戒して退くことを決めた。

「退きましょうか」

アクロマがボールを使って戻すのではなく、わざわざ指示を出したということは「ボルトチェンジ」の合図だ。即座にレアコイルがパチ

リと電気を弾かせて、その反動でボールへと戻っていく。暗闇に溶けたクロバットを捕捉できずとも、安全に交代することはできる――

――はずだった。

「あはは！掌の上ね！」

ボールへと戻っていく道中、カットするように横切る影、瞬間、ゴッと鈍い音がしてレアコイルは三度目の落下を迎えた。二度目までの落下と違うのは、レアコイルが気絶してもう動かないということ。

「『追い討ち』！逃すわけないじゃない！」

得意技よ、と闇の向こうで笑っていた。

（相手が見えないと、みんな自然と引け腰になるわね）

生物としての本能が、暗闇を恐れる。ロベリアは、アクロマの思考を追えていたわけではない。ただ、暗闇に紛れたクロバットを前にした相手がどういう傾向なのかを知っていただけだ。アクロマのような知性あるトレーナーであっても、人である以上その傾向から逃れることはできない。

「見えない相手には後手に回るしかない。それならもっと有利で状況を打破できるポケモンに逃げたくなるのは当然よね？」

クロバットはただ追い討ちだけを狙っていた。先手を打つ権利は常にクロバットにあった。だからこそ、じっくりと焦らせて相手の精神を揺さぶる。そうして交代へと逃げの手を打つ相手に高威力の「追い討ち」を決めるのが得意の流れだ。

「おいで」

「バァット！」

「よくやったわね」

クロバットを腕にとめてやる。「はねやすめ」とまではいかないが、軽く労わる程度にご褒美だ。

「次はたぶん……厳しいから、上手くやりましょ」

「バット！」

ズゥン、と地面が揺れる。少し横に平べったい大きな影。戦闘不能

のレアコイルを戻したアクロマが繰り出したのは――
「――メタグロス」
やはり従えていた。オーベム、レアコイルとくれば、この男の性質からして従えているポケモンは簡単に想像できる。ポリゴンやギギギアルなんかも従えていそうだ。逆にルリミゾは従えているポケモンが意外だとよく言われる。オコリザルを連れていないのが意外だそうだ。許せない。
「隙を見て交代するわよ」
頷いて腕から飛び立ったクロバットがすぐに見えなくなって、メタグロスの鈍く月光を反射する大きな身体だけが戦場に残っている。
「――」
アクロマが何か指示を出して、巨体が低い音を立てて動く。その見た目の割りに、メタグロスは磁力で浮遊することもできるポケモンである。その太い腕から繰り出される重い一撃と、耐久力、そして高い知能。
「何より厄介なのは……」
エスパータイプ。感知に優れていることだ。奇襲は自慢の硬い体で耐えられ、念力で位置を特定される。だから指示したのは「蜻蛉返り」。バトルで戦うにはあまりにも分が悪い相手だ。
ボッ
そこまで思考したところで、クロバットが攻撃したにしてはあまりにも低い打撃音が鳴った。遅れてアクロマが技を読み上げた。
「コメットパンチ」
軽い体に重い一撃の突き刺さる音。彗星のような一振り。背後から迫るクロバットを振り向いて撃ち抜いていた。メタグロスの両目が妖しく光っている。
「『ミラクルアイ』…！よく使うわねそんな技…！」
エスパーの能力で相手の位置を特定する技だ。クロバットの位置をわかった上で誘っていたのだろう。しかしクロバットも自分の判断で咄嗟に羽ばたいて、「霧払い」することによって衝撃を和らげている。

「でも目的は遂行できたわ」
「『リフレクター』を剥がしましたね…咄嗟に『霧払い』を出すとは」
吹き飛んだクロバットがボールへ戻ってくる。戦闘不能でも「蜻蛉返り」でもない。持たせていた道具の「脱出ボタン」だ。攻撃を受けたポケモンを強制的にボールに戻してくれる。
繰り出すのはロベリアのエース、ポリゴンZだ。

「素晴らしいですね」
アクロマはクロバットのパーティへの献身に感心していた。「コメットパンチ」がヒットする直前、あのクロバットならもっと勢いを殺すことも、もしかすると回避すら出来たはずだった。「ミラクルアイ」はあくまでも位置を把握できるだけで、「ロックオン」のように必中となるわけではない。それにも関わらず、「霧払い」に切り替えてわざと被弾したのだ。全てはパーティとロベリアの勝利のため。
クロバットという種族は、非常に打たれ弱い。これは見た目からも分かることだが、理由は他にもある。クロバットの牙の中は吸血のために空洞になっており、非常に脆いのだ。そんな危険をクロバット自身理解していながら、「霧払い」を放ったのだ。
向こうからロベリアの声とともに現れたのはポリゴンZ。
「ポリゴンZ！あんたもポリゴン連れてそうね！どうなの？」
「……ええ、今は連れていませんがね」
この地方には連れてきていないが、ポリゴン2をアクロマは従えている。ポリゴン2とポリゴンZ、どちらの姿がポリゴンの潜在能力を引き出せているのか。アクロマも答えを出せていない問いである。
閑話休題。メタグロスは先ほどの「コメットパンチ」で攻撃が上がらなかったものの、クロバットに大ダメージを与えただけでも十分な成果だ。メタグロス対ポリゴンZは後出しされたとはいえ、そこまで不利な対面ではない。
しかし、ポリゴンZは特殊技を使うのにもかかわらず、わざわざ「霧払い」して「リフレクター」を早めに剥がしたということは、相打ち

覚悟や早期の交代で物理攻撃のポケモンを出すことを想定しているに違いない。炎タイプの技を耐えるために持たせている「オッカの実」の出番はなさそうだ。

「アームハンマー」

腕で飛び、磁力で浮かび上がったメタグロスがポリゴンZに接近する。その二つの前腕を大きく振りかぶり、そして振り降ろすと同時――

ゴシャア!!

大きく土埃を上げながら崩れた。

「『イカサマ』！強い力はそのまま自分に返るのよ！」

受ければ一撃でやられてしまうであろう「アームハンマー」の大振りを利用して、メタグロスをひっくり返した。効果は抜群。このためにクロバットは「リフレクター」を剥がしたのだ。

しかし。

鋼のボディには土の汚れしか見えない。地面を揺らすほどの衝撃、そして効果は抜群だったにもかかわらず。かなり響いてはいるだろうが、あれほど硬いメタグロスは見たことがない。上手く嵌めて倒したレアコイルも同じように鍛えられていたのだろうか。

「……どんな鍛え方してんのよ」

「言ったでしょう？潜在能力を引き出すと」

育成の方法はロベリアにわからないが、普通のメタグロスよりも硬く、重いように感じる。かといって動きが遅いわけではない。やはり優秀な人間らしい。協力を得られれば、ルリミゾの手持ちの調整にも役立つだろう。益々力が入る。

「シャドーボール」

距離を取って数発、影の弾を撃つポリゴンZ。メタグロスはその太い腕であちこちへ弾く。まるで弱点のタイプなど関係ないように全てを。

「硬すぎじゃない……？」

メタグロスが再び距離を詰めんと迫り、繰り出したのは「思念の頭突き」。思念の力を頭に集めて攻撃する技だ。初見殺しの「イカサマ」がもう一度通用するとも思えないので、正面から撃ち合う。

「悪の波動！」

効果抜群の悪タイプの技である。加えて、相手を怯ませることもある。エスパータイプの技と撃ち合えば、ポリゴンZ側が有利なのは明らかだ――

が、波動を突き抜けた頭突きがポリゴンZを吹き飛ばした。当のメタグロスは当然とばかりに構えている。

「押し切れるラインをずらされるだけでこんなに面倒なんてね」

またしても感覚とズレた重量、硬さで押し切られた。ポリゴンZは首を傾げながらくるくると飛んでいる。勢いは「悪の波動」で抑えられたものの、突破された衝撃が大きい。生半可な攻撃は通用しないようだ。何度も撃ち合っていては、撃たれ弱いポリゴンZが不利である。メタグロスにダメージは通っているであろうものの、あと数発撃たねば倒れないだろう。

「アレ、やるわよ」

ピピッと、電子音のような返事があった。

今までの攻撃は全て、サブウェポンだ。

強いな、とアクロマは思った。バトルをすればある程度相手のポケモンの強さがわかる。バトルは専門ではないにせよ、ポケモンの潜在能力を引き出すという研究上無縁ではない。

アクロマの手持ちのポケモンは出来る限り力を引き出したポケモンたちだ。戦術では毎日研鑽しているトレーナーに及ばないものの、ポケモンたちの能力は劣っていない。いや、むしろ単に戦闘を繰り返しているだけのトレーナーたちよりもその能力を発揮しているだろう。

「来ますね」

ロベリアが照らされている。雲間から出た月の光と、ポリゴンZの

出す光に。生半可な攻撃は通用しないと悟ったのだろう、「破壊光線」の体勢だ。

「守る」

止めに行くにはメタグロスの足は遅いので、耐えて返しで叩き潰すことを狙う。「破壊光線」はノーマルタイプの技である。鋼／エスパータイプであるメタグロスに効果は今ひとつだ。反動は大きく、メタグロスが耐え切ってしまえばポリゴンZを確実に落とせる。

――極大の光線が放たれた。

「消し飛べ！」

標的である鋼の巨体へと指をさして。同時に光線が放たれる。

起きた風で髪や服が靡く。

メタグロスはその四脚をしっかりと地面に突き立て、衝撃に備える。グッ！という音が聞こえて来そうなほど力強く。正面には「守る」を。本来タイプ相性で半減される技であるが、あれほど全力で守るのはロベリアへのリスペクトだろう。

最も強く光り輝いた次の瞬間には、光線がメタグロスの眼前まで到達していた。ド！と接触時にそれだけ音がして、ガリガリと「守る」を削る音に変わった。周囲は明るく照らされて、メタグロスの踏ん張りで土が舞い上がる。

地面をズズズ、と跡を残して下がりながらもメタグロスの体勢は変わらない。正面に「守る」を出しながら四足で踏ん張りを。そして数秒、破壊光線の威力がほんの僅かに弱まった。

これなら耐え切れる、とアクロマが次の指示を出そうと口を開いた瞬間。メタグロスが「守る」を解いて反撃に移ろうとした瞬間。

その一瞬、声が響き渡った。

「まだまだいけるでしょ！」

呼応するようにポリゴンが強く光る。

「もっと強く！もっと！」

ポリゴンZに括りつけた宝石が輝く。光が太くなる。

「な……！」

光をメガネに反射している奥で、その怜悧な表情が崩れた。ロベリアは笑った。

アクロマの冷静そうな目を見開かせた。それが爽快で、ロベリアは大きく口を開けて笑う。ターフタウンで手に入れた「ノーマルジュエル」だ。一度に限り、ノーマルタイプの技の威力を大きく向上させる。今まで「シャドーボール」や「悪の波動」で戦っていたのはこれを温存するため。中途半端な攻撃では有効打になり得ないと判断しての使用である。予定外ではあるが、突破できないよりはマシだ。

ジュッ！と焼けるような音がして、メタグロスの「守る」が消し飛んだ。そして同時にメタグロスも光に呑まれた。巨体は地面から捲れ上がり、吹き飛んだ。

倒れて動かない姿から戦闘不能を判断して、アクロマがボールに戻す。それを見たポリゴンZが狂ったように高速で回転して、その喜びを表現している。電子音が踊り、手と尾は止まることを知らず忙しなく動き回っている。

「ギンガ団のエース、舐めてんじゃないわよ」

「低く見ていたわけではありませんがね」

やや不服そうに、リスペクトは十分だったと主張するアクロマ。ロベリアとて刃を交えてそれを理解している。決め台詞が言いたかっただけなのだ。

「そんくらいわかってるわよ」

まだ上下左右に乱れて動くポリゴンZを抱きしめて頭を撫でた。

5番道路、ターフタウンとバウタウンの間。ワイルドエリアの上に架けられた橋の上で男が目を見開いた。欄干に手を置いて、身を乗り出すようにしてワイルドエリアを凝視する。

「あの光は……」

西の方、おそらく「逆鱗の湖」辺りだろうか。深夜にもかかわらず大きな音と光があった。あれほどの出力、並みのポケモンではない。

野生のポケモンに襲われたトレーナーが指示したものにせよ、野生のポケモンのものにせよ、いずれにせよ確認しに行かずにはいられない。男はどんな立場でもそうする人間であり、また男の立場からしてそうしなければならないからだ。

「俺じゃ時間がかかってしまうな」

男は方向音痴である。だからいつも相棒に任せている。普段は並走していたが、今日は特に急ぎのため「そらをとぶ」で連れて行ってもらう。

「リザードン！」

「ばぎゅあ!!」

炎が橋を照らした。その背中に乗れば、炎と体温で力強い生命を感じる。男は相棒の調子が絶好調であることを触れて感じながら、光のあった方へとリザードンが羽ばたいた。

39―ｖｓ■■■■　感性ｖｓ理性③

倒されたメタグロスのボールを眺めて、アクロマは暫し自らを落ち着かせようと試みた。「破壊光線」の反動で技の撃てないポリゴンＺに立ち直る隙を与えてしまうが、動揺と興奮で揺れている精神ではロベリアの相手ができないと判断したのだ。

「……」

ロベリアと彼女のポケモン達の強さは、アクロマが設けた基準をとうに超えていた。薄々、敗北を感じながらも、降参しないのは何故か。一瞬の自問自答の後、自分のポケモン達の強さを見せつけたいという内心に気が付いた。

「らしくないですね」

協力者が十分に強いと判明した以上、このバトルは研究には不要な時間である。バトルを打ち切り、今後の相談に時間を割いた方が建設的である。

――しかし何故か、それを許さない自分の衝動を自覚した。

ほぅ、と一息吐いてから、ボールを投げた。動揺は収まったものの、自分が思うよりも熱くなっている。投げたボールの選出も、この熱に浮かされたものである。そのことを自覚しながら、ポリゴンＺを抱きしめて不思議そうにこちらを見ている少女を見据えた。

「ギギギアル、頼みます」

繰り出したのはアクロマのエース、ギギギアル。他にもロトム、ジバコイルの選択肢があったが、最も信頼しているポケモンを選んだ。それは理性的な判断から来たものであり、またアクロマ自身と、このギギギアルがあのポリゴンＺ相手にどれだけ戦えるのか知りたい欲求から来たものでもあった。

バトルは専門外で、勝ち負けに拘りはないつもりであったが、いつの間にか熱が入っていたらしい。試す――アクロマが勝てば、それだけ、負けたとしても都合の良い協力者が見つかるだけ――そう思っていたはずが、全力で勝ちを獲ろうとしている。

「しかしまあ――そう悪い気分でもありませんね」
いつのまにかズレていた眼鏡を手で直して、少し笑いながら向き合った。

「強そうね」
繰り出されたギギギアルを眺めながらロベリアが呟けば、ピピピッと音が返って来た。艶のある鋼は、暗闇の中でもハッキリとその輪郭を現わしている。ギリギリと歯車の回る音が響く。手元に抱いているポリゴンZがもぞもぞと動いている。手触りはつるつるしていて、そこに命があることを忘れてしまいそうなほど。
（こうして触ってると、ほんとに生物感ないわね……）
無機質な手触りが、しかし、力強くロベリアの手元を離れた。アクロマが何故か時間を使ったおかげで反動からは復帰している。
「やってやろうじゃない」
電子音が鳴る。ポリゴンZがバチバチと光って、その本質を電気に適応させていく。ポリゴン種固有の技――「テクスチャー」と呼ばれている技――である。ノーマルタイプだったポリゴンZは、今や電気タイプ。鋼タイプの攻撃に強く、鋼タイプに対する技の通りが良い。
「これでタイプ有利はひっくり返ったわね」
「ええ。しかし時間はこちらにも与えられている」
ギアが音を立てて加速する。ガコガコと金属がぶつかり、ギアを変える音が鳴る。ギギギアルの回転はさらに速くなり、その身体には力強さが漲っている。攻撃力が上がり、素早さもぐーんと上がった。
「『ギアチェンジ』これから先はもっと速くなりますよ」
アクロマ自身の纏う雰囲気も変わった。
「ムカつく顔だったけど、少しはマシな顔になったんじゃない？」
そこに立っているのは研究者というより、ひとりのポケモントレーナーだった。
・・・
「ギギギアル」

アクロマの呼びかけと共に歯車が二つ、浮かび上がった。噛み合う対象もなく、ひとつずつそれぞれ高速で回転しながらポリゴンZに飛んでいく。軌道はちょうどポリゴンZを挟んで噛み合うように。

（やっぱり普通のより速い！）

ポケモンの状態が技のキレにまで反映されている。幅広く技を使い、ロベリアとの豊かな戦闘経験によって鍛えられたポリゴンZ。対して、その能力を伸ばし、「ギアソーサー」と「ギアチェンジ」のみで戦ってきたギギギアル。対応の遅れた今、崩れた体勢で迎え撃てば押し潰されるのは明白。

「避けて！」

選択肢は二つ、撃ち落すか回避するか。撃ち落そうとしなかったのは、アクロマとギギギアルへのリスペクトだ。万全の状態で技を出力しなければ、撃ち落とすことは不可能だろう。メタグロスから既に学んでいる。ましてやこちらのエースにぶつけてきたポケモン、警戒しないことが非礼である。

回避行動をとって動いた一瞬、歯車の軌道がガクンと変わり、ポリゴンZを挟み込んだ。

「――ッ!!」

ごりごりと潰すような衝撃に、痛みを推し量ったロベリアの顔が歪む。

（『ギアチェンジ』だけじゃない、元からして火力が違う……！）

「放電！」

バチィ！と電気が弾けて目が眩む。その反動で歯車が散って消えた。なんとか脱したものの、厄介な攻撃に変わりはない。

「アレ、返すわよ」

ポリゴンZにだけ聞こえるように、小さく呟く。相手の攻撃力を利用して反撃するのだ。

「もう一度『ギアソーサー』」

アクロマが指示を出す。ギギギアルの技範囲からして、攻撃は単調。しかしその愚直さから来る熟練度は計り知れない。武人のような一芸に、ただただロベリアは感服するばかりだった。

「備えて」
　ポリゴンZからの返事は無い。集中を高めて、ただ次の指示を待っているから。
「イカサマッ！」
　叫ぶと同時――ポリゴンZがその歯車に当たる瞬間――に、歯車がそのままターンしてギギギアルへと向かった。
「ッ！ギアチェンジ！」
　これを返されるとは想定していなかったのか、ビクリと身体を震わせた後、指示を出すアクロマ。「アームハンマー」のような近接技だけでなく、「ギアソーサー」のように遠距離の物理技までも正確に返せる技術がポリゴンZにはある。
　返された高威力の「ギアソーサー」がそのままギギギアルへと飛んでいき――しかし、高速で回転する身体に受け流された。ガキン！と音が鳴って、そのまま横へと逸れて消えた。
「ええ!?」
「バトルに明るいわけではありませんが――自分の繰り出す技くらいはよく知っていますから」
　少し口角を上げながら言うアクロマ。そんな滅茶苦茶な、とロベリアは思った。けれども、次から次へとユニークな戦い方をする相手にワクワクしているのも事実だった。
「十万ボルト！」
　加速したギギギアルにゴリ押しされる前に先手を取る。技の撃ち合いというアクロマの土俵に立つのは癪であるが、中途半端な小細工が効かなくなる程度には積みを許してしまっているため仕方がない。
「迎え撃ちましょう『ギアソーサー』」
　同じ技しか撃たないというのに、技名を毎度言うのは感情移入か、それとも合理性か。ロベリアにアクロマの考えは何一つわからないが、この熱を共有していることを願った。
　正面から電気と歯車がぶつかりあう。積みを許して尚、拮抗するほどのポリゴンZの適応力。いや、むしろ押し返している。が、追加で飛び出た歯車によって押し合いは中断され、お互いに元居た位置から

変わらず向かい合う。――と、不意にギギギアルの光沢に違和感を感じた。未だに道具について情報が得られていなかったが、この光沢の違和感から推理できる。

「メタルコートね」

「ご名答です」

ギギギアルの身体はコーティングされている。鋼タイプの技を強化する道具「メタルコート」だ。単純さ故に見落としていた。

（わかったからといって方針が変わるわけじゃないけどね）

道理で一撃が重いわけだ、と納得した。本題はあの「ギアソーサー」をどう凌ぐかである。電気タイプとなったポリゴンZに対して効果はいまひとつだが、この後に控えるポケモン達にとってはタイプ相性による軽減がない。ポリゴンZが生命線だ。

「自己再生」

「追撃しましょう」

傷の修復を試みるポリゴンZ、追撃を狙うギギギアル。ほとんど移動せず「自己再生」を行うポリゴンZは当然歯車に挟まる。すり潰されそうなほどの圧の中、ポリゴンZは自己再生を続ける。ギギギアルが若干前のめりな体勢になって、力が入っている様子がひしひしと伝わる。ポリゴンZは狂った動きをかすかに圧の中で見せながら端から傷を回復していく。

ここでもまた根競べだ。グググ、と跳ねのけようとするポリゴンZと、それを押し込めようとするギギギアル。何度目かもわからない押し合いで確実に両者は疲労していく。

「埒が明かないわ。『かみなり』！」

痺れを先に切らしたのはロベリア。単調な力比べが続くことに耐性がない。命中率に難のある「かみなり」だが、この状況を打破するには十分な威力であり、リスクを避けたいアクロマを下がらせるには十分な技だった。数で負けているアクロマにとって、このエースを失うことは出来るだけ避けたい。少なくとも1―2交換――ギギギアル一匹で二匹を持っていくこと――は行いたいと考えているだろう。

空から雷が落ちる。ゴロゴロという予兆もなく、唐突な衝撃。ほぼ

同時に耳を劈く轟音。焼け焦げた地面はあれど、しかしギギギアルは距離を取って回避している。「ギアソーサー」から解放されたポリゴンZは自由に飛び回り、次の攻撃を牽制する。

「シャドーボール！」

天を指し、指示を出すロベリア。それを見たポリゴンZは即座に「シャドーボール」を連続で撃つ。しかし「ギアチェンジ」を重ね、変速に変速を重ねたギギギアルにとっては何も脅威にならない。ひらり、ひらりと飛来する弾丸を回避していく。曲がる弾も、直進する弾も、素早さの前では無力だ。

（効かないと容易に想像できたはず。それでも「シャドーボール」を撃つ理由は……）

と、「シャドーボール」選択の理由に思考を巡らせたアクロマが一瞬遅れて狙いに気付く。天を指した指示の意味。

「――ッ！動くな！撃ち落とせ！」

戦闘経験の差。時既に遅く、狙いを理解したアクロマが声を上げたときには雷が落ちていた。

バン！

どんぴしゃり。轟音、眩光と共に中心にいたギギギアルが見えなくなった。「かみなり」の位置へと誘導されていたのだ。煙が上がり、その衝撃の凄まじさが窺える。耳が裂けそうなほどの音量にアクロマの聴覚は麻痺していた。

「ギアソーサー！」

それでも、それでも出す指示はひとつ。後悔は後回し。耳が少し聞こえなくなっても、叫ぶのはひとつの技。煙の中から一対の歯車が飛び出す。

「十万ボルト！」

影響されてか、無意識にロベリアも叫んでいた。正面から突き進む光に対して、歯車はそれを避けるようにしてポリゴンZへと向かう。

「刺し違えてでも……！」

「望むところよ！」

ごりごりとすり潰す音、それと電気の弾ける音。「かみなり」という

重い一撃を見舞った以上、撃ち合いでは負けないだろうとロベリアは踏んでいる。そしてアクロマもまた、ギギギアルの強みを押し付けることのできるこの形を望んでいた。

・・・

――永遠にも思えるような長い力比べの末、先に「十万ボルト」が途切れた。同時に歯車が停止して、間にいたポリゴンZが落下する。

（連戦とはいえ……まさかこの子が負けるなんて）

「お疲れ様。よくやったわ」

労わりながらボールに戻して、正面に目を向ければ光景。ギギギアルがゆっくり、ゆっくりと減速していく。そしてガタガタガタ、と音を立ててから停止――地面にぼとりと落ちて二度と浮かび上がらなかった。

（いや、引き分けね）

「お疲れ様です」

ボールに戻すアクロマのその表情は、心なしか悔しそうな、しかし晴れやかなような表情に見えた。アクロマの心情を推し量るには、ロベリアはあまりにも短い付き合いであったし、夜がその観察を妨げていた。

「カビゴン」

「ジバコイル」

次のポケモンを繰り出したのは同時。示し合わせたわけでもなかったが、綺麗にタイミングが一致した。

「的が大きいですね」

カビゴン相手なら、いくらチャージが遅く照準を定めにくい技であっても当てられるはず。そう判断したアクロマは、そのままその指示をジバコイルに伝える。

「『電磁砲』、速攻です」

初撃から全力。ただでさえ体の大きく、動きの遅いカビゴンである。麻痺を入れることができれば戦いはジバコイル有利に傾く。そ

してその凄まじい威力はカビゴンとて無傷ではいかないだろう。
「地震！」
対するロベリアも、妨害を狙って「地震」で応戦する。強く、強く地面を踏みつけたカビゴンの真下から亀裂が走り、ビキビキ！と音を鳴らしてジバコイルの真下に迫る。ジバコイルは「電磁砲」のチャージで動かず、とにかく先に撃つために照準を定める。
――地面が盛り上がり、チャージ中のジバコイルを下から突き上げた。バゴ！という打撃音が鳴ったのは――
まさに発射のタイミング。浮いた鋼が揺れる。その照準も合わせて。
ドッ！
斜め上、狂った照準が夜空を貫いた。思わず目で追った先――ポケモンが飛んでいる。
「なっ……！」
声にならない声。驚くほど正確に、吸い込まれるように「電磁砲」が空を飛ぶポケモンの方へと向かっていた。
「危ない！」
どちらともなく叫んでいた。
直撃する――思わず目を閉じてしまいそうになった瞬間、炎が光線を上書きした。ゴオオ！と炎を吐き出す音が届いて、その光によって明らかになったポケモン、それとその背中に跨る人物。
王冠をあしらった帽子と、重厚なマント。
ゆっくりと羽ばたいて、近付いてくる。
「――ダンデ」
ガラル地方が誇る無敗のチャンピオン。
トレーナーの頂点。
その代名詞であるリザードンは、アクロマのジバコイルが放った電磁砲を、いとも簡単に掻き消した。火炎放射の一振りで。
「熱いバトルだな！大きな光が見えて、何か事故かと思って急いで来たんだが、安心したぜ！」
まるで何事もなかったかのように。だんだんと高度を下げて着地

し、語り掛けてくる。
「強いリザードンですね」
「ああ、ありがとう」
　アクロマは謝罪の言葉を頭に浮かべていたが、思わず先に賞賛が飛び出した。アクロマ達のミスで流れ弾が飛んだのだが、モヤモヤした思いを抱かずにはいられない。そうだ、本来アクロマとルリミゾは危険に晒したことを謝罪する立場であった。それにもかかわらず、全力の戦いを一笑に付されたような。
　そう感じることが完全に格上だと認めたようでさらに苛立ってしまう。場を完全に支配しているダンデが言葉を続ける。
「……ルリミゾじゃないか！どうしたんだ？こんな時間にバトルなんて」
　言外に、アクロマの身元を問うているのだろう。これはどういうバトルなのか、と聞かれている。
「観光客。散歩してたら強そうだったから吹っ掛けたの。双方同意の対戦よ」
　もしも相手が不審な人間だったり、犯罪者だった場合は加勢するつもりだったのだろう。ジムリーダーやチャンピオンともなれば、軽々しく一般人とバトルすることはあまり褒められたものではない。そのことを咎められるのかとルリミゾは思ったが――しかし、ダンデからそのことを責めるような様子はない。むしろ、羨ましそうな顔を一瞬して、再びリザードンに跨った。
「そうか、それならいいんだ。邪魔してしまったな」
「大変ね、チャンピオンも」
　事件かどうか確かめに来たのはその性分か、それとも職務か。おそらくどちらも兼ねているであろう人間性を想像して、ルリミゾは笑った。
「ははははっ！そう悪いもんじゃないさ」
「見に来ただけで終わり？」
　ルリミゾは冷や汗を流しながらも問う。今場に出ているのはちょうどカビゴンだから良かったものの、もう少し早ければポリゴンZを

見られていた。まさかこんな時間に人が、しかもチャンピオンが来るなんて予想外だ。距離によってはポリゴンZを確認されていたかもしれない。そのことを探りながら、真意を探る。

「ああ、バトルを見ていきたいところだけど、明日の活動に支障が出てはいけないからな」

「戦いに水を差されたんだし、詫びのひとつでも欲しいところね」

挑発。しかしダンデは歯牙にもかけず、ただその王者の笑みを湛えながらリザードンを羽ばたかせる。

「それなら『電磁砲』の流れ弾でひとつ、帳消しにしてもらおうかな」

「つれないわね」

造作もなく打ち消したくせに。チャンピオンの手の内を実際に目の前で見たいという気持ちが強かったが、自身の疲労状態とポケモン達の状態を鑑みて諦めた。

「ま、せいぜい追加で飛んでこないことを祈るのね」

「それは困るなあ」

軽口を混ぜて、その背を見送った。ガラルの企業があちこちに書き込まれたマント。そして少年少女、いやガラル全土の期待を背負う背中。そこには王者として完成された強さがあった。落ち着き払い、すべての挑戦者を見定めんとする風格。裁定を待つかのように、自ずから背を伸ばすトレーナーのどれほど多いことか。

(最悪の事態にはならなかったみたいね)

水を差されたことで冷えた頭が最低限の思考を取り戻した。これがもしも、ポリゴンZの戦闘中であったなら。その想像をしてぞっとした。

「さあ、どうする?なーんか白けたわね」

目をやれば、同様に白けた表情のアクロマ。その眼は冷静さを取り戻し、最初に出会った時のような無垢さ、無機質さが浮かんでいる。先ほどの熱は嘘のように、流れ落ちる汗だけが熱狂した戦いを示していた。

「お眼鏡にはかなったかしら?」

「ええ、それはもう十分に」

これからよろしく、と手を差し出して握手した。東の空が少し白んできて、朝の到来を予感させる。それから少し、ルリミゾは我に返って睡眠時間がほとんど残されていないことに気が付いた。

「じゃ、連絡先も交換したしあたしは帰るわ」

「おや、ダイマックスしたポケモンを調べるのに協力してほしいのですがね」

「うー……しょうがないわね」

アクロマが指さした先にはポケモンの巣穴。ワイルドエリアにある巣穴は、稀に中の空間が歪んでいて、ダイマックスしたポケモンがいることがある。今から「ねがいぼし」を使って何かやらかすことはないだろうが、貴重な協力者だ。親交を深めるためにも延長戦に協力することにした。果たしてこの男に親交という概念があるかはいまひとつわからないが、どうにでもなれという気持ちが強かった。

・・・

数時間後、ダイマックスしたポケモンが一匹も見つからず、気合を入れ直していたルリミゾが消化不良と疲労でフラフラになりながら帰路についた。

４０―夜明けの歌

「バトルとは――不思議ですね、勝ち負けに拘りはないつもりだったのですが」

　別れる前、アクロマはそう零していた。

「アンタのポケモン達は、きっとアンタが探って来た方法の集大成なんじゃない？能力を引き出すために、一緒に来たわけなんだから」

「……そうですね」

「それなら、きっと愛着だって沸くじゃない。『ポケモンの能力を引き出すのが何かを知りたいのであって、それを行うのは自分じゃなくてもいい』。そう思ってるかもしれないけど、アンタはアンタが思う以上に、自分の研究とポケモンたちを誇りに思ってる」

　ルリミゾから見たアクロマの様子を伝えれば、はっとして目を見開いていた。きっとこの研究者は一人で行動していたのだろう。「何が何でも知りたい」という内からの欲求に突き動かされていても、アクロマは人間臭かったのだ。少なくともルリミゾにとっては。

　では私からも一つ、とアクロマ。

「あなたは自分の与える影響をもっと見つめてみてはどうですか」

「どういうことよ」

　おせっかいかもしれませんが、とアクロマが続ける。

「人に影響を与えるだけ与えて、自分は帰ってお別れですか？尊重をしていながら、軽んじて別れようとしている」

「――ッ！」

　それは、ルリミゾとバトルして熱くなったアクロマだからこその言葉。バトルをして――ジムリーダーとして人を魅せ、人を倒し、あらゆる形でガラルの人々と関わって来た。リーグ戦で大きな渦の中心にいながら、ファンを増やしながら、突然消えるつもりなのか、ということ。

「人間関係について、この私からアドバイスするのもおかしな話ですから、これ以上は言いませんが」

心のどこかで自覚していたことを、形にして突き刺された。表面上好意的に――円滑に事を勧められるように――関わる以上に、入れ込んで人と関わっている。しかし誰にも目的は打ち明けず、いつか裏切るつもりでいる。

「そう簡単に割り切れたら、誰も苦労しないわよ……」

薄ら明るい空を背に「そらをとぶ」。ウォーグルに掴まっていれば、風とともに背中に昇りつつある陽を感じて焦りが生まれる。ジムが開くまでそう遠くない時間である。家でぐっすり寝るにはあまりにも短く、仮眠程度に横になるしかないだろう。

「スピード上げれる？」

「クァ」

指示に反して、ウォーグルは速度を変えない。大人しく、素直な性格だと思っていただけに意図が汲めずに戸惑う。

「ちょっと？」

「クァァ！」

見ろ、と言わんばかりに嘴で背後を指した。何かと思い振り返れば

「朝焼け……」

朝日が空を焼いて、煌々とオレンジが顔を出していた。遮るものはなにもなく、空の上、特等席で目を焼く朝。高く、薄く掛かる雲はどこまでも空の高さを示している。ルリミゾの瞳が光を反射してきらきらと。

「……ありがとね」

「クァ」

「ふふ」

当然、と言わんばかりの反応の薄さに自然と口角が上がる。ニクい奴め、と一息ついて、風に身を任せた。

「そう焦るな、ってことね」

今のこの帰路についてなのか、ルリミゾの今の生き方なのか。きっ

とウォーグルにそこまで深い意図は無かっただろうけれど。大切なのは、後ろを振り返ったことだろう。

振り返る余裕もなく、ずっと前を見て走っていた。

今日、初めて後ろを振り返った。

・・・

静まり返った部屋の中。すぅすぅ、と小さな寝息。秒針が進む音。その他の音はなにもなく、カーテンの隙間から差し込む白い日差しが外界との時間のズレを意識させる。室内の様子とは対照的に、外では太陽が既に上に昇っている。ソファで仰向きに寝ている少女の上に、チラチーノが被さる。

「……ふぐっ」

息が止まる。口を動かせば毛が入り、不快感で目を覚ました。ばっ、と起き上がれば顔の上に乗っていたチラチーノがぼとりと落ちる。

「ぐふ!?」

「あ、ごめん」

口内に残る不快感を洗い流すため、キッチンへ向かおうとしたその時。

「あれ？」

アラームよりも早く起きてしまったのだろうか。疑問に思い時計を見た。

「……」

針が示すのは14時半。スマホロトムは通知で光っており、予定を完全に破壊してしまっていた。無意識にアラームを止めてしまっていたらしい。

「……やば」

さぁっと血の気が引いていく。寒気が頬の辺りから首、肩、心臓へと通って腹で止まる。ヤツに何を言われるかわかったものではない。

「……でもまあ、どうせ遅刻するなら同じことね」

却って落ち着いた足取りでキッチンへ向かう。軽く口を濯いだところで、だんだんと意識も覚醒していく。遅刻中でもマイペースに行

動すれば、自分が世界の中心のような気分になって心地がいい。例の如く頭に飛び乗ってくるチラチーノに重心を取られながらも支度を始めた。限度を超えてしまえば何も怖くないもので、鼻歌すら鳴らしながら荷物を詰め込んでいく。

「――で、ワイルドエリアで観光客相手にふっかけて遅刻と？」

「そうよ」

他の口実を立てるわけでもなく、ただ正直に話した。アクロマに言われたことが尾を引いて、ジムがいつもと違って見えた。各々ポケモンと訓練しているジムトレーナー達だが、ルリミゾを責める様子はなく、むしろ「またバトルか……」という表情。サボりではないことを少しも疑わないその目に、抱えているプランの後ろめたさが炙り出されて苦しかった。

「……悪かったわね」

耐えきれなくなって、話していたノマに謝罪の言葉が出た。それは遅刻に関してでもあったし、このいつか消え去る関係性に対してのものでもあった。

「あんたがいなきゃ締まらないからな。しっかりしてくれよ、ジムリーダー」

「……ッ！……そうね」

別れるその時までは、ジムリーダーを背負おう。そう誓った。

41―ガラル地方で考え中

「……取っていただけると嬉しいんですが」

チラチーノが顔に張り付いたアクロマが言う。あまりにもその光景が面白くて、ルリミゾはスマホロトムで写真を3枚ほど撮ってからチラチーノを引きはがした。アクロマは特に気にしていない様子だったが、ルリミゾはとにかく笑って、笑って、倒れこんで「捧腹絶倒」という言葉を文字通り体現していた。

「……そろそろ話を進めましょうか」

「――ええ、そうね。……ふふっ」

まだ少し思い出して笑うルリミゾを無視してアクロマは続ける。ホワイトボードの横に講師のように立つアクロマ、そしてそれを座って聴くルリミゾ。

「まず、ポケモンの能力を引き出すうえで最も知っていなければならないことは、種族、才能、鍛え方です」

そう、二人が集まったのはルリミゾの手持ちのポケモンの強化のため。自身の手持ちのポケモンに関しては一通り生態や特徴、性格などを把握しているルリミゾだが、最善の鍛え方、となると専門外である。能力開発を専門としているアクロマと知り合った以上、使えるものは使おう、という精神に基づいてのものだ。

「種族――これは種としての限界のことです。トリトドンがどんな個体でもゆっくりとしか動けないように、ポケモンには生まれた種族によって鍛えられる限界があります。これは私(わたくし)が説明しなくても理解されていますね」

「そうね」

どんなポケモンも生まれた種族からは逃れられない。ヒトが二足で歩き、言葉を話すように、ポケモンもまた各々の性質と結びついている。極稀に例外はあれど、ルリミゾの手持ちには関係のない話だった。

「次に才能、トレーナーも同じです。あなたも今まで才能の壁にぶつ

かるトレーナーを多く見てきたでしょう」
「手を出してからじゃないとわからないのが本当に質が悪いわね。道中で自らの才能の限界に気付くことほど残酷なことはないわ」
そう語るルリミゾ自身、生まれ持った才能に生かされてきた自覚があるため複雑な表情をしている。とはいえ、トレーナーに才能が求められるといっても、手持ちのポケモン6匹は才能を求められるのだろうか。深く考えたことのない問いであったが、アクロマが話題にすることでルリミゾは初めて疑問に思った。その様子をみてアクロマは続ける。
「〝意外にも〟理解力があるようですね。ポケモンにもバトルの才能があれば良いに越したことはありませんが、しかし、バトルで重要なのはどういう種族で、何に長けているかではないでしょうか。それぞれのポケモンが役割を背負って、パーティを組むわけですから」
今一瞬、ものすごく失礼なことを言われた気がしたが、ルリミゾは顔にチラチーノを貼り付けた様子を思い出して耐えた。
「……そうね、深く考えたことはなかったけど、その通りね。挙げるならカブのコータスや、ルリナのペリッパーね」
「ええ。もちろん彼らとて、同種族の他の個体よりは戦闘が得意なはずですが、一匹だけで二匹のポケモンを倒すなんてことはまずないはずです。もし彼らに戦いの才能がないとしても、あまり変わらないはずです」
話していくにつれて、ルリミゾはひとつのことに気が付いた。
「じゃあ、鍛え方と運用が大事ってこと？」
「そうです。私（わたくし）の研究テーマは――」
「「ポケモンの力は、何によって引き出されるのか」」
散々聞いてきたルリミゾが被せるように言う。ふ、とアクロマが笑った。
「才能がないので力を引き出せません、なんていうのはおかしな話です。普遍的に力を引き出すことが可能なものを探していますから」
「じゃあなんで才能の話をするのよ」
前振りが長い。さっさと要点を聞きたいルリミゾだったが、アクロ

マの目はそれを許そうとはしておらず、ルリミゾの眉間に皺が寄る。飛びつけ、とチラチーノに指示を出そうとしたところで、アクロマが口を開いた。少し額に汗が流れているのは気のせいではないだろう。

「全く才能が必要ない、というわけではないんです。技の覚えの早さ、習熟、そして実戦における直感。そういった部分において才能は大きく関わってきます」

「エースを張れるようなポケモンたちは、薄々気付いてたけど才能が突出してたりするわけね。習熟と覚えの早さっていうのは?この子みたいにコツを掴むのがはやいってこと?」

まさに今、ルリミゾの膝元でうつらうつらしているチラチーノがその例だ。チラチーノという種族が覚えられる技をほとんど覚え、かなりの練度で使いこなす。才能と言わずして何になろうか。

「はい。技を覚えさせれば覚えさせるほど、各技を出す頻度は減り、習熟しにくくなります。ですから、駆け出しトレーナーには『まずは技を4つに絞れ』と教えるわけなんです。才能があれば多くの技を高い質で繰り出し、様々な状況に対処することができますが、器用貧乏になってしまえば本来の役割すら果たせなくなってしまいますからね。」

「なるほどね。この子は覚えが早いから色々教えていたけど、そういうことだったのね」

技マシンを使ったり、ビデオを見せるだけですぐに技の感覚を掴むのは流石のルリミゾも違和感を覚えていた。

「育成の効率を上げるためにも、才能を見極め、どこまでの範囲の技に手を出すのか、取捨選択が必要になります。時間は無駄にできませんからね」

なかなかまともなコーチングに関心するルリミゾ。本来ならばルリミゾが頭に入れているべき事柄だったが、無理矢理のし上がって自分の才能だけで暴れていた彼女には難しい話である。

時間は過ぎて、話題は「力を発揮する状況とは?」ということ。

「鍛えても、それを発揮し、開花させるような場が必要です。バトル、コンテスト、野生でのサバイバルでもいいですね。家の中なんて安全な場所で突然ポケモンが力に満ち溢れるわけがないですからね」

もうルリミゾは相槌をしなかった。半分、眠くなって瞼が降りかけていたのもあったが、アクロマが言葉にする前にそういったことは既に昔から五感で直感していた。

「その場において、鍛えた以上にポケモンの能力を引き出すもの――絆、恐怖、あるいは個としてのプライド――何が最も良いのかはまだわかっていませんが、どれもある程度結果を残しています。表には信頼関係によって力を引き出すトレーナーしかいませんが、裏にはいくらでもポケモンの命を脅かしたり、恐怖を与えることによって力を引き出すトレーナーがいます。野生にも、いくつもの修羅場を乗り越えた主のようなポケモンがいますからね」

思い当たるのは、ギンガ団のあの胡散臭い科学者――ポリゴンに過剰な改造を加えたり、他にもポケモンに手を加えていたと聞いている――のこと。確かにポケモンたちは改造や調整によって強くなったけれど、無垢なポケモンの意志を無視してヒトが手を加えるのはルリミゾにとって気分良いものではなかった。ルリミゾと協力しているこの目の前の男はきっと自分の知識欲がために躊躇せずに行うだろうけど、と自らの立場の曖昧さを自嘲した。この男は倫理や情熱を解していながらも、それ以上に知識欲が狂っている人間だ。絆の力を信じていながら、理性はそれと反対に徹底的に何が正しいのかを知ろうとしている。倫理を知っていながら、理性的に淡々とそれを踏み越えて知りに行く男だ。

「あなたは信頼関係による後押しが最も良いと考えているようですから、その方法を採りましょう。ポケモンたちも実際にあなたを信頼しているようですしね」

アクロマの、おそらく無意識であろう言葉選びからしてルリミゾの推理は当たっていたとみえる。常人であれば信頼関係以外の選択肢など浮かばない。わざわざ「その方法を採りましょう」なんて口から出ないのだ。

「では本題です。脅されたとて、普段戦わないポケモンが力を発揮できるはずもありません。それは信頼においても、野生においても同じです。ですから、やはり日常的に鍛えている必要があります。その方法をこれから話し合うわけですね」

「やぁーーーっとね！」

んぐぐ、と伸びをすれば固まっていた身体がパキパキとなって心地が良い。膝の上でチラチーノはすうすうと寝息を立てている。

「私（わたくし）が考える方法はですね……」

態度が一転、身を乗り出したルリミゾを見てアクロマは半ば呆れた顔をした。

アクロマが提示した方法論がホワイトボードに書かれていく。

①種族・性格・才能をもとに役割分担を明確にする
②役割分担・勝利プランに基づいて鍛える
③実戦で確認
④欠陥、未熟な部分の洗い出し
⑤②へ戻る

この方法論自体は一般的にも有名なものらしいが、それすら知らなかったことを伝えれば奇抜な髪の毛が跳ねるほど驚いていた。

「この程度ならば、ジムトレーナーやそこらの少し詳しいトレーナーなら提供できる情報です」

「じゃあアンタにしかできない情報提供は？」

間髪入れずに聞き返すルリミゾに少したじろぎながらも、アクロマはドヤ顔で語った。

「先ほど才能は目に見えないと仰りましたね。しかし！このアクロママシーンを使えば！なんと！ポケモンの才能を数値としてジャッジすることができるのです！」

「!!!」

いまいちアクロマの能力が具体的にわからなかったルリミゾとしては顎が外れるほどの衝撃だった。そしてアクロマもそのリアク

ションに引っ張られたのか、まるで通販番組かのように自分のアピールを始める。
「そして当然！　私（わたくし）はポケモンの種族それぞれの能力の引き出し方も調べられます！」
「やるじゃない!!!」
　耳を貫通して脳を震わせるような大声にアクロマは一瞬意識を失った。
「それぞれの子の性格はあたしがよーく知ってるわ。あとは実戦の傾向からして、得意な戦い方、つまり役割分担もわかるわ。アンタには才能と、鍛え方を任せる。そしてこの――ホワイトボードに書いてくれた――サイクルを回せばもっと強くなれそうね」
　とにかく実戦ばかりしていたルリミゾからすれば、劇的な変化だ。ポケモン達も驚くに違いない。
「今まで、やはり実戦ばかり試していたんですね……」
「……そうよ」
　呆れたような声のアクロマだが、ルリミゾとてバトルを生業とし始めたのはつい最近である。ポケモンのエサだって基本は好みに応じて与えていたし、実戦以外の鍛え方などもってのほかである。一般的にポケモンそれぞれの独自のトレーニング方法なんて知られていないし、そういった鍛え方をするのはどこかに所属して施設を与えられたトレーナーだけである。ルリミゾもその一人ではあるのだが。
「ジムトレーナーはどうしていたんですか」
「あいつらは施設を使って色々してたみたいだけど、あたしに一回も勝てないし基礎から鍛え直してるもんだと思ってたわ」
「……そうですか」
　これ以上深くは聞かない、いや聞きたくないらしい。
「太りやすい木の実――ザロクやネコブ――他にも色々ありますが、そういうのは与えてませんよね？」
「ええ。流石にそのあたりは知っているわ。でも一般的に知られている通りに食べ物を与えてるのよね。そこも何か変えるべきなの？」
「そうですね。まずはチラチーノのメニューから考えましょうか。

あ、その前にアクロママシーンで才能を見てみましょうか」
いよいよプロ――ポケモンバトルだけて食っていく人間――らしくなってきた生活に、自然と口角が上がった。

４２―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑫

ラテラルスタジアムの中心、大歓声のなか佇むルリミゾ。入念にストレッチした身体は内側からの熱で暖かい。観客の熱狂で地面が、身体が震えるのを感じながら腕を組んでいる。以前なら一つ一つの動作に気を付けていたけれど、素顔を晒した今更気にすることはない。

「来たわね」

裸足でゆっくりとフィールドへ入場するのは本日の対戦相手、サイトウ。緩慢な一歩一歩は、しかし闘争へと向けて濃厚な闘気を放っている。ルリミゾが無意識に腕組みを解いていたことに気付いたのは、サイトウが目の前に立ってから。

（目つきが変わってる）

以前、ロベリアに敗北して以来鍛え直したのだろう。何かを乗り越えたような目に、落ち着いた佇まい。それを示すように今期のサイトウはネズに勝利している。

「不思議と、あなたの試合を観ていると熱くなってしまいます」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない」

「心を平静にして戦う、とは言いません。熱くなっても、あなたから勝ちを貰います」

心が揺れないよう戦おうとしていたあの日とは違う言葉。思わずルリミゾも笑って返した。

「光栄ね。お互い楽しみましょう」

「お手合わせ、よろしくお願いします」

ガラル空手流の挨拶、掌に拳を押し付けて一礼。ルリミゾは特に礼の仕方なんて決めていなかったので、そのまま踵を返して所定位置へと歩いた。尊敬と礼儀は戦いの中で示せばいいと思っているからだ。

「一番手、よろしく頼むわね」

すぅ、と息を深く吸い込んで、ゆっくりと吐く。審判の合図を待ってから、手に持ったボールを投げた。

「試合開始ィ！」

スタジアム柄か、やけに声を張って気合の入った開始の合図だった。

「バイウールー」

下手（したて）で軽くボールを投げれば、飛び出すのは白いもふもふ。物理攻撃しか攻撃手段をもたないサイトウのパーティに対して、タイプ相性が悪いとはいえ「もふもふ」であるバイウールーは効果的だとルリミゾは踏んでいる。

「タイレーツ、行きましょう」

拳を突き出して、演舞のように滑らかに投擲されたボールからはタイレーツ。ある固有技を持ち、積みを許すと面倒な相手であり、バイウールーではやや苦しい対面である。よって隙を与えるような「コットンガード」は指示しにくい。

「伸し掛かり（のしかかり）」

全身で「伸し掛かり」、麻痺を狙う。これまでの試合では毎度積極的に「コットンガード」を積んできたが、ここでの攻勢は新しい変化だ。

――しかしサイトウの表情に一切の変化はない。

「背水の陣」

タイレーツがV字に広がり、ゆるり、と舞う。それに合わせてサイトウも拳と足を動かし、一分の隙も無い舞いを舞う。タイレーツから力強いオーラが放たれ、全能力が一段階上昇する。「背水の陣」とは交代や逃走をしないという決意によって、自らを奮い立たせる技。リスクがある一方、決まりさえすれば非常に強力な一手である。

「メェエ！」

バイウールーがその身体で押しつぶそうと迫り来る頃には、舞いが完了していた。ぐぐぐ、ともふもふが伸し掛かる中、タイレーツは必死に押し返して抵抗する。攻撃の為に近付くということは、逆に相手の射程に入るということ。ぶわっ、と何かを全身で感じ取ったルリミゾは思わず叫ぶ。肌が粟立ち、心臓がギュッと締め付けられる。

「ッ！『コットンガード』！」

一瞬サイトウから漏れ出た殺気。咄嗟に攻撃技が来ることを直感して守りの指示を出す。バイウールーの体勢、素早さからして回避は

間に合わないと判断して「コットンガード」。完全に遂行することは叶わずとも、ある程度衝撃を和らげることはできると判断している。サイトウの一声で五匹からなるタイレーツは一斉に拳を溜める。その短い手足からは考えられないほど力強く、時間をかけて。

（攻撃技じゃない……！）

予想に反して来ない攻撃に「コットンガード」が完遂される。殺気はブラフで、タイレーツが繰り出したのはおそらく積み技。ルリミゾは面食らって、思わず「はぁ!?」と叫んだ。それを見てサイトウは笑った。試合中は無表情を貫くあのサイトウが、笑った。ルリミゾがそれに注意を向ける余裕は無かったが、カメラに写ったその表情は、大いに観客を騒がせた。ネズ戦も数えてこれで二回目。闘気や雰囲気ではあまり察知できない大衆も、サイトウの確実な変化に気が付き始めていた。

（あの構えは『ビルドアップ』や『剣の舞』じゃないし、『背水の陣』はもう使ってる。『鉄壁』にしては攻撃的な構えが過ぎる……）

思考を可能な限り高速で巡らせる。思い当たる積み技が候補からどんどん外れていく。「コットンガード」を許しても、突破できるような積み技。

「『気合い溜め』……！」

それは、会心の一撃を狙う技。集中力を極限まで高め、技の一撃一撃の質を高めようとする試み。実戦で使うにはあまりにも不確実で、並外れた集中を要することから誰も使っていない技。様々な技の候補を探るルリミゾだからこそ正体を見破れた。

――そして、今度こそ攻撃だと真に確信する殺気。

「『堪えろッ』!!」

指示が間に合ったのは幸運だった。叫ぶより先、溜めた拳がまさに解放されんとしているのを殺気で直感したから。回避は元より不可能。

「インファイト」

拳の荒波が来る。凪のような静かなサイトウの声に反して、6×2の拳の暴力がバイウールーを打つ。増え溢れるもふもふを貫通して、

ひとつひとつの拳が音を立てて打ち込まれていく。
——会心の一撃（急所に当たった）！。
あらゆる能力変化を無に帰すほどの衝撃に、バイウールーはぐらり、と揺らぐ。
「メ……」
——されど倒れず。
「ワイルドボルト！」
飛びかけた意識を手繰り寄せて、ボロボロの身体で放つ渾身の雷。
短い手足で殴っていたタイレーツに直撃して距離が開く。サイトウは即座にバイウールーを刈り取る指示。立て直す暇を与えず、このまま押し切るためである。「堪える」でなんとか耐えたとはいえ、バイウールーは一撃を受ける体力も残っていない。
「岩砕き」
接近すれば「ワイルドボルト」による時間稼ぎがある。だから、岩を砕いた破片で攻撃するための「岩砕き」。
——しかし指示に反してタイレーツは動かない。
「この子はあんまり器用じゃない。でも、何度もやれば麻痺だって狙えるのよ」
「麻痺……！」
最初の「伸し掛かり」で既に麻痺しかけていたのだ。至近距離で「ワイルドボルト」を浴びたことによって今、麻痺の症状が現れた。バイウールーがよろよろと走り出す。タイレーツは何度も立ち上がり動こうと試みるが、がくがくと転んでしまっている。
「起死回生」
まさにこの状況を現わす技だな、なんて思いながらルリミゾはその技の名前を口にした。自分の体力が少ないほど、大きな威力を出せる技。
「行けえええええッ！」
バゴ！と生物同士が、ましてやバイウールーがぶつかったとは思えない音が鳴って同時に二匹が崩れ落ちる。
「両者戦闘不能ッ！」

クセのある審判が判断を下す。同時に歓声が起こり、スタジアム全体が揺れる。

「……ふぅ」

タイレーツに一方的に積みを許してしまったにもかかわらず、相打ちまで持っていけたことは大きい。「背水の陣」から「気合溜め」まで積んだタイレーツが生き残れば後続にどれだけ負担が掛ったか想像したくもない。

「鍛え直した甲斐があったわね、お疲れ」

「楽しみながら、正確な判断を下すのは難しいですね。次は上手くやりましょう」

お互いポケモンを労わりながらボールに戻していく。「伸し掛かり」や「ワイルドボルト」を連打することで相手を麻痺させるのは、アクロマから提案された新しいスタイルだ。「電磁波」をバイウールーという種族は覚えるが、あまりルリミゾのバイウールーは得意ではなかった。「コットンガード」以外の戦術がなければ、今回のように積み技や挑発で簡単に潰されてしまう。アクロマを育成面のコーチとしたのは正解だったといえる。

「すぅ……」

目を閉じて、再度集中を図るサイトウ。流れに乗ることと、調子に乗ることは違う。凪いだ状態で戦えば、不調好調問わず実力を発揮できる。その一方、流れに乗って戦えば、好調そのまま押し切ることもできる。使い分けが大切だな、と自戒して心を静めた。

「ルカリオ、行こう」

全力投球。繰り出されたのはルリミゾのパーティにとっての天敵。唯一まともに組み合えるのは――

「思う存分空を駆けなさい」

ウォーグル。しかしルリミゾはこの場面でルカリオが出てくることを想定していたわけではなく、ウォーグルで数的有利を獲りに行くことだけを考えていた。

「――バトル開始ッ！」

声が響き渡った。

４３―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑬

「空を飛ぶポケモンの弱さは――攻撃の単調さです」
　解説のカキタが話し始める。
「棒立ちの殴り合いは当然不可能ですし、空から勢いを付けて攻撃することしかできません。ですから、特殊技で戦うファイアローや絡め手を使うエアームドが評価されるんです。以前キバナ選手にウォーグルが撃墜されていたように、上手いトレーナーとポケモン相手には対処される傾向にあります」
　ウォーグルがいま身を置いているのは野生における狩りのような奇襲でもなく、一対一の平地でのバトルだ。ルカリオとサイトウは一瞬たりとも空を飛ぶウォーグルから目を離さず、迎撃のチャンスを窺っている。
「今、その変化を試されているわけですね」
「はい。サイトウ選手は、格闘タイプの使い手ゆえに飛行タイプのポケモンの対策に一番詳しいと言っても過言ではないでしょう。それを上回れるかどうか、ということです。単に飛行タイプを当てれば良いという単純な話でプロの世界は成り立っていません」
　ジムリーダーが特定のタイプのポケモンしか使わないのは、イメージ戦略や規定というわけではない。そうした方が強いからだ。

「行けッ！」
　ルリミゾが叫ぶ。何の変化もない指示。その声が耳に届いたウォーグルは愚直に急降下してルカリオへと襲い掛かる。風を切り、加速に加速を重ねて更に速く。
　――しかし、空にいるウォーグルに届いた指示はサイトウとルカリオにも筒抜けである。スゥ、と呼吸を整えて一声。それだけで指示は事足りる。
「気合パンチ」
　それは。

まず成立しない技。多大な集中を要し、必ず後手に回るほどの時間、集中を重ねなければ撃てない技。その威力は「ギガインパクト」「破壊光線」と同等。反動が無い代わりに、前提が重すぎる技。

「『気合パンチ』だ！やるのか!?あのウォーグル相手に!?間に合うのか!?」

経験からその技が「気合パンチ」であると見抜いたミタラシが盛り上げる。要点を短く、大きく声を張り上げて。全ての人に伝わるように。

「彼女はポケモンと共にワイルドエリアで鍛錬をしていると聞きます。もしかしたら、もしかするかもしれませんよこれは……！」

解説としての下調べも当然カキタの仕事である。サイトウはワイルドエリアに籠ってポケモンと組み手をすることすらあるという。そんな彼女なら、ウォーグルが届くより先に「気合パンチ」の集中を完了させるよう仕上げていることも考えられる。

――コォォォォ、という音が聞こえた。風のような、空気がどこかを動く音。心当たりはただ一つ。ルカリオの口から呼気が漏れている音。高速で動くウォーグルを瞬き（まばた）ひとつすらせず見つめている。歓声も、観客も、全てが意識から押し出されてただ迎撃だけに意識を研ぎ澄ませる。

「今だッ！」

ウォーグルが図ってか、図らずか、太陽と重なるその瞬間。ルリミゾが声を張り上げる。ルカリオはただ目で追っていたが故に、瞬き（まばた）が生まれる。――けれども情報は途絶えない。コンマ以下の秒間、瞬き（まばた）が生まれようとも耳はまだ聞こえる。風切り音から大まかな情報を繋いで、目で確認して感覚を修正する。わずかな違和感を抱きながら。

そうして両者が衝突する瞬間、観客が同時に息を飲んだ。

「なッ!?」

ルカリオの渾身の一撃は――空を切った。
確かにそこにウォーグルがいた。目視したウォーグルの姿があった。真っ白になったルカリオの頭が動き始めるその前に、ウォーグルが迫る。パニックになった頭でも、拳を突き出した状態から再びガードへと、考えるよりも先に染み付いた身体が動く。歯を食いしばり、衝撃に備えた。
「ガードじゃない、離れろッ!!」
――が、サイトウの声虚しく次の瞬間、ルカリオは気持ち悪いくらいの浮遊感と風切り音に包まれた。

「ウォーグルがルカリオを掴んだッ!どんどん空へ上がっていくーーーーッ!」
ミタラシの声が響き渡る。観客席よりも高く、高く。そうしてスタジアムを飛び越えた瞬間――ルールで規定された飛行範囲のギリギリに――落下を始める。掴まれたルカリオは抵抗を試みるが、狩られた獲物に自由はない。生物として、種としてのウォーグルの勝ちの体勢。獲物を掴み、空へと連れ去るかたち。
「『フリーフォール』だ!ガラルで見られるなんて!」
相手を拘束して空へ連れ去った後、急降下して地面へ叩きつける技だ。そう、連れ去るという行為にガードは意味をなさない。

「慌てるな!『鉄壁』から受け身だッ!受け身を取れッ!」
サイトウが必死に叫ぶ。「フリーフォール」に捕まったが最後、ルカリオでは暴れて逃れることができない。捕まっている体勢から暴れられる技をルカリオは持っていない。だから、今できることは『鉄壁』で防御を上げて備えること。そして投げられた後の受け身で少しでもダメージを軽減すること。
「あはは!引き摺り回せ!」
嗜虐心の刺激されたルリミゾが歯を出して笑う。受け身なんて取らせない。斜めに滑空したウォーグルが加速し――ルカリオを手放さない。

――ズザザザ！と地面を抉りながら、跡を作りながら引き摺る。衝撃でルカリオの口から息が押し出される。

一直線に地面が抉れ、やっとウォーグルの動きが止まる。あまりの衝撃に観客は静まり返り、悲痛な面持ちでフィールドを見る。ルカリオを開放し、ウォーグルはルリミゾの下へと戻っていく。勝利を確信したからではない。地面に着いたルカリオから反撃の気配を察したからだ。

「ルォ……！」

全身ボロボロになりながらも、ルカリオは立ち上がる。鋭い目でウォーグルを見据えながら。

「よく耐えた……！」

サイトウが感傷的に叫ぶ。呻るルカリオと共に、もう一度。

「しぶといわね」

「クァァ」

ルリミゾとしてはフェイントを織り交ぜた今の動きで仕留めたかった。何度も通用する技ではないからだ。わしゃわしゃとウォーグルを撫でながら、次の作戦を伝える。

「いい？次はね――」

「ルカリオが『気合パンチ』を空振りしました。衝突の瞬間、ウォーグルの姿がブレたように見えましたが、何があったんでしょうか？カキタさん」

「『影分身』です。一瞬先に『影分身』を先行させたんです！」

カキタが解説する。「影分身」の条件は高速で動くこと。そして、ウォーグルは開幕からその条件を満たしていた。使ったのは、太陽と重なったあの瞬間。既に急降下している最中にもかかわらず、ルリミゾが「今だッ！」と叫んだのは「影分身」の指示だったのだ。ルカリオは瞬き（まばた）の一瞬で影分身に騙され、そこからサイトウの指示を挟む間もなくウォーグルと衝突した。

「『影分身』といえば、相手の攻撃を躱すために偽物を大量に作るイメージですが、こんな使い方もあるんですね」

「技の使い方がほんとうに多彩で面白いことをしてくれますね、彼女は」

まさに「型破り」なルリミゾには普通の対策は通用しない。絡め手ができないほど攻めるか、より柔軟な発想で上回るかだ。

「しかし冷静に『鉄壁』を指示したサイトウ選手も素晴らしい判断です。上手くやられたとしても、いかに被害を抑えるかが大事ですからね」

「速い判断でしたね。あの空中で拘束された状態ながら『鉄壁』を完遂して耐えたルカリオも非常に良いプレーでした」

「先手を取ろう！『ストーンエッジ』！」

ルカリオが地面を砕き、岩を飛ばしてウォーグルへ。

「暴風」

対するウォーグルは大きく翼をはためかせ、「暴風」を放つ。命中率こそ低いもの、その風は「ストーンエッジ」を押し返し、むしろルカリオへと――

「「速いッ!!」」

カキタとミタラシが声を上げたのは同時。ストーンエッジが返った先には誰もいない。

「インファイト」

既にルカリオは射程の内側。鍛え上げられた打撃が炸裂する。ドドドドッ！とラッシュでウォーグルを吹き飛ばし、即座に「波動弾」までチャージして発射、追撃を狙う。

「上に回避！そこから――」

ルリミゾとて黙って見ているわけではない。回避の指示、そして反撃の糸口を掴もうと――

「スカイアッパー！」

「ッ！」

間髪入れずの追撃。息つく暇も与えない攻撃。大きく飛び上がったルカリオは右拳を上に突き出し、上へと駆け上がる流星のよう。

ルリミゾはその攻撃に、笑った。

「――やっと空に来てくれたわね」
空は。
ウォーグルが土俵。そこに翼を持たないポケモンの居場所はない。
「インファイト」
既にウォーグルは力を込めて足を振りかぶっている。ラッシュというよりは、渾身の一撃。空への愚かな侵入者を叩き落とす。高速で地面へと突き刺さるルカリオ。
効果は抜群だ。
「ルカリオ戦闘不能！」
――その審判の声と同時、ウォーグルの居た場所が青く弾けた。
「『波動弾』は必ず命中する……！ありがとう、ルカリオ……！」
ラッシュの後に追撃で放っていた波動弾。薄れゆく意識の中でルカリオがコントロールしていたのだ。悔しそうに顔を歪めていたサイトウだったが、報いた一矢に口角を上げた。

「今、ウォーグルの体勢の立て直しが異常に早くなかったですか？」
「ええと、確かにそうですね。回避のために上へ飛ぼうとしていたハズですが、即座に反撃に移りましたね」
ミタラシが疑問を呈する。あの瞬間、攻めていたのはルカリオだった。逃げに回ったウォーグルに「スカイアッパー」が突き刺さると誰もが思った瞬間だった。
「おそらく、相手が『スカイアッパー』で追撃する瞬間のために反撃手段を用意していたように思われます。回避というよりは、『スカイアッパー』を誘っていたのかもしれません。過去の試合であのルカリオは何度か『スカイアッパー』を使って撃墜していますから」
「相当研究しているということですね……」
「相手へのリスペクトを欠かさない、素晴らしい一手でしたね」
「大丈夫？まだ戦えるわよね」
「クァ」
やれるとも、なんて表情のウォーグルだが、傷は多い。どう繋ぐの

かのプランを考えているところで――
「クァア！」
鳴き声に引き留められる。目には強い意志。もう一匹、持っていけると言わんばかりの気迫。
「……そうね、まだやれるわね。やってやろうじゃない。信じてるわよ」
返事はなかった。力強く羽ばたくことが何よりの返答だったから。

４４―ｖｓサイトウ　メジャージムリーグ⑭

サイトウが空手の舞から繰り出したボールが光れば、現れたポケモンの重みで振動がルリミゾまで伝わる。ずっしり、という擬音が似合いそうな姿と、その両手。

「ローブシン、よろしく」

鍛え上げられて、弾けそうなほどの筋肉が掴んでいるのはコンクリートの柱。スゥ、と息を吸い込んだサイトウの目からハイライトが消える。纏う雰囲気が戦いへと変わる。

「ここでサイトウ選手、ローブシンの投入です！しかしカキタさん、サイトウ選手のローブシンといえば、アレですね」

「ええ。ローブシンはコンクリートの柱を杖代わりに使っていますね。理由は簡単で、鍛え上げすぎたその上半身を支えきれないからです。ですがガラル空手の下にいるローブシンが、どんな方法で戦うのか想像してみてください。体力を温存するために今は柱を杖代わりにしていますが、ルリミゾ選手ならすぐアレを引き出してくれるでしょう」

ポケモンから人間へ伝わった技術にコンクリートがある。ローブシンが杖代わりにしているあの柱から、現代の建築が始まったと言われている。生存競争がために生み出されたコンクリートは、単に丈夫であるだけではない。ローブシンの歪な身体を支える役目も果たしている。ドッコラーからローブシンに至るまで、下半身に変化はない。ただただ上半身のみが鍛え上げられ、進化していくのだ。

「しかし、今ローブシンですか……」

ローブシンは足の遅いポケモンだ。コンクリートを捨てたとしても、空を飛んでいるウォーグルに対して「ストーンエッジ」は命中不安を抱えている。ウォーグルの接近にカウンターを狙ったとしても、わざわざ大きく消耗しているウォーグル相手に後手に回るのは勿体ない。

「サイトウ選手の残りの手持ちの中から、ローブシン。この選択にはどういう意図があるのでしょうか？」
「この選択は……ですね、うーん」
　カキタの言葉が詰まる。
「考えられるのは二つです。一つはダイマックスですね。しかしこれは、カイリキーに信頼を重く置いているサイトウ選手では考えにくい選択です。そしてもう一つは、私たちにはわかりませんが――ウォーグルに対して撃ち落とす策が用意できている可能性です」
　そう言い終わるのを待っていたかのように、二人の眼前を高速でコンクリートが飛んだ。

「――ッ！」
　ルリミゾは声が出せなかった。かろうじて攻撃する瞬間を察知できたものの、ローブシンの太い腕が一瞬ブレた後は何が起きたかわからなかった。ウォーグルは自分で察知して回避に成功していたものの、あと数センチ動くのが遅れていれば直撃していただろう。コンクリートは高所で観客席前の障壁にぶつかり、その破片が降りそそぐ。
「距離を詰めるな！『羽休め』！」
　継戦のために指示したのは「羽休め」。地面に下りて文字通り羽を休める技だが、隙が大きい。相手がローブシンだからこそ可能な状況である。しかし――
「させるなッ！」
　当然、サイトウは妨害に出る。着地を狙い、ローブシンが大きく腕を振りかぶり、残ったコンクリの一柱をグッグ、と片手で持ち上げる。ウォーグルはそれを見て咄嗟にホバリング、上下左右に回避ができるように再び舞い上がる。ルリミゾもそれには口を挟まない。もう一柱をさっさと消費させるための誘いだったから。
「オオオッ！」
　想定通り、ローブシンが柱を振り――しかし想定を裏切るようにそのまま下ろし、
「なッ!?」

空へ飛んだ。
ドンッ！という衝撃があり、それから鍛え上げられた腕を中心にローブシンが宙を駆ける。棒高跳びのようなモーションで高く、高く飛んだ。
「冷凍パンチ」
胴体をギュッと引いて冷気が右拳に集まっていく。筋肉が隆起し、その身体を空へと運んで有り余る力が籠められる。
「ツ！鋼の翼！」
想定外の一瞬、ルリミゾのなんとか開いた口から咄嗟に指示が飛んだ。その指示が正しいかどうか考える時間すらなかった。氷の拳が迫る。パキパキと音を立て、不釣り合いな筋肉と脈打ちながら。
ウォーグルは――
「ローブシンが飛んだぁぁぁぁっ!?なんだこれは!?右手に『冷凍パンチ』を構えながら近付いていくぅぅぅぅっ!!」
興奮のミタラシが叫ぶ。ローブシンが宙に浮くなど誰が想像出来ようか。サイトウの武道家らしい戦い方を想像していた観客も叫び倒している。
「こっれ、は、凄まじいですね」
過去一度も、サイトウは空を飛ぶポケモンに対してこれほど独創的な対処をしていない。いずれも「ストーンエッジ」を命中させたり、「スカイアッパー」や相手の攻撃へのカウンターがメインだったはずだ。カキタは自身の記憶と手元のノートを必死に振り返りながらそう考える。だから、後出しでローブシンを当てたのが想定外だったのだ。
「たったひとつ、このクリエイティブなプレーが”あの”サイトウ選手とそのポケモンから飛び出した。それだけで私は感動しています」
そうさせるほどの何かが、あったのだろう。このルリミゾとの戦いには。明らかに、ウォーグルへの対策として用意された動きだ。
――風が吹いた。

ちょうどルリミゾ後ろ側から、強く背中を押す風が。ウォーグルが最後に放った「追い風」だ。

「……バカ」

空から墜ちるのは、氷漬けになったウォーグル。地面と衝突するよりも先に、ルリミゾがボールに戻す。「鋼の翼」での撃ち合いが不可能だと判断したウォーグルは、ルリミゾの指示を無視。後続のために「追い風」を残して「冷凍パンチ」の直撃を受けたのだ。「自分の活躍よりもチームへの勝利を」とでも言いそうなウォーグルらしい行動だな、とルリミゾは思った。ルリミゾも、ウォーグルも、あのローブシンの奇行に反応できなかった。どちらが悪いというわけでもなく、ただただサイトウが上手だった。

「楽しそうね」

ズゥン、と着地したローブシンとその奥にいるサイトウを見やれば、相変わらず目のハイライトは無かったが、その口は弧を描いている。高揚、興奮は自分を高めてくれる原動力だ。冷静さの欠如とは違う話である。高揚・興奮しながらでも冷静に判断は下せる。心についてルリミゾは詳しいわけではないが、高揚を抑えたところで冷静さとは直結しないことをなんとなく理解していた。

「楽しかった?ウォーグル」

手元のボールに語り掛ける。当然、返事はないけれど。ルリミゾは同じ気分の高まりを持っていることを願った。ルリミゾとウォーグルは打ち破られた。しかし、楽しかったのだ。真面目ちゃんなサイトウの見せた独創的なプレーが。心なしか、「冷凍パンチ」を避けられないことを悟ったウォーグルは笑っていたように見えた。

「イエッサン!」

繰り出した後続は、イエッサン。両手のフリーになったローブシンのあの素早さからして、相手をさせるのは少し不安だった。

しかし。

今は、追い風が吹いている。

「ウォーグル戦闘不能!ルリミゾ選手が繰り出したのはイエッサンで

す！……しかし、改めてとんでもないプレーでしたね」
「ええ。もう目玉が飛び出るかと思いました。ただでは落ちないウォーグルも流石ですね」
あの状況で「追い風」を残せるのは並大抵の技術ではない。眼前に突然ローブシンが現れて、殴られるまでに何か行動を起こせる者はそういないだろう。
「あんな奇襲、誰も反応できませんよ。ルリミゾ選手の咄嗟の反撃指示が悪手だった、とは口が裂けても言えませんね。大事なのはウォーグルがそれを〝あえて無視した〟、ということです。瞬間瞬間の判断では、ポケモン自身があとどれだけ戦えるのか一番よく知っています。『鋼の翼』で抵抗しても、もう間に合わないと確信していたのでしょう」
「『褒められたい』とか『活躍したい！』という気持ちを糧に戦っているポケモンも多いですからね。そんな中でも己の分を弁えて冷静にチームに貢献するのはなんというか、武人気質な性格ですね」
それは言えてますね、とカキタが笑った。

45―vsサイトウ　メジャージムリーグ⑮

「サイトウ選手は恐らく今、悩んでいます」
カキタが言う。真剣な目つきでフィールドを見つめては、ルリミゾとサイトウ両者のポケモンのデータを眺めている。
「えぇっ、今ですか!?3―3でイエッサンが出てきただけじゃないんですか?」
今までプロの試合を観続けてきたミタラシとしても、カキタの言う意味はぼんやり理解している。しかし視聴者の為に詳しい説明を続けられるよう質問をした。フィールドはカキタが言った通り、サイトウが悩む素振りを見せている。
「ルリミゾ選手の残りはイエッサン、チラチーノ、カビゴンですね。カビゴンを出さないのは相性からでしょう。おそらく最後まで出さないと思われます。つまりですね……」
「ダイマックスするポケモンがイエッサンしかいない、と!」
カキタの言いたいことを先取りしてミタラシが言う。カキタがじと、と丸眼鏡越しに見つめる。ミタラシは笑って続きを促す。
「その通りです。チラチーノでダイマックスしてしまえば、回避中心でヒットアンドアウェイの戦法が取れませんからね。ルリミゾ選手は今まで一度もチラチーノでダイマックスしていませんし」
「では、サイトウ選手もダイマックスすればいいのでは?」
ミタラシの疑問は当然だ。実際、バトルをあまり観ない視聴者は同じことを考えている。サイトウのファンや、リーグを通して見ているコアな視聴者は理由に思い至っているが。
「――サイトウ選手はこれまでの試合、カイリキーでのダイマックスがほとんどです。それだけ彼女を信頼しているのでしょう。ですから、サイトウ選手がどう選択するか見どころなんです」
また変化を加えてくるのか、それとも今まで通りカイリキーまでダイマックスを温存するのか。
――サイトウがダイマックスをカイリキーばかりに使う理由は、信

頼だけではない。ダイマックス状態としての戦闘経験、技の練度、そしてパーティ内での役割、全てから最善と判断してカイリキーをダイマックスしている。しかし、この状況でローブシンがダイマックスしなければイエッサンに突破されるのは目に見えている。

（全部言い切るには時間が足りなかったな）

カキタがそう思いフィールドを見れば、サイトウが巨大化したボールを構えていた。既にミタラシがマイクに向かって叫んでいる。話す内容を纏めないとな、と思いながらカキタは深呼吸をした。

「尊敬を込めて」

サイトウが小さく呟いた。

「全て、壊しましょう――」

ローブシンをボールに戻し、流れるような動作で武の舞を。そうして祈るように巨大化したボールを祈るように抱えて、全力で投擲した。

「ダイマックス！」

ほぼ同時、ルリミゾも動いていた。

「あたしは、後には退けない――」

静かに、覚悟を確かめるようにルリミゾが言う。イエッサンのダイマックスはサイトウに読み切られていることだろう。イエッサンをボールに戻し、笑いながら数度コツコツと叩いた。

「なんてね」

――そして、ボールを入れ替え。

「ウォーグルはね、勝利を望んでいたの」

悪戯が成功した子供のように。

「正面から殴り合うことが礼儀じゃないのよ」

繰り出したのは、居眠りポケモン――カビゴン。

実況席は静まり返っていた。

「ウォーグルが追い風を遺したんだぞ……？どうしてそんなプレーが思いつくんだ……!?」

情に囚われず。
勝利だけを。
歪なカタチの笑顔がハッキリと見えた。
「笑ってる……」
託された追い風を使うことなく。それすらも勝負に出ると見せかけるための餌にしてサイトウを誘っていたのだ。勝利以外の何物でも目的は達成されないと言わんばかりのプレーだった。
「……追い風、加えてタイプ相性の有利なイエッサンを後出ししたこと。ここまで来れば誰もがダイマックスを切ると思い込みます。私たちもそうですね」
「カビゴン、を――肉壁に、するつもりですか……？」
意図に気付いたミタラシが、言葉に詰まった。

「どっかの誰かに影響されたらしくてね。どんなカタチでもいいから、一番になりたいんだって。うちのコたちは」
脳裏に過(よぎ)るのは、あのコータス。
「それに応えるのが、トレーナーの役目でしょ」
手を貸してもらっているのはどちらだったか。ルリミゾも、ポケモンたちも、覚えていない。
ただ、一位を狙っているだけだ。
・・・

「――いい加減……」
サイトウの額から汗が流れる。焦りからか、やけに心拍の増した身体を動かしながら。
「倒れろッ!!」
叫び声と共に、渾身の「ダイナックル」が降り注ぐ。もうダイマックスしたローブシンに時間は残されていない。
これで三度目。

「ぐおおおんっ！」
カビゴンはあちこちに傷を作り、殴打の痕が痛々しく残っている。
――しかし、倒れない。
そして返しに一撃、全身を使ってローブシンにぶつかり――
大きく地面を揺らしながら仰向けに倒れた。
「カビゴン戦闘不能……ッ！」
審判が告げる。同時にルリミゾの背から吹いていた風が止む。
「……ありがとう。『恩返し』なんて粋な技使ってくれるじゃない」
最後に撃ったのはノーマルタイプの技「恩返し」。トレーナーとの絆が強いほど、威力を増す技。巨体をボールに戻したあと、手の震えに気が付いた。
――緊張。
全身が固まるような錯覚を覚える。
「あはは、今更緊張するなんてね」
柄にもなく。繋がれたバトンをこんなカタチで運用したからには、
「負けてもスッキリした」なんて口が裂けても言えない。ポケモンたちの全てをルリミゾは背負っている。
「――大丈夫。勝つわよ、イエッサン」
すっかりと焦りの表情に支配されたサイトウを見据えながら、ボールを投げる。
「ッサン！」
珍しく吠えながら。愛らしい外見には異質な闘気が溢れ出している。仲間のバトンを勝利というゴールまで運ぶために。ルリミゾの感情がビリビリと伝わっていることだろう。すっかりルーティーンと化してしまった口上を述べる。
「あたしは、後には退けない。この勝負も、これからも」
不退転の意志を。
「ダイマックス」
両手でボールを抱え、軽く下手（したて）から。
――巨大化したのは感情ポケモン、イエッサン。

サイトウは焦っていた。
（完全にダイマックスをスカされた……！）
加えて、今まで死んでいたカビゴンというカードが役目を得たこと。カウントこそ3―2でサイトウが有利なものの、実情はダイマックスを残したイエッサンとの対面だ。
「守るッ！」
ローブシンに出したのはガード技「守る」の指示。ダイマックスしたイエッサンからは「ダイサイコ」が迫る。空間を歪めながら、ローブシンを破壊せんと迫る。
「オオオオオッ！」
張った障壁ごと吹き飛んでいくローブシン。が、その結果はわかりきっていたこと。なんとかその時間で精神を立て直そうと目を閉じる。「守る」などの技でもダイマックス技は防ぎきれず、ダメージを低減する効果しかない。辺りが不思議な感じに包まれ、「サイコフィールド」が展開されていく。
「まだまだ『ダイサイコ』！」
ルリミゾの叫び声が通る。
「立て直してもう一度『守る』！」
サイトウもなりふり構っていられない。二連続の「守る」は失敗率が高いが、ダイマックスを凌ぐには他に方法がない。
――しかし、ローブシンは腕をクロスするのみで障壁が展開できない。
「失敗……ッ！」
目に見えるほど空間が大きく歪み、ローブシンの周囲をベゴ！と凹ませながら念波が到達した。
「ローブシン戦闘不能だァーーーーッ！完全にルリミゾ選手のペースです！イエッサンが止まらないッ！」
「あの大がかりな誘導の成果ですね。ダイマックスの残っていないサイトウ選手はとにかく守りに徹するしかありません」
これはルリミゾがダイマックスをスカした時点で決まっている展

開だ。問題はメンタルの勝負であるトレーナーが立ち直れるかどうか。実況席のモニタから見るサイトウの目は忙しなく動き、呼吸も浅い。

「ええと、サイトウ選手に勝ち目はあるのでしょうか？」

「あのプレーから、ここまでは仕方ないと割り切るしかありません。あとは、どれだけ逆転の芽を作り、掴み取れるかです。次のポケモン――ルチャブルですね。ルチャブルが落とされるまではもう仕方がないです。ですから、カイリキーで二匹を倒すためにメンタルを回復することが必要です」

同時にカメラがサイトウへと向かう。

――ルチャブルを繰り出したものの表情は暗く、感情を隠さなくなったことが裏目に出ている。プラスにもマイナスにも振れない無心であれば、今の状況に冷静に対応出来ていただろうけれど、クリエイティブなプレーは生まれていなかっただろう。

難しいものだな、なんて思いながらミタラシは実況を続ける。

「サイトウ選手、立て直せるでしょうか！ファンの声援が響いています！」

「さあ、あと二匹よ」

「――イエエエエッ！」

イエッサンはより昂り、「ダイサイコ」が放たれる。サイコフィールドの広がっている今、「ダイサイコ」の威力は大きく上昇している。

「……『守る』！」

対するルチャブルは同様に「守る」。耐えきって少しでも傷を残せれば御の字と考えているのだろう。

「舐めんじゃないわよ！潰せッ！」

トレーナーに動揺は許されない。否、正しくは「折れることが許されない」。どれほど動揺しようとも、常に最善手でポケモンと共に戦わなければならない。

（そんなカオでポケモンが全力を出せるわけないでしょ）

以前の自分がチラついて苛立つ。ルリミゾはいつかの入れ替え戦

を思い出しながら、同じ失敗をしているトレーナーを見て舌打ちをした。

——ルチャブルの「守る」虚しく、「ダイサイコ」は威力を増して全てを薙ぎ払っていく。上下左右、天と地が逆さになるほどに身体を揺さぶられる。捻じ切れるような、内側から破裂するような、外側から押し潰されるような、切り刻まれるような。

そうしてルチャブルは気を失った。

「ルチャブル、戦闘不能ッ！」

「——ッ！」

目を見開いて硬直するサイトウ。

（見てられないわね）

始めからずっと集中して、無心で臨んでいたなら。

きっとこの動揺は生まれていなかったのだろう。感情の振れ幅は、プラスだけではない。

「カイリキー、お願いしますッ！」

ボールから出すと同時、目を閉じて再度の集中を試みるサイトウ。

が、ルリミゾはカイリキーの動きに目を見開いた。

「ソイツ！」

ぱしぃぃぃん！と音が響いた。カイリキーがサイトウの背中を叩いた音だ。

「ッたぁ!?」

思わずサイトウは目を開いて前に倒れそうになる。瞬きしながら状況を理解できずにいるサイトウにカイリキーが力強く鼻息ひとつ。

「フンッ！」

カイリキーが四本の腕であちこちを指さす。

——観客を。

「サイトウさーーーーん！頑張れーーーーッ！」

「逆転だーーーっ！」

「「「オーオーオーオオオオーオーオー」」」

——サイトウの腰に留めた４つのボール——タイレーツ、ルカリオ、ローブシン、ルチャブル——を。

――カイリキー自身を。
鍛え上げられた肉体にはあちこちに傷が。そのどの傷も、サイトウはいつの傷か思い出せる。共に進んできた相棒だ。
――そして、サイトウを。
「……ありがとう」
伝えたいことは、伝わった。心の震えは収まった。
・・・
「厄介ね」
イエッサンは時間切れでダイマックスが解けている。しかしサイコフィールドは持続しており、「マッハパンチ」が飛んでくることはない。何が厄介なのかといえば、サイトウが立ち直ったこと。エースのポケモンと覚悟を決めたトレーナー相手は手強い以外の形容ができない。
「調子付かれる前にさっさと締めるわよ」
「イエッサー！」
放つのは「サイコキネシス」。カイリキーに狙いを定めて――
カイリキーが目の前まで現れたのは同時だった。
「速いッ……！」
「サイトウ選手がどうしてカイリキーに絶対的な信頼を置いているのか。答えは簡単です――」
「強いからです」
「メンバーでいえば、ルチャブルも昔から連れています。他にもパーティからは外れましたが、サイトウ選手と長い付き合いのポケモン達はいます。カイリキーは、付き合いが長いだけじゃないんです。一番鍛え、一番期待に応えてくれるんでしょうね」
「確かにその通り、凄まじい連撃です！ラッシュ、ラッシュ、ラッシュだぁーーーっ！イエッサンも『サイコキネシス』で応戦しますが、押し返しきれず距離を詰められています！」
まさに「ノーガード」で撃ち合うイエッサンとカイリキーを見ながら、カキタが解説する。

「『爆裂パンチ』は普通ほとんどヒットしません。力をありったけ込めますからね。しかしあのカイリキー、『ノーガード』と呼ばれるような個体は例外です。超近接での殴り合いを好み、回避を捨てて殴り合いに持ち込む以外の戦い方をしないんです」

イエッサンの放つ「サイコキネシス」で揺さぶられながらも、カイリキーは膝をつかない。連撃を入れるために距離を詰め続け、グルグルとフィールドを回っている。

「おっと、イエッサンの様子がおかしいぞッ!?」

ミタラシが実況を中断して叫ぶ。突如足がふらふらと回り、目が回り、明らかに焦点が合っていない。

「『爆裂パンチ』はあまりの威力に相手が混乱してしまうんです……！本当にどうなるかわからなくなってきましたよ……！」

「あたしを見ろッ！イエッサンッ！」

ありったけの声で叫ぶルリミゾ。焦点の合わないイエッサンは、酔っぱらったかのようにフラフラしながらあちこちに「サイコキネシス」を放っている。なんとかカイリキー近くを掠めたおかげで再び距離が開いたものの、混乱を確認したカイリキーは即座に距離を詰めに走るだろう。

「イエエイ？」

指示が通じていない。

「今だッ！詰めろ！」

サイトウが叫び、カイリキーが走る。

「……！」

追い詰められたルリミゾは。

髪をかき上げ、ふぅ、と一息ついて。

記憶を探る。それも、はるか遠い故郷の記憶を。

「あたしは帰るんだ……ッ！」

――感情の昂り。

感情ポケモンであるイエッサンは両角で人の感情を察知する。

そして。

「ッサン！」
　強い感情を受けたイエッサンは正気に戻っていた。ハッキリと、迫るカイリキーを見据えて「サイコキネシス」を放つ。カイリキーはすでに四腕でパンチを放つ体勢。
「進め！撃ち込め！」
　サイトウはそれを後押しするのみ。
「後ろに下がりながら撃て！」
　ルリミゾも放つ言葉はほとんど変わらない。共通しているのは――
「「負けるなッ!!」」

　それだけだった。

　そして。
「――戦闘不能ッ！戦闘不能ですッ！」
　ミタラシが叫ぶ。
「イエッサン戦闘不能！これで1―1です！」
「本当に、わからなくなってきました。ここはサイトウ選手のホームです。この歓声、この熱量、この展開。何があってもおかしくないです」
　実況解説である二人は、これまで逆転劇は何度も見てきた。そのどれとも遜色ない美しい展開だった。
　サイトウはほっとしたような笑顔を浮かべながら、カイリキーとハイタッチをした。
「……！」
　この切迫した戦況ゆえに、カキタはいちいち触れなかったが、サイトウが試合中にポケモンと一緒に喜び回っているのは異常事態である。

「ええと、最後のポケモンは……」
　ミタラシが疑問を呈する。
「ルリミゾ選手が繰り出すのは万全のチラチーノですよね、いくら流れが来ていても消耗したカイリキーでは厳しくないですか？」
「確かにチラチーノは無傷です。しかしカイリキーの特性を思い出してください。そしてタイプ相性も」
「――ノーガード……！格闘タイプの技はチラチーノに効果抜群ですね……！チラチーノは回避し続けることができるんでしょうか？」
　いくら距離を詰めて殴るのが得意とはいえ、吸い込まれるように当たるわけではない。あくまでもパンチをほとんど外さない、回避すらさせないというのが本質だ。
「あのチラチーノならもしかしたら、と思わなくもないですね……」
　非常に小柄かつ、毛量が多く芯を捉えにくい身体である。

「結局アンタまで回ったわね」
「ぐふ！」
　チラチーノはルリミゾの肩に乗って尻尾を巻きつけながら、戦術の方向性の話を聞いている。
　見せ場は最後に、なんて意識しているつもりはなかったが、自然とエース対決の構図が出来上がっている。
「あいつは近接の撃ち合いで異常に精度が良いわ。あまり回避に集中しない方がいいかも。かわりに一切回避をしないから、攻撃は狙わなくても簡単に当たる」
「ぐふぐふ」
「それにしても……」
　辺りを見渡せば、ほとんどがサイトウの応援ばかり。居心地が悪い、とは言わなくても感じるものがある。それに影響されるほどヤワではないと思っていたルリミゾだったが、影響がないとは言い切れないほどの会場の圧に気持ち悪さを感じていた。
　――と、視界の端に奇妙な髪形が見えた。
「あれ、アクロマ……？」

周囲の熱狂との空気感の差から、めちゃくちゃ浮いている。髪型の奇妙さも相まって。コーチとして雇ったからには映像をチェックしていると思っていたが、まさか実際に観に来ているとは思っていなかった。

――それから、ルリミゾは自分でも何故そうしたのかわからないほど無意識に、観客席に見知った顔を探した。

「「ルリミゾさーーーーん！」」

キルクスの住人がひと固まりになって小さな白色を作っていた。街中で一緒に写真を撮った少女、声をかけてくるおっさん、ステーキハウスで見かける家族連れ。

「「「オーオーオーオオオオーオーオー」」」

――他にもちらほらと、白色のユニフォームを着たサポーターが、やけに目立って見えた。サイトウカラーであるオレンジ色の横断幕や旗、ユニフォームに混ざってぽつぽつと。

応援から、力を貰う。

「どんなツラで歓声を受けりゃいいのよ……」

ここを去りたくて、ここに立っているはずなのに。

どうしようもなく人々は暖かくて。

「……チラチーノ」

「ぐふ？」

無邪気な瞳は、ルリミゾの気持ちなんて知らずに。早く戦いたいと言わんばかりに輝いている。

「勝つわよ」

「ぐふっ！」

・・・

「『タネマシンガン』、続けて『ダストシュート』」

距離を詰めるまでは、チラチーノの土俵。次々と種や毒を飛ばしていく。が、カイリキーは四腕で次々と薙ぎ払って距離を詰めていく。距離が詰まるまでの射程有利、一手も無駄に出来ない。

「つぶらな瞳」

チラチーノの可愛らしい姿が、カイリキーの攻撃を躊躇させる。性

格によっては一切の躊躇いなく攻撃してくるが、幸いこのカイリキーは優しいらしい。

「爆裂パンチッ！」

サイトウの一声で気合を入れ直して拳を振りかぶる。接近を許せば、リーチはカイリキーに分がある。人型の腕は、チラチーノの短い手足の何倍も長い。

――しかしチラチーノは、柔らかな毛に包まれたポケモンである。

「なッ!?」

拳を受け流し上の左腕に張り付く。電気を纏いながら。カイリキーは地面に叩きつけんと振りかぶり――

――バチィッ！と全身に走る痙攣に崩れ落ちた。

「スイープビンタ！」

逃さずルリミゾが叫ぶ。短い右手が光り、左手で倒れ伏すカイリキーの顔を持ち上げる。

「立ち上がれッ！動けッ！」

サイトウは声を上げるのみ。相棒を信じて、ただ動くことを待つのみ。

未だに全身を痙攣させるカイリキー、そして銃声のような破裂音が何発も響く。

パパパパパッ!!

「終わらせろッ！動く前に！」

ルリミゾの声を聞いてチラチーノはビンタを中断、飛び上がる。

「ギガ――」

ルリミゾには確信があった。

イエッサンが繰り返しヒットさせた効果抜群の「サイコキネシス」、そして「タネマシンガン」に「ダストシュート」、「スイープビンタ」。倒れないはずがない。

チラチーノが勢いをつけ、突進する。冷え切った会場の空気を物ともせず、小さく聞こえるルリミゾの応援歌とともに。

「インパクトッ！」

だからこれでおしまいだ。

ボッ！という鈍い衝撃と共にカイリキーがフェンスまで吹き飛ぶ。
広告を貼っていた壁はベコリと凹み、カイリキーが倒れ伏している。
「カイリキー戦闘不……」
審判が戦闘不能を告げようとしたとき。
指先が、ピクリと動いた。全身を痙攣させながら。
「まだだッ!!」
そして。
次に右腕が動いた。地面に掌を付け、まるで立ち上がらんとするように。
膝が曲がった。審判は戦闘不能を告げようとした口を開いたままフリーズしていた。
左腕が身体を支えて、その上体を完全に地面から持ち上げた。
「嘘でしょ……」
歓声は上がらなかった。誰もが今の状況を信じられず、カイリキーを見つめる以外の動作をしていなかったから。
ずっ、ずっ、と痙攣する身体を引きずりながら、右足を引きずりながら、チラチーノへと近付いていく。
「ギガインパクトの反動で動けない……！」
チラチーノは憎々しげに睨みつけるが、その身体は反動で少しも動かない。一歩、一歩と距離が詰まる。
――そうして目の前に立って、互いに敵だけを見て対峙する。
「気合パンチ」
最後の一撃は。

ドサッ、とスタジアムの中心で鈍い音が鳴った。
「カイリキー、戦闘不能……！」
――カイリキーが倒れたことによって届かなかった。
「勝ったのね……」
息つかず見守っていた反動で、呼吸を荒げながらルリミゾが呟い

た。反動で動けないチラチーノをボールに戻し、フィールド中心へと歩こうとしたところで、サイトウの様子に気が付く。
サイトウはカイリキーまで駆け寄り、何かを言ってからボールに戻す。そして何かを堪えるような表情をして、中心へと歩いてきた。
「「……」」
どちらも何も言わなかった。勝ったルリミゾから何かを言い出すのは気が引けたし、サイトウは賞賛を言い出せるような心情でもなかった。
だから。
「「ありがとうございました」」
ただ、手を差し出して握手をした。試合の内容を語るには、あまりにも互いに消耗していた。

46―サイトウという少女

「なに、これ」

ルリミゾは衝撃に言葉を失う。破壊の跡が痛々しく残っていた。元あったものは粉々に粉砕され、内側に閉じ込められていたものが見えている。

「誰がやったのよーーーーッ！」

虚しく観光地に声が響く。

ラテラルタウンの壁画が壊され、中から現れた像が新たな観光地になったのはつい先ほどの話。

・・・

サイトウとの試合の次の日、観光を兼ねてルリミゾは遺跡の壁画を見に訪れた。しかし壁画は粉々に砕かれ、隠されていた像が現れたのだという。

（あの時に壊してればもっと早く手掛かりになってたのに……）

声にこそ出さなかったものの、ルリミゾはその思いが強かった。二匹のポケモンが剣と盾を構え、後ろに並ぶのは二人の王。二匹の伝説のポケモンが、二人の王と協力してガラルの厄災を打ち払ったのだろう。

「まるであの像を隠すように作られていた壁画でしたね」

後ろから声が掛かる。ぼっ、と振り返れば私服姿のサイトウだった。こんにちは、と何でもないように挨拶をされた。昨日の今日で、ルリミゾとしては気まずかった。

「こんにちは。その通りね。誰かにとって何か都合の悪いことでもあったんでしょうね」

人間サマに都合の悪いことが。広く知られている伝説は人間の英雄一人が厄災を打ち払ったというものだ。ポケモンの存在を隠蔽していたということは、人間にとってポケモンの存在が都合の悪いものだったということ。例えば王位の正当性を説くときなんかに。

そこまでは言わなかったものの、ぼかして言えばサイトウも同意し

ていた。
「少し、話をしませんか」

サイトウに連れてこられてルリミゾが訪れたのは、ラテラルタウンのケーキ屋。サイトウは実はスイーツ巡りが好きだとかで話題になっていたが、本当にそうらしい。可愛らしい外観と、中に客はぽつぽつと。ラテラルの土地柄からして、少し目立っている店だが味は確かだとか。
「いらっしゃいませ――ってサイトウさん！今日は……ルリミゾさんも一緒ですか!?」
「はい。えっと、静かな席にお願いします」
どうやら常連のよう。そのやりとりをルリミゾに見られて照れながら、サイトウは店員の後をついていく。ルリミゾもニヤニヤしながら後を追った。
「こちらですね、ご注文が決まりましたらまたお呼びください」
案内されたのは一番奥のボックス席。確かに外から顔も見られず、会話も聞こえにくいだろう。椅子はクッションが程よく柔らかく、斜め掛けしていた鞄を置いてから座った。サイトウがメニューをルリミゾに手渡す。気心知れた仲でもなく、サイトウが敬語であるためルリミゾとしても少し気まずい。受け取ってから、話題を探る。
「ありがと、もう決めてるの？」
「いえ、私はだいたい覚えて――」
そこまで言って、顔を赤くするサイトウ。イメージとかけ離れた自分を晒すのが恥ずかしいのか、そのまま固まっている。
「何もおかしくないわよ。可愛いじゃない。別に恥ずかしがることないのに」
「そ、そうですか？」
大人しく礼儀正しいフリをしていたルリミゾからすれば、本当の自分を曝け出す恥ずかしさ、怖さは理解できる。そして作り上げたイ

メージの大切さも。サイトウの真面目さ、ストイックさに惹かれるファンの中には、スイーツ好きという側面にガッカリする者もいるかもしれない。

「あと敬語もやめて。ほぼ同い年くらいでしょ？」

「そうですね、あ、えっと……そうだね」

たどたどしい言葉遣いに堪えきれずルリミゾが笑えば、サイトウも笑った。

「笑わないでよ～！」

「あはは！敬語やめるだけでそんなに詰まることないじゃない……ふふっ……」

・・・

「昨日の試合」

そうサイトウが口にして、場は少しピリっとした。何を言われるのかと身構えたルリミゾだったが、続く言葉を聞いてすぐに警戒を解いた。机に並んだケーキはどちらも手を付けられておらず、並んだ紅茶だけがそれぞれ減っている。辺りに店員や一般人がいないのを確認してから、サイトウは口を開いた。

「ルリミゾ、本当に強かった。色々対策してたんだけどね」

それは、賞賛。

「結構ショックだったから、何も言えなかったんだ。それが気がかりになってて」

強いな、とルリミゾは思った。ただただ尊敬の念が沸いた。この少女は全てのトレーナーを尊敬し、尊重している。それがヒシヒシと伝わる言葉だった。

「最後カイリキーが立ち上がった時、こっちは吐きそうだったわよ。アンタも本当に強かった」

「ありがとう。あの子は無理が祟って、今日はちょっと身体を診てもらってるんだ」

「そう……。ま、次も叩きのめしてあげるから、万全な状態にすること

ね」

相手だったルリミゾが労わる言葉をかけるのもおかしな話だ。だからワザと挑発するようなことを言った。張り詰めた空気は跡形もなく消えて、ただ柔らかな雰囲気だけが二人を包んでいた。

「うん、次は絶対、リベンジするから」

サイトウだって、ルリミゾのこの挑発の意味を理解しているのだろう。まだまだ元気そうな様子にルリミゾは安堵した。

「……あはは」

何を安堵したのか。

「？、どうかしたの？」

「いや、何でもないわ」

今、自分はサイトウと仲良くなって何がしたいのだろう。ルリミゾはそう自嘲しながら、ケーキに手を付けた。

「……！」

「美味しいでしょ？」

「んん、そうね。硬派なジムリーダーのサイトウさんが通うだけあるわ」

「やめてよ、もう」

そうやって二人で笑った。真面目ちゃんと勝手に決めつけていたけれど、意外とルリミゾとサイトウは気が合うらしい。若いジムリーダーという立場も近く、ルリミゾは「友達になれるかも」なんて思い始めていた。

「先輩風……ってわけじゃないんだけど、練習試合の相手に困ってたりしないかな」

「あー……そうね、ツテはないわ」

年が近いゆえの配慮。代々続いてきた格闘タイプのジムリーダーであるサイトウにはない悩みだったが、いきなりジムリーダーを務め、他のジムリーダーとほとんど何の繋がりもないルリミゾにとってはひとつの悩みだった。ジム同士で練習試合を行えば、ジムトレーナーには良い経験になるだろう。ジムトレーナーの強化はルリミゾの練習相手の育成にもなる。斜め上に目を向け一瞬考えた後、ルリミ

ゾはサイトウの意図を理解した。
「ありがたい話ね。是非お願いするわ」
スッと連絡用のスマホロトムを取り出す。まさかそこまで話が飛躍して進むと思っていなかったサイトウは、一瞬硬直した後慌ててスマホロトムを取り出した。なんでもない、私服のサイトウが笑っているアイコン。よろしく、と淡泊なメッセージでちゃんと機能することを確かめながら、残ったケーキに手を付けようと――
「ルリナさんはちょっと年上だし、同年代のジムリーダーが増えて嬉しいんだ」
ケーキに手を伸ばしていたルリミゾの手が止まる。若くしてジムリーダーに就いたサイトウを気に掛けるジムリーダーはいれど、気の置けない友人はいなかったのだろう。ルリミゾもネズとの微妙な距離感を思い出しながら。
「……ありがとう。でもすぐシンオウに帰るかもしれないわよ？」
素直に好意を受け止めるには、捻くれてしまっているから。
照れ隠しをしながら、冗談めかして言った。
「そんなの関係ないよ。熱い試合をした。こうして話した。だったらもう、友達でしょ？」
「――！」
頭の中に警鐘が鳴る。これ以上関わってはいけないと。未練を残すなと。
それでも。
「確かに。友達ね」
友誼を結んだ。
・・・
「そういえば、なんで壁画があんなことになってんのよ」
「あー、それはね……」
――ビート。あのクソ生意気ピンクがやったらしい。ローズに認められたい一心で、壁画と共に埋まっている願い星を集めようとしたとか。ローズのダイオウドウを借りて行ったらしいが、そのまま従うダイオウドウもダイオウドウだ、とルリミゾは思った。

「失格処分って……」
「私から言えば仕方ない処罰だと思うけどね。結果的に壁画の中から良い物が出て来たけど、ラテラルタウンの観光名所を破壊したことはやっぱり許せないかな」
　己に厳しいサイトウらしい意見だった。この街を愛していることが伝わってくる。壊そうとしていたルリミゾとしては――心底どうでもいい問題だったが、才能あるあの少年が誰の指導も受けられずに腐っていくことに虚しさを感じた。
（ま、あたしが指導するわけでもないから何も言えないわね）
　ローズはビートを拾って、何か教え導いたのだろうか。その才だけを見出し、あとは何も教えてこなかった。その結果があの傲慢な態度であり、この悲しい結末だろう。
「ユウリってジムチャレンジャーが一応止めてたよ。今日ジムチャレンジに来てたけど、強かったね」
「でしょ!?最初からやるな～と思ってたのよ！」
「知り合いなの？」
「まあね」
　奇妙な縁がある。
　それから二人は今まで戦ってきたジムチャレンジャーの話をした。ルリミゾを通過した一方、サイトウに躓いている者もいれば、両方すんなり通り抜けた者もいる。面白い戦術を見せたトレーナーの話をしたり、ガラル空手についてルリミゾが聞いてみたり。
「あの壁画ね、前も壊されかけたことがあるんだ」
「……ギンガ団のロベリアね？」
　遂に来たか、とボロが出ないようにルリミゾは気を引き締めた。壁画が壊された以上、そのことは必ず話題に上る。そうなればサイトウが以前ロベリアと戦った話も上がるだろう。
「うん。知ってると思うけど、負けたんだ。私」
　一般には、「なんとか退けたものの逃げられた」ということになっている。不安を煽らないため、リーグがそう報道させている。歴史や伝説を調べているらしい様子から、事を大きくしないほうが犯人にとっ

てもメリットで、わざわざ訂正を求めに来ることもないと考えたのだろう。

（ま、勝手に負けたことにされるのは癪だけど仕方ないわね）

実際そうだった。

「強かった？」

少しそわそわしながら。

「……うん。でもそれ以上に、私が弱かったかな。犯罪者と対峙する覚悟がなかった。相手はルール無用の何でもアリ」

だから、悔しくてワイルドエリアに籠っていたと。そう零した。その表情は過去を悔いるというよりは、懐かしんでいる様子だった。ルリミゾは「強かった」と肯定されたことに口元を緩めながら。

「今なら負けない？」

「どうだろ。でも、今度はあの像たちを守ることはできるかな」

等身大の自信で、ハッキリとそう言った。ルリミゾはその様子を見て、自分が今嬉しいのか、厄介に思っているのか、わからなかった。

「3匹の手持ちらしいけど、どう対策すればいいと思う？実際に戦った感想が欲しいわね」

情報収集というよりは、純粋な興味だった。自分のパーティはサイトウにどう映っていたのか。

「いいよ。守りをドータクン、攻めをポリゴンZに任せてたかな。常にクロバットが裏を狙ってて、それに集中を乱されるのがかなり苦しい。首を狙われてる訳だから」

トレーナーが安心して戦況を把握することに集中できないのは、大きな痛手になる。ポケモンたちの目であり脳であるトレーナーの妨害は効果的だ。トレーナーさえ倒せば勝ちなのだから。

「クロバットなら一人くらい簡単に殺せるものね……。じゃあ守りに一匹、必ず割く必要があるわね」

「うん。私はローブシンに守ってもらってた。で、ドータクンとポリゴンZなんだけど……特殊耐久に厚いポケモンがいればかなり楽になるかもしれない。鋼タイプとかかな」

その通り。ロベリアへの対策は特殊技を耐えて時間を稼ぐこと。

正体を隠す必要があり、一人で戦っている以上、増援が何よりも苦しい一手である。

「もしかして……カイリキーがイエッサンの攻撃をあんなに耐えたのも、それが理由？」

「……うん。あれから特殊攻撃を受ける特訓をしたんだ」

あの異常な硬さは、根性や絆だけでは説明しきれないものがあった。

サイトウは、いつまた来るかもわからない脅威に備えていたのだ。

ルリミゾは大きく目を見開いて、サイトウの方を見た。恥ずかしそうにしているけれど、その手の包帯は訓練の傷を隠すため。

（本当に努力家なのね）

襲撃した時に吐いた暴言が、今になってルリミゾを苛む。当時は落ち着きもなく、精神が不安定だった。目線を落とし、当時の苛立ちを思い出して――

「ごめんなさい……」

言い切ってから、はっとして顔を上げた。サイトウも突然の謝罪に意味がわからず、きょとんとしている。

「えっと、辛い経験を根掘り葉掘り聞いてしまったから……」

苦しい言い訳だったが、ルリミゾは咄嗟にそれしか言えなかった。

「いいよ。ルリミゾが戦う時に、役立ててくれると嬉しいから」

ふわりと笑いながら、サイトウはそう言った。眩し過ぎてルリミゾは目を合わせられなかった。ただただ真面目で努力家なサイトウへのリスペクトが増すばかりだった。

47―ビューティフル

予感があった。何かと出会う予感。

――そして。

ｒｒｒｒｒｒｒ！

人の耳に届くよう、少し不愉快に作られた着信音が鳴る。

「ッ!?」

「ぐふっ!?」

オフにして自宅でチラチーノと戯れていたルリミゾの肩が跳ねた。チラチーノは驚き、音の発信源を探してキョロキョロとしている。スマホが電話で鳴ることなど今までなかったからだ。チラチーノを宥めて、スマホを取って画面を確認すれば。

「リーグから!?」

表示されるのはリーグ委員会の文字。直接お叱りを受けるようなことをした覚えはない。恐る恐る応答を押し、耳を近付ける。変な汗が噴き出て、妙に緊張する。

「ルリミゾです」

「リーグ委員会のオリーヴです。オフの日にすみません。緊急の要件なので手短に。今から動けますか?」

声色から緊急性を察して、ルリミゾの目つきが変わる。ジムリーダーが直接呼ばれるということは、何か実力の必要な事態であるということ。平穏を表していた部屋の静けさが、むしろ緊張を孕んだ嫌な静けさに変わった。

「はい」

「ありがとうございます。キルクスの入り江でポケモンが暴れています。メロンさんに向かっていただいたのですが、増援が必要とのことです。すぐに準備して、捕獲をお願いします。やむを得ない場合は……」

「大丈夫です。行ってきます」

続く言葉を遮って、通話切断を押す。メロンはマイナーリーグ落ち

しているのが信じられないほど実力のあるベテランであり、キルクスの住人である。試合の近いルリミゾを動かすことなく解決しようとしたらしいが、予想以上に暴れているポケモンが強いらしい。

「ん、戻って」

ボールにチラチーノを戻して支度を始めた。

「ダメじゃないか機嫌を損ねちゃあ。彼女は我が強いんだから」

隣で会話を聞いていたローズが口を出す。一方的に切られた通話に、画面を暫く眺めていたオリーヴが顔を向ける。

「しかし……」

「冗談だよ。暴れているポケモンに罪はないと考える人は少なくないからね。彼女もその一人だったんだろう」

イッシュにはそこそこの規模で、ポケモンの解放を謳う集団があるとも聞く。人間とポケモンの生活の衝突は珍しい話でもない。ローズは地下プラントにある〝モノ〟を思い出しながら、閉じた目を開いた。

「こちらです！」

入り江へ向かう道で待機していたリーグスタッフに案内されて奥へと向かうルリミゾ。一般人が通らないよう2、3人のスタッフが既に立っている。相変わらず空は白く、気分を滅入らせる。少し駆け足で、現状を聞きながらボールに手をかける。

「暴れているポケモンは？」

「わかりません」

わかりません。つまり、何もわからないということ。ルリミゾの頭が一瞬フリーズして、思わず大きな声で聞き返す。

「わからない!?どういうことよ」

複雑な表情で言うリーグスタッフから面倒事の予感がしながら。

「速すぎて視認できないんです！破壊力とスピードが高くて近付くこともできません。今はメロンさんがなんとか留めています……」

「あー……、ありがとう。もうここまでで十分よ」

手にはウォーグルのボール。事態の深刻さを理解したからには、最速で向かうほかない。リーグスタッフはそれを確認すると、再び一般人の通行止めへと戻っていく。ウォーグルの脚へ掴まり、ひやりとした風を感じながら空へと。

「飛ばすわよ」

「クァア」

・・・

「あれね」

近付くにつれ、霰（あられ）がだんだん強さを増していく。ラプラスと、白いふくよかなシルエット。隣にはバリコオルが守るように立っている。ガラル特有の白いヒヒダルマが首と目を頻繁に動かし何かを探して。キツくなっていく霰に瞬きをしたその瞬間――

「なッ!?」

ヒヒダルマが吹き飛んだ。

着地しようと高度を下げながら、チラチーノとバイウールーを繰り出して。

「相手は超高速！慣れてないだろうけどあたしを守りながら！ウォーグルはそのまま索敵！」

先に着地しているバイウールーの横に降り立ち辺りを見回せば、一瞬何かの姿がブレて――

「メェエ！」

衝撃。２度バウンドして吹き飛んでいくバイウールー。即座にその場から距離を取り、カビゴンを繰り出す。一度に指揮できるキャパシティを超えているが、守りに徹する分の指示は必要ない。

「メロンさん！」

「ルリミゾだね!?助かったよ！」

「相手は何!?速すぎるわよ！」

到着したことをメロンに伝えて、現状の共有を図る。ドスドスと必死に走るカビゴンを連れながら、メロンのもとへ。

「わからないんだよ！あたしも初めて見るポケモンさ！もうコオリッポとヒヒダルマがやられたよ」

メロンが倒れたヒヒダルマをボールに戻す。影は心なしか更に速くなり、一瞬たりともその姿を捉えることができない。霰によって多少の動きにくさ、ダメージを与えられていても、大きな影響は出ないだろう。

「これは……」

あまりにも速すぎる。復帰してルリミゾの下に合流したバイウールーはかなりダメージを負っている。相手の攻撃力が異常に高いか、格闘タイプの技を貰ったかのどちらかだ。

（ドータクンとポリゴンZが出せたら戦いやすいのに……）

当然、ルリミゾとメロンの手持ちは野外戦闘に慣れているわけでも向いているわけでもない。ルリミゾ一人であったなら、と思わずにはいられない状況だった。スタジアムと違って戦場の広さに際限はなく、相手が逃げないとも限らない。そうなれば大きな失態になる。

「バリコオル、『リフレクター』」

「助かるわ」

メロンの指示でバリコオルがルリミゾの周りに障壁を展開する。恐らく相手は近接主体のポケモンだと判断したからだ。

「あたしのポケモンはかなり消耗してる。悪いけどサポートに徹させてもらうよ」

「ええ。あなたの支援なら心強いわ」

長時間戦っていたのだろう。メロンの息は上がり、顔色も悪い。

「ッ!?」

――と、殺気を感じて二人同時に振り返る。

「かぶりん」

聞いたことのない鳴き声。

見たことのない姿。

白い、どこまでも白い身体は細長く、モデルの女性を思わせるような艶美さ。長く伸びた二つの触手は垂れて揺れており、後頭部から髪の毛のように広がる半透明と。そして何より――

「傷だらけじゃないか……」

ルリミゾが到着するまでに一撃も与えられなかったのだろう。既

に傷を負っていたことにメロンが驚いている。
そしてルリミゾは。
「アンタも同じなの……？」
目が合って。互いにこの世界の住人でないと理解した。
――そのポケモンも、何かを感じてただルリミゾを見つめていた。
何も、そのポケモンについて知らないのに。何も、そのポケモンと言葉を交わしていないのに。自分と同じであるという確信。その瞬間、周りには誰もおらず、二人きりであるかのように錯覚するほど。
不安、混乱、孤独。渦巻く感情がありありと。一人と一匹、ただ見つめ合う。
まるで今のルリミゾそのものだった。不安で周りと戦う姿まで。
「凍える風！」
メロンが叫ぶ。冷たさと氷で素早さを下げるため、ラプラスが風を起こす。同時、傷だらけのポケモンの姿が消える。
「ラプラスッ！」
ばっ、と振り返ったメロンよりも速く。
ラプラスの首へと蹴りが叩き込まれる。ボ、という音が霰の中くぐもって聞こえて。
「嘘だろ……？」
一撃。たった一撃で、ラプラスがゆっくりと力を失い、倒れていく。
そしてまた爆発的な加速――
「危ないッ！」
同時、咄嗟にバリコオルがメロンとポケモンの間に割って入る。咄嗟に展開されたリフレクターを叩き割り、メロンを巻き込んで吹き飛んでいく。倒れて動かないバリコオルとメロンを横目に、蹴った姿勢からゆっくりとポケモンがルリミゾの方へと向く。無感情な瞳が、しかしその奥に混沌とした感情を携えて見つめる。
「帰りたいの……？」
「りん」
ボロボロの身体で、どこかから逃げて来たのだろう。そう思うと、ただただ胸が痛かった。一人放り出された異世界で、味方もなく追わ

れて、追われて、果てにまた追われて。入り江で発見されたということは、流れ着いたのかもしれない。

「そりゃ、暴れるわよね」

ゆっくりと、そのポケモンがルリミゾの方へと歩く。ルリミゾより少し高い背丈は威圧感を与えても、ルリミゾは少しも臆さない。ただ、微笑みながら待っているだけ。

――そして、触れ合うような距離。ルリミゾが少し見上げるかたちになって。

ルリミゾはそのポケモンを抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫よ」

「かぶりん……」

とん、とん、と背中を軽くあやすように。

すると倒れるように、ルリミゾに体重が掛かる。見た目通り、吹くと飛んでしまいそうな身体から力が抜けていく。

「……気を失ったのね」

安心したのか、それとも限界だったのか。手に持っていたボールを当てれば、抵抗なく三度揺れて捕獲が完了した。ボールを小さくしてポケットに隠した後、偽装の方法に考えを巡らせる。

「海に飛び込まれた……のがベストね」

ルリミゾの評価は下がるかもしれないが、メロン共々倒されたとなれば相手の強さに箔が付いているだろう。あとはルリミゾが手持ちのポケモンと一緒に傷を負ってリーグスタッフを呼びに行くだけだ。もしも素直に捕獲したことをリーグに報告すれば、取り上げられることは目に見えている。研究対象として、このポケモンはどんな仕打ちを受けるのか。ただでさえ人を傷付けた野生のポケモンであり、希少な異世界からのポケモンだ。

「ちょっと戦うわよ！」

ポケモンたちのため息が聞こえた気がした。

リーグでは。
「本当ですか……!?わかりました。対策はこちらで考えておきます。ええ。それでは」
「どうだった?」
電話で知らされた予想外の事態に、オリーヴは深刻な面持ちでローズに報告する。
「逃げられたと……。メロンは3匹瀕死、ルリミゾは2匹瀕死のようです。傷を負わせたものの、海へ飛び込まれたと」
ジムリーダー二人を相手にして逃げ果せるほどの強さ。手持ちの半分を戦闘不能にするほどの。
「スタッフのポケモンたちに臭いで追跡させたようですが、やはり海近くで途切れていたようです」
「ウルトラビースト、だったか。その線を疑うしかないね。国際警察に連絡しよう」
ガラルだけで解決できる事態ではない。ローズは面倒事に眉を顰めながら、国際警察へ連絡する文章を考えた。
実際は一人が解決したのだが。

「……それで、捕まえてきたと」
来い、とだけ書かれたメッセージで呼び出されたアクロマは呆れ果てていた。
「この子、ほんっとにキレイね!」
と言いながらウルトラビーストの全身をペタペタ触っているルリミゾが原因で。当のウルトラビーストはただ無表情で突っ立っているのみ。ルリミゾに何の反応も返さない。
「何を食べるのか、どういう環境が良いのか、何ができるのか、わかんないのよね」
「そんなことだと思いましたよ……」
アクロマはウルトラビーストと心を通わせたルリミゾにドン引きしながらも、その生態について説明していく。
「その種族はＵＢ０２：ＢＥＡＵＴＹと呼ばれています。世界で2例

目のウルトラビースト、ということですね」
　UB（ウルトラビースト）とは、異世界から来たポケモンの総称。国際警察はコードネームで呼び、一般人へその存在が知れることを避けようとしている。
「じゃあ名前ないの？」
「ふぇろーちぇ」
　ウルトラビーストが無表情に呟く。
「フェローチェだって。可愛いじゃない」
　平時よりも数倍増しで雑なルリミゾの様子に、アクロマはひとつの疑いを持つ。
（まさか洗脳されてませんよね……？）
　フェローチェはあらゆる生物を魅了するフェロモンを出すと聞く。それに当てられたルリミゾが魅了されていてもおかしくはない。捕獲された例のないポケモンであり、研究は一切進んでいない。
（よく警戒心もなく……）
　見た物、感じた物が全て。その野蛮さがかえってフェローチェを安心させて、捕獲に至ったのかと思うと何も言えないアクロマだった。うりうり、と触手を触るルリミゾをペし、と叩くフェローチェの様子を見れば、洗脳とは思えない。それでも触ろうとするルリミゾに「やめてあげなさい」と注意しながら。
「能力は元に戻っているようですね」
「どういうこと？」
「ウルトラホールにある莫大なエネルギーを、通る時に溜めることがあるんです。戦った時、異常に速かったり力強かったりしませんでしたか？」
「そういうことだったのね。滅茶苦茶速くて強かったわよ！」
　こちらの世界に、力を溜めてやってくる。そして見慣れない土地のストレスで暴れる。これがウルトラビーストが第一級の危険生物と指定され国際警察に追われる理由だろう。
「元の世界に帰すつもりですか？」
　この少女ならそのつもりだろう。わかりきった問いだったが、アク

ロマはあえて問うた。
「当然よ。あたしも、この子も帰りたいの。まあ、保護したのはあのままだと野垂れ死ぬか、研究所行きだったからね。仕方なくよ。仕方なく」
ルリミゾの目が泳いでいる。自分と同じ境遇に同情せずにはいられなかったと目が語っていた。
「別に他のポケモンと同じ食事でいいって。本当に普通のポケモンなのね」
姿かたちが違って、異世界から来ただけで。
アクロマと別れた後、家にてフェローチェに絡むルリミゾ。フェローチェの反応は薄く、「かぶりん」と時々鳴くだけ。あとはルリミゾにされるがままになっている。
「一緒に、戦ってほしいの。帰るために」
真剣な目つきで、フェローチェを見つめながら。右手を差し出し、握手のようにして待つ。
「りん」
フェローチェは首を傾げながら、左手でルリミゾの右手の手の甲を握った。
「「……」」
きょとんとしているフェローチェと、目をぱちくりさせるルリミゾ。
「伝わってる……？」
「かぶりん」
「ま、まあよろしくね」
仲間が一匹増えた。たぶんそういう日だった。

48―センチメンタル過剰

フェローチェと出会ってから、ルリミゾは自宅で自分を省みる時間が増えた。迷子で暴れている姿があまりにも痛ましいものだったから。

ラテラルタウンで暴れた日、宝物庫を荒らした日。ストレスで荒れていた自分はどんな姿だっただろう。故郷へ帰れない痛みは少しも消えていないけれど、余裕が生まれたのは最近だ。

「いっそ迫害してくれれば、どんなに楽だったか」

力で以って捻じ伏せるだけで済んだなら。

しかし現実は暖かく、優しい人ばかり。有り余る暴力性を振るうには、良心が芽生えてしまっていた。直接応援を受け、人と触れ合い、街を背負うトレーナーになったからこその葛藤だった。

誰でもない、犯罪組織の団員だった頃はいとも簡単に人を傷つけられたのに、今では葛藤が生じるほどに。

「ここで骨を埋めるのも悪くない……なんてね」

口に出した途端、不安が膨れて胸の内を満たしていく。

「そんなわけ、ないじゃない……」

――ポン！とボールからポケモンが飛び出る音。振り返れば、新入りの白色がベランダに出ようとしていた。フェローチェの姿を外に晒すわけにはいかないから、ルリミゾが慌てて止める。

「ちょちょちょ、やめなさいって」

抵抗もなく、カーテンを開いてぼんやりとするばかり。何かと思って見上げれば、丸い、丸い月が出ていた。はらはらと降る雪が美しく、フェローチェも魅入られている様子。真っ黒な夜空は、月と雪だけを目立たせていた。薄らぼんやりと明るい街の光が、暖かく、しかし邪魔することなく灯っている。

――綺麗。

月は、どこから見上げても夜を照らしている。シンオウからでも、ガラルからでも、同じ月が見える。しかし、いつかルリミゾの見た月

はここにはない。それが急に心を打って、息が上がる。
「ッ……」
マットを置き無理矢理土足とスリッパの境界を作った玄関は、使う度にここが異国の地ということを実感させる。ガラルには家で靴を脱ぐ文化がないからだ。コンコン、とつま先で地面を叩いて靴を履けば、ドアを開いてキルクススタジアムへと向かう。しんしんと雪は降り、シンオウを思い出させる。加速したセンチメンタルを振り払って、一歩一歩滑らないように歩く。道中にはユキハミ。
「また道に飛び出して……危ないわよ」
「ふんわ！」
抱えて道の外へ動かしても、懲りずに道へ戻ろうとする。
「あーもう！どこがいいの？連れて行ってあげる」
「ふわ！」
うにうにと腕の中で動くユキハミを抱えて、示す方向へと連れていく。
「ふんわ！ふんわ！」
そして止まったのはゴミ箱の上。
「ここでいいの……？降りられるの……？」
「ふ！」
嬉しそうな様子を見ればそれ以上口出しできなかった。隣の手すりを伝って降りることはできるだろう。そう信じてまた歩き出す。ふと自宅のベランダを見れば、モデルさながらの艶美な姿が物憂げに空を見ていた。フェローチェだ。手すりに体重をかけ、頬杖をつく姿は道行く人を虜にしてしまいそうなほど絵になっていた。
「何してんのよもう……」
フェローチェがベランダに出ていた。
「ってフェローチェ!?」
開いた口が塞がらない。
「ウォーグル！ちょっと飛んで！」
慌ててウォーグルを繰り出し、ベランダまで飛んでいく。幸い辺り

に人はおらず。
「戻って！」
ボールに戻し、部屋の中へとベランダから侵入する。
「家の中にいるのよ!?」
再びボールから出して、自分より高いフェローチェを見上げながらお説教を。わかっているのかわかっていないのか、無表情のまま。
「……」
気を取り直して出発しようとしたルリミゾが、急に何かに引っ張られて転げそうになる。
――無言でフェローチェが服を掴んでいた。
「「……」」
二人の間に微妙な空気が流れる。
「……かぶりん」
「……あーもう可愛いわね！」
折れたのはルリミゾ。
「いいわ！一緒に行くわよ！その代わりボールから出ないこと。いいわね？」
「……」
無表情の沈黙。
「どっちなのよーーーーーー!!」
ルリミゾの叫びが虚しく木霊した。

スタジアムの前には既に人が集まり始めていた。他の会場と違うのは、全員が厚着をしているということ。こそこそと、マスクで顔を隠しながらルリミゾは裏口へと向かう。騒がしさが遠ざかるにつれて、ジム内のドタバタが聞こえてくる。
「慣れたものね」
今日は6度目のリーグ戦。控室近くではリーグスタッフとジムトレーナーが慌しく動いていた。ルリミゾの姿を確認するなり、ノマが近付いてくる。
「ヤローさんはもう到着してる。ポケモン達の調子は大丈夫か？」

「ん、大丈夫よ。引き際は弁えてたから。ありがと」
フェローチェの一件はジムトレーナー達にも伝わっていた。なにせポケモンの休養とリーグ委員会への報告でジムを空けていたのだから。
「しかし、お前とメロンさんで手に負えないとはとんでもない怪物だな……。俺らは口止めされてるし、専門の組織が動くんだろうな」
「強くたって同じ生物よ」
「それはそうだけどな……」
含みをもった言い方に気圧されたのか、ノマはそれ以上続けなかった。ルリミゾはカタカタと震えるボールを抑えるのに必死で口数が少なかったのだが。

控室で暇つぶしにヤローの記事を手に取れば、数ページにも渡る長文のインタビューが載っていた。
『〝ファイティングファーマー〟、ヤローは実力者だ。相性の悪いカブ戦を落としがちなものの、常に中堅以上に食い込んでいる。勝負を楽しみながら、粘り腰でしぶとく耐えるスタイルの彼は特に地元で人気だ。ルリナやキバナといった拠点のある街以外からのファンが多いトレーナーと違い、ターフタウンからの熱狂的な支持に支えられている。』
「自分自身がライバル、ね……」
そう語る彼のインタビュー記事は、農業でかいた汗が眩しく笑顔で光っている。心優しいことで有名で、ジムチャレンジャーを試すことができない、という理由で1番目のジムを任されているほど。甘さじゃないの、とルリミゾは思っているが。自分自身への厳しさが、あの優しそうな顔と不釣り合いな肉体を生み出しているのだろう。そしてその厳しさは、他人への優しさとして裏返っている。
「まだまだ学ぶことは多いわね」
他人と関わるためには、自分自身を省みなければならない。
ルリミゾは、どんなジムリーダーだろう。街の人にどう映っているのだろう。ヤローのように地元に愛されているだろうか。ルリナの

ように幅広く人気だろうか。キバナのように確固たる実力とカリスマがあるだろうか。

「今度サイトウに座禅を教えてもらおうかな」

――コンコン、とノックの音。

「はい、どうぞ」

「時間だ。先にスタンバイしておくんだろ？」

がちゃりとドアを開いたのはノマ。似合わないスタッフの服に身を包み、笑いながら。

「ん、ありがと」

「やけに素直じゃねえか。変なもんでも食べたか？」

「試合が終わったら覚えてなさいよ」

二人で笑いながら、通路へと向かった。

４９―ｖｓヤロー　メジャージムリーグ⑯

フィールドへと続く通路は暗い。がやがや、とジムリーダーの入場を待つ観客の雑談が一つの雑音となって通路を通り抜ける。準備している間に雪は止んだらしく、キルクスにしては珍しい晴れ。天候とリンクするように、ルリミゾが目を閉じて歌を口ずさみながら機嫌よく。

「♪～」

「ほんと上機嫌だな」

素っ気ない態度ではないことにノマが興味を抱いて、いつもより多めに話しかける。ノマの知らない歌だったが、気になったのは曲名ではない。その上機嫌の理由だった。だから、ルリミゾが口ずさんでいたのがシンオウの曲だと知ることはなかったのだが。

「まぁね。今日は色々見えるのよ」

片目だけを開けたルリミゾは、自分でも気付かないほど抽象的な答えを返した。シンオウ人らしい焦茶色の瞳は澄んでいた。

「そうか」

ノマは「何がだよ」とは続けなかった。既にルリミゾが歩き始めていたから。

「ポケモンリイイイイグ！」

盛大な曲と共に〝Ｐｏｋ▪ｍｏｎ　Ｌｅａｇｕｅ〟のロゴが画面に表示される。そして次々と、ポーズをとったジムリーダーの姿が名前と共に。リーグ戦の全国配信、そのオープニングだ。

「さあ！始まりましたガラルリーグ、Ｇａｍｅ６、Ｍａｔｃｈ２の様子をお送りいたします。実況を務めますミタラシと……」

「解説のカキタです。よろしくお願いします」

よろしくお願いします、と定型文を終えたところで、互いに目配せをして話を切り出す。長年コンビを組んでやってきたこの二人はまさに阿吽の呼吸だ。カメラは現在話している二人を映している。

ノートを開いて情報を探すカキタと、カメラ目線を続けるミタラシの姿が対照的に。
「まずはお互いのポケモンを見てみましょう……本日のマッチアップはこちらです」
　そうミタラシが言うと即座に画面が切り替わり、ルリミゾとヤローの登録されたパーティが表示されていく。
「こちらルリミゾ選手……エースのチラチーノを中心に、満遍なく色々な相手に対応できるポケモンが揃っていますね」
　メンバーに変わりはなく、チラチーノ、ウォーグル、バイウールー、イエッサン、カビゴンとノーマルタイプで統一されたいつもの顔ぶれが並んでいる。
「そうですね。この相手にはこのポケモンを！という明確な想定がない代わりに、ルリミゾ選手の柔軟な発想を活かせるような手札の多さが特徴ですね」
　ノーマルタイプは効果抜群となる相手が存在しない。ゆえに、その器用さを活かした戦い方が求められる。各自に固定の役割を求めるのではなく、自由な対応を。
「一方ヤロー選手……一応アップリューをエースとしていますが、アップリューの顔を拝む前に倒れるトレーナーは多いですね」
　並んでいるのは、弱点の多い草タイプでありながら、苦手なタイプに対抗するための布陣。エルフーン、ナットレイ、ワタシラガ、ルンパッパ、アップリュー。ミタラシは読み上げながら、前シーズンとの変更点に気が付く。
「このナットレイは今期からですよね！ルンパッパをダイマックスして自ら『すいすい』を発動させることもありましたが、このナットレイはどういった運用をしているのでしょうか？」
「このナットレイは、草タイプの弱点である毒や飛行の攻撃をカバーしてくれます。炎にはとても弱いですが、他にも耐性が高いですからね」
「なるほど。ということはヤロー選手は交代戦を仕掛けるつもりであると？」

「その通りです。ヤロー選手は明確に敵を想定してパーティを組んでいます。常に有利となるようにポケモンを入れ替えて、まさに〝粘り強く〟戦うトレーナーです」

「「「「ワァァァ!!」」」」

ノーマルタイプのイメージカラーそのままに、のっぺりとした白色のフィールドへとルリミゾが一歩踏み出すと同時。気付いた観客が声を上げた。それは波のように広がり、面白いくらい急速に歓声が大きくなっていく。いきなり日光の下に出たことで、目がきゅう、となる感覚。それでもハッキリと目を開いて、観客の顔をざーっと見ていく。

「いつも、ありがとう」

マイクには乗せなかった。聞こえないように小さく呟いて、微笑みながら手を振った。満面の笑顔、というほど笑顔を作ることに慣れておらず不器用な微笑みだったけれど。

「――来たわね」

ルリミゾは入場する瞬間を直接見ていたわけではなかったが、本日の対戦相手の入場を悟った。歓声が一段と大きくなり、試合開始の期待を込めた拍手が始まったからだ。

目を向ければ、ズン、ズン、という音が歩く度に聞こえてきそうなほど鍛えられた肉体。そして性格をそのまま表す、肉体に不釣り合いな優しい顔。

〝ファイティングファーマー〟　ヤローだ。

「カシワさんが倒れてすぐ、君と当たらんでよかったです」

後頭部を掻きながら、ヤローは言う。ルリミゾは上機嫌から一転、眉を顰めながら黙っている。続く言葉によっては斬りかからんとするほどに殺気を発しながら。ヤローは少しも臆することなく話し続ける。

優しいからといって、臆病なわけではない。当たり前のことだった

が、ルリミゾにはヤローが歪に見えた。
「僕はきっと、無意識に本気を出せず負けてしまうんだな。そんな境遇の相手だと心が揺らいでしまう」
　これは僕の弱さです。ハッキリとそう言った。
「君は強いんだな。僕が何の心配もしないほどに。だから、僕も失礼がないくらい全力で戦えるんだわ」
　この男は。
　強く在りながら、驕りとも見做せるほどの優しさを抱えているのだ。そして、その優しさが相手への侮辱となることも痛いほどに知っている。
「誤解していたわ」
　相手を弱者と扱い、一方的に上からの優しさを押し付けている男ではなかった。相手を尊敬した上で、相手の心境や境遇に同情してしまうほどに優しい男だったのだ。ルリミゾはこの男に勝手に抱いていたイメージを完全に消去した。単に甘さが優しさに見えているのではない。優しさを捨てられない性質だっただけなのだ。だからこの男は自ら「弱さ」と形容したのだろう。
「何がです？」
「なんでもないわ。続きはバトルで語りましょう」
「そうじゃな」
　田舎特有の訛りに気が抜けそうになりながらも、ルリミゾは所定の位置へと歩いていく。両掌を上に、観客を煽りながら。ますます熱を帯びて大きくなる歓声に、気分が高揚していく。浴びれば浴びるほどに昂り、気分が戦いへと切り替わっていく。
「キルクスタウンジムリーダー、ルリミゾ。悪いけど見せ場はないわよ。ここはあたしのホームだから」
　ホーム&アウェイにおける自分のスタジアム。当然その意味でルリミゾはホームと呼んだのだが。
　所定の位置に着いたヤローは、対戦相手の少女を見る。入れ替え戦や、キバナとの戦いではあんなにも動揺していたあの少女が、何か芯

となるものを掴んでここにいる。確かに初めはジムリーダー”代理”として立っていたのだろう。しかし今は、キルクスの観客を背負い、一人のジムリーダーとして戦っている。ダンデを除いたガラルで最も強い8人として、破竹の勢いで勝ち続けている。

「たった5試合でこんな成長するとは思わなんだ……」

そしてヤローは。

揺らいでしまうほどに心優しくても、この場所でジムリーダーとして立っているということは。

「僕も全力で戦わせてもらうんだな！」

確かな強さがあるということ。

「ターフタウンジムリーダー、ヤロー。アウェイでも粘らせてもらうんじゃ！」

「バトル開始ィ！」

審判が声を張り上げる。マイク越しに、熱狂の中でも差し支えなく声が届くように。

同時、ヤローは他のジムリーダーと比べて特徴のないフォームでボールを投げた。

――歓声が爆発する。

ルリミゾがボールを投げようと腰に手を掛けた瞬間――

「ちょっ!?」

「ぐふ！」

ボールが光り、小さな姿が現れる。チラチーノだ。締まらないスタートにルリミゾは嘆息した。観客は却って盛り上がり、「かわいー！」だとか「いいぞー！」なんて歓声を送っている。

「おっとルリミゾ選手、ハプニングかーーーッ!?チラチーノが最初に飛び出しました！」

ミタラシが半笑いで実況する。敢えて視聴者と同じように笑って話すことで、万が一本当にハプニングで戦略が崩れていた場合の悲壮さを誤魔化すことが出来るからだ。ちら、とカキタの方を見ればマッチアップの解説をする準備は完了している様子。

「カキタさん、この一番手は事故ですか？」
「ええと、事故ではありませんね。おそらく事前に一番手は打ち合わせされたものだと思います。ヤロー選手のパーティは、素早く重い攻撃を繰り出すポケモンがいません」
「そうですね、どちらかというと相手に合わせて受け流したり、上手く対処することで有利を取るイメージがありますね」
　一撃で吹き飛ばすような、力のゴリ押しはない。本人の自称するように〝粘り強い〟プレイングが特徴だ。
「ですから『ダストシュート』や『蜻蛉返り』などの草タイプに効果的な技を持ちながら、容易に離脱できるチラチーノを先頭にしたんだと思います」
　これで事故だったら私は引退しなければなりませんね、と笑うカキタ。しかしその眼鏡の奥には確かな知識に裏付けられた自信があった。
「エルフーン！頼んだんだな！」
　ヤローが繰り出したのはエルフーン。可愛らしい見た目と裏腹に、凶悪な特性――「いたずらごころ」と呼ばれている――を持っている。相手より先にあらゆる変化技を使え、悪戯好きなその傾向からそう呼ばれている。
「エルフーン対チラチーノ！見た目だけなら可愛らしい対決ですね！」
「ええ。しかしその裏ではトレーナー達が駆け引きを行なっています。チラチーノが『ダストシュート』を撃てば裏のナットレイに無効化される可能性がありますから」
　――と、カキタが言い終わるよりも先にエルフーンは交代し、ヤローの投げたハイパーボールから現れるのは鋼のカタマリ。ゴン！と地面を揺らしながら着地したのはナットレイ。
「ナットレイに即座に交代しました！やはり交代戦を仕掛けていくようです！」
　チラチーノは動かず、交代した瞬間の隙を狙うこともしない。ただ、ルリミゾ側が不利だと言われているマッチアップが生まれただ

け。

「ルリミゾ選手は交代しないようですね。しかしこの対面を作って大丈夫なんでしょうか……」

　可能な限りルリミゾを擁護しながら、ルリミゾ側に考えられる手を次々とノートへ列挙していくカキタ。ルリミゾにしては少し冷静さを欠いた判断のようにしか思えなかった。チラチーノがナットレイ相手に有効打が無い場合、ナットレイは「ステルスロック」「やどりぎのタネ」「鈍(のろ)い」といった厄介な技を重ねることができる。それだけで交代戦を強いられるルリミゾにとっては苦しい展開になるだろう。

　格闘技を使えるウォーグルに交代するのか、それとも炎技「マジカルフレイム」を使えるイエッサンに交代するのか。そう期待していたカキタを裏切るプレーだった。

・・・

「なーんでわざわざ相手の土俵に上がる必要があんのよ」

　ルリミゾは自信満々に笑う。交代しなかったのは、そうする必要がなかったからだ。

「嘘泣き」

　――指示したのは、相手の特殊防御を下げる技。チラチーノの嘘泣きを見たナットレイは、特殊防御がガクっと下がる。

「ッ!?」

　ヤローは目を見開いて驚き、一瞬で思考へ沈む。

（何か特殊技を狙っている……？イエッサンの『マジカルフレイム』ならわざわざ特殊防御を下げる必要はない……）

「『嘘泣き』ですか!?特殊技を撃つんですか!?」

　慌ててルリミゾのチラチーノの技の使用歴を見るカキタだが、公式戦でチラチーノが特殊技を撃った記録はない。ノートを開いて、チラチーノが種族として覚える技のリストを探す。毎度披露するルリミゾの予想外の技の採用に合わせて、カキタはルリミゾの手持ち全ての種族が覚える技のリストを作成していた。プロ根性である。

「あった！『気合玉』か!?使えるのか……？」

　それは可能性だった。「嘘泣き」を交代際に使うということは、「私

は今から特殊技を撃ちます」と宣言しているようなもの。ヤローはこのアクションひとつで、チラチーノの特殊技を警戒しなければならない。しかもそれは、チラチーノで居座れるほどナットレイに効果のある技、かもしれない。ミタラシはカキタの情報が纏まるのを待ちつつ、場を繋ぐためにマイクを手に持つ。

「ルリミゾ選手、指示したのは『嘘泣き』！特殊防御をガクっと下げる効果があります！これにはヤロー選手も動揺しています！『気合玉』を撃とうとしているのか!?それともブラフなのか!?」

「ブラフ……だと思います。『嘘泣き』自体は習得が簡単です。しかし物理攻撃ばかりで戦ってきたあのチラチーノが今更特殊技を撃てるとはとても……。もちろん形にはなるかもしれませんが、プロ同士の戦いでは通用するレベルまで高めて初めて「使える」と形容できるんです」

「では、ダイマックスしてはいけないんですか？ナットレイの耐久であればチラチーノの『気合玉』を耐えられるのでは？」

ミタラシの疑問は当然である。

「いえ、そうするとカビゴンに出られてしまいます。ダイマックスの効果時間中にカビゴンを落とせるかどうかも怪しいですからね。ダイマックス権を残しておかないと、ウォーグル一匹にほとんど持っていかれてしまいます」

「なるほど……」

それから、ブラフと判断したヤローが「やどりぎのタネ」を指示したのと。

――チラチーノがその小さな短い手で、気を集めてエネルギーの塊を作り出したのは同時だった。

50―vsヤロー　メジャージムリーグ⑰

「『気合玉』の練習を見てほしい？」
「ええ。次の試合で使いたいの」
――サイトウがそうやって相談を持ち掛けられたのは、ジム同士の練習試合の日だった。
打算での親交を疑うほどに、突飛な話だった。サイトウは可否を答える前に、まずルリミゾの瞳を覗き込んだ。その奥の真意、感情を少しでも確認しようとしたのだ。手合わせに留まらず、互いの技術を教え合う関係までは考えていなかったサイトウは言葉に詰まる。ただの友人同士ならともかく、プロ同士、それも同じリーグで対戦する者同士である。やはり、断ろう。そう思ってサイトウは口を開いた。
「それはできないかな。仲良くても、まだ試合は残ってるわけだしね。教えることは簡単だし、時間も取らない。でも対戦相手と教え合う関係は作りたくないんだ」
競技者としてのサイトウのプライドだ。ルリミゾは何の対価もなしに要求するような人間ではないだろうし、きっと教え合えば互いに強くなるキッカケとなるであろう提案だった。しかし、シーズン中にそういうことは避けたかった。ルリミゾは、そんなこと思いもしなかったという表情で驚いている。ただ貪欲に、強くなるために何も考えず質問をしていた様子。
「……そうね。あくまで実戦に近いバトルを提供し合うだけだものね。今の話は忘れて？」
突き詰めればサイトウは承諾したかもしれなかったが、他人のプロ意識に足を踏み入れるほどの無遠慮さをルリミゾは持っていなかった。まだまだプロ意識が足りてないわね、とルリミゾの笑う様子がやけに寂しく見えた。
「……これ終わったら一緒にご飯行かない？キルクスのお店教えてよ」
言葉通りサイトウがキルクスの土地に慣れていないのもあったが、

同年代のジムリーダーができた喜びからの誘いでもあった。ぱぁっ、と顔を合わせて笑うルリミゾの様子は、バトル時の獰猛さが欠片もなかった。

「……！行きましょう！穴場を教えてあげる！」

「――この為だったんだね」

テレビ画面に映るチラチーノの構えを見て、サイトウはいつかの会話を思い出していた。

チラチーノが撃とうとしているのは「気合玉」。左手を前に突き出し、ナットレイへと照準を合わせる。右手だけで気を集め、段々と玉は大きくなっていく。その熟練度は低く、やっと形になったような光り方。しかしその独特な構えは――

「私のルカリオそっくりのポーズだ……！」

サイトウのルカリオが使ったことのある構えだった。両手で気を溜めるという都合上、どうしても命中率が低くなってしまうのを改善するための構え。片手の分威力は下がるものの、左手越しに合わせた照準で狙う工夫。そしてまた、連打がしやすい構えでもあった。

ナットレイの動きは非常に鈍く、回避は期待できない。大事なのは、チラチーノが外さないということと、多く技を叩き込むこと。そして持ち前の硬さは「嘘泣き」で大きく損なわれている。普通のポケモン相手には、通用しないような――あまりにも特殊な運用だった。特殊防御を下げることに成功し、なおかつ高確率で技を当てられて、連射の隙を突かれないような効果抜群の相手。まさにこの今、ナットレイ以外に刺さらない運用。

「一人の対策にそこまで詰めるなんて……！」

勝ちを何が何でも獲りに行くという覚悟が、画面越しにも感じられた。同時に、その教えを乞いに来たのが自分だったことにサイトウは言い表せない胸の高鳴りを覚えた。そして断ったにもかかわらず――恐らく過去の試合の録画などを漁って研究したのだろう。勝利への貪欲さを学ばされた気分だった。すぐにテレビを消して、次のサイ

トウの対戦相手――キバナへ向けて準備を始めた。まだまだ対戦の日まで時間はあったが、そうせずにはいられない気分だった。

チラチーノの右手で「気合玉」が完成する直前、意識のリソースが左手へと切り替わっていく。左手へと気が集まり、小さな小さな次の玉が作られる。そして右手の玉が完成し――

「撃てッ！」

タイミングは完璧に、ルリミゾの叫びが響き渡った。

「ぐふ！」

右手で勢いよくアンダースロー。と同時、左手の照準を今度は気を集中する砲台へ。手を全く逆に入れ替え、再び「気合玉」の構え。チャージは短く、予め割かれた時間が活きていく。そしてそれの繰り返し。

「ふッ！ふッ！ふッ！ぐふーッ！」

連射、連射に次ぐ連射。ゴン！ゴン！ゴン！と「気合玉」が放たれる度にナットレイに命中し、金属特有の音が鳴る。雑で、熟練度の低い攻撃は積み重なって鋼の身体へとダメージを与えていく。熟練した「気合玉」の一撃と遜色ないほどに。

「はーっ、はーっ……」

チラチーノは身体のあちこちに植え付けられた「やどりぎのタネ」に体力を奪われながらも次の攻撃の準備をする。消耗の程度と、奪われた体力の様子を見ながら、ルリミゾはダメージの計算を始めた。

（効いてる……！もう一度やれば落とせる……！）

スタミナの消耗が激しいものの、今回きりの奇策としては十分すぎる働きだ。

「なんちゅうプレーじゃ！面白いなナットレイ！」

「……！」

あちこちに傷を作ったナットレイが、それでも笑う。常に勝負を楽しもうとするヤローの姿は、真剣さが伝わりにくいため「真面目にやれ」なんて声が飛ぶこともある。しかしその楽しむ姿が、トレーナーたちやファンの光となっていることを忘れてはいけない。

「〝アレ〟をやろう！付け焼刃を崩すにはもってこいだわ！」
それを聞いたナットレイは頷いて、じっとチラチーノが動くのを待っている。
「何か、来るわよ。警戒しなさい」
「ぐふ」
ヤローが選んだのは後手。ナットレイの遅さゆえに先手でアクションを起こすことは不可能だが、攻撃が迫ってからの迎撃、あるいは何か技を繰り出して場を整えることはできる。だからチラチーノが攻撃時に隙を晒すのを待っているのだとルリミゾは推理した。
（『ステルスロック』、『身代わり』、それとも何か攻撃技か……）
ナットレイは何かしらの技を狙っている様子だが、一目では判断がつかない。「ステルスロック」だった場合は、活躍の期待されるウォーグルが動きにくいフィールドを作られてしまう。ルリミゾはウォーグルへの交代も考えたが、攻撃技であった場合のリスクをみて「気合玉」を判断した。
「もう一度『気合玉』！」
続行の判断。あのラッシュを全て当てられれば落とし切る自信がルリミゾにはあった。チラチーノが同じように構え、集中を高めていく。ナットレイはそれを妨げる様子もなく、ただ静かに見つめている。不気味なほどに。

「付け焼刃も重ねてしまえば実用に至ると……！そんなプレーです！こんな状況のためにわざわざ用意してきたんでしょうか!?」
「恐らくその通りです。この状況を生み出すための、先発チラチーノ。ヤロー選手がエルフーンで突っ張っていたらどうするつもりだったんでしょうね……」
未熟で、完成度の低い「気合玉」はまさにこの限定的な状況にのみ機能していた。ヤローはそんな奇策にも笑いながら、楽しそうにただナットレイに語り掛けている。
「ヤロー選手、楽しそうですね」
「本当ですね！どんな状況でも楽しそうにプレーする彼は本当に面白

い選手ですねぇ」

カキタとミタラシがヤローについて触れる暇があるほどに、静かな戦いだった。チラチーノは次の「気合玉」のために集中し始めていて、ルリミゾはそれを妨げないよう黙っている。腕を組み顎に手を当て、ヤローの後手の策、そして今後の展開に思考を巡らせているのだろう。

「ゆっくりとした戦闘が行われています。ナットレイは静かにチラチーノの動きを待っています！」

「しかしヤロー選手も妙ですね。『身代わり』や『守る』で粘る様子もありません。何を狙っているのかちょっと気になりますね」

いくら想定外に体力を持っていかれたとしても、これまでのヤローの試合通り〝粘る〟戦いをするならば「身代わり」や「守る」で時間を稼ぐはずだ。「やどりぎのタネ」が成功している以上、時間をかければかけるほど形勢はヤローに傾いていく。しかしこの様子は、まるでナットレイで下準備をしているような。

「……！チラチーノが動きそうですよ」

完全に集中が高まり、エネルギーの玉が準備されたのをみて、カキタが解説を中断した。

「さあ、付け焼刃の奇策です！ヤロー選手はどう返すのでしょうか!?」

そして。

――集中しきったチラチーノが「気合玉」を撃ち出そうとした瞬間。

「今だ！『重力』ッ！」

「ッ!?」

グググッ、とナットレイが沈んで、辺りを重力が支配する。観客席から障壁を隔てたフィールド全てが、異常な重力に侵されていく。

「こっ、れ、は……！」

慣れない感覚にチラチーノは膝を屈して気弾を霧散させる。同様にルリミゾも未知の感覚に崩れ落ちた。「重力」とは、フィールドの重力を強くする技。トリックルームやその他の天候変化と同じく、発動者が大きく有利を取る。発動者側にとっては慣れた環境・練習してき

た戦術である一方、無理矢理その土俵に立たされる相手からすれば全く慣れない環境だからだ。
　それを示すかのようにヤローは何事もないかのように平然と立ち、愉快そうに笑っている。
「やってくれたわね……！」
　ルリミゾはよろよろと立ち上がりながら、全身にかかる負荷に耐えながら。チラチーノは四足で身体を支えてなんとか動けるようになっている。が、やどりぎのタネがジワジワとその体力を吸い取っていく。
「『パワーウィップ』！息をつかせんように！」
　今までのゆったりとした展開は嘘のように、間髪いれずの攻撃。当然チラチーノがこの重力に慣れてしまう前に押し切るつもりだろうが、そのペースの変わりようにルリミゾが面食らったのは確かだ。ナットレイの触手がしなり、破壊力を伴って叩きつけられる。回避を試みるチラチーノだが、強い重力に慣れない身体は言うことを聞かない。
「『アイアンテール』で威力を殺せ！」
　回避が不可能と悟るや否や、ルリミゾが叫んで指示を出す。それに合わせてチラチーノも即座に回避行動をやめ、全力で尻尾を固めて迫り来る触手へとぶつける。
　――ガイィン！
　生物同士がぶつかったとは思えない音が鳴り響く。
　一瞬攻撃が緩んだ瞬間、チラチーノをボールへ戻し――
「カビゴンッ！」
　割り切っての交代。試合前の努力は、必ず通用するとは限らない。「気合玉」が撃てなくなった以上、チラチーノではナットレイを見ることができない。意地を張らず、ルリミゾは全力でカビゴンの入ったボールを上に投擲した。
「ボディプレス」
　この重力下ならば。
　カビゴンの押し潰す威力は高まっている。

――ズゥウン！と、大きな大きな地響き。その重量は平常時で約５００kg。

「ナットレイ戦闘不能ッ！」

消耗していたナットレイを踏みつぶして、着地ひとつで決着を。

「ボディプレス」は防御力を活かして攻撃する格闘タイプの技。ナットレイに〝効果は抜群〟である。

「重力！やはりヤロー選手も用意してきていました！」

「しかしルリミゾ選手も対処が速いですね！チラチーノではナットレイが倒せないと見るや、すぐに重力を活かしてカビゴンでナットレイを落としにかかりました。素晴らしい判断です」

ただですね、とカキタ。頭の中に浮かぶのは、ヤローのエース。アップリューは「重力」の発動下で強力な技を持っている。おそらくナットレイは突破されることを予期した上で、ダメ元で重力を発動したのだろう。

「ナットレイがあれほどのダメージを負った時点で、倒される想定の判断を下していたのかもしれません。ヤロー選手はポケモンに痛い思いをさせたくないトレーナーですから『大爆発』こそ使わないものの、次への布石のように見えますね」

「布石、ですか」

「ええ。ヤロー選手のアップリューは、重力発動下で特に強力な技を持っています。しかも、重力下ではポケモンの動きが鈍くなってしまいますよね」

カメラが映したフィールドには心なしか動きづらそうなカビゴン。普段が遅いためあまり差異がわからない。

「……ちょっとカビゴンだとわかりにくいですね」

――そして、カメラが機転を利かせて映したのはルリミゾ。なんとか立ち上がり、苦しそうに表情を歪ませている。

「ま、まあルリミゾ選手はポケモンではありませんが、見るとわかりやすいですね。普段と違う重力は、回避行動を取るのも一苦労です。普段から張り切りすぎて攻撃を外しがちなあのアップリューには嬉し

い状況です」
　ヤローのアップリューは〝はりきり〟すぎて攻撃を外してしまいがち。全身全霊で撃ち込むのが楽しいらしく、ヤローもそれを矯正しようとはしていないらしい。
　と、話をすれば、繰り出されたのは予想通りアップリュー。カキタがニヤッと笑って、メガネが光った。
「やはりアップリュー！流石ですねカキタさん」
　小さな身体に、不釣り合いなほど大きな力。３０㎝ほどの体長だが、ジャラランガ、そしてカビゴンと同じくらいの力を持つ。
　ありがとうございます、とカキタが言おうとした時。
　――実況席からも見えるところから、まるで流星のように飛来する何か。
「これは……」
　アップリューにのみ、使うことのできる技。
　重力下でその威力を大きく増し、「ソーラービーム」と同じ威力にまで至る。
　空から落とされるそれは。
「Ｇの力（ちから）」
　ひとすじ、林檎がスタジアムを貫いた。

51―vsヤロー　メジャージムリーグ⑱

――ドム！

音は、それだけだった。観客が静まり返るほどに勢いよく落とされた林檎の衝撃は、その規模に反して小さな小さな音しか起こさなかった。なぜなら、

「ふふ」

巨体の腹にめり込んでいたから。ルリミゾに動揺は一切なく、ニヤつきながら腕を組んで様子を見守っている。

「グオオオッ！」

グググ、とカビゴンの腹に突き刺さる林檎。勢いは殺せず、未だにカビゴンを潰さんと迫り続けている。相応の負担、ダメージを負いながらも――

ボッ！と一直線。

「カウンター」

「なッ!?避けろッ！」

既に反射された弾丸はアップリューの正面。

捻って芯をズラすが――高速で撃ち返された林檎は、アップリュー自身の首を絞める。

「返したァーーーーッ!?ルリミゾまさかの『カウンター』で撃ち返したーーーッ！」

「素晴らしいッ！」

アップリューの小さな身体は耐久力に優れているというわけではない。カビゴンを一撃で落とすことは格闘タイプ以外にほぼ不可能な一方、アップリューは効果抜群の技や高威力の技ですぐに落とされてしまう。それを活かした「カウンター」。カビゴンの機動力のなさを相手の攻撃で補う、ハイリスクハイリターンな仕掛け。

「まだいけるかい？」

ヤローが心配そうに問う。怪我に繋がりそうならばすぐ退かせるのがヤローの信条だ。バトルで後遺症を残したくないのだ。ポケモ

ンに恨まれようとも、絶対に無理をさせない。アップリューがほぼ戦闘不能寸前であることを察しながら、様子によっては自主的に戦闘不能宣言を出そうと考えていた。

「リューー……！」

鼻息荒く、致命的なダメージを受けながらもアップリューは羽ばたく。闘志は消えず、必死に小さな身体を動かして次の技に備えている。

「……よし！『Gの力（ちから）』もう一回だ」

ヤローの計算では、カビゴンは二度の『Gの力（ちから）』に耐えられない。カウンターできずに力尽きるという予測だ。まさか「Gの力（ちから）」を「カウンター」で返されるなど予想もしていなかったが、なんとか反応したアップリューは一撃で倒れるのを免れた。ヤローはその大きな手で小さなアップリューの頭を撫でながら、戦いへと送り出した。

きらり、と空に一点の光。

「グオッ！」

目視すると同時、カビゴンの巨体が傾いていく。

「ッ!?」

突然の奇行に実況席の二人は声が詰まる。〝戦闘不能〟という四文字が頭を過るが、どう見ても自分から倒れていく様子だった。

「ころがる」

――正体は「ころがる」。

重い身体で動くことは叶わずとも、転がっていくことはできる。ごろ、ごろ、ごろごろ、と勢いを増していくカビゴンだった球体。

「速いッ！林檎が落ちるより先にアップリューへと突撃していく！」

「しかしアップリューも距離を取ろうとして……いや、重力があるのか！アップリューも遅い！逃げられないぞ!?」

高速で接近する球体がわずかに跳ねて、現れたのは拳を振りかぶったカビゴン。その拳に氷を纏いながら。

「冷凍パンチ」

ドラゴン／草タイプであるアップリューには、

「効果抜群、でしょ？」
――ズドン！
「アップリュー戦闘不能！」
カウントは5―3。歓声が止まない。アップリューに駆け寄りボールに戻すヤロー。観客席ではウェーブが起こり、忙しなく旗が振られ、声援が送られている。
その中で。
開かれて澄んだルリミゾの目だけが、静かに在った。

「落とした！カビゴンでアップリューを落としました！エース対決はカビゴンに軍配が上がりました！」
興奮気味にミタラシが実況するが、カキタは違和感に眉を顰めていた。
「静かじゃないですか？ルリミゾ選手」
「……！確かにそうですね。いつもならポケモンとはしゃいで喜んでいるんですが」
カメラが映すのは、淡々とカビゴンに話しかけるルリミゾ。カビゴンは少し困惑したような表情でそれを聞いている。
「凄い集中力ですね……」

（不思議……劣勢だったのにどんどん頭が冴えてくる）
当のルリミゾ本人は、感覚の冴えに表情がついていっていないだけだった。
心境の変化――余裕が生まれたからだろう。「カウンター」、そして「ころがる」からの「冷凍パンチ」はヤローの為に用意した策というよりは、機転を利かせた対処だった。
「――ってカンジね、気を抜かないでいきましょ」
そして作戦を伝え終わってから、カビゴンが心配そうに見つめていることに気が付いた。無心で頭に流れる情報を垂れ流していたため、アップリューを倒した後に喜ぶこともせず、いきなり次の話をし始めたからだろう。いつもなら褒めて、腹をぶにぶにしたりしてコミュニ

ケーションを取っていたのだが。
「ん、ナイスファイトよ」
「ご、ごん……」
「ほら力抜いて！うりうり～！」
つま先立ちで手を伸ばして見上げ、カビゴンの顔をつまんで伸ばす。ぐに～っと伸びる顔に思わず半笑いになりながら。
「作戦はオッケー？」
「ごん！」
「よし！行きなさい！」
カビゴンを送り出したあと、ルリミゾは自身のパフォーマンスの変化に目を向けた。
「――見える」
すべてが。すべてが透き通って見えていた。目を見開いて、右手で髪をくしゃり。視界をクリアに、網膜に焼き付けるように光を取り入れる。
「――聞こえる」
衣摺れ、歓声、息遣い、風。
観客ひとりひとりの顔が認識できそうなほど、目が冴えている。歓声のひとつひとつが聞き分けられそうなほど、耳が澄んでいる。頭の中では、ヤローの残り3匹にそれぞれどう対処するのか、あらゆる状況の想定を組み立てている。
「負ける気がしないわね」
物が上から下に落ちるように。日が昇り沈むように。月が満ち欠けるように。
自らの勝ちが当然と思えるほどに調子が良かった。

「絶好調ですね」
モニタ越しに試合の様子を見ていたアクロマは、そう零した。
ポケモンバトルは、心の勝負である。心と心の勝負ではなく、己の心の調整との勝負である。練習試合で大胆にプレーできたとしても、本番で竦んでしまえば意味がない。上位層とのバトルともなれば、当

然初見の状況は多く、それぞれに対処するために一歩踏み込んで判断する必要がある。

「フェローチェと出会ったからですかね」

カメラが映した、腰に提げたボールを見つめながら。

ルリミゾ自身は全く意識していないだろうが、既に実力はネズやキバナと渡り合えるほどに成長しているとアクロマは踏んでいた。タイプ相性的に不利な相手ながら、調子の良かったサイトウやカブを下した時点で普通は自分の調子に気付くはずなのだが。

・・・

ルンパッパが倒れていく。ダイマックスした巨体が霧散して、元のサイズの丸っこい姿をとって、倒れていく。

「ルンパッパ戦闘不能！」

「3―0、大差をつけて勝利したのはルリミゾ選手だーーーッ！」

「奇策から始まりましたが、振り返ってみれば実力で捻じ伏せた展開でした。入れ替え戦上がりでここまで成長するスピード、とんでもないです」

これでルリミゾは5勝1敗。4勝2敗のネズを抜いて、6勝0敗のキバナの下についている。

「サイトウ選手や、今はマイナーにいるオニオン選手はデビュー時あまり成績が振るいませんでしたよね。この勢いを維持できるかどうか、二週目に期待ですね」

残り一試合、各ジムリーダーが試合を行えば総当たりの一週目が終わる。そのあとジムチャレンジ杯を間に挟んでから、メジャージムリーグの二周目が行われる。

「ジムチャレンジ杯でも期待できそうですね。もしかしたら、チャンピオンとの戦いが見られるかもしれません」

「そうですねぇ。ジムチャレンジといえば、恒例のジムチャレンジャー特集がこの後に控えています。どうぞチャンネルはそのままでお待ちください！」

7～8人の、現在トップを走るジムチャレンジャーたちの特集。ジムチャレンジ杯へ向けて、彼らのバックグラウンドの紹介は欠かせない。ミタラシがそう締めくくりながら、画面がコマーシャルへと切り替わった。

「大差、ねえ……」

控室へ戻ってモニタを見れば、先ほどの試合がそう解説されていた。彼らとて試合の内容が決して一方的ではなかったことを、少しでも何かが違えばヤローの勝利に傾いていたことを理解していただろう。ただ、誇張表現であっても「大差」「捻じ伏せた」と表現されるのはルリミゾにとってモヤッとするものだった。

「ナットレイが突破できていなかったら……。アップリューにカビゴンが落とされていたら……。キリがないわね」

ヤローのパーティは草統一ゆえに、毎試合で少数のポケモンに大きな負担がかかる。カブを相手にするならルンパッパ、ネズを相手にするならエルフーン、と重要な核が存在する。それゆえ、その重要なポケモンを落とせるか落とせないかで大きく試合展開が異なるのだ。ルリミゾは上手く奇策でナットレイを落とせたものの、ポプラやルリナ、サイトウは苦戦を強いられていた。

「まあ、それでも上手くいったのは成長ね」

「勝ちやがりましたか……」

「強いですね……。次の試合、頑張ってください」

ネズさん、とパンクファッションのジムトレーナーが言う。薄暗い、ジムとも呼べないようなその土地で、その主、ネズは静かに笑った。

「迷いは晴れた……というよりは棚に上げているだけですね」

練習試合以来のあの少女。悩みは解消できていないらしいが、それ

がパフォーマンスに影響しないほどにプロとして成熟しつつある様子。いずれにせよ、ネズとのバトルで一切支障がないようで戦うのが楽しみだった。

「何を抱えてやがるのか、知ったことじゃないですが……」

放って置けないのも確かだった。

その優しい気質が、彼女の抱えている苦しみを増やしているとも知らずに。

52―半透明少女関係

【ジムチャレンジャー・ユウリがスパイクタウンジムを突破！いよいよナックルシティジムへ！】

スマホに表示されたニュースをざーっと眺めた後、画面をロックしてソファへ放り投げた。

ユウリの快進撃は止まるところを知らず、序盤よりも勢いを増して進んでいる。ジムチャレンジ杯はまだ1ヶ月近く先だが、この調子では3日後にもナックルシティジムを攻略するだろう。

「ジムチャレンジ杯のタイミングで空き巣……」

――まさに天啓。

ぱっと口から出ただけの発想だったが、この上なくベストなタイミングに思えた。

ルリミゾにとって、ジムチャレンジ杯で戦うメリットはない。勝ったところでジムの順位が上がるわけでもないし、チャンピオンになったところで元の世界には帰れない。チャンピオンへの挑戦権、という普通なら喉から手が出るほど欲しいものも、一切興味がなかった。

「サボってナックルスタジアムの地下を襲えば、誰もいない……！」

チャンピオンも、ジムリーダーも、ジムチャレンジャーも。アクロマの調査により、ナックルスタジアムの地下に何かがある／いることはわかっている。それが巨大な願い星のような物なのか、あるいは強大な力を持つポケモンなのかはわからなかったが、ダイマックスのエネルギーが不自然に発生した円の中心にナックルスタジアムがあるのだ。

「計画を立てるべきね」

折角得た協力者だ。帰るまでこき使わねば勿体ないというもの。常にルリミゾが「強さ」という形で対価を提供している以上、アクロマとの契約は続いている。

「それは……確かに成功すれば帰れると思います。私の機械が間に合

わなければ、そのエネルギー源を盗んでイッシュへ逃亡するという手があります」

アクロマはルリミゾの突飛な計画を肯定した。

ジムチャレンジ杯当日は、全てのジムリーダー、そしてチャンピオンがシュートスタジアムに集まる日。やましいものを隠してると公言できないマクロコスモスからすれば、シュートシティの守りは有象無象に任せるしかないだろう。

「しかし、いいのですか？」

らしくない、やや困惑の混じった瞳でルリミゾを見た。妙な髪形が重力にぴょいん、と跳ねて。

一位になってナックルスタジアムを本拠地にした場合と比べて、あまりにも唐突な別れになってしまう。今まで結んだ友誼や、師弟関係、そしてファン。

アクロマは敢えて直接言わなかったが、人同士の会話に疎いルリミゾでも理解できた。それほどに自らの気持ちを自覚していた表れでもあった。

しかし。

「知らないわよこんな世界の関係なんて……。あたしはギンガ団幹部。最初からジムリーダーでもなんでもない」

帰れるならそれでいい。

断ち切るように、振り切るように言った。

アクロマは何も言わなかった。

「――それでね、カイリキーたちと一緒に洞窟から出られたんだ！」

「無茶しすぎでしょ……」

サイトウのとんでもない修行の無茶に呆れながら、ケーキを口に運ぶ。もはや恒例となったスイーツ店での雑談だが、ルリミゾはそれほどスイーツ好きでもないので飽きつつあった。そのことを切り出した時のサイトウの顔を想像して、何も言わずにいるのだが。

「……ん？」

「どうしたの？」

怪訝そうなサイトウの後方、数席向こうのキャスケットからわずかに見える蒼と黒の髪。そしてその向かいには、明るい茶髪と小さな銀のハートマークたち。ガヤガヤと賑わっているおかげで目立ってはいないが、熱狂的なファンが注視すればバレてしまうような軽い変装だ。

「あれ、ルリナじゃない？」

「えっ!?……って、ルリナ〝さん〟でしょ！」

厳しく育てられたサイトウから小声でお叱りを受ける。慌てて、

「さん」

とだけ付け足したが。

「遅いよ！」

あはは、と二人で笑った。

「このお店人気だしね……。お互い目立ちたくないし、友人さんと来てるみたいだし、そっとしておいてあげようよ」

「そうね」

サイトウは変装していないものの、ルリミゾはバレない程度に帽子を被っている。ちらちらとこちらを見る目があるが、サインや写真をねだることはせず配慮してくれているらしい。

そんな土地柄の良さに、またひとつ心が揺れた。

「あのネズさんと同率2位だ。スゲェよお前は」

ノマが照れくさそうに言う。ジムでの練習では、既に8バッジ相当の実力を発揮している。それでも大会に出場しないのは、ひとえにジムトレーナーという立場だからだろう。

「アンタが望むなら、色んな大会に推薦するわよ」

「あー……お前の出る大会なら出させてもらうよ」

以前ノマは「ルリミゾを倒してから、リスタートする」と宣言した。今では更にそれが遠のくほどにルリミゾが伸び続けているが、ノマも成長しているのは確かだ。距離が開いても、ノマはもう折れない。

「お前を倒して、新しくトレーナーとして踏み出すって決めてるんだ。どうせお前は勝ち上がるだろうからな。いつか当たるだろ。それな

ら目標達成とリスタートが同時にできる。面白いだろ?」
それほどまでに、影響を与えていた。
ファンレターの中には、「勇気を貰った」という子供の未熟な字。
「逆境の中、戦う姿に感動しました」という達筆な文字。様々なガラルの人間が、ルリミゾを慕っている。
ジムトレーナーはルリミゾのアドバイスを得て、日々特訓している。今シーズンでジムトレーナーをやめ、新しくトレーナーとして再挑戦するトレーナーもいる。
「……ええ、待ってるわ」
別れの言葉を飲み込んで、そう答えた。
自らが灯したノマの目の光を、ルリミゾは直視できなかった。

・・・

「帰る……絶対に帰る……!」
魘されるように布団で呟き続ける。私の心が変わってしまわないように。元の世界の思い出が霞まないように、思い出を振り返る。
もう、マーズの顔さえハッキリと思い出せないでいる。
元の世界はどうなっているのだろう。私は心配されているだろうか。アカギは部下を使い捨てるタイプだから、きっと目的のためなら何とも思わないだろう。マーズやジュピターは心配してくれているだろうか。サターンは呆れているだろうか。飛び出した家の両親は、どう思っているだろう。
「うぅ……」
いやな妄想ばかり繰り広げてしまう。
その度に、サイトウの笑顔や、ファンの顔がチラつく。ノマの不器用な尊敬が、カブとの熱いバトルが、ネズ兄妹の愉快さが、ポプラの老獪さが……あらゆるガラルの楽しかった日々がフラッシュバックする。
元の世界に帰るために築き上げたガラルでの立場が、鎖のように心

を縛り付けて離さない。
「騙してきた罰、ね」
口調を取り繕うのをやめて、素の自分を曝け出したのがキッカケだろう。仮面と素顔の境界線が消えてしまった。ジムリーダーとして成長した良心が、帰るための悪行を咎める。バトル以外に何も知らなかった私が、多くの尊敬すべきトレーナーと観客によってたくさんのことを学んだ。
「いっそこのガラルの思い出を忘れられたら……」
そう呟いて、机の上のボールが目に入った。
「……そっか」
知識を司る神がいる。
記憶を消すことなど造作もない。
「忘れられるじゃない」
それは、この苦しみから逃れられる、この上なく甘美な方法に思えた。

53―ヒミツガール・トップシークレット

迷い自体は、ずっと心の奥底にあった。

いずれ去るであろう私が、ジムリーダーとして振る舞うことの意味。多くの人と繋がりを作り、影響を与えることの罪。ずっと試合の間は考えないようにして、楽しんで戦い続けてきた。その代わりにいつも自宅で苦しんでいたけれど。

「……でも、好きになってしまったものはしょうがないじゃない……！」

口に出して、ハッキリと想いを自覚した。私はこのガラル地方が好きなのだ。

「バトルでこんなにも暖かさが貰えるなんて、知らないわよ……」

私が戦う姿で人が勇気付けられるなら。私が戦う姿で人を魅了できるなら。私はもっと戦いたい。光の当たる場所で戦いたい。暗い欲求を満たすために壊して回っていた日々では得られなかった、暖かい喜びがあった。

バトルはいつだって、目的を達成するための手段だった。ギンガ団でいうなら、邪魔者を蹴散らす手段。この世界でいえば、元の世界に帰るための脅しや暴力。それがいつからか、目的に変わっていた。相手と鎬を削り、高め合うようなコミュニケーション、そして私自身の魂の表現に変わっていた。

「だから、忘れるまで真摯でいよう。この大好きなガラルに爪痕を残してやる」

野蛮な衝動と、矛盾する誠実な私が絡み合った歪なカタチ。

やっと自分のカタチを理解して、私は唇が弧を描くのを止められなかった。そうだ。誰だって色々な面がある。私は壊すことも大好きだったし、ジムリーダーとして振る舞うのも大好きだったのだ。

「『ダイマックスを使わないのが本来のポケモンバトル』、ねぇ……」

ルリミゾが手に取ったのは【ネズに迫る！故郷への想いとは!?】と

題された記事。故郷、という単語に思うものがありながらも、縦書きで何ブロックも分けられた、少し読みにくい記事を読んでいく。

中心にはマイクスタンドを持って指示を出すネズの写真。様になっていて、これほど魅力的な人物のホームが寂れているとは思えないほど。

「……町ごと移転!?あのおっさん、とんでもないこと言うわね」

スパイクタウンには、ダイマックスできるパワースポットが存在しない。それが原因で集客も悪く、ネズの強さと裏腹にポケモンバトルが地味であるとか。

そこで委員長であるローズの持ち掛けたのが、スパイクタウンの移転。しかし、ダイマックスが嫌いでしかも故郷を離れたくないネズはそれを拒否。何度かの話し合いの後、ジムチャレンジの開会式にも顔を出さなくなったという。ローズとの冷めた関係はリーグのファンも察しており、ワンマンで強引なやり方の摩擦だろう。

『～♪』

なんとなくネズのCDを垂れ流していたスピーカーは、もう12曲目。人気なのも納得だった。ネガティヴから出発する歌詞は、不安や後悔に直面した人間に突き刺さるのだろう。それでも前を向こうとする様子が、共感を呼ぶのだろう。勇気を与えるのだろう。

「これが、ネズの音楽……」

苦しむ心を、共に苦しんでくれるような。生きていることを、肯定されるような。聴き入って、思わず歌詞カードを開く。粗雑に床に放り投げていたそれを。ツルツルの正方形に近いカタチに印刷された、ネズの魂の言葉たち。12曲目はもう終わって、次の曲までの一瞬の間が空く。

『～♪』

13曲目。最後の曲だ。

それまでとは打って変わって、静かにアコースティック・ギターの音が鳴る。歌い出しも穏やかに、ぽつぽつと語るような曲調で。

『歌で、誰かにエールを送るなんて……』

スピーカーから流れるのは、ネズの歌。魂の一曲のようだ。ライブ

のトリに決まって歌われるらしいソレは、一本のギターによる弾き語り。

『本当はウソだよ……無理だよ……』

「……！」

歓声への後ろめたさ。『本当はウソ』の自分。ネズの苦悩を歌っている筈なのに、ルリミゾの心の奥底を開かれたような気持ちだった。

『だけどそれでも……歌うよ』

尊敬されるような人間ではないのに、歓声を浴びる苦悩。自己肯定感の低さか、それとも劣等感か。少なくとも、ネズが何かと闘っていたのは確かだった。偽ってジムリーダーとして振る舞い続ける少女にも、その歌は響いた。

それでも、ネズは歌うのだ。

それでも、ルリミゾは戦うのだ。

『ささやかな歌を、歌うよ』

そこに、ネズの立ち上がる姿を幻視した。

気が付けば、ルリミゾは立ち上がり外へと駆けだしていた。

「はぁ、『ネズとの試合を放送して欲しい』ということですかね」

ローズはリーグ本部に乗り込んで来たルリミゾに頭を掻いた。アポ無しの突然の訪問であったことについては、オリーヴが射殺さんとする視線を送っていた。直前に入れ違いにアポ無し訪問して、言うだけ言って出て行ったルリナから蓄積したオリーヴのストレスは限界ギリギリである。

「ネット配信だけじゃ満足出来ないわ。テレビもよ」

「しかし、次の試合は――」

「スパイクタウン、でしょ？問題ないわ。あたしが盛り上げるもの」

遮るようにルリミゾが言った。生意気な口調で自信満々に。ダイマックスが無いことは重々承知しているだろう。

「あり得ませんね。ダイマックスの無い試合がどれだけライト層に不人気か。ジムリーダー同士の戦いはダイマックスがあるからこそ興行として成功しているんですよ」

「まぁまぁ、落ち着きたまえオリーヴくん」
眉間にシワを寄せたオリーヴが、口調を強めて言う。相当イラついている様子が見て取れる。
「ですが……」
「ネズに影響でも受けたのかな？」
見透かすような、底の見えない目。１０００年後の未来を見ている、という怪しげな噂が立っているが、真に迫る圧だった。
「きみは何をしても許されると思っている節があるみたいですね。ちょうど青年期に入ったくらいだからかな？礼儀正しいキャラクターを捨てたからといって、野蛮で礼儀知らずであることが許されると思っていませんか？」
ん？と迫ってルリミゾを覗き込む。
「……」
「ポケモンバトルの強さだけで我儘が通せるほど、世界は甘くない」
重みを伴って、大人の言葉が場を支配した。

私は、このバトルの腕っ節だけで全てを解決してきた。ギンガ団でも、バトルの強さで邪魔者を黙らせてきた。ジムリーダーになってからも同じだ。強さで魅せているだけ。
でも、ローズは勘違いをしている。私はバトルしか能のない女だったけれど、今は違う。
「べつにスパイクタウンを哀れんでるわけじゃないわよ」
口から出たのは、そのままの言葉。故郷が寂れていくネズに同情こそすれ、その力になりたいと思ったことは一度もない。
「ただ、ネズ……さん、とは良い試合が出来そうだと思ったの。それだけ」
戦う以外の表現の仕方を知らない。歌えるわけでもないし、絵を描けるわけでもない。だから、私は戦う。
バトルはただの野蛮な争いかもしれない。何も伝わらないかもしれない。怪我をするかもしれない。所詮は選ばれた者だけの領野かもしれない。

それでも、私は戦うのだ。
「だから、『放送して欲しい』なんてお願いや我儘じゃない。あたしは忠告しに来た」
この姿が何かを伝えられると信じて、ジムリーダーになるのだ。
「ルリミゾ　ｖｓ　ネズ、なんて好カードを放送しなくていいのかってことよ」
私の姿を、もっと多くの人に見せたい。表現者としての欲求が生まれた。
「強ければ何をしても許される、とは言わないわ」
以前の私ならそう言っていただろうけれど。
「あたしは魅せたいだけ。寂れたダイマックスの無い町だろうと、それは変わらない」
もう、自覚してしまった。大衆の中に在って、光り輝くジムリーダーとして振る舞う心地良さを。
「――だから、これは宣言。きっと試合を大成功させて、多くの人の心を貫いてあげる。撮れなくて後悔しても知らないわよっ、てね」
それじゃ、と言いたいことを言って出口へと向かった。
「待ちなさ――」
ローズが手で制したのだろう。オリーヴの言葉は途切れていた。
「全員強いのは良いことだが……我が強い人間ばかりなのも考え物ですね……」
廊下を上機嫌に通り抜ける最中、かすかにそんな声が聞こえた。

５４―幸福のしっぽ

コンコンコン、とノックの音が控室に鳴る。リラックスして膝の上で寝ていたチラチーノがビクン！と飛び起きる。その姿がまた愛らしくてルリミゾはふにゃりと笑った。

辺りを見渡せば、上着やら荷物が散らばっている。「少し待って！」と声を張り上げて、片付けてから返事をした。

「はい」

試合時間まではまだまだ余裕があり、時間のコールではないことは理解していた。トラブルか。エール団と同じ格好をした小太りのジムトレーナーの姿を描きながら振り返った。

「失礼しますよ」

黒と灰の髪が先に一束、ドアの隙間から飛び出した。

続いて、ぬっ、と痩せぎすの長身が背を猫のようにして現れる。目元は窪み、色白の――蒼白とも形容できるような――顔には、しかし、確かな意志の強さが表れていた。

ネズだ。

予想外の訪問に、ルリミゾは一瞬口を開けて静止する。間抜けとも呼べるような、背景に宇宙が幻視できるような顔を数秒晒してしまったが、すぐに軽口で会話の主導権を取ろうと試みた。

「なあに？妹ちゃんのジムチャレンジは手を抜いてないわよ？」

「……そんな用件で控室のドアを叩くと思ってやがるんですか」

「違うの？」

「マリィはとうに俺を越えていきましたよ」

結局マリィの話じゃない！とは言わなかった。あまりに大真面目な顔で言うので、本当に言っているのか、ボケなのかわからなかったのだ。

表情に出さないように努めていれば、ネズが一息ついてから本題を切り出した。

「流石に今回、これほど客が集まっていれば気付きます。あのローズ

がスパイクジムでの試合をテレビ放送ですよ?」
　ローズとネズの不仲を知らない人間はいない。ジムチャレンジの開会式さえ顔を出さないのだ。背景を知らずとも間に何かがあることは気がつく。とはいえネズが一方的に苦手なだけで、ローズ自体は試合に価値を見出して放送を決めたのだが。
「知らない話ね。こんな過疎の町じゃ、あたしの観客が少ないから手を加えただけよ。知らない知らない！」
　自分の為にやったこと。そう言わんばかりにルリミゾは手をひらひらと振る。
「そうですか。なら俺も何も言いません」
「急に観客が増えるなんて不思議なこともあるものね～」
「ええ。まったくですよ」
「「……」」
　そうして互いにふっと笑った。

「ここらへんかな……どうぞ！」
　一見ガラの悪そうな風貌の、されど砕けた笑顔で席へと案内される。パンクファッションに身を包んだ迷惑集団として知られていたエール団は、そんな悪名の影もなくあちこちを走り回って観客の案内を続けている。
「ネズさんのバトルは凄いんだぞ～！良い場所でしっかり観な！」
　そう言って、小太りのエール団員は他の観客を席に案内するために去って行った。目立つ格好だったはずだが、盛況ぶりにすぐ姿が見えなくなってしまった。案内されたのは、金網が目の前の特等席。シュートシティへ向かう前に訪れた甲斐のある、素晴らしい席だった。
「楽しみだな！」
　元気そうに、チャンピオンと同じ髪色の少年が言う。
「うん！スタジアムと違って距離が近くていいね！」
「そうだな！でもこんなに人が多いとは思わなかったぞ」
　最速で８つのバッジを集め終えたジムチャレンジャー、ユウリはラ

イバルのホップを連れて観戦に訪れていた。

「こちらです！」

ジムトレーナーに案内されて、フィールド入口に隠れてＭＣの紹介を待つ。ルリミゾは腕を組み、目を閉じてリズムを取っている。

「キルクスタウン、ノーマル専門ジムリーダー！ルゥリィミゾォォォツ！」

気合の入った呼び方に思わず笑いながら、一歩一歩ゆっくりと入場する。ネオンライトは妖しく、これからの戦いにそぐわないようにも見える。しかしこの風土、ネズがなんとか盛り上げて続いてきた土地柄が違和感を打ち消している。栄えていた過去の哀愁を感じさせながらも、そこに活気が確かに残っていることの証明するネオンでもあるのだ。

「ふぅ」

軽く微笑んで手を振りながら位置に着けば、空いた反対側の選手の名前が読み上げられる。ピンク色で着彩されたフィールドは、ルリミゾの水色の髪が目立つ。その主を待つかのように、挑戦者であるルリミゾの水色を拒否しているようだった。

「我らがスパイクタウン、悪タイプ使いの天才！」

奥の方、ステージの袖から歩いてくるのは。

「哀愁のネズッッッ！」

束ねた髪を揺らしながら、その長身を丸めながら。肉付きの悪い長い手足が、余計に不気味さを強調する。白い上着が熱狂を受けて揺れる。

落ち着いていられず、ルリミゾは挨拶代わりに軽口を放り投げた。

「観客が多くてビビっちゃった？」

金網越しに多くの観客。立ち見だけでは席を確保できず、急遽段々のスタンドが建てられるほどに人が集まっていた。天井が近いせいか、余計に密集して感じられる。空調を全開にしても追いつかず、辺りの店のドアや窓を開けて換気を行う始末。そのぶん熱気は凄まじく、ヒシヒシと期待が伝わってくる。

観客と選手を隔てるのは、障壁もなく金網一枚だけだ。その距離感が、更にルリミゾを昂らせていた。歓声が直に、会話すら聞き取れそうなほどに近い。

ライブ会場としても使われるフィールドは、ちょうどルリミゾの反対側にステージがある。機材は全て片付けられ、ネオンでスパイクジムのシンボルだけが光っている。

「思ってもないことを言いやがりますね。オマエが浮ついてるようにしか見えませんよ」

「あはは！ずっと楽しみだったからね。はやく始めましょう！」

「落ち着きのない……」

そのやり取りが終わるのを見て、審判が旗をもって開始の合図の準備をする。ネズはマイクスタンドを構えて、ふぅと一息吐いた後。

「俺は悪タイプポケモンの天才、人呼んで『哀愁のネズ』……！」

哀愁。寂れてく町にしがみついて、戦い続ける姿が悲しいのか。それとも、他の意味があるのかはネズは知らない。ただ、自嘲気味に、いつの間にか広まっていたその呼び名を名乗るだけだ。

「この町を背負って、歌って戦っている……！」

歓声が更に大きくなる。スパイクタウンの住人総出の応援が高まっていく。

「この町の為に！行くぜェーーーーッ!!スパイクタウン!!」

左手はマイクスタンドを握ったまま、右手からアンダースローでダークボールを投げた。燃料が投下されて一層熱くなる歓声と、一転して静かになったルリミゾが対照的だった。

「名乗るほどの呼び名なんて持ってないわ」

マイクに乗った静かな声は、これだけの音に埋もれることなく。むしろ歓声を制さんとするほどに通っていた。

「でもまあ、一応名乗るなら」

属すべき故郷など、遠い世界の話。今はただ、一人のキルクスタウンのジムリーダーとして。

左右の金網を順番に見て、最後に背後の観客を見て。

「キルクスタウンジムリーダー、ルリミゾ」

自分を示す。バトルはいつしか自己実現の手段となっていた。それで人が魅了されるかどうかはわからないが、戦う姿を示したかった。この暖かい世界に、何か返せるものがあるのなら。

「ぐふ！」

全力で投擲したモンスターボールから、相棒とも呼べるポケモンが飛び出した。

５５―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⑲

「ちょっと臭うけどいいよなァ？スカタンク！」
　気力なさげに投擲するフォームとは正反対に、がなるようにネズが叫ぶ。同時に現れるのは、紫と白の毛が特徴的なポケモン。むん！という擬音が似合いそうな丸まったω状の口と、頭の上まで乗っかる尻尾に見え隠れする目元がギラついている。
「きゅおおっ！」
　着地と同時、ぶおお！という音と共に流れ出したのは悪臭を放つガス。「毒ガス」という何のひねりもない、生態を活かしただけの技である。しかし、狭いフィールドで撒かれたガスはチラチーノの行動圏を大きく狭め、スカタンクに有利なフィールドを作り出している。
（クサすぎでしょ……！まともに吸ったら気絶するわよこんなの……！）
「下がれ！」
　ルリミゾ、チラチーノともに鼻をつまみ、顔をしかめる。

　ルリミゾたちが主従揃って同じような行動をしたのを見て観客が笑っていられたのも束の間。
「くさっ!?」
「こっちまで届くのかよ!?」
　多すぎる観客の大半は初めてスパイクタウンで観戦する人間。金網しかフィールドと観客席を隔てるものがない以上、スカタンクの放った悪臭は観客たちにも届いていた。

「穴を掘る」
　ルリミゾの意図を即座に汲み取ったチラチーノが、フィールドの地面へと潜っていく。ガスの無い場所は、空か地中か。ルリミゾが選んだのは地中だった。
　地中からであれば、ガスの影響を受けずに攻撃することができる。

が、
「穴の入り口に『毒ガス』！」
スカタンクの長所は、ただ毒ガスが出せるだけではない。
時には５０メートル以上もの超射程へ届かせることのできる噴出力だ。そしてその精度は、トップクラスのトレーナーによって鍛え抜かれている。より効果的な毒ガスを出せるよう、食事から管理されている。
すべては勝利のために。
「ッ！」
ぶしゅうう、とチラチーノが掘った穴へとガスが放たれていく。
「穴を掘る」のメリットは、攻撃の主導権が強制的に奪えること。「地震」や何かしらのアイデアで地中に攻撃できない限り、必ず先手を打つ権利が奪えるのだ。
しかし、もはや先手の権利は腐らされつつある。ガスが届くよりも先に地上の安全圏に出るか、それともガスの中へ無理矢理飛び込んで攻撃するか。じっくり機を伺いテンポを取り返すための「穴を掘る」が完全に無効化されている。選択を迫られている。
――もしもこの場に解説のカキタがいれば、そう評しただろう。
しかし、チラチーノは単に主導権を握るためだけに地中へ潜ったわけではない。
「最も大切なのは、相手へのリスペクト。『きっと対処してくるだろう』と、常に相手の研鑽を想定すること！」
熱に浮かされたルリミゾが語る。
「残念ながらガスは効かないわ！」
けほけほ、と大仰に話す反動で咳込みながら。
「地中から出るつもりがないから、蓋をすればおしまい！入り口から注いでもガスは届かないわ」
完全な密閉。出て攻撃するつもりがないという。
地中に籠る行為は遅延の反則を取られかねない。訝しむネズだったが、続くセリフが聞こえると同時に叫び始めていた。
「そのガス、可燃性だって聞いたわ！」

スカタンクは「火炎放射」を使うことが出来る。ガスへ引火させて、噴き出すように炎を出すのだ。スカタンクのガスはよく燃える。
そして今、地上に充満しているガスはスカタンクを中心に大きく広がっている。
「ッ！『守る――」

「かみなり」

バン！と、本や映像で見るよりも衝撃的な音だった。
季節はずれの落雷が、地上のガスに火を点けた。
爆音に次ぐ爆音。ゴウ！とフィールド上を爆風が踊り、金網をガシガシと揺らす。観客が一歩下がるほどに熱がフィールドを包む。ネズの白いジャケットがはためく。
そして、爆風で乱れた髪をかき上げながら。
歯を見せてルリミゾが笑った。

「地面に入ったのは、爆風から逃げるためだったんだな……！」
ホップが目をきらきらさせて言う。大迫力の熱波が観客席にまで届いて、観客は大きく盛り上がっている。その声量に負けじと大声でユウリに語り掛けていた。
「『霧払い』の使えるウォーグルに先手で交代すれば、交代際に毒を当てられたりするリスクもあるし、ストリンダーが裏にいる。だからチラチーノで対処する必要があったんだ」
ぽつぽつと早口で考察するユウリの声は、不思議と他の騒音のどれよりもハッキリと聞こえた。そして、ホップの至らなかった視点まで目が行き届いていた。
「お、おう……そこまで見えてるなんてすごいぞ」
えへへ、と笑うユウリだったが、ホップは自分が一歩遅れていることを自覚せずにはいられなかった。たったひとつの試合観戦。ジム

チャレンジャーとして出発する以前はホップが試合を解説していたのに、今では差を見せつけられるばかり。
「……2位争いはやっぱりすごいな！」
「ほんっと来て良かった！」
顔をはたいて、雑念を振り切って。
ライバルと一緒に目の前の試合の観戦を楽しむために、フィールドへ目を向けた。

「ぐふ」
ぽこ、と地中から頭だけを出して辺りを確認した後、チラチーノが這い出る。
フィールドはあちこちが焦げ、隅に置かれていた三角コーンはとうに吹き飛んでしまっている。壁に叩きつけられたスカタンクは痛手を負ったものの、なんとか復帰した。まだ戦える体力である。しかし状況が変わったことといえば、ガスが晴れてしまっていること。
「ロックブラスト！」
間髪いれずにルリミゾが指示を飛ばす。ガスを出す余裕を与えたくないからだ。
一方、ネズはマイクスタンドへ向かって大きく叫ぶ。
「お返しだッ！『穴を掘る』！」
スカタンクは地面に巣穴を作る習性がある。「穴を掘る」は種族として得意な技能だ。地中というアドバンテージは高く評価するトレーナーも多い。相手に交代や積みのチャンスを渡しても、それだけ「穴を掘る」は強い。
「ッ……」
一瞬の逡巡。
チラチーノを引くべきか、居残るべきか。
スカタンクが「穴を掘る」で地中にいる今、ガスを払うことのできるウォーグルへと交代するチャンスである。その一方、裏にいるストリンダーが厄介だ。
「正面だけ警戒！背後はあたしが見る！」

選択したのは居座り。
死角を狙った攻撃こそ、トレーナーとの連携した対応が試される。
どこから来ようとも対応できる、そう考えてスカタンクが現れる場所を注意深く探すルリミゾだったが、ボコ！と地面が複数盛り上がって硬直する。
ボコ！ボコ！ボコ！
明らかに一匹ではないように見える地面の盛り上がり。チラチーノの正面、横、後ろ、全てに穴が増えていく。
（何よ……？実体のない影分身じゃこんな芸当はできない。複数盛り上がるなんて……）
チラチーノは地中でガスを回避し、反撃した。であれば、スカタンクは地中に潜って何をするのか。そこまで考えたとき、答えが見えた。
「――ッ！地中からの毒ガス！」
「正解ッ！そのまま食らってくれよな！」
同時、シュウウウウウ！とあちこちからピンクの毒ガスが噴き出してくる。それと同時、ゆっくりと土の中から満足げにスカタンクが現れる。一歩、二歩と安全圏へ毒ガスを吸い込まないよう下がりながら、ルリミゾは叫ぶ。
「蜻蛉返――」
「不意打ち」
チラチーノの渾身の蹴りが突き刺さる瞬間、スカタンクの爪による一撃が交錯する。
ルリミゾが狙ったのはダメージを与えながらの交代「蜻蛉返り」。しかしネズはそれを読み切って「不意打ち」を指示していた。
「やってくれたわね……！」
なんとかチラチーノは「蜻蛉返り」でボールに戻ったものの、毒を吸い込み、「不意打ち」の一撃をもらっている。ルリミゾにとって想定以上の痛手だった。
（焦りで崩せるのはこの一回きりですかね。ムカつきますがすぐに立て直しやがるでしょう）

逃げ場のない毒ガスで判断を急かし、やっと入れることのできた一撃だ。一度も毒を食らわずにスカタンクを完封しようと試みるのも納得できるほど、チラチーノは仕上がっている。あのチラチーノとスカタンクの対面で毒を入れ、さらに一撃攻撃を当てられたのは自分だったからこそだろう、とネズが思うほどだった。

ばっ、と大きなモーションでルリミゾが上にボールを投擲。

「ウォーグル！」

軌道の頂点、自由落下を始める直前のボールから飛び出たのは、飛行タイプであるウォーグル。ガスを晴らしながら羽ばたいている。

スカタンクはあと一撃で沈むほど。ネズの理想としては、このままスムーズに戦闘不能になって交代すること。スカタンクが倒れるギリギリまで粘り、次のポケモンを安全に繰り出すことが理想だ。撃ち合いを二回できればベストだが、おそらく残りの体力からして一撃を受ければ倒れてしまうほどだろう。そう予測してネズは攻撃の指示を出した。

「また熱いぜ！客席は気を付けな！『火炎放射』！」

目を向けた先、ルリミゾは一瞬思案する表情を見せたあと、すぐに人差し指で狙いをスカタンクへ向け指示を出していた。

「吹き飛ばし！」

「ッ!?」

強い、強い風が火炎ごとスカタンクを飛ばさんと吹き荒れる。

「火炎放射が……！」

あまりの風圧に、スカタンクの火炎放射は大きく軌道が逸れてしまっている。ウォーグルに届かず、空を切るばかり。

本来、「吹き飛ばし」は後手に回ってしまうほど発動に時間のかかる技だ。相手に先手を許すほどに、風の発生に時間がかかる。ルリミゾの指示より先に準備していたとしても、火炎放射をはねのけるほどのパワーはない。

ネズは気付いていたが、ルリミゾに悟られているのは予想外だった。

「この広いフィールドを埋めるほどの毒ガスを二回も繰り出したらど

うなるか！」
　――ガス切れ。
　本来スカタンクは、外敵から身を守るために臭いのある液体を出す。腹で熟成するほど威力を増し、食べたものに質が影響される。そして出し続けるにつれて臭いが弱まるという性質がある。
　リザードンの火炎放射のように、ほとんど常に撃ち続けることのできるような攻撃手段ではないのだ。ましてやガスに変換し、二度もフィールドを埋めるために使った。なんとか「火炎放射」を放つことはできても、「吹き飛ばし」に対抗できるほどの勢いがない。
「きゅおっ!?」
　脚が地を離れた瞬間、スカタンクはボールへと吸い込まれていく。
　そして。
　ネズの腰のボールがガチャガチャと鳴り、無作為に次のポケモンが引きずり出される。
「クソッ……！」
　悪態をついても、強制交代は止められない。ストリンダーを安全に着地させるハズが、違うポケモン――開いたボールの位置からして恐らくタチフサグマ――を引きずり出されてしまった。
　常に一緒に戦っているネズ本人ならともかく、一度も刃を交えていないルリミゾがスカタンクのガスの限界を見極めているのが、ネズは不思議でしょうがなかった。
「誘爆のケアかな……？」
「あのスカタンクは誘爆だったぞ！多分『吹き飛ばし』は誘爆のケアとストリンダーの牽制両方だな！」
　漏れ出ているガスを、今際（いまわ）の際（きわ）に爆発させる性向。直接攻撃が主なウォーグルにとっては厄介な特性だった。それを回避しながらストリンダー以外を引きずり出せたのだから御の字だろう。観戦していた二人にとって予想外だったのは、「火炎放射」が「吹き飛ばし」に負けるほどの出力だったこと。
「なんでスカタンクは攻撃ごと吹き飛ばされたんだろう……」

「たぶんガス欠だぞ！」
「ガス欠？」
聞きなれない言葉にユウリが聞き返す。
「スカタンクは元々あんなにガスで満たせるほどガスを出せるポケモンじゃないはずなんだ」
それは、ポケモンが大好きだからこそ知っていたこと。ネズと戦う前に何度もポケモン図鑑を見て、少しでもヒントを得ようとした経験値。
「バトルの為に必死に鍛えたんだと思うんだぞ！でも二回もフィールド全体にガスを張って限界ギリギリって感じだな」
「……すごい！私全然そんなこと知らなかったよ」
ユウリは純粋に感心していた。ホップはチャンピオンの顔に泥を塗るような弟ではない。ホップはホップとして、一人のポケモンが大好きな少年なのだ。
「でも、ルリミゾさんもそれを把握して『吹き飛ばし』を指示したってこと……？」
「「……」」
「あの人が知識として持ってたのか、それともポケモンの生態に詳しい人を雇ってるのか……」
「バトルの戦術とポケモンの生態、両方勉強したら頭がおかしくなりそうだぞ……」
金髪に青色の妙な髪形の男が、どこかでくしゃみをした。

５６―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⑳

「大きく、大きく飛べ！」
ルリミゾは気持ちを表すように叫び続ける。そうすれば、何か振り切れるような気がした。
ウォーグルは閉じられた天井ギリギリまで上昇していく。
「『ブロッキング』にビビんなくていいわ！好きなように戦いなさい！」
選んだのは、ポケモンに判断を委ねた近接戦闘。
高速で接近と離脱を繰り返し刺し合う戦いにおいては、ルリミゾの指示によるウォーグルの迷いが致命傷になり得る。相手のプランを見抜き、狙いを共有することがこのマッチアップでのルリミゾの仕事だ。
（『ブロッキング』で崩されたとしても、ウォーグルなら攻めっ気が増すからそこまで損じゃないわね）
「ブロッキング」は「守る」と同系統の防御技。大きな違いは相手の防御を崩すことができる点だ。それがウォーグルの「負けん気」のトリガーを引く。「ブロッキング」を介した攻防を重ねるにつれてウォーグルの攻撃力は研ぎ澄まされ、一方で防御が甘くなっていく。
「防御が下がるってったって……ねぇ？」
攻撃が当たれば、困るというだけのこと。
「全部避ければ関係ないもの」
全幅の信頼を添えて。
タチフサグマを指さし、攻撃開始の指示を出した。

（少し考える必要がありますね）
ネズにとって厄介なのは、タチフサグマが「ブロッキング」を撃てば、ウォーグルは「負けん気」で攻撃性が上がるということ。スカタンクがもうほとんど使い物にならない以上、カウントは実質４―５でネズが不利だ。いくらウォーグルの防御を下げられたとしても、タチ

フサグマを突破されてしまった場合のリスクが大きい。攻撃性の極めて高くなった状態のウォーグルを場に残してしまうからだ。

「でも、まァ……」

攻撃が当たれば、困るというだけのこと。

「全部避ければ関係ないですね」

ネズの最も長い相棒であるタチフサグマが負けるわけがない。上手く攻撃をいなし、防御を崩し、甲高い唸り声を聞かせてくれるだろう。

飛行タイプのポケモンだけが持つ有利――空中に位置取れるという有利――は限定的なものである。空中で様子見を続けてしまえば、飛行タイプに対処できるポケモンへの交代の隙を与えてしまう。

故に、ウォーグルは攻め続ける必要がある。

「手を緩めなけりゃ何やってもいいわよ！危ないときだけ指示出すわ！」

「クァア！」

ルリミゾの叫びに負けじと、ネズもマイクをキンと鳴らしながら叫ぶ。

「掴まれないようになッ！防御よりも受け流しだァ！」

「ぎゃおお！」

ネズが警戒するのは、車さえ持ち上げるほどのウォーグルの力。アーマーガアタクシーが主流となる前は、ウォーグルが運び屋をしていたことすらあるほど。個体による血の気の多さ、仕事の荒さに問題があり、その座をアーマーガアに奪われた話は有名である。

しかし、タチフサグマ側も無策ではない。

「ちょっと痺れるぜェ～！『雷（かみなり）パンチ』だ！」

いつもの癖を出しながらも、歌うように叫ぶコールに観客は沸き立つ。

「やっぱり覚えさせてたわね……！」

ネズの悪癖。

それは昂って技を叫んでしまうこと。しかしそれが欠点とはなら

ないほどに、ポケモンの動きが洗練されている。そしてまた、繰り出される技がわかってもどうしようもないほどにバトルは高速である。

（『雷（かみなり）パンチ』自体は予想できてる。崩し方もシミュレーションしたし、ウォーグルとその共有もしてる。戦い方自体に指示は必要ないわね）

ゴオ！とルリミゾの耳から鼓膜までを風が貫いて音を立てる。

正体はウォーグルが起こした「暴風」。スカタンクを吹き飛ばすほどの風を発生させられるウォーグルならば、タチフサグマの体勢を崩すほどの風を起こすことも可能である。後ろに立っているルリミゾはほとんど影響がないものの、ネズの髪は揺れ暴れ、スタンドを掴んで顔を顰めている。

「クァ！」

起こした風に乗ってウォーグルが距離を詰める。

「姿勢を低く、地面を掴め！」

タチフサグマはその本能から、最適解を実行していた。

四足で移動していた頃のように手を地につけ、風の影響を最小限に。左手を突き立て、右手を後ろに強く引き技の構えを。バチバチと音を立てて雷が右手に集まっていく。

その体勢を見て、はじめてルリミゾに焦りが生まれた。

（――まずい！体勢が崩せてない撃ち合いならリーチで負けるッ！）

ウォーグルが繰り出すであろう技は「インファイト」。武器として使うのはその強靭な脚だ。上空から高速で攻撃するという性質上、普段であれば近距離の撃ち合いで問題ない。しかし、タチフサグマにはまるでネズのような長い腕がある。

先に攻撃を当てられてしまえば、加速した勢いが殺される上に、そのままウォーグルに返ってくる。

タチフサグマは体勢鋭く、研ぎ澄まされた集中でウォーグルの動きを見ている。迫り来る両脚を見ている。そこから放たれる「インファイト」が届くよりも速く「雷（かみなり）パンチ」での先制を狙っている。

（手を変えるしかない！）

・・・

――ルリミゾが出した答えは。
「アイアンヘッド！」
「！」
咄嗟。
タチフサグマの目の前で勢い付けられたウォーグルの脚がカクンと引き。
叫ばれた技名にハッとしたタチフサグマが視線を上げれば。
突き出し始めていた雷の右拳よりも先に。予測していた攻撃の瞬間よりも先に。
バゴン！
鋼の如く硬化された頭突きが命中した。
「――ッ！」
ぐらり、とまるで人間のようにタチフサグマがふらつく。右手の雷は霧散して。
星が、白い明滅が視界に現れて意識が一瞬吹き飛ぶ。「アイアンヘッド」という技の強さだ。
頭への強い衝撃で、まれに相手の意識を飛ばしてしまうほどの技。
タチフサグマは　ひるんで　うごけなかった！
「タチフサグマッ！」
「ぎゃおッ!?」
ネズのシャウトで我に返るも、既にウォーグルは離脱して空中に戻っている。
「ナイス！最高よ！」
「くぁ」
一瞥。すぐにルリミゾから目を離し、再び正面を向いて飛んでいく。
「そのまま攻勢！交代の隙を作らないように！」
「……」
流れを指示したルリミゾに対して、劣勢のネズは何も言わずに見守っている。不気味ですらある沈黙に、ルリミゾはとにかく思考を巡

らせる。何を狙っているのか明らかにするために。
（特に指示するまでもないってコト？タチフサグマが自分で修正すると思ってるのかしら）
ウォーグルは既に急降下して攻撃に転じていた。タチフサグマは腕をクロスさせ、大きく息を吸い込みながら。
「崩されてもいいけど追撃のケア！」
「――――！」
すう！と音が聞こえるほどの予備動作。
――大音量でのシャウト、そして腕をクロスさせての防御姿勢。それが「ブロッキング」というタチフサグマ固有の防御技の正体である。
ルリミゾも、ウォーグルも「ブロッキング」を疑わなかった。ノーマル／悪タイプであるタチフサグマには「インファイト」が抜群に、それこそただの弱点では済まないほど効果抜群に効く。
ウォーグルが「インファイト」を撃てば「ブロッキング」で対処する。そうすればウォーグルは柔らかく、鋭くなっていく。そこからはどちらが一撃を入れるかの対決だ。そう、相互了解で撃ち合うと確信していたのだ。
ただ、見逃していたことは。
――ネズには、アンコールがないということ。
「俺たちに再演はない！みんなも叫んでくれッ！」
ルリミゾが知る由もないが、ネズは引退を覚悟してこの場所に立っている。
いまやその言葉は、不退転の決意を示しているのだ。次のない、ジムリーダーとしてのバトルなのだ。
「――『ハイパーボイス』！」
「オオオオオオッ!!」
地面が揺れる。建物が揺れる。身体が揺れる。
金網が騒ぎ立てるように揺れ、観客が危なげに波打つ。
鼓膜どころか身体全体をビリビリと震わせるほどの声量。攻撃を妨げるどころではない、破壊を伴った咆哮。
身代わりすらも貫通し、どこに隠れようとも破壊を与えるその咆哮

は、ウォーグルの全身を揺さぶりダメージを与え続けていた。
「ウォーグルッ!!」
想定していなかった攻勢に、ウォーグルの体勢が大きく崩れる。羽ばたきが不安定になり、ふらふらと揺れる。あらゆる音は消え、プツンとそれきり。目は霞み、勘のみで滞空を成立させていた。
「前!避けろ!」
主の声も聞こえず。
タチフサグマが空中で姿勢を崩したウォーグルへと大きく飛び上がり、右拳に大きな雷を携えて。
準備は万端。ウォーグルのダメージを確認した瞬間に、叫びながら右手に雷を集めていた。
バツン!
殴打の衝撃とは思えないような、落雷そのものの音が落ちた。

・・・

「ギャオオオオッ!!」
タチフサグマが黒焦げた中心で咆哮を上げる。
「ウォーグル戦闘不能!」
そのジャッジと同時、エール団から「ハイパーボイス」と大差ないほどの大きな大きな歓声が沸き起こった。

――それは、ガラル全土を貫いた雷だった。
普段は配信されることのない、スパイクタウンでの試合。「ダイマックスがない」というマイナスイメージを抱いて、なんとなく視聴していた人々を突き刺した。
「……」
マクロコスモスの副社長・兼社長秘書は、窓から見える飛行船のスクリーンに映ったそれを一瞥して再び業務に戻った。
街行く人は立ち止まり、口を開いてスクリーンを見ている。普段の放送と違う、ネオンに照らされた暗いフィールドと元のサイズのポケ

モンたちが映っていた。けれども、じっと、ダイマックスでもないその戦いのワンシーンを見守っていた。

彼らには、不意に立ち止まって見たそのシーンが山場なのかどうかわからなかった。

ただ、ダイマックスしているわけでもない、暗いフィールドで行われているそのバトルから目が離せなかった。

57―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⊠

油断、慢心、不足、どれもウォーグルとルリミゾの間には無かった。
そう、ルリミゾ自身確信していた。
ただ、あの瞬間はネズとタチフサグマの方が強かっただけ。
その事実を認めるのに、トレーナーのプライドが邪魔をした。試合中に相手の強さをリスペクトすること、その難しさ。これから打ち倒す相手の強さを認めるという矛盾する行い。ルリミゾは数度、頭を掻いて、くしゃりと髪をかきあげて。
「……流石、ね」
なんとか称賛を落とした。
思い通りにいかなかった苛立ちに顔が熱くなる。ぎりり、と歯が鳴る。それでも、自覚しているだけ成長したと自嘲しながら、「ふ」と「ほ」の間のような溜息を口から吐き出した。後続を繰り出さないルリミゾを怪訝そうに審判が見る。
「時間いっぱいまで使わせてもらうわ」
苛立ちも溜息に乗って吐き出されたようだった。目を数秒閉じれば、熱が引いて心が鎮まっていく。
「イエッサン」
今なら、誰よりもイエッサンのパフォーマンスを引き出せる。
そんな妄想のような不思議な確信があった。
ポケモンバトルにおけるルリミゾとその手持ちの戦闘スタイルは、ルリミゾのワンマンである。ルリミゾの冴えがそのままパーティ全体のパフォーマンスに影響し、勝敗に直結する。その形が最も勝利に繋がるとルリミゾの手持ちのポケモンは信じている。そしてまたルリミゾ自身もポケモンの力を十全に発揮させられると考えていた。
「イエッサンだな！」
「タイプ相性じゃ不利だけど、裏のズルズキン、ストリンダーに刺さるね。タチフサグマも一応消耗してるから、上手くやればルリミゾさん

が一気に逆転しそうなマッチアップだね」
　見かけだけではダメージの蓄積は判断できない。バトル経験の少ないユウリは、観戦ひとつでも目を養うためにダメージの蓄積を推測する癖をつけていた。
「消極的な選択に見えるぞ。他のポケモンを選べない状況だよな？」
「ウォーグルが倒されたから、『捨て台詞』や『ブロッキング』が元の強さを取り戻したもんね。バイウールーやカビゴンじゃ後続に圧もかけにくいし有効打もない。チラチーノは毒をもらってるから時間稼ぎをされるとつらい。だからイエッサンしか残ってないって感じかなぁ……」
　互いに理由を並べても、やはりイエッサンしか選べない状況に思えた。ウォーグルを落とされたというのはそれほどに重く、裏のズルズキンの「威嚇」でさえも脅威を取り戻している。
　しかし、それでも。
「自信満々な表情だぞ……」
　吊り上げた口角、挑戦的な瞳。
　金網越しでもそのギラついた表情がはっきりと見えた。

　前回の結果は相打ち。しかし、タチフサグマが消耗した今、ルリミゾとイエッサンが共に磨かれた今なら。
「距離をキープすること！あとは練習通りに！」
「俺達以外は黙ってろ！『地獄突き』ッ！」
　音を立てながらタチフサグマが駆ける。ネオンに照らされて妖しく影が生まれる。イエッサンは下がり、それを追うタチフサグマ。縦長のフィールドをどんどんと詰めていく。牽制に放つのは三属性の攻撃「トライアタック」。タチフサグマは手刀でそれらを振り払いながら迫る。
「追い続けろ！」
「あと１０歩で壁！牽制しながら下がれ！」
　追って、退いてを繰り返して数秒。ついに壁際まで到達する。ルリミゾの状況報告を信じてイエッサンは一度も振り返らなかった。

「トライアタック」
そして一瞬の溜めのあと、ひときわ強く光って攻撃を放った。
「無視して貫けッ！」
手刀に悪のエネルギーを集め、光を浴びながらも突進を続けるタチフサグマ。
ウォーグルに対する迎撃の姿勢から、ネズのこの試合への姿勢がなんとなく読み取れていた。そして今、この強引な押しで確信した。
（やっぱり無茶を通してくる……！かなり強気ね）
「そう何度も通すかっての……！」
傾向が掴めれば、潤沢な手札からいくらでも攻め立てることができる。
「イエイッ……！」
バゴ！と鈍い音。
トライアタックを中断、回避に全力を注いだイエッサンはタチフサグマの突きを紙一重で避けた。右の手刀は壁に突き刺さり、左の二撃目を既に振りかぶっている。大振りのそれは、この上なくイエッサンが技を放てるタイミングだった。
両手を突き出して、大仰な詠唱。
「一撃で仕留めろ！撃たせるなッ！」
ネズの指示に、タチフサグマは全力を左腕に篭める。
「地獄突き！」
「トライアタック」
炎、雷、氷の三位一体の攻撃。そして、喉を潰す悪の一撃。
それぞれが衝突する。
・・・
先に崩れたのは――
「タチフサグマッ！」
制御を失ったように、不意に筋肉が跳ねるタチフサグマ。まるで感電したような、筋肉の収縮。
しかし、戦闘不能のジャッジは上がらない。
（……麻痺か）

「ちょっとシビれるでしょ？」

トライアタックは炎、電気、氷を操る攻撃である。被弾すれば身体が灼け、凍り、雷に撃たれる。とはいえ、三属性を調和させて放つ「トライアタック」自体に直接状態異常を引き起こすほどの偏ったタイプの力はない。当たり所が悪ければ、火傷したり痺れたり、凍ってしまう程度だ。

「何度も、何度も食らいながら突っ込んできてくれたおかげよ」

（たんなる技の撃ち合いで先に落とせたら有利になってたけど、それでもしイエッサンが落とされたら本当に取り返しがつかなくなる。当て続けて状態異常を引き起こして、安全に倒し切らないと不利の挽回にはならないわね）

イエッサンなら、最低でもタチフサグマの足を遅らせることができるだろうという判断だった。実際は状態異常になるのが想定よりも遅く、ギリギリでの麻痺だったが。

「いーかげん倒れろ！『マジカルシャイン』！」

全身の筋肉が意図に反して動く不快感に、しかし表情も変えられず痺れている。壁際から既に抜け出したイエッサンが余裕をもって狙いを定める。

その瞬間、観客は目撃した。

ネオンの妖しいピンクを打ち消す、ファンシーな優しい桃色の光の中で動いた黒色を見た。

マジカルシャインを全身に浴びながら、その不自由な身体を全力で動かして。

「根性見せろよ！タチフサグマァ！」

・・・

「タチフサグマ戦闘不能！」

結果として、その突きはイエッサンを倒すに至らなかった。

しかし倒れたタチフサグマの数歩先、イエッサンも同様に傷を負って倒れていた。「マジカルシャイン」を貫いて放たれた「地獄突き」がヒットしたのだ。

（ムカつくくらい強かったわね……）

倒れていたイエッサンは、よろりと起き上がり、ルリミゾへと歩いていく。自身の状態が戦闘継続可能か診てもらうためだ。

ダメージがかなり蓄積しているように見えた。

「戦える状態ではあるわ。でも喉を潰されてるわね……苦しかったらやめてもいいわよ」

「……！」

戦闘可能。ならば答えは一つ。

鳴き声は出せなかった。それでも、力強く一度、頷いた。

「わかった」

ふわふわとした頭を撫でて、目を合わせて微笑む。

「もう一匹持ってくわよ！」

「……！」

痛みを代わってやることはできない。ただ見て声を飛ばすだけの立場、それがポケモントレーナーだ。

「頑張れ」の気持ちを込める。感情を察知するイエッサンには、声よりも何よりもそれが伝わると思ったからだ。

カウントは４―４。スカタンクはほぼ戦闘不能、チラチーノとイエッサンも大きく消耗している。予想外にタチフサグマに暴れられたものの、ネズの象徴ともいえるポケモンを落とせたのは大きい、とルリミゾは考えていた。

「羽ばたけ！バルジーナ！」

ルリミゾは思い知る。

このガラルという土地で、ダイマックスせずに立ち回るということ

の意味を。
エースが先に倒れることが、何の意味を持とうか。変わりなく、ただ五匹のポケモンを従えて戦っているだけだというのに。
常に柔軟に。常にカバーを。ダイマックスという戦いの目玉を盛り下げてしまうほど揺らがないメンタルを。街一つを背負って戦う男の強さを。

５８―ｖｓネズ　メジャージムリーグ⊠

「ふーん……バルジーナね」
ルリミゾはネズの選択を訝しむ。
ネズのパーティにおいて、バルジーナはストリンダーのカバーが主な仕事である。地面タイプとエスパータイプに弱いストリンダーの相性を補完する目的で、過去の試合ではストリンダーと交互に相手を翻弄していた。
（ポケモンが倒された後の、フラットな状態で繰り出すような役割ではなかったはず……）
違和感。
腕を組み、右手を顎に当てながら。さながら探偵のようなポーズで考えられる可能性を脳内で虱潰す。
「……」
その間、３秒。眼光はバルジーナを捉えたまま、一挙動も互いに動かないまま風が吹くのを待っている。

「なんでバルジーナなんだろ……？」
ユウリが疑問を口にする。少しでもポケモンバトルを観戦している人間なら、誰でも覚える違和感だった。
「でもネズさんが判断ミスするようには思えないぞ」
「だよね……戦闘不能の後の繰り出しだから考える時間もあったし」
バルジーナは攻撃よりも防御が得意なポケモンである。「羽休め」や「どくどく」「イカサマ」といった絡め手で持久戦を強いることで知られている。ネズのバルジーナもそれに違わず、これまでの試合で何体もの物理主体のポケモンを沈めてきている。
だからこそ、特殊攻撃主体のイエッサン相手に繰り出す理由がない。物理主体のカビゴンとチラチーノがまだ残っているにもかかわらず、バルジーナをイエッサンに当てる理由がないのだ。起こるかもしれないストリンダー対カビゴンのマッチアップの引き先としての

役割も残している。
「わっかんないなー！」
プロの考えることはわからない。
「何が狙いなんだろうな……！」
目を輝かせながら、ホップはフィールドへ向き直った。

「揺さぶりのつもりね」
ルリミゾが出した結論は、敢えてバルジーナを出して揺さぶりをかけてきているだろう、ということ。
（イエッサンの方が素早いから、順当に戦えばイエッサンが先手を取る。そこでフェアリータイプの技を撃たれてもバルジーナは一撃じゃ倒されない。狙っているのは……後攻での『蜻蛉返り』！）
消耗しているイエッサンに対して「蜻蛉返り」は効果抜群の技。イエッサンは落とされてしまうだろう。先手で無理な攻めに出た場合、返しで放たれる「蜻蛉返り」を回避することは難しくなる。そうなればイエッサンを倒されたうえに、無傷のストリンダーの裏にバルジーナという最悪の状況が生まれてしまう。
（一見弱い手に見えたけどいやらしい一手……）
イエッサンにかかる負荷は大きい。ここで上手くバルジーナを消耗させられなければ、ストリンダーの処理ができなくなる。場の流れからして、やる気に満ち溢れ継続戦闘を望んでいたイエッサンを下げるのは躊躇われる。そこまで計算に入れられたバルジーナの繰り出しだったのだ。
（エースを落とされたのに冷静ね）
無表情にマイクを握って隙を晒さないネズの顔が憎らしく見えた。
交代か、それともこの策の中での継戦か。
「……相手の攻撃を見切ってから攻撃。それに徹しなさい」
「……イエイ！」
イエッサンを尊重しての居座り。ここでイエッサンを下げれば、頂点まで熱された闘志が冷めてしまう。
「『マジカルシャイン』の準備だけして、反撃に専念」

イエッサンは光りながら、攻撃を回避できるように姿勢を低くする。マジカルシャインを高威力で放つために溜めているのだ。
不気味なほどに、ネズとバルジーナは動かない。
見つめ合う。
一手一挙動を見逃さないように空気が張り詰める。
見つめ合う。
瞬(まばた)きの一つもなく、見つめ合う。
見つめ合う。

――そして、永遠にも思えるほどの対峙のあと、一陣の風が吹いた。
ルリミゾは、ネズの口が動くよりも速くに声を出そうとした。
――来る。
ネズの動きよりも、その気迫が何よりも次の攻撃を語っていた。
「ッ！」
言葉が出なかった。何が来るのか、予測はついていた。どう対処すべきかも浮かんでいた。
しかし、言葉という伝達手段はあまりにも遅く、トレーナーとポケモンを隔てていた。
「仇(かたき)討ち！」
執念が迫る。

「仇討ち！」
「イエッサン避けれるか!?」
直前に味方のポケモンが倒されていなければ使えない技「仇討ち」。その威力は「破壊光線」とほぼ等しい。それだけの力を身に纏って、バルジーナが進む。風を切り、歓声を切り、イエッサンを倒して仇を討つために。
「間に合わないッ！」
ホップが叫ぶ。
イエッサンは回避ができるように注意を割いているものの、恐ろしい速度で迫る「仇討ち」は避けられない。立ち止まった状態からの瞬

発力があるポケモンではないからだ。

「あッ……」

ユウリの声が詰まった。なぜなら、ポケモンが指示を待たずに動き始めていたから。

イエッサンというポケモンの特性。

それは、角で人の感情を察知するというもの。

「イエイッ……！」

言葉は届かずとも、察せることがある。感情の揺れひとつで、培った信頼関係が教えてくれる。ルリミゾがどんな指示を出したかったのか。どんな攻撃が飛んでくるのか。

――ガキン！

両手を前に突き出し、防御を展開。

独断でマジカルシャインの準備を即座に放棄し、バルジーナが届くよりも先に「守る」を繰り出していた。

「……ッ！マジカルシャイン！」

褒める言葉よりも、喜びの感情よりも。

その信頼関係に応えるための反撃の指示が、ルリミゾから即座に出された。

（厄介ですね）

「仇討ち」を放つまでにネズが長い間を取ったのは、バルジーナを繰り出した意図を探らせるためだった。上手く意表を突いた「仇討ち」を放てたものの、咄嗟に対応されたことでネズの作戦は裏目に出てしまっている。

ピィイ、と「マジカルシャイン」を被弾したバルジーナが忌々し気に鳴く。

ネズは相手を動揺させて、読み合いの勝負に持ち込むことが強みだと自負している。ダイマックスがないことも予測不能の強みに変換している。しかし、対応されてしまった今、動揺を狙った手は悪手と

してネズに返ってきていた。
頭を掻きながら、次の一手を考える。依然、無表情にペースは崩さないまま。内心を少しも表に出さずに呟いた。
「大丈夫ですよ」
バルジーナに声を掛けたあと、マイクを強く握って大きく息を吸い込んだ。

「とにかく後手、この流れを維持するわよ」
「イエイ！」
予想外の「仇討ち」に肝を冷やしながらも、乗り切ったことに安堵する。バルジーナから独創的なプレーは飛び出さない。警戒すべきは「蜻蛉返り」や悪タイプの技だけだ。
「……ふぅ」
バルジーナの挙動にただフォーカスして、待ち続ける。再度「マジカルシャイン」を準備しながら。じりじりと歩を続けつつも、距離は保って冷静に――
「バルジーナァ！」
「ッ！」
一人一匹、身構えたその瞬間。
バルジーナの姿が消える。赤くその姿が光り、モンスターボールへと吸い込まれていく。
「やられたッ！撃ち込め！」
交代。
バルジーナの名を大きく叫んだことが、一手も間違えられないルリミゾ達の警戒を誘った。着地後の隙を狙い、イエッサンは準備していた「マジカルシャイン」を放つが――。
ギュィイイイイン！
ギターの如き轟音。胸の突起を掻きむしってストリンダーが現れる。
効果はいまひとつ。
首を傾げ、煽るように顎を持ち上げるストリンダー。ローで寒色の

身体は、しかし熱をもってルリミゾを焚きつける。
それに合わせてエール団がブブゼラや打楽器を鳴らしてスタジアムを染めていく。歓声と楽器、そして金網が揺れる音。全てが混ざり合って熱狂を形作る。
「効いてないアピール?すぐに潰してやるわよ」
ルリミゾの啖呵が透き通って聞こえた。

「あの気迫で交代するとかわかんないよ……」
大きな声でバルジーナの名を呼べば、技が来ると思い込む。今までのネズの行動を逆手に取った交代だった。ルリミゾ側に傾きつつあった流れが、再びネズへと揺り戻されていく。
「でもバルジーナがダメージを受けて帰っただけだぞ?ネズさんの方が損しただけだよな?」
事実として、イエッサンはダメージを受けておらず、バルジーナが効果抜群の技を一度受けただけ。ネズは奇抜な一手が裏目に出て大損している。しかし、ホップが自分の状況理解に自信を持てないほど、ネズとストリンダーは悠然と構えていた。
「うん……ルリミゾさんが上手く返してるんだけど、なんだろうこの雰囲気……」
勢い、流れ、雰囲気。そんな言葉で表される、有利不利と違った何かがネズの味方をしていた。

いやな感覚だ。
何をしても相手の掌の上のような錯覚。アウェイだということを承知でルリミゾはこの退廃のネオンまみれのスタジアムに立っているのに、それでも全身に敵意が纏わりついてくる。観客席との近さが感覚を狂わせる。熱心なファンの多さは歓声の大きさを決める。
まるで耳元で鳴っているかのようなブブゼラの大合唱。打楽器が心拍数を乱すように鳴り、ストリンダーはそれに乗って音を奏でてますます調子を上げている。
(ここでストリンダーを落とせないとかなり不利になる……。相手か

ら見たイエッサンも同じね。だからバルジーナで上手くやって詰ませたかったんだろうケド……）

”舐めてんの？”

一瞬脳裏に浮かんだ言葉に血が沸騰しそうになる。冷静さを取り戻したのは、ネズの揺さぶりの一環であることを推測したからだ。バルジーナでイエッサンが倒せれば、ストリンダーに対して強く出られるポケモンが少ないルリミゾは一気に不利になる。タイプ相性こそ有利であれ、イエッサンの方が素早く、特殊攻撃による遠距離攻撃の手段を持っている。素直に最初からストリンダーで勝負していれば、傷を負ったイエッサンを押し切れるはずだったのだ。

「サイコキネシス」

タイプ相性は有利。ただ、種族としてわずかにストリンダーの方が特殊攻撃に長けている。つい先ほど見えた絆が冷えないうちに、ルリミゾは攻撃の指示を飛ばした。

言葉が耳に届くよりも先に、イエッサンは攻撃を始めていた。

「スパイクのお前らと一緒になァ！せーの！」

ネズが右手を大きく掲げる。一瞬で黒とショッキングピンクが静まる。

息を吸い込む。

「「『爆音波ァ』！」」

エール団は必死に叫ぶ。まるで自分が戦っているかのようにネズを見ていた。

観客を煽り、味方につける。独りで試合に没入するルリミゾとは対極の戦い方だった。

「……！」

それは、肌で直に感じたジムリーダーの在り方。

ストリンダーが大きく右手を振りかぶり、音を出す胸の突起に向けてスイングするのがスローに見えた。まるでギターを弾くように、衝動を叩きつけるように。

――ガラルのジムリーダーであるということは、スターであるということ。ロックスターを兼業しているネズは、とくにその側面が強い。地域の熱狂的なファンに支えられ、盛り上げ、力をもらう。そしてファンに熱を返す。ネズが行うバトルは興行であり、真剣勝負なのだ。

エール団はネズに救われ、ネズを救っている。辛いときにネズのバトルを見て勇気づけられ、ネズが辛いときに応援をする。相互一体の関係性がそこにあった。

ルリミゾにとって、バトルはトレーナーとポケモン達だけがぶつかり合う舞台だった。観客は、それを近くで見守ることができるだけの存在だと思っていた。しかし、ネズとエール団の関係性は違ったのだ。「応援が聞こえる」のではない。「ファンと一緒に戦っている」。それがネズとファンの関係性を表すのにふさわしい言葉だった。

〝いいな〟

ルリミゾはそこで、初めて〝憧れ〟を見た。見出してしまった。対戦相手に抱いてはいけない感情。それを抱いてしまった。

――ならば、天秤が傾くのは道理。

「イエッサンッ！」

気付いた時には、全てが遅かった。

地面に転がるイエッサンと、戦闘不能を示すカウント　4―3の文字。審判の戦闘不能宣言も聞こえないくらい、熱狂がネズに味方してルリミゾを絞めつけていた。

「……？」

手ごたえのなさにネズは首を傾げる。突然、イエッサンとルリミゾのパフォーマンスが落ちた。「爆音波」の次の一手を準備していたネズにとって、イエッサンがクリティカルに被弾して一撃で倒れるのは拍子抜けの展開だった。

「戻れッ……！」
倒れて動かないイエッサンをボールに戻す。私の動揺は収まらない。
自分でも気付かなかった心に気付いたときほど、心が乱れることはない。ああ、ゆっくり考えられる自宅で気付けたならよかったのに。不甲斐ないと思う気持ちが止められない。
「ふー……ッ！」
無理矢理大きく息を吸って吐く。アクロマに教えてもらったメンタルコントロールを試みる。土壇場で落ち着くためのルーティーンだ。
「……よし」
頭の片隅に、抱いた夢の欠片を仕舞い込む。そんな場合じゃないんだ。
「ルリミゾ選手、次のポケモンを――」
「わかってる！」
審判の催促を食い気味に返す。ちょっとよくない態度だったな、なんて思いながら。今は試合に集中したいんだ。
「カビゴン！頼むわよ！」
ポン！という軽快なボールの解放音とは反対に、重い音を立ててカビゴンが着地する。スパイクタウンが揺れる。ちょっとそこらの建物が軋んで、金網が倒れてこないか少し気がかりになったりして。
「……」
カビゴンが重い身体をゆっくりと動かして私の方を見る。
「大丈夫か？」と言外に問うているような視線だった。親戚のおっさんがいたらこんな感じなのかな、なんて思うくらいに人間臭い仕草だった。不甲斐ないメンタルでイエッサンを落としてしまったから、その心配は当然だった。
「うん、大丈夫よ。心配かけたわね」
のっそりと正面を向くカビゴン。マイペースなくせに、ふとした気遣いがこそばゆかった。

もう、大丈夫だ。
これからのこと、やりたいことなんて後でいい。今は戦うことだけに集中するんだ。

５９―ｖｓネズ　メジャージムリーグ☒

カビゴンとストリンダーが相対する。ルリミゾとネズのカウントは３―４。

ちらり、と状況を示す電光掲示板を見ながら、ユウリが呟く。

「ルリミゾさんのカビゴンは『厚い脂肪』だし、ストリンダーとバルジーナから『どくどく』を撃たれるとちょっと苦しいかもしれないね……」

歓声の中で小さく発せられたユウリの呟きを、ホップの耳が拾う。

そういえばファンだったな、なんて思いながら。

カビゴンの特性はたいてい「厚い脂肪」である。炎タイプや氷タイプの技に強く、よりパーティ内でのタンクとしての役割が果たしやすいからだ。残りの特性は『免疫』と『食いしん坊』。あらゆる物を食べるために毒への耐性がある『免疫』と、木の実を早めに食べる『食いしん坊』だ。『食いしん坊』はその希少性から、『免疫』はあまりにもピンポイントすぎる能力から、バトルにおける個体数は少ない。

そもそもカビゴンという種族自体、食糧費や生活スペースの関係からプロの試合以外ではまず見られないポケモンである。

「それならネズさんの選択肢は『どくどく』をどっちのポケモンで撃つかだな……」

「うん。ストリンダーに効果抜群の『地震』は避けたいだろうしバルジーナに交代するのかなあ」

電気／毒タイプのストリンダーに地面タイプの『地震』は抜群以上に効く。一撃で落とされてしまう可能性すらあるだろう。

「でもそれを読んでルリミゾさんも『冷凍パンチ』を撃つかもしれない……だから逆に居座って……」

「結局本人たちの間にある空気、気配、そういうのの読み合いになると思うぞ」

ぐるぐると思考を回し始めたユウリにストップをかけて、ホップはそれを少しでも感じ取るために両者を観察し始めた。

今、主導権は間違いなくルリミゾに揺り戻っている。
なぜならカビゴンは特殊耐久に厚く、ストリンダー相手にはどっしりと構えることができるから。バルジーナやズルズキンへの交代を行えば、重たいカビゴンからの一撃は避けられない。ストリンダーで避けて削る戦いをするか、それとも一撃をもらう前提で有利なポケモンへ交代するか。その選択をネズに強いていた。
しかし、流れはネズのもの。鳴り止まないコールと、楽器たちはネズへの期待を加速、爆発させ続けている。ストリンダーもそれに乗って音を奏で続けており、ネズもまた大仰な演技で更に盛り上げていた。
(勢い付いて転んでくれるとありがたいんだけど……)
大仰な身振り手振りとは裏腹に、ネズの瞳は少しも油断を残していなかった。
「単に勝負して倒すだけじゃ不利ね」
ネズの残り4匹は、ダメージの蓄積したスカタンクとバルジーナ。そして、無傷のストリンダーとズルズキン。対してルリミゾの残りは無傷のカビゴンとバイウールー、負傷したチラチーノの3匹。
(毒を負って突破しても先が苦しい……)
ストリンダー対面のシミュレーションは何度も繰り返している。動きの遅いカビゴンは、リアルタイムの指示よりも事前に策を組み立てる方が強い。具体的な技の指示がなくとも、既にカビゴンの頭の中にはストリンダー相手の立ち回りが叩き込まれている。もちろん、活躍した場合の褒美のごはんも。
「カビゴン、アレやるわよ」
「……ぐお!」
だから、ルリミゾは奥の手を切る。本来は、耐久ポケモン同士の戦いになった場合の奥の手を。
「行けッ!」
肌をビリビリと振るわせるような轟音の応援も、マイペースな巨体には通じない。少しもパフォーマンスを落とすことなく、カビゴンが

ドスドスと接近していく。
「迎え撃て！『アシッドボム』！」
「オオオオオッ！」
カビゴンが吠える。距離の離れたまま、大きく足を持ち上げて。
――ネズの判断は、正しかったといえる。カビゴンの特殊防御をがくっと下げる『アシッドボム』を撃ちながら後退すれば、いくら特殊に厚いカビゴンとはいえストリンダーの攻撃を何度も耐えられなくなる。脅威である『地震』も、じゅうぶんに距離を取れば回避できると踏んでいた。
見過ごしていたのは、ネズと同様にルリミゾにも後がないということ。
「『地割れ』」

一撃必殺

「……そう、来ましたか」
しん、と静まり返る会場。ぱち、ぱち、とまばらに始まったルリミゾへの拍手が、より一層状況の歪さを際立てていた。ストリンダーの音も、楽器も、歓声も止んだ。
スパイクタウンの破壊者だけが、その水色の髪を揺らして堂々と立ち。
「これで同数、でしょ？」
あはは、と笑いながら。
「ストリンダー、戦闘不能……！」
やや遅れた審判のコールがその後を追った。

「『地割れ』を使いましたか」
モニタを眺めながら、アクロマが呟く。
通常、一撃必殺の威力を誇る技は上位では好まれない。耐久型のポケモンへの対策として使用されることはあれど、７割の確率で失敗す

る技は、多くの試合をこなすプロの試合ではリスクが高いのだ。自分の実力に絶対の自信を持つトップクラスのトレーナー達は、運に勝負を投げずに、自分の力で戦うことを好む。

だからこそ、ルリミゾのこの一手はアクロマにとって意外だった。誰よりも自身に満ち溢れ、常に不遜な態度を崩さないルリミゾが、3割に身を投げたのだ。

「正面切って戦っては勝てないと判断したんですね」

対戦相手を認めるということ。それも、相手を格上と。

間違いなく、ルリミゾの精神的な成長の表れだった。

気を取り直したネズがマイクを握る。同時、ジムトレーナー達やスパイクタウンの住人も慣れた様子で準備を始める。ドラムが先行して、その他の楽器はスタンバイを。

「やっとのお出ましだァ！ズルズキン！」

その叫びをきっかけに、再びスパイクタウンが騒がしくなる。ズルズキンの『威嚇』でカビゴンの勢いは衰え、ふたたびルリミゾ不利の対面が始まる。タイプ相性からして、ルリミゾのパーティの天敵だ。『負けん気』でカウンターの取れていたウォーグルを失ったため、対処が困難になってしまっている。

（さっきは不意だから『地割れ』が決まったけど……ズルズキン相手じゃ外した瞬間に詰みね）

まるまる一度の行動を消費するデメリットは大きい。当然、相手が警戒している状況で当てられるほど『地割れ』は簡単な技でもない。バイウールーに退くか、カビゴンで戦うか、その選択を迫られている。

それも、ズルズキンが既に駆けだした状況で。

「『アームハンマー』ッ！」

選択したのは、迎撃。

両拳を祈るように合わせて、頭上から大きく振りかぶる。巨体の全体重を乗せられるように準備動作を。

「『飛び膝蹴り』」

勢いよく飛び出したズルズキンの膝蹴りと、カビゴンのアームハン

マーが衝突する。肉体同士のぶつかり合いは、衝撃波も激しい音も起こさない。

鈍く、低い音が一度鳴るのみだった。

双方ダメージなし。

「追撃だァ！」

ネズの指示から始まる格闘戦。カビゴンは、元々格闘戦の経験値が低い。対してズルズキンは格闘タイプも含まれるほどに格闘戦が得意である。

波に乗るように、ドラムのリズムに乗って拳と蹴りが繰り出される。風を切るように素早く、そして重く。

カビゴンは腕で防御を試みるも、図体の割りに短い腕では全身を守り切れない。

「弾け！カビゴン！」

はっとしたようにカビゴンは、ぐぐ、と腹に力を籠める。カビゴンの防御が上がる。

「『気合パンチ』！」

それを隙と見たネズが叫ぶ。

まるで武道家の演舞のように、耐える体勢のカビゴンと、正拳突きの構えを取るズルズキンが立つ。裏には不似合いなパンクロックが流れながら。

衝突の瞬間は、当のズルズキン以外の誰からも不意に。

拳が動くと同時、ルリミゾは叫び始めていた。

「カビゴンッ！」

巨体が吹き飛ぶ。

まるで鞠のように、柔らかな丸い肉体が壁に激突して地面が揺れる。フィールドが軋む。ネオン灯が明滅して、看板か何かがギイと嫌な音を立てた。スパイクタウンに初めて訪れた人間は心配そうに自分の頭上や辺りを見回す。

それでも、ルリミゾは笑っていた。

「――よく耐えたわね」

カビゴンが覚えるなどとは、誰も知らないだろう。アクロマの研究

で気付くことができたのだから。防御が一段階上がったのは、攻撃の準備。甲羅を持つポケモンが主に使うそれは、高威力な一方隙のある技。仕切り直すのには最適で、防御を厚くしたうえで高威力の攻撃を放つそれは。

防御姿勢を取ったあと、反発でロケットのように飛び出すことから、こう呼ばれる。

「『ロケット頭突き』」

ネズが見たのは、視界の端を横切る何かだけだった。

「ッ!?」

マイクを取り落としそうになるほどの衝撃で咄嗟に振り返れば、転んだような体勢のカビゴンと、その数メートル先に倒れるズルズキン。そこから推察されるのは、渾身の『気合パンチ』を受けたはずのカビゴンが、何か、おそらく強力な攻撃を繰り出したということ。

「『ロケット頭突き』。覚えるなんて知らなかったでしょ?」

勝ち誇った表情でルリミゾが言う。カビゴンはむくり、と起き上がって追撃の『アームハンマー』を構える。

「……お喋りは勝ってからだろ?『飛び膝蹴り』!」

「どのみち結末は決まってるじゃない!『アームハンマー』!」

ルリミゾの啖呵に反して。

カビゴンの体力は限界を迎えつつあった。ズルズキンの攻撃に晒され、防御が上がったとはいえ渾身の『気合パンチ』を腹に受けてしまっている。普通のポケモンであればとうに戦闘不能に陥っているのを、その種族としての強さと、鍛錬によってなんとか立っている状態だった。

ズルズキンとて渾身の一撃を被弾したのは同じ。しかし、効果抜群の一撃を被弾したカビゴンとは文字通り倍の差がある。

だから、踏み込みが一歩遅れたのは仕方がなかった。

「カビゴン戦闘不能!」

『飛び膝蹴り』が一手、先にカビゴンに突き刺さった。振り上げた拳

は力なく、そのまま巨体と共に崩れ落ちる。ズルズキンが着地する姿は、まるで敵を倒した主人公のようで。

カビゴンをボールに戻して、バイウールーのボールに手を掛ける。どれも装飾の付けられていない赤と白のモンスターボールで、ルリミゾの戦闘以外への関心の薄さを表すような淡泊さだった。しかし、それはまた、先代のジムリーダーに彼らが簡単に打ち解けたことを示すモンスターボールだった。

戦いの果てに投げるハイパーボールでもなく、和解を示す赤と白のモンスターボール。それが何よりもノーマルジムのポケモン達の気性を示している。

「おつかれさま。回復したらカレーでも作ってあげるわ」

そうやってカビゴンのボールに語り掛けると、ボールが少し、震えたような気がした。

「戦いにくい相手だけど……頼んだわよ」

バイウールーを繰り出す。

裏に残るのは、毒にやられダメージを負ったチラチーノ。2―3の数的不利を覆すためには、チラチーノへの負担を最大まで軽くさせることが必須だ。だから、バイウールーの役目に多くは求められていない。

バイウールーは、ダンデのリザードンのようにはなれない。バイウールーが敵のポケモンを一撃で戦闘不能にすることは、おそらくこれからもありえないだろう。複数のポケモンを連続で戦闘不能にすることも、ありえないだろう。

それでも、最上位のポケモントレーナーがメンバーに選ぶ理由がある。頼る理由がある。

「メェェ」

プロとして戦うトレーナーが従えるポケモンもまた、プロフェッショナルなのだ。

ルリミゾとバイウールーが対戦相手のビデオを見ていた日のこと。連日のトレーニングで疲れ果てていたルリミゾは、バイウールーの毛

に埋もれたまま眠りについてしまう。
「ふぁ……」
欠伸をしながら、寝落ちしてしまったことをぼんやりと思い出しているルリミゾの横で。
バイウールーは繰り返し再生されたビデオを見続けていた。本来、草原で穏やかに暮らす種族のバイウールーのなかで、彼だけは、ただ戦闘のことを突き詰めていた。
「……トレーナー失格ね」
バイウールー自身が、種族としての限界を知っている。だから、バイウールーは高望みをしない。夢を見ない。ただ、自分にできる戦い方で、ルリミゾの勝ちへ貢献しようとする。闘争とは縁遠い種族でも、彼は戦うのだ。

ぺっ、と唾を吐き捨てたズルズキンが『挑発』する。バイウールーの『コットンガード』を封じるためだ。防御がぐぐーんと上がるため、直接攻撃が主体のズルズキンにとっては非常に厄介な技である。
しかし。
「その程度の安い『挑発』には乗らないわよ。『コットンガード』！」
バイウールーは動じない。
手負いとはいえ、ズルズキンと殴り合って勝てるなんて思い上がらない。バイウールーにできるのは、相手の攻撃を受け流すこと。道具アリのバトルでは、メンタルハーブといった道具を使えば、精神が安定して『挑発』や『アンコール』といった精神に揺さぶりをかける技の効果を打ち消してくれる。しかし、メンタルハーブも無しに、バイウールーはその強靭な精神で『挑発』を意に介さず行動していた。
「メェ！」
もふもふが増す。それと同時にバイウールーの防御がぐぐーんと上がる。
『挑発』は、うまくきまらなかった。
「もう一度」
「舐めるなッ！仕留めろ！」

ズルズキンが『気合パンチ』を構える。が、それを無視するかのように再び『コットンガード』を積むバイウールー。
もう顔も見えないほどに、毛が溢れて膨れていく。
「顔にヒットさせろ！」
通常時であれば、露出している顔が急所になる。それは当然、毛の量を増やした今でも当てはまる。
顔（が隠れていると思われる場所）へ向けて拳を叩き込むズルズキン。連続で、何度も繰り返し叩き込み続ける。手応えがなくとも、何度も、何度も。
「『バトンタッチ』ッ！」
すべては、最後の希望に託すため。
戦闘不能になる寸前、ズルズキンの拳がクリティカルヒットして朦朧とした意識の中で、バイウールーは確かに聞こえたトレーナーの声に従った。

バイウールーが戻ったボールを見て、ルリミゾが言う。
「……この子は戦闘不能よ。もうほとんど意識がない状態だったと思うわ」
『バトンタッチ』が発動できたのが奇跡と思えるほど、致命的な攻撃を受け続けていた。後続に全てを託すために力を使い果たしたバイウールーを、たとえ立てたとしても戦場に出す理由はもうない。
そう、文字通り全てはチラチーノに託されたのだから。
「残りの三匹、全員持ってくわよ」
「ぐふ」
『コットンガード』を二回分引き継いだ、手負いのエースが再び降り立った。

ガラル地方メジャージムリーグ第7ラウンド、ルリミゾ　ｖｓ　ネズ。

ルリミゾ　0―1　ネズ

勝利者、ネズ。

60―罅

「陽が落ちるまでには戻ってきてね」

そう言ってポケモンたちを野放しにして、ルリミゾは伸びをする。程よい木の根元に腰を下ろし、木漏れ日を浴びながら欠伸をした。空は青く澄んでいたが、試合明けに散歩するほどの気力はルリミゾになかった。

ここはワイルドエリア、うららか草原。街から近く、ワイルドエリアのなかでは最も人が多い地域である。リーグスタッフも常駐しており、駆け出しのトレーナーや散歩気分で訪れる一般人も多い。比較的温厚・友好的なポケモンが住んでいるのもその理由だろう。

「ぐふ」

「アンタは行かないの？」

「ぐふー……！」

ルリミゾの肩から離れないチラチーノ。好物であるチイラの実を齧りながら、不満そうな顔を隠そうともしない。

それも当然。チラチーノは負けず嫌いだからだ。

チラチーノの最後の一撃は、ネズのバルジーナに届かなかった。毒が全身にまわり、あと一歩のところで力尽きてしまったのだ。チラチーノは少しの間を置いた後に起き上がり戦闘続行の意志を示したが、ルリミゾは治療のために棄権を選択した。

その日の晩は、それはもう凄まじいものだった。家じゅうの家具をひっくり返し、ルリミゾの顔に貼りつき、チイラの実を貪り食い、それでようやく落ち着いて不機嫌になった。

「まあ、気持ちはわかるわよ」

今すぐバトルなり訓練なりをしたいのだろう。しかし、ここで技を振り回すには人やポケモンが多く、戦うには温厚でレベルの低いポケモンたちばかりだ。

同じく負けず嫌いなルリミゾとしても、チラチーノが頬を膨らませている気持ちはよく理解できる。気を抜いてリフレッシュすること

が、負けの悔しさを忘れるようで一歩を踏み出せないのだ。
ウォーグルは温厚なポケモンたちを怖がらせないように、荒野へ飛び立っていった。バイウールーは辺りで日向ぼっこを。カビゴンはジムにて、ご褒美に用意した食事をひたすら食べている。イエッサンはルリミゾの隣で穏やかに寛いで。
みな、気分を切り替えるために好きなことをしているのだ。プロであるルリミゾたちは、計画的に心身を整えてバトルに臨まなければならない。勝つこと、ファンを集めることを求められている手前、根を詰めて不調になることは許されない。
「なんだか……」
大人になったみたい。
口にこそ出さなかったものの、成長なのか、諦観なのかわからない感情がこみ上げてくる。予定に縛られ、感情を律して動く。誰だって倒せる自信はもう消えて、現実的な計算の上で動くようになっている。
いま、間違いなくルリミゾは成長している自信があった。ネズにこそ僅差で負けてしまったけれど、次戦えばキバナもネズも倒せる自信がある。それは根拠のない、あの時抱えていた全能感から来るものではなく、実際に戦ったからこその自信だ。不思議と、もう、チャンピオンを倒せるとは思わなかった。
いかにチャンピオンと遭遇せずに目的を達成するか、と考えている。
「ふふ」
まだ頬を膨らませているチラチーノがまるで昔の自分のように見えて、ルリミゾは曖昧に笑った。
誰にだって勝てる、なんて考えているのだろうか。
「ねえチラチーノ」
「？」
ごくん、とチイラの実を飲み込んで、首を傾げる。愛らしい奴め、なんて思いながら。
「辛いことは忘れない？」

「……ぐふ！」
嫌だ！とでも言うような鳴き声。
「あたしはバトルで人を魅了したい。戦って勝つ、その姿で人に元気を与えたい。最近気付いたんだけどね」
「ぐふ」
それは、いつからか抱いた願い。もうすぐそこにある夢。ガラルのジムリーダーとして活動を続ければ、その地位は得られるだろう。帰られないことを抜きにすれば。
いつまでも恩人を眠らせているわけにはいかない。もう、引き金は引かれている。
「でも、もう後には退けないの。だから、忘れるしかないみたい」
「……」
ジムのポケモンたちには、ルリミゾの計画を伝えていない。連れ出して、「故郷に帰りたい」なんて同じ気持ちを抱かせたくなかったからだ。
「なんでもないわ。ちょっとキャッチボールでもしない？」
「……ぐふ」
チラチーノは何かを察したような、悲し気な表情をした。
それから一人と一匹は、キャッチボールをした。

「お疲れさま。ありがとね」
「クァ」
ウォーグルに掴まっていた手を放して、私はキルクスジムの前に着地する。滑らないよう細心の注意を払って、少し格好を付けながら。辺りには誰もいなかったけど。
陽がちょうど夕に変わるくらいの時間、雪は止んでいた。
ずっとウォーグルの脚を掴んでいたから、肩と腕が疲れて怠い。ぐりぐりと肩を回しながら、ジムの自動ドアをくぐる。ぶわっと暖房の温かい空気が纏わりついて、さっきまで触れていた外気が他人みたいに冷たく感じた。
「ニュース見たか？この前の試合がすげえ反響だってさ」

ちょうど近くにいたノマが開口一番にスマホを見せてきた。もちろん私も知っている。エゴサもしたしニュースも見たから。

でもなんだか、その話をするのは気恥ずかしくて、無理矢理話題を変えた。

「ま、当然ね。トレーニングは順調だった？」

「おう。ジムチャレンジ杯が終わったら負かしてやるよ」

ジムチャレンジ杯までの日程は、調整するためにジムトレーナーとの模擬戦を控えるように決めた。エネルギープラントの視察や、計画を煮詰めるために使うからだ。

いつも通り、何度負かしても自信に満ちたことを言う。まるでそれが習慣のように、何十回目のリベンジを宣言する。そのくせ毎度本気で勝つつもりで、戦術を練ってくる。

私が灯した火だ。バトルで私が直接点けた火。それが今、かえって私を焦がす。

「……いいわよ、またボコボコにしてあげる」

嘘をつく。ジムチャレンジ杯、それが、計画の実行日だ。

「ちょっと急いでるから、カビゴン回収してすぐ出るわ」

「あいよ。じゃあまた明日な」

「ええ」

カビゴンを回収してから、私はノマと顔を合わせないようにしてジムを出た。

61―新しい、いのち

カーテンの隙間から差し込む光が強くなる昼過ぎ、それでもまだ薄暗い部屋で寝息がふたつ。外の寒気とは反対に、暖房の効いた室内は暖かい。鳥ポケモンの少ないキルクスでは、早朝の鳴き声もなく、温泉街であるため車通りも少ない。要は静かなのだ。

だから、オフでとにかく眠るルリミゾにとっては何よりも快適な場所だった。

ルリミゾは布団が少し乱れる程度の寝相で、枕元には丸まったチラチーノが。尻尾を定期的にパタパタと動かしては、顔にぶつけられたルリミゾが魘された表情になる。

「んぅ……やめ……」

「ぐふ……」

それでも眠りが妨げられることはなく、一人一匹は疲れを癒すために睡眠の限りを尽くしていた。

そんな幸福な時間、スマホから「ぽこん」と通知が鳴る。眠りが浅くなっていたルリミゾは、その音で目覚める。

「何……？」

ぼんやりと霞む頭でスマホを手探りで取る。充電コードを外し、開いた画面には1件のメッセージ通知。

「人が寝てんのに何よ殺すわよ……」

昼過ぎまで眠っていることを一切棚に上げて、ただ眠りを妨げられた不機嫌から言葉を放り出す。もう一度布団をかぶって枕に頭を置こうとしたとき、送信者の名前を見て一気に目が覚めた。

送信者は……サイトウだった。

『ジムチャレンジ杯、初戦だね。絶対負けないからね！』

「あれ、今日抽選日だっけ……」

ルリミゾは完全に頭になかったが、この日はジムチャレンジ杯のトーナメント表が抽選で決められる日だった。ローズが直接クジを引き、トーナメント表を決めていく様子がテレビで放送される。各選

手の紹介や、ジムチャレンジャーのこれまでの試合の振り返り、そして勝敗予想など、それなりに盛り上がるコンテンツだ。実況解説であるカキタやミタラシも他のキャスターと共に出演しており、勝敗予想では各々の贔屓込みでコメントを繰り広げる。

サイトウはそれを観てすぐに連絡したのだろう。もそもそと起き上がり、半目でテレビを点ける。どうやらトーナメント表が丁度出揃ったようで、一覧が表示されていた。確かにルリミゾとサイトウは初戦で当たる組み合わせになっていた。ポプラの名前がないのは、引退を表明したからだろう。

「返事しなきゃ」

文字入力画面で「あー」だの「んー」だの唸っているうちに、指は止まる。

当日はエネルギープラントを強襲して、ジムチャレンジ杯には出ないのだから。

何文字かを入力しては消してを繰り返し、スタンプを送る画面へと切り替える。ファンが作ってくれたチラチーノのスタンプ一覧から、返信に一番合いそうなものを選んで送信した。

『」（´ д｀）「』

『何そのスタンプ！かわいい！』

『ファンが作ってくれたの』

『私もあるもんね？（・？・）？』

カイリキーのデフォルメされたスタンプに笑いながら、また返信に悩む。そうして時間は過ぎていくのだった。

日は変わり、カフェにて。

スマホのメッセージでポケモンの預かりを相談されたルリミゾは、カフェにサイトウを呼び出したのだった。場所はナックルシティの有名店。ナックルシティはキルクスタウンとラテラルタウンの間で、なおかつ発展している。まさに「ちょうどいい」場所だった。

「わざわざごめんね、ジムチャレンジ杯も近いのに」

多少の皿とドリンクが来てから、サイトウが話し始める。

「いいわよ別に。で、言ってた子は？」
余計な気遣いを関係に含みたくないルリミゾは、世辞も切って本題を出す。
サイトウもそれを察して、すぐに鞄からボールを取り出した。
「出ておいで」
そうしてサイトウがボールから出したのは、膝に乗るサイズのヌイコグマ。ノーマル／格闘タイプであり、進化すればキテルグマという強力なポケモンになる。
「やる気いっぱいで、血統も良いんだけど……うちのジムは手が足りないんだよね……」
そう言いながら、ぎゅっとヌイコグマを抱えるサイトウ。ヌイコグマは可愛らしく抵抗するが、サイトウも更に力を込めて、ぎゅむ、と抱く。暴れられると机の上の皿やコップが危ないからだ。傍から見れば絵になる図だが、ヌイコグマについて知識のあるルリミゾは怪訝そうな顔でそれを眺める。
（ヌイコグマって大木も折れるくらいの力じゃないの……？）
「この子はよく育つと思うから、野生に帰したり一般に預けるには勿体ないかなと思って」
「だから、見てほしいって話だったのね」
「うん。育ててみる気、ない？」
じっ、とヌイコグマを見つめる。サイトウの言う通りなら、将来的にかなりの戦力に育つのだろう。物理攻撃に特化したポケモンがいれば、またチラチーノとは違った力強い攻めが期待できる。戦略の幅も広がるだろう。
いまキルクスジムにいるキテルグマは、ジムチャレンジの腕試し役を務めている。プロの試合に連れていくには、歳をとりすぎてしまっているのだ。
問題があるとすれば、ルリミゾはもういなくなるということ。
「そっちは時間さえ経てば手が空いたりしないの？」
「ジムトレーナーが育てるには難しい種族の子だからね……。私の特訓は生まれたての子にはちょっとハードというか……」

顔を背けながらサイトウが言う。噂に聞く、自分に厳しいサイトウのトレーニングとは如何なるものか。

「確かにその通りね……」

以前にサイトウから聞かされた、ワイルドエリアでの修行のことを思い出す。

・・・

「それでね、『数日間ジムを空けます』って連絡してワイルドエリアに飛び出たんだけど……」

ジムチャレンジがない時期とはいえ、アクティブが過ぎる行動だ。とてもカフェで女子校生がする会話ではない。ルリミゾは半笑いでドリンクのストローに口をつけ、続きを促した。

「野宿で？」

「うん。野宿。で、雨がひどくなったから雨宿りしようと入った洞窟の入り口が崩れちゃって」

話しぶりからしてポケモンと同じような動きをしている様子だが、ルリミゾは深く聞かなかった。

「何をしても岩が動かなくて、スマホもタクシーに落としちゃって遭難しちゃったんだよね」

つっこまない。つっこまない。と念じながら話を聞くルリミゾ。

「カイリキーたちでも動かせないなんて相当危なかったのね」

「寒いし疲れでヘトヘトだったし……でも色々なことに気付かされたなあ」

きっと、語るには気恥ずかしいような色々があったのだろう。

ルリミゾとしても、どの程度ハードな訓練を課しているのかが知りたかっただけなので、深くに踏み入ろうとすることはしなかった。サイトウを強くした体験のひとつだったのだろう。

・・・

そんな会話を思い出しながら、ルリミゾが言う。

「流石にその子を同行させるのは過酷ね」

「付きっ切りで見てあげる余裕がないんだ。もちろんルリミゾが暇そうに思ってとかじゃないよ？」

「わかってるわよ。うちのジムなら見れるでしょうけど……」
言葉に詰まる。
「そんで、結局引き取ったのかよ！」
「……そうよ」
結局手元にヌイコグマを抱きながら、キルクスジムに帰った。思っていたよりも簡単に反抗を抑えられたのは内緒だ。サイトウと同じようにルリミゾにも懐いたようで、すぐに抵抗をやめて身をすり寄せるようになっていた。
「ジムで面倒を見るわよ」
「マジか!?俺ヌイコグマの扱い方なんて知らねえぞ!?」
「これも勉強よ」
都合よく使いやがって……とノマが笑いながら言う。幼いポケモンの面倒を見るのは満更でもなさそうな表情だった。トレーナーなだけあって、例に漏れずポケモンが好きなのだ。それでも、ルリミゾは内心、利用していることの罪悪感にチリチリと罪の意識が燻っていた。
「あたしが面倒見れないときは頼むわよ」
「おう。まあちょっと俺にも抱っこさせろよ」
「あっ」
ひょい、とルリミゾの腕の中からヌイコグマを抱こうとして——
ブン！とノマの身体が宙に舞う。
「うおォ!?」
背中からドン！と地面に着地。打ちどころは悪くなかったようで、のそりと苦悶の表情を浮かべながら起き上がる。
ヌイコグマが投げたのだ。
「痛ぇ……なんだこの筋力……」
「あはは！貧弱ね。あたしとサイトウは飛ばなかったわよ」
「お前らがおかしいだろ……！俺は貧弱じゃねえ……！」
ヌイコグマはルリミゾの腕の中で「ふんす」と誇らしげにしている。
まだ、人間の身体能力と自分の筋力の違いがわかっていないのだろ

う。そして、今の行為がどれだけ危ない行為だったのかも。投げ飛ばされるノマの姿はルリミゾにとって滑稽で愉快なものだったけれど、それはそれとして躾は必要である。

「ねえ、ヌイコグマ」

「くま？」

しっかりと目を合わせて、真剣な雰囲気を纏って。

「突然触られるのは怖い？」

「くぅん」

ヌイコグマのそれは、命を守るための反射。外敵に襲われた際に身を守るための当然の反応なのだ。生まれたときから近くにいたサイトウは当然として、カフェで長く様子を見ていたルリミゾにもヌイコグマは慣れつつあった。しかし、初めて見る人間に突然触られては反射的に暴れるというもの。

「今のはこいつも急に触ったから悪かったわ」

ノマの非を認めつつ。

「でもね、人間はあんたを傷付けないわ。あたしも、サイトウもそうだったでしょ？」

「くぅ……」

「だから、触られても暴れちゃだめよ。もう一度、ノマが抱いてもいいかしら？」

「くぅん！」

「あんたも軽率に近付きすぎなのよ。人馴れしたポケモンばかりだから麻痺してるかもしれないけど、本来初めて見る人間に怯える子だって少なくないのよ」

「それは……悪い……」

「面白かったからいいわよ。この子も気にしてないようだし」

今度は、好奇心に満ちた目でノマのことを見つめていた。

「ヌイコグマ、よろしくな？」

「くぅん！」

恐る恐る、ノマが手を差し出す。今度は、ヌイコグマからも見えるようにゆっくりと、正面から。一方的な干渉ではなく、相互のコミュ

ニケーションとして近付いていく。
　すると、ヌイコグマが腕に身をすり寄せて、抱きやすいように身体を収める。
「おぉ……！」
　ゆっくりと、持ち上げる。負担にならないようにしっかりと気遣いながら。
　その態度がなんだか普段の皮肉屋な姿と対照的に映って、ルリミゾは微笑んだ。ノマに悟られないよう手で口元を隠して、静かに笑った。
「よくできたわね！きのみ食べていいわよ！」
　成功体験には、それに結びつくメリットが必要である。
　鞄から、ルリミゾがきのみケースを取り出す。ポケモン達の好みに合わせられるよう集めた、色とりどりのきのみが並ぶ。チイラの実を除いて。
「……！」
　くんくん、と鼻を動かし、自分の舌に合いそうな物を探しているのだろう。ノマの腕から落ちそうになるくらい身体を近付けて選んでいる。それに合わせてノマも落とさないように腕を動かす。もう完全にヌイコグマに振り回されている。
　ぴた、と止まったのは、大きく曲がりピンク色をしたきのみの前。
「マゴの実がいいのね？」
　ルリミゾがケースから取り出して近くまでもっていけば、手で掴んで食べ始める。
「あれ、何してるんですか？――ヌイコグマじゃないですか！かわいいですね！」
　部屋のドアが開いて、次々と練習終わりのジムトレーナーが入ってくる。そうして各トレーナーに抱っこされて、じっとしていたご褒美としてヌイコグマはきのみを7つ平らげた。
　練習に疲れていたはずのトレーナーたちも癒しを求めて集まり、ノーマルジム一丸となってあれこれヌイコグマを育てるための環境作りに勤しんだ。

62―キルクスの母

あてもなく、キルクスの町を歩く。

薄灰色だった空は、すっかり陽をなくして黒に変わっている。

雪がゆっくりと降り始めていた。街頭の灯りを一瞬一瞬遮りながら、止まることなく降り続く。

その景色だけでも呆けて見惚れていられそうなほど、やさしく、ゆっくりと。

夕暮れを丁度過ぎたこんな時間に外に出たのは、気分転換のため。効きすぎた暖房に頭がぼうっとして、エネルギープラントの地図が頭に入らなかった。

家の中にはチラチーノが残っている。

「付いてくる?」と聞いたものの、ぷい、と顔をそむけて拒否されてしまった。

換気のために窓を少しだけ開けて家を出た。賢い子だから、寒くなる前に閉めるだろう。

この先、私がいなくてもやっていける。

住み慣れたと思っていた町は、去る時が近付くにつれて変わって見えた。

普段は意識しない一軒一軒の店が、急に魅力的に思えてくるような。お土産屋さんを覗いてみたくなったり、柄にもなくブティックに足が吸い込まれたり。

結局何も買わなかったけれど、誰かと訪れることを想像して楽しくなったり。

目に付く看板のそれぞれが、まるで新しく訪れた土地のように意識される。

息をゆっくり吐き出すと、少し湿気た白色が流れていく。

シンオウを思い出させるような雪と寒さが、じわりと身に染みる。

不思議と不快感は無かった。よく知っている気候だからだ。

それでも立ち並ぶのは、異国の建物たち。

歴史ある町ゆえに、その成り立ちから今に至るまで、異国の土地であることを嫌というほど意識させられる。
地震がないため、家が長持ちするらしい。とくにキルクスの家々は、改装を重ねて築２００年を超える家もある、なんて聞く。
そんなことはもう、どうでもいいんだけど。
――もう帰ろう。
センチメンタルを振り切るように、雪に残る足跡が増えていく。今滑って転んだら滑稽だな、なんて浮かんだことも、すぐ後方に消えていった。
歩きなれた道を、何も考えずに歩く。
目に入っていた看板も目につかなくなって、日常の風景に戻っていく。
辺りを歩く人もまばらに、見覚えのある白いファーが目に入った。
気にも留めないつもりだった視線が、一瞬そちらに向く。
「あら」
目が合った。
それが誰なのかを認識して、目を遣ったことを少しだけ後悔した。
雪の町に似合わないような、大きな笑顔で今にもこちらに話しかけようとしていたからだ。
長くなりそうだな、と思った。

「あんた！ルリミゾじゃないの！」
白い、ふわふわなファー。淡い色をした柔らかい生地のコートは、少しふくよかな体型を意識させないほど馴染んでいる。
街灯に暖かく照らされて、夜の黒によく映える生地。同じ職業とは思えないくらい上品に見えた。
元々ボディラインを隠そうともしない人だったけれど、バトルのユニフォームとはまた違った印象を感じた。
「……こんばんは、メロンさん」
精一杯の、愛想笑い。
関わりたくないのを婉曲に伝えるには、最も適していると思った。

思ったんだけど。
「時間あるかい？少し、話をしようじゃないか」
手を取って、無理矢理歩かされる。
少しの散歩のつもりだったから、今ろくな格好じゃないのに。
キルクスの冷たい空気に反して、メロンさんの手はとても暖かかった。

それから、色々な話をしたのを覚えている。
この町のこと、バトルのこと、美味しいお店のこと……。
そしてなにより、この町のジムリーダーのこと。
「この町のジムリーダー争いをするのは、息子か、あたしだと思ってた。偉いもんさ、うちの息子より若いのによくやるよ」
一秒、嫌味かと勘繰る。
でも、メロンさんの表情は朗らかで、本当に褒めてくれているようだった。
少し、反応に困る。
曖昧に笑ってから、当たり障りのない返しをしようと思った。
「ありがとうございます。二人の戦いに恥じないように――」
「そんな教科書通りの答えは聞きたかないよ」
優しい声色で、遮られた。
機嫌を損ねたのかと思って、思わず表情を伺う。
飲み干されたドリンクの氷が、溶け落ちてカランと鳴る。
空気が一瞬、張り詰めたように感じる。
恐る恐る目を向ければ――
メロンさんは、揶揄うように微笑んでいた。
「あたしが知りたいのは、この町のジムリーダーとして楽しくやってるかどうかさ」
そう前置きして、目をゆっくりと合わせて。
頬杖をついて、じっと見て。
「どうだい？ジムリーダーは。楽しかったかい？」
そんな問いを投げかけられた。

浮かぶのは、マクワを倒してからの日々。
何かを背負うことの重責や、騙していることの罪悪感。そして敗北の苦しみ。
辛かったことがいくつも思い出される。
それでも。
それでも、バトルを通じて得たファンや、善き友の姿が浮かぶ。
ジムトレーナー、実力者揃いのジムリーダーに、あの歓声。何より、瞼に焼き付くようなあのスポットライト。
答えは決まっていた。
恥知らずに、厚顔で笑う。
「楽しかったです……！」
メロンさんは何も言わず、穏やかに笑っていた。
私はちくりと痛む胸の奥に蓋をして、ジムリーダーとしての最後の会話をした。

63―決行

「盛り上がってるかぁー!?」

マイクに声を乗せて叫ぶのは、ガラル無敵のチャンピオン、ダンデ。

ローズ不在にて、開幕の挨拶まで担当することになったことを露ほども感じさせないマイクパフォーマンスで観客を盛り上げていく。

空はこれ以上ないほどの晴天。芝は青々しく、風に揺れる。フィールドを囲むように、観客席は少しの隙間もなく埋め尽くされていた。

ちら、とダンデが背後を見れば、今にも射殺さんばかりの視線。

熱狂の観客席と対照的に、フィールドは殺伐とした冷たい空気で満ちている。

ダンデの背後に並ぶのは、6人のジムリーダーと、ジムチャレンジを突破したユウリ。プライベートでは仲の良い彼らも、一言も発さずに張り詰めた空気が流れる。ユウリはやや緊張した面持ちで、不在のジムリーダーの姿を横目で探していた。

スポンサーだらけの赤いマントに、闘気が突き刺さる。王者らしく飾られたマントには、現代的にスポンサーのロゴが連なっている。有名企業のロゴの数々が、隙間もなく詰め込まれていた。

王者は少しも意に介すことなく、司会を続ける。

「ワケあって、ローズ委員長は不在だ。だから俺が代わりに開幕の挨拶をさせてもらう!」

再びワッと大きくなる熱狂を、手で制す。

一瞬の拍手や歓声がすぐに収まり、満員の観客が全て耳を傾ける。

それほどに、絶対王者のカリスマは凄まじいものだった。

「改めて名乗ろう……俺はチャンピオンのダンデ!」

〝チャンピオン〟という名乗りに対して、背後の闘気がより鋭くなる。

誰もがその座を、首を狙っていた。

「長い演説は不要だな!」

自然体で、それが許されるのも彼が王者だから。全ての人間が彼を

認めているから。
「ガラルのトレーナーをより高みに連れていくために！何より俺のために！」
連れていく。そんな表現を使えるのも、この男唯一人。
殺気にすら迫るほどの視線が、キバナ、そしてネズから発せられる。
「最強のチャレンジャーを決めてくれ！」
「――今ここに宣言する」
期待が膨らむ。嵐の前に、一瞬の静寂が訪れる。
「ファイナルトーナメント　開催だ！」
歓声が爆発した。

プルルル！とノマのスマホが鳴る。
着信は、ジムトレーナーの同僚から。
『自宅もダメだ、誰もいない……！』
「わかった、ありがとう」
宿泊するはずだったシュートシティのホテルにも連絡は無し。
最悪の可能性がチラつきながらも、心当たりのある場所を虱潰しに探していく。
普段と変わらないはずの灰色の空が、心なしか暗く感じる。
ジムに残されていたのは、ポケモンたちのボール。
ジムチャレンジ杯ファイナルトーナメント当日、ルリミゾは忽然と姿を消していた。
「なんでだよ……！どこ行ったんだよ……！」
雪の中、立ち止まる。
心当たりもなければ、消えるそぶりもなかった。
軽率にボールを置いていくような警戒心のない人間ではないだけに、自ら行方を眩ませたのだろうとジムトレーナー達は推測していた。
「何か、手掛かりを……」
行き詰った捜索に頭を抱えていると――
――ポン！

鞄の中が光り、現れ出たのはチラチーノ。
「ぐふ……！」
「チラチーノ！何か知らないのか!?」
首を横に振る。
つぶらな瞳には、付き従っていたトレーナーへの心配と、不安が見え隠れしていた。
何も知らされていないのだろう。
ポケモンは聡い。
今が異常事態であることも、そしてルリミゾが意図的に置いていったことも理解しているだろう。
共生関係を育んでいた相手に突然見捨てられた心情を考えて、ノマは自分が今どんな表情をしているのかわからなくなった。
「ポケモンにも知らせないで何してんだ……！」
苛立ちが募る。
「そうだッ、ウォーグル！」
「クァア！」
「空からルリミゾを探してくれ！頼む！」
ばさ、とひと羽ばたきで空へ飛びあがっていく。
「みんな、手分けして探すぞ！」
バイウールー、イエッサン、カビゴンを繰り出して各々散っていく。
「見つけたら力づくでもいいからジムに連れて来てくれ……！」
藁にも縋る思いで言う。
誰でも、何でもいい。見つけてくれと。

古く厳めしい城の中にある、現代的な内装。
ナックルスタジアムと呼ばれるそこは、ジムトレーナーも出払い、マクロコスモス社員だけが残っていた。
エレベーターの前には見張りが一人立ち、ジムの業務を代行する人間が数人。
一人残らず、社員として、この日、この場所を任された人間たちだった。

伝えられた命令は、ただ「通すな」と、それだけ。
地下で行われていることの詳細を知っているのは、数名。
当然、反感や疑問を持つ者はいる。
しかし、ガラルの大企業のトップに逆らえるような人間はいなかった。
そんな場所に、場違いな来訪者がひとり。
「こんにちは。開けてくれる？」
ドータクン、ポリゴンZを引き連れた少女が言う。
戦闘服に身を纏い、背中にはギンガの頭文字であるGが光る。顔をマスクで隠し、ベレー帽からは水色の髪がこぼれる。
「どちら様で……？」
エレベーターを守るマクロコスモス社員は、ボールに手を掛けながら返す。
明らかに不審な人物たちを前に、無線で連絡を取ろうとした瞬間――。
「誰だっていいでしょ？通せって言ってんの」
男の身体が浮き上がる。絞め付けられるように頭痛が走る。
ドータクンが超能力を行使したのだ。
「ぐッ……ぁ……！」
ただごとではない様子に、辺りのスタッフが慌しく動きはじめる。
どこかへ走って逃げる者、物陰に隠れる者、無線で何かを話す者。
各々、身を守るための行動を取っているようだった。
かくん、と男が白目を剥いたのを確認してから、少女はドータクンに指示を出して男を地面へと解放した。
「エレベーターを止めろ！地下に通すな！」
ヴン、とエレベーター前のランプが消える。ボタンの光も消え、乗り物としてのエレベーターが完全に停止する。
バトルで成功した人間が、有能さを見込まれマクロコスモスへ就職することは少なくない。
だから、この場に集まった社員の中にも戦える者が数人。
そして、警備員と。

「戦える人間は戦えッ！拘束するぞ！」
「有象無象が……無駄なのよ！」
そうして、エネルギープラントへの襲撃が始まった。

報せはローズにも届く。
「上でギンガ団が……？」
辺りは願い星から抽出されるエネルギーで満たされた管で光る。
怪しく点滅する機械とパイプ、そして薄暗い雰囲気が、まるでローズを悪役のように見せていた。
ローズは会場の様子を伺いながら、ブラックナイトを起こす時を待っていた。
これから、未来のために正しい行いをする。
そして現れる英雄の礎になるために待っているのだ。
大衆に理解されるとは思っていない。
今まで築き上げてきたリーグの発展も、マクロコスモスの名声も、全てを台無しにするような凶行だ。
しかし、悪人として裁かれることに、ローズは何の未練もない。
すべては、無理解な彼と時代の波のせいだ。
大きな波が、もうすぐそこまで来ている。
ネズとポプラの引退。
ルリミゾやサイトウ、オニオンといった若いジムリーダーの登場。
ダンデの世代を彷彿とさせるような、怪物揃いのジムチャンジャー世代。
決勝戦は、時代の変化を示す頂点となるだろう。
ローズの見立てでは、ユウリは今、かつてのダンデのように勢い付いている。
ダンデがチャンピオンを破ったときの、あの感覚。それに酷似している。
おそらく決勝戦は、ユウリ対ダンデ。そしてその勝敗は――。
「まァ、決勝戦まで待つつもりだったんですがね」
決勝に抜けるのがユウリなら、どちらが勝つかわからない。

もしキバナが抜ければ、ブラックナイトを延期してもよいだろう。
その他ジムリーダーでも同様だ。
だから、ローズは観戦しながら決勝を待つつもりでいた。
「君、この計画に関わっている、戦える社員を全て集めてくれるかい？」
「承知しました……！」
「私はここで待ちます。上層階で、マクロコスモス内だけで拘束できるようにしましょう」
公的機関に準備が露見するのは避けたかった。
優秀な社員と、ローズが動けば拘束ができると考えていた。
能わずとも、ブラックナイトを起こすのが早くなるだけだ。
ギンガ団がもしここまで突破してきたとしても、ローズが直接対峙するつもりですらあった。
ある種、天が与えた試練の様に感じていた。
時代のうねりに逆らうローズを、試しているかのように。

64―鋼の精神

バゴ！と上層で鈍い音が弾けて、思わずローズはエレベーターを見遣る。
明らかに人が乗ったのではない、破壊音が連続する。
金属の何かが落下してひしゃげる音がする。
「まさか……」
エレベーターのドアが膨れる。
内側から何度も、殴りつけられたように鈍い音が響き、それに合わせて変形していく。
ホラー映画のワンシーンのように。あるいは、閉じ込められた怪物がドアを破って追って来るシーンのような。
バゴン！
吹き飛んだドアが壁に突き刺さり、非現実のような挙動をする。
「社員だけで取り押さえられると思った？舐められたものね」
ドータクンと共に、ふわりと着地した少女。
軍服のような装備に、ベレー帽からこぼれる水色の髪。
そしてその声は、ひどく聞き覚えのあるものだった。
ファイナルトーナメントに不在で、ジムトレーナー達が探し回っている渦中の人物。
師を襲った突然の意識不明に、代理として出場し、駆け上がった超新星。
「ルリミゾ、でしたか。まさか君だったとは」
「ボイスチェンジャーがなかったら簡単にバレるのね。ああ、そういえば髪も隠してないし当然か」
（どうしたものか……）
まさかの侵入者の正体に、思考が飛びかけて。
「カシワ君に拾ってもらったのも計画のうちかな？」
時間稼ぎのために、会話を繋ごうとする。
脳を最大限に回転させて、ボールに手を掛けて。

「……さあ、どうかしら」
——何故ルリミゾが今、こんなことを。
頭を横切るのは、全く読めない少女の動機。
それでもこの危機的状況を脱するために、口を動かし続ける。
（上のトレーナーが降りてくるまで時間稼ぎをすべきか）
とにかく、会話を長引かせることだけを考えようと試みていた。
「これは一杯食わされた。ジムリーダーを隠れ蓑にしてたワケだ」
乗ってくれ、と願いながら、努めて冷静に飄々と話す。
「そう。カシワさんを眠らせたのもあたし。今までの襲撃も、全部ね」
「なら、目的はコレですね」
親指で指すのは、背後の黒い球体。
脈動しながら、目覚める刻を待っている。
浮かぶ疑問は、なぜジムリーダー代理に過ぎないルリミゾが知っているのか。
社員から流れたのか、それとも何か他の方法で知られたのか。
「どこからバレたのかな?キバナ君さえ知らないハズなんだが……」
「サイコキネシス」
返答は、念動力の一撃だった。
時間稼ぎが見え透いていたのだろう。
躊躇なく放たれたそれは、一直線にローズへ向かう。
「シュバルゴ」
投げることなく、手元のボールから槍兵が現れる。
槍のような腕を交差させてガード。
衝撃で後退しながらも念力を振り切り、槍を向けて闘志を顕わにする。
「手荒い返答だねぇ。これでも昔はそこそこ戦えたんですが……」
「へぇ。どうだっていいわよそんなこと」
返事の代わりに攻撃を返すような開戦からは、あまりにも不自然な間。
まるで意識を逸らすかのような——
——同時、後方にわずかな風切り音。

（背後にクロバットか！）
「ナットレイッ！」
ボールが開くと同時、『パワーウィップ』を振り回して牽制する。
姿こそ見えなかったものの、クロバットは攻撃を中断したようだった。
薄暗い天井付近を、わずかに影が揺らぐ。
「流石にバレバレだったわね。まぁ、背中に気を付けて？」
ルリミゾはマスクの下で笑っているのだろう。目を細めていた。
（なるほど、これは……）
三体を場に出さざるを得ない。
トレーナーが狙われる戦いは、ワイルドエリア外ではそう起こらない。
まして人がポケモンを従えてトレーナーを狙う戦いなど、滅多に経験する機会がない。
経験豊かなポケモンバトルから、無理矢理ルリミゾの土俵である野外戦闘へと上げられるのだ。
（増援が来るまでの時間稼ぎに徹する。とはいえ守りだけではポリゴンZに削りきられてしまうね）
三匹目に選んだのは。
「ニャイキング」
本来は、採掘現場をより活気付けるために従えていたポケモンだ。
メジャーであるシングルバトルでは活かせない特性だが、この三体が入り混じる戦闘では大いにその力を発揮するだろう。
小判がキラリと光り、歯をぎらつかせて鳴く。
それが、再びの開戦の合図だった。

（なんでコイツがここにいんのよ……！）
ルリミゾにとって、待ち受けていたローズは予想外だった。
「ローズが開会式でひとつ演説をする」と、ジムリーダーへ事前に伝えられた段取りではそう説明されていた。
今、ちょうど開会式が終わったくらいの時間だ。

事前に計画がバレていたことに思考が巡るが、それにしては薄かった上階の守りを根拠にそれを否定。
軽く蹴散らしてエレベーターを突き抜けたが、まさか目的地にローズがいるとは思いもせず。
警備のトレーナーがいたとして、精々8バッジを集めた程度の人間だと踏んでいた。
彼が従えているポケモン達を一目見れば、ジムリーダーでもかなり上位に相当するような練度であることが容易に分かる。
（あの子を出すべきか……いや、万が一クリティカルに攻撃を貰うと脆いから危険ね）
ここまで来た以上、出し惜しみはできない。
手札を切るタイミングを伺いながら、まず一枚目の手札を切る。
ローズの手持ちについて、ルリミゾが知っていることはほとんどない。鋼タイプ使いであり、ダイオウドウが相棒だということ程度しか知らなかった。
だから、初撃に全力を費やした。
「ニャイキングから狙え」
応答するように、ポリゴンZが動く。
ピピ、と電子音が鳴り、集められるエネルギーは炎を形作っていく。
狂ったような挙動から放たれるそれは、熱をもってニャイキングに迫る。
「『ドリルライナー』ッ！」
即座にカバーに入るシュバルゴ。
地面の力を纏った槍が交差されて、炎のエネルギーを受け止める。
「シュバ……！」
「『目覚めるパワー』か。手厳しいね」
「ご名答。調整には苦労したわ。でもそれも、今日で終わり」
ジュウ、と音を立てて食い込む炎にシュバルゴが表情を歪める。
それでもエネルギーの勢いは止まらない。
これからの快進撃を表すかのように、炎が全てを覆った。

65―徹底抗戦

辺りには、黒焦げのポケモンが2匹。
シュバルゴとニャイキングだったそれらをボールに戻して、ローズは周囲を見渡す。
――特にムゲンダイナ関連の機械に損傷はない。
あちこちに残火が燻り、いやな臭いが漂う。
「……なんとも、手厳しいね」
「昔のレベルが低かったのか、それともアンタが衰えたのか、どっちかしらね」
ローズのポケモンは、残すこと3匹。
対してルリミゾのポケモンは一切の傷なく照準をローズに合わせていた。
「命までは取らないわ。退いて。」
「随分な言い草だね。まだ勝負はついていないというのに」
降伏勧告が示すのは、甘え、もしくは暴力行為への躊躇。
そこに一縷の希望をみたローズは、大仰な姿勢で口を開く。
「これから先の未来、チャンピオン・ダンデの栄光は忘れ去られ、私たちが築いたリーグも衰退するかもしれない」
かつて、18年間王座を守り続けるという偉業を成し遂げたマスタードさえ、遥か過去の人物と化している。
相棒の死と共に緩やかに衰え、そして表舞台から消えた。
マスタードの名を聞くことはもう殆どない。
――ダンデという男は、そんな終わりを迎えるべきではない。
「ダイオウドウ！」
ローズの腕時計が光り、ダイマックスのためのエネルギーが集まっていく。
通信機を取り出し、言う。
「ムゲンダイナにエネルギーを投入。そして会場に繋いでもらえますか」

現れる鋼の巨躯、そして同時に巻き起こる鋼鉄の散弾。
『キョダイコウジン』だ。
ドータクンが1歩分前に進み出て、ルリミゾへ飛来する鋼塵をカットする。
「ッ！」
思わず舌打ちを返すルリミゾ。
このやや狭い環境下でダイマックスを行えば、どう周囲に影響があるのかわからない。ローズは恐らく、問題がないことを理解したうえでダイオウドウをキョダイマックスさせたのだろう。
エネルギープラントに深く関わっているローズだからこそ打てた一手だった。
「時間が無いのよ……！」
焦燥は、禁忌に手を伸ばさせる。
腰元深く、「使うことがないように」との無意識を反映して、ポーチの奥底に押し込められたマスターボール。ダイマックスしたダイオウドウを手早く落とし、目的を達成するためには、どうしても必要なように思えた。
モンスターボールと少し形の異なるそれを、ルリミゾは手探りで握った。

シュートスタジアムにて。
熱狂の最中、ダンデを映していた大型のスクリーンに異変が起こる。
ざ、ざ、と無理矢理何かに書き換えられるような挙動。
『無理解なチャンピオンよ。開会宣言は出来たかい？』
スクリーンに映し出されるは、不在だったはずのリーグ委員長の姿。
気付き始めた観客が騒めき始めて、ダンデやジムリーダー達も背後へ振り返り、モニタを見上げる。同時に、異様な速度で流れ始める暗雲。
スタジアムに集まった誰もが、異常事態を察していた。

『突然だけど……ブラックナイトを始めるよ！』

ノイズ混じりにローズの声が響く。

何かの衝突音や、金属音、そして画面端にチラつく火花。

意味の掴めない宣言に、騒めきがさらに大きくなる。

『エネルギープラントが襲われていてね……猶予はないんだ、チャンピオン』

それは、個人へ向けてのメッセージ。

見出した才能への、あまりにお節介な贈り物。

『ガラルの未来を守るために、君が英雄になるんだ。わかってくれるよね？』

――ザザ！と激しくノイズが走り、映像が閉じる。

それから、各地でポケモンがダイマックスして暴走しているという報せが届いた。

ローズの背後、黒い塊にエネルギーが注がれる。

辺りの管が妖しく光り、激しくエネルギープラントが揺れる。

「さあ、厄災の復活だ」

直後、ダイマックス現象で見られるピンク色の光が爆ぜ、耳を劈く音と共に黒塊が弾けた。

蛇のような、龍のような何かが一瞬うねり、天井を突き破って消えていく。

その姿を目で捉えることは能わず、ローズは一瞥したあと再びルリミゾへと向き直る。

「……私の役目はこれで終わった。後は英雄の到着を待つだけですね」

そう言って、瀕死になった二匹を再び繰り出す。

ニャイキングとシュバルゴだ。

傷は痛々しく、炎によるダメージからか、少し触れるだけでも身体を蹲らせて呻る。

そして、懐から取り出したのは、黄金に輝く鉱石。

刺々しく、その見た目からは生命力を復活させる効果があるとは到

底予想もつかない。
しかし、鉱山と縁深いローズはソレをよく知っている。
「……」
一瞬の葛藤。
手元を見つめた後、強く握ってその感触を確かめる。
そして、決心。
「私にはガラルを守る使命がある。１０００年後のガラルを守る使命が……！」
――元気の塊。
そう呼ばれるその鉱石は、瀕死に陥ったポケモンを復活させる効果を持つ。
市場に出回ることはほとんどなく、この日の為に集めた物がちょうど五つ。
「もう一度、頼みますよ」
「ニャア」
「シュバ……！」
倒れた兵（つわもの）が再び立ち上がる。
これで振り出し。
そして、残る元気の塊はあと三つ。
〝鋼の精神〟は折れない。倒れない。
「私は徹底的に抗う！この時代の流れにも、時間の流れにも……！」
もう、ローズは自分が何を言っているのかわからなかった。
論理的に導き出したはずだった答えは、いつのまにか心臓の奥から送り出されているようだった。
「チャンピオンも、ポケモンリーグもいずれ終わる！人は老い、資源は消えていくだろう」
鼓動と同じ速さで、言葉が一つずつ流れ出していく。
指示も出さずに、ただ何度も繰り返したように、演説のように語る。
「災厄を止めた英雄ならばどうだろう？ブラックナイトを鎮めた英雄・ダンデの御話は語り継がれ、１０００年後も続くだろう！」
英雄は死なない。

かつて、ガラルを救った人間が今も人々に語り継がれるように。
「君も英雄の像を見たでしょう。英雄は、時代を超える！」
英雄の物語、そのエンドロールに、ローズの名前が載るなら。
いつか、ジムチャレンジで勝てなかった自分でも、その栄光に預かれるなら。
ローズには、それを実行できるだけの頭脳も、築き上げた地位もある。
「１０００年後に、この愛おしい豊かなガラル地方を残す。そこにはポケモンリーグも残っていて、今と同じく人々が笑って暮らしている。そんな未来を創るのは私だ……！」
他の誰にも、ムゲンダイナは止められないだろう。
だが、ダンデなら止められる。
ローズは自首する腹積もりでいた。
きっと、強引に災厄を引き起こしたことを、大衆は許さないだろう。

今の倫理にそぐわない行為だという自覚もある。
しかし、名誉とは後から生まれるものだ。
１０００年後の人間は理解してくれる。
そう夢想して、『キョダイコウジン』を指示した。

これ以上の出し惜しみは、計画の破綻を招く。
そう考えたルリミゾは、ぎゅ、と目を瞑り息を吐く。
結局、ローズにも相当な覚悟があったということ。
戦いの腕こそ衰えていたものの、下準備と意志はルリミゾに迫るものがあった。
躊躇しながら戦って倒せるほど、ガラルリーグを成功させた人間は弱くなかった。
だから、もう一度決心をする。
――例え命を奪ってでも、元の世界に帰る。
「もう、どうなっても知らないわよ」
警告はとうに発された。

伝説のポケモンが再誕しようとも、時間稼ぎに徹されようとも。
この一匹で、全てが片付いてしまうだろう。
手に持ったマスターボールから、溢れんばかりの力を感じる。
それを一度動かせば、この施設がどうなってしまうかも理解できるほどに。
ちょうど戦場の中心、空いたスペースへ向けてボールを投げ。
「?????」
その名を呼ぶ。

66―

???????

「――！」

空を駆けるダンデとリザードンが、目的地の方角へ、ばっと顔を向ける。

ブラックナイトとは異なる、何かしらの脅威が現れたことを肌で感じ取っていた。

圧倒的な力が、空気を歪めていると錯覚するほどに。

雷が落ちただとか、爆発が起きただとか、そういう明らかな異変はなかった。

ただ、空気が変わった。

何かが地に降り立ったことを直感していた。

変わらず暗雲は立ち込め、各地で赤い光と共にポケモンが巨大化している。

横目にそれらを見ながら、被害をジムリーダー達が抑えてくれることを信じ、一直線にナックルスタジアムへ向かう。

「急ごう……！」

「ばぎゅあ」

もはや、意志のぶつかり合いは終わっていた。

各々の想いを乗せたポケモン達の勝負ではなく。

ルリミゾがこの手札を切った時点で、残された道はひとつしかなく。

それはガラルとの決定的な別れを告げるものだった。

蹂躙。

それが、ルリミゾの選んだ手段だった。

「『アームハンマー』」

驚愕するローズの顔を横目に指示を出せば、巨人が動き始める。

両手で一つの巨大な拳を作り、大きく頭上に振りかぶって。

「やれ」

バゴン！
キョダイマックスしたダイオウドウの身体が、弾けた。
立っていた地面は凹み、あちこちに罅が走る。ムゲンダイナが空けた穴からパラパラと破片が零れ落ち、重低音が継続して鳴る。いとも簡単に命すら砕いてしまえそうな程の一撃。
その一撃は、ローズの意志を砕くのに十分すぎる衝撃だった。
即座にダイマックスは解除され、元の大きさに戻ったダイオウドウは倒れて動かない。
「ダイマックスなしで、この破壊力だと……！」
神話は語る。
「その者、大陸を動かすほどの怪力を持つ」と。
その力が、振るわれようとしていた。
『ヒートスタンプ』
燃え上がるように熱された足が、ニャイキングを踏みつける。
ボ、という音と共にその姿が足裏へと消えていく。
再びレジギガスが足を上げたとき、もうそこには何者も立っていなかった。
ニャイキングは二度目の大火傷、そして瀕死。ぴくりとも動かず、凹んだ地面の中心で倒れたままに。
助けようと入ったシュバルゴを片手で薙ぎ払い、壁に叩きつけ、『握り潰す』を放った。
何度バトルしても砕けない程に頑丈だった殻は砕け、本体がぼとり、と地面に落ちる。チョボマキから引き継いだ頑丈な殻から出た本体は、成長したカブルモのような姿で。
ずるずると這って動くのを、ローズが咄嗟にボールへ戻す。
「ッ……！」
ルリミゾの脳が警鐘を鳴らす。
一撃で砕く度に、何かが擦り減っているような気がした。
過剰なまでの力の暴力に、バトルで得られたような高揚感も、充足感も得られなかった。
当然、これはポケモンバトルという競技ではなく、ルリミゾもロー

ズもポケモントレーナーとして立っているのではなかった。もっと原始的な方法で、何かを賭けて戦っていた。
だから、勝利で得るものは、主張を通す権利。
より強い者が、好きなように動ける。それだけのこと。
もう、後戻りが出来ない場所まで来てしまっていた。
「全部潰して！」
ピピピ、と電子音のような、鳴き声のような、どちらとも判別がつかない音が巨人から聞こえた。
脚に向かって伸びてくる、ナットレイのツタの鞭を掴んで手繰り寄せ、本体を片手で掴む。１１０kgのナットレイを、軽々と片手で。
そして大きく振りかぶり、『馬鹿力（ばかぢから）』で地面に叩きつける。
ぴし、と鋼の身体に罅が入り、ナットレイの意識が刈り取られる。
ギギギアルを無造作に拳で払い、その回転を止め。両手でぐしゃり、と『握り潰す』。バラバラになってもう動かないそれを、ローズが下がらせた。
「なんと……」
残ったのは、倒れ伏す数匹の鋼ポケモン達。
瀕死まで至る傷を負い、立ちあがることはない。
ごう、と広い空間に響く空調の音だけが木霊していた。
もう、ローズから戦意は感じられなかった。
膝から崩れ落ち、呆然と手に持った元気の塊を取り落としていた。
「これで、おしまい」
逃げるようにレジギガスをボールに戻し、ルリミゾは背を向けた。

ぱり、とローズの手から零れた「元気の塊」が割れる。
そして、バラバラになった破片は都合よく転がっていく。塊は欠片となって、まるで何かに導かれるように。
戦いで歪み、凹んで、傾いた広場で、誰も予想だにしない方向へ。

ローズは呆然と、敗北に頭が真っ白になっていた。
しかし、ぱりん、と結晶の割れる鋭い音に意識を向ければ、まるで意志を持っているかのように転がる「元気の欠片」が見えた。
打つ手は無くなり、用意した回復手段は、圧倒的な力の前に無意味になっている。
それなのに、諦めの悪い、いつも空回りばかりする相棒のもとへ「元気の欠片」が転がっていく。
ラテラルタウンで、褒められたいがためにビートと壁画のレプリカを砕いてしまうような、そんな考えなしの相棒。
欠片が転がった先には、倒れ伏したダイオウドウがいた。
「待ってくれ」
もう、動いてはいけない。
伝説からの一撃は、他のポケモンの攻撃とは一線を画している。その状態から復活したとしても、すぐさま戦闘できるような状態にはならないだろう。
「ダメだ」
きっと、彼女は再び立ち上がってしまう。
いつかの夜に、語った夢の話を、きっと彼女は覚えている。ジムチャレンジから何十年もずっと共にいた相棒だからこそ、戦うだろう。
零れるように発されるローズの制止も振り切って。
倒れたダイオウドウの眼前まで転がった「元気の欠片」が光り。
静かに、ダイオウドウは立ち上がった。
パオオオオン、と咆哮と共に巨体が駆ける。なけなしの体力を振り絞って。
「元気の欠片」による回復は万全ではなく、これ以上、瀕死の身体を無理に動かせば――。
「死んで、しまう」

ルリミゾに攻撃が向けられる。
ただ、ルリミゾは咄嗟に振り返り、驚愕の表情で固まっていた。
反応したのは、ルリミゾの従えるポリゴンZ。
ダイオウドウの巨体から放たれる攻撃を防ぐため、主に仇なす敵を倒すため。
無感情に、光線が放たれた。
――殺してしまう。
ルリミゾは、スローモーションで動く光景の中で、頭でそれを理解していた。
しかし、もう制止はきかない。そして、殺すか殺されるかの状況であることも確かだった。
どこか、諦めにも似た感情でそれを眺めていた。
対立した時点で、いつかはこうなることは明らかで。
手を血で汚すことになっても、成し遂げなければ、費やした時間、重ねた努力、得た協力に報いることができない。
（ごめんなさい）
せめて、自らの背負う罪に向き合おうと、放たれた光線を見た。
――それと同時、視界の端から光線に割り込む、小さな、小さな影が見えた。
よく、知っている姿だった。
ぴかり、とその小さな身体で『光の壁』を貼って、光線が天井へと逸れていく。
ポリゴンZの攻撃を、上手く受け流し逸らすほどの技量。
正面から見るのは初めてで、いつもその小さな背中を頼って戦っていたのを覚えている。
天井に空いた穴から、瓦礫が落ちる。
同時に、雷の鳴る赤黒い空から光が差し込む。
清潔に手入れされた毛並みはつやつやと光って、ぼんやりと暗いエネルギープラントでもその白い姿はよく見えた。
「ぐふ」
チラチーノ。

ジムリーダーとして従えてきた相棒が、そこにいた。
「ポケモンまで置き去りにして、何してんだよ」
よく、知っている声だった。
ジムトレーナーのノマが、そこに立っていた。
キュウコンとダーテングに並び立って、鋭い視線を向けていた。
振り切って屋上へ逃げようとしても、ルリミゾの足はぴくりとも動かせなかった。築いた繋がりが、心に、足に、絡みつく。
別れはすませたはずだったのに、どうしても、動くことができなかった。
「……さぁ、アンタには関係ない話でしょ」
辛うじて口から出たのは、そんな言葉だけだった。

67―幻によろしく

びゅう、と天井に空いた穴から風が吹く。
壁や天井の破片がカタカタと揺れる。
それでも、地下に残された三人は誰一人動かなかった。
「ッ……」
ボールに手を掛けたまま、硬直するルリミゾ。
目の前の光景が信じられないでいるノマ。
打ちひしがれて、膝をついたローズ。
三者それぞれが、それぞれの理由で動けないでいた。
ノマは、言葉が出なかった。
行方をくらませていたこの女に、何を求めていたのか。
どうして、ノマはこの女を追いかけたのか。
自分自身でもわからないまま、息を切らして見つめていた。
風が体温を攫っていく。汗が、ぽた、と落ちるたびに、頭が冷えていく。
そうして落ち着きを取り戻して、ようやく絞り出した言葉は、縋るように吐き出された。
「嘘だったのか……？　ジムのことも、夢のことも……」
ルリミゾはノマに目を合わせずに、その水色の髪をくしゃりと掴んだ。悩んでいるような、苦しんでいるような。どうしようもなくて、空いた手が髪の毛を自然と掴んだようだった。
はぁ、とひとつ息を吐いて、手に持ったボールを見つめながら。
「それは――」
ルリミゾが口を開いた瞬間だった。
視界の端から、黒い影が。
バサ！と羽ばたいて、ルリミゾの答えを待たずに。
ルリミゾを連れ去った。
「は？」
呆然、虚を衝かれると形容するような表情で、ノマは立ち尽くして

いた。
薄暗い天井の穴に消えていく紫色を見た。
クロバットが、ルリミゾを掴んで飛び去って行くところだった。

雨粒がルリミゾの頬を打つ。風に身体は吹き曝しだ。
「……」
どうして、とは問わなかった。冷静さを欠いたルリミゾよりも、クロバットの方が目的遂行のために動けていたからだ。
目標はすでにタワー屋上に移動しているうえ、天井に空いた穴から簡単に離脱できるようになっていた。
もしルリミゾが冷静でいて、ノマ以外の追手と対峙していたなら、クロバットに離脱を指示していただろう。
――きっと、これが最善だったのだ。
ルリミゾの迷いを連れて、クロバットは空を駆ける。
雷が鳴る。心が軋む。
涙は出ない。雨が降っている。

「クァアァッ！」
その鳴き声は、はるか後方からルリミゾに届いた。雷鳴と雨音の隙間を縫って、いつも聞いていた鳴き声が聞こえた。
「ウォーグルッ!?」
振り返ると、おおきな翼と人影。
ゆっくりと羽ばたきながら、大空の戦士が追ってきていた。ぶらさがるノマと、その肩に乗ったチラチーノを引き連れて。
狭い洞窟で獲物を仕留めるために進化したクロバットと、大空で獲物を連れ去るために進化したウォーグル。人を連れた状態でどちらが速いかは明らかだ。
ルリミゾの決心を揺らがせるかのように。冷静な判断を奪うかのように。追手が迫っていた。

ノマ自身、このままルリミゾを追って何がしたいのかわからなかった。

捕まえたいのか、攻撃したいのか、それとも何かを問いたいのか。

「うおおおおッ！」

「クァア！」

ただ雨風を突き抜けて、その背中を追う。

これまでそうしてきたように、我武者羅に突き進んでいた。

ウォーグルの鳴き声に振り返ったルリミゾの驚いた目。

「――」

と、こちらを一瞥したルリミゾが何かをクロバットに指示しているようだった。

風雨と雷鳴で内容は聞き取れなかったが、対処できるように心の準備をしたとき。

ルリミゾが窓ガラスに向けて飛び込んだ。

「なッ!?」

まるでアクション映画のワンシーンのような奇行。

しかし同時に、合理的で追手を振り切るための一手だとノマは悟った。

ガラスの破片も、ダイブの衝撃も問題にはならない。なぜならルリミゾは念力の使えるドータクンを連れているからだ。そのまま非常階段から、ドータクンの念力の補助を得ながら駆け上がるつもりなのだろう。フィジカルに自信のあるルリミゾらしい振り切り方だった。

ならば、同じようにドータクンを連れているノマが採る選択肢はひとつ。

「ドータクンっ！頼むぞ！」

ノマのドータクンは、ルリミゾのように人を補助する訓練もしていない。ぶっつけ本番。

それでも、ノマはその背中に追いつくために、ポケモンをまるで自分の身体の一部のように捉えて動こうと決めた。

信用・信頼の一歩先へ。

「ウォーグルはそのままクロバットを追ってくれ！」
「クァア！」
そのまま大きく窓ガラスに向かって飛び込んだ。
目を瞑って、ドータクンを信じてルリミゾと同じ階層に突っ込んでいく。
ガラスの割れる音、風を切るような速度の浮遊感。
しかし、痛みも衝撃もない。
目を開けてみれば、わずかに身体が浮遊して、ドータクンと共にゆっくりと着地するところだった。
「よし、……よし……！」
追えている。
遠かった背中に、近付いている。
その実感が、命懸けで渡った橋の達成感をより大きくする。
そして一呼吸おいて、ルリミゾの姿を探そうと顔を上げたとき。
既にルリミゾは目の前にいて。
「鬱陶しいのよ」
横ではポリゴンZが光線を溜めて踊り狂っていた。
水色の髪が揺れる。目の下のクマと、ぼさぼさの髪が、彼女の心身の状態を表していた。それがやけにはっきりと見えた。
そして時間もゆっくりに、音も光もスローモーションになっていく。
まるで走馬灯だと、ノマは思った。
「ッ冗談じゃねえ！チラチーノ！」
「ぐふ！」
幾度となくノマを苦しめてきた『光の壁』が、一転何よりも心強く感じられる。
光線が放たれると同時、大きく飛び込むように前転して、並んだ仕事用の机に身を隠す。
衝撃で何台ものパソコンが吹き飛んでいくのを横目で見て、寒気を感じながら走る。
チッ、という大きな舌打ちの音がオフィスに響く。

（苛立ってる……てことはこの状況は想定外……。しかも、わざわざ待ち伏せして潰しに来るのはさっきのクロバットの判断と矛盾している……！）

状況に反して、驚くほど冷静にノマの頭は働いていた。

「結局、ナックルスタジアムで戦うことになるなんてな」

「……？」

ルリミゾの鋭い眼光は、発言の意図を問うているようだった。

「忘れたのか？お前がジムリーダーで一位を獲って、このスタジアムで俺の挑戦を待ってくれるんだろう？」

「……！」

それは、初めて会った日に交わした約束。

それすら思い出せないほどに、ルリミゾは平静さを失っていた。

「なあ、どうしてだよ。あと少しで一位だって狙えたじゃねえか」

キュウコンとダーテングを繰り出しながら、問いかける。

「何か事情があったとしてもさ、うちのジムで相談を――」

「それ以上、踏み込んで来るな……！」

遮ったのは、今まで聞いたことのないようなルリミゾの低い声だった。

「そういうしがらみが鬱陶しいから黙って出たのに……！折角クロバットが引き剥がしてくれたのに……！」

目の下の隈がやけに目立って見えた。

髪の毛に艶はなく、ばらばらと揺れていた。

「何やってるんだろ。あはは」

ルリミゾがそのボールを取り出したとき、ノマのトレーナーとしての平凡な嗅覚さえ警鐘を鳴らした。

得体の知れない何かがいる。

この世界とは根本から異なるような、理解不可能性を持った何かが来る。

「あなたのように速ければ、こうして過去に追いつかれることもなかったのかな」

「ダーテングッ！キュウコンをカバーしろッ！」

「ねえ、全部振り切って」

ボールが開いて、光が漏れ出たその瞬間。
ノマの真隣を何かが通り抜けて、数瞬遅れて衝撃に身体が揺れた。
破裂音のような、打撃音のような、鈍い音が後ろから聞こえた。
「キュウコン……？」
蹴りが、キュウコンを磔にしていた。
長い脚はまるで女性モデルのようにすらりと。生理的嫌悪感を伴う触覚の動きと、無機質にこちらを見つめる瞳。病的に白い姿は半透明のヴェールに覆われて、ある種の整った美を表現していた。

「おねがい、フェローチェ」

ノマに与えられた舞台は、ただのオフィスの中。
人知れずローズが戦った薄暗い地下・エネルギープラントでもない。今、英雄のダンデが戦っているような、ガラルで最も歴史ある塔の上でもない。
ナックルスタジアム上層の、どことも言えないような階の中。誰かが日常の中で仕事をしていた場所だった。
どこでもない、ただの通過点。
キュウコンが瀕死のいま、残された「日照り」が消えるまでに決着をつけなければならない。
傍らには相棒のダーテングと、何度も戦ってきたチラチーノ。
「……上等だ」
対峙するは、未知なる生物　ＵＢ：Ｂｅａｕｔｙ。
憧れに手を伸ばした青年の、その決着への幕が開いた。

物語のどこにも載らないような、名も無きジムトレーナーの戦いが始まった。

68―努力の果てに

ギンガ団幹部（ジムリーダー）　の　ルリミゾ（ロベリア）が
勝負を　しかけてきた！　▼
「ッ……！」
ノマの思考が巡る。
眼前の得体の知れない生物、そのタイプは何なのか。
そもそもタイプという枠組みが当てはまるのか。
おそらく名前はフェローチェ――ルリミゾがそう呟いていた――
なんて思考が混乱して、ノマは完全にフリーズしてしまっていた。
（今まで見てきた生物とは何か違う……！）
規格外のスピード、攻撃力、そして無機質ながら生物として完成された美の肢体。
初見で凡夫が相対するには、あまりにも異質な存在だった。
だから、才能溢れるチラチーノが先に動いたのも当然のことだった。
「ふッ！」
即座にフェローチェに向かって放った『じゃれつく』。
いままで一度も手合わせしたことはなくとも、ルリミゾとノマの会話、そして天性の戦闘勘で弱点を見抜いていた。
「かぶりん」
しかし、フェローチェは、するりと這い回るように回避してゆく。
（じゃれつく!?　てことはフェアリーが弱点なんだな!?）
格闘タイプか悪タイプ。
研鑽に励んできたトレーナーであるノマは、チラチーノの行動を切っ掛けにして、思考の健やかさを取り戻していた。フェアリータイプが効果抜群のタイプは三つ。悪、格闘、ドラゴンである。見た目・性質からしてドラゴンタイプはありえない。いまひとつ絞り切れないまでも、ぼんやりと考えられる可能性を虱潰しに脳内で浮かべた。
格闘タイプであれば、より人に近い姿だ。悪タイプであれば、黒っ

ぽい獣に寄る傾向がある。
　つまりは、どちらか単タイプではなく、複合タイプ。
（複合だとすればもう一方は……虫、岩、エスパー、地面、毒、草、電気、ノーマルあたりだろうな）
（ゴーストや鋼じゃねえのは明らかだ。水棲生物が陸上でこんなに強いハズもない……）
「ッダーテング！狙われてるぞ！」
　恐ろしい速度での『とびかかる』がダーテングに迫る。
　生理的嫌悪感を掻き立てる、おぞましい動き。かさかさと動く姿に、ノマは全身が粟立つのを感じた。
「ダァッ！」
　しかし、ダーテングもまた猛者。
　この晴れのエネルギーが満ちた場において、唯一フェローチェと競り合う速度を持った生物である。
　寸前まで引き付けて、リーフブレードでの反撃。
　しかし、効果はいまひとつだ。
（草タイプが効いていない……！虫、毒、草のどれかだ！）
　虫タイプの技を使ったということは、それに相反する草タイプの可能性は薄れる。毒タイプなら、最初から毒を用いた戦いをしているはず。
「虫／格闘、あるいは、虫／悪……」
　ちらりとルリミゾを一瞥。しかし、ルリミゾは俯いて、髪に目が隠されたままだった。
「ご主人サマが使い物にならなくても賢いヤツじゃねえか！」
　チラチーノは、飛行タイプの技を使えない。だからこそ、唯一この場で飛行タイプの技を使える可能性のあるダーテングをわざわざ狙ったのだろう。定石からいえば、いずれ日照りの消滅によって動きの遅くなるダーテングから仕留めに行く理由はない。
「……うるさい」
「聞こえねえなあ！黙ってジム出て行きやがって。もっとハッキリ言えよ！」

「……うるさいって言ってんのよ！『破壊光線』！」
精神的動揺。
誰よりもその弱さを知っているはずのルリミゾが、叫びながら、隈の濃くなった顔を晒す。
叫びに応えるように、電子音が鳴り響き、光と共に空間が軋む。
「チラチーノ！ドータクン！『光の壁』！」
ふたたびの二枚体制。
明確な拒絶を以って放たれたその光線を『光の壁』が受け止めて消滅させてゆく。隙を見て飛び込んで来ようとするフェローチェを牽制しながら、ダーテングは位置取りを変えて立ち回る。
しかし、相対するはＵＢ：Ｂｅａｕｔｙとポリゴンｚ。特殊攻撃と物理攻撃に特化した相手に、いつまでも防戦一方では削られていくばかりである。ノマは３対３のバトル経験などなく、ましてや相手は通常のバトルでさえ敵わないルリミゾ。だから、ノマは真正面から勝つことを諦めた。
ベルトの両サイドにぶら下げたボールから、三つをさらに取り出した。
「イエッサン！エレザード！ズルズキン！」
ノマは、トレーナー込みの戦いを放棄した。
（バイウールーは圧力不足、カビゴンは出したらここが崩落しちまう……。アイツのドータクンが動かないのが妙だが――！）
そこまで思考したところで、ノマはルリミゾが戦術面において、数段上で思考していることに気が付いた。
ノマのドータクンが『トリックルーム』を使った瞬間、フェローチェの素早さに頼り切ったこの盤面はひっくり返る。そこで、即座にルリミゾのドータクンが『トリックルーム』を返してリセットするために待機させていたのだ。だから、お互いに動かすことのできない駒となっているのだ。
「フェローチェは俺とダーテング、チラチーノで倒す！だからズルズキン、エレザード、イエッサンであっちを抑えてくれ……！」
土俵を降り、ポケモンに半分を委ねた。

数的有利による強引な選択の押し付け。乱戦と化した戦場において、ルリミゾはフェローチェとポリゴンZの両方を指示し続けなければならない。

この戦い方が通れば、ノマは二匹のポケモンの指示に集中するのみで、3vs1の数的有利な戦場は気に掛ける必要がなくなる。

そうしてボールを投げたとき。

「総出で邪魔しようってこと……？そんなの通すわけないでしょ」

苛立ちを隠そうともせず、ルリミゾが呟く。

「フェローチェ、蹂躙しろ！」

ポケモンは、環境によってその姿かたちを変える。雪景色に紛れるためや、砂漠に紛れるため。あるいは溶岩地帯の熱さに耐えるためや、海水温の変化や日光の量に適応するため。

わからないのは、フェローチェというポケモンがここまでの速さを獲得しなければならなかった理由――。

音すら置き去りにするような速度で動く必要が、なぜあったのか。

ウルトラビーストの生態は謎に包まれている。

瞬き（まばた）の一瞬だった。

ボールから飛び出た瞬間のエレザードの首に蹴りが突き刺さり、一撃で瀕死に追い込み――続いてイエッサンに向かって回し蹴りが放たれていた。

ノマがその攻防を認識したのは、ダーテングが扇子を交差させてイエッサンを庇った瞬間だった。

「エレザードッ！」

「倒れたポケモンの心配してる場合？」

きら、とポリゴンZが光線を放って、チラチーノが即座に前で『光の壁』を展開する。何度目か繰り返された攻防である。

「くッ……」

ズルズキンの威嚇すら意に介さず、再びフェローチェが加速し始める。

しかし、意外なほどノマの思考はクリアに澄んでいっていた。
（ああ、きっと、今日、この日のために俺たちのバトルはあったんだな）
才能への迷いや、勝負の世界に身を投げることの躊躇い、挫折の苦い思い出、それらすべてがゆっくりと脳内を駆け巡った。
どれも、乗り越えて今のノマがいる。
やるべきことはひとつ。
今のルリミゾなら、きっと乗ってくるだろう。
「ポリゴンZを落とせ、ズルズキン！イエッサンとチラチーノはその援護だ！」
「はァ？」
不思議なほど澄んだ気持ちで、ノマは一世一代の大勝負に出た。
つまりは、フェローチェとの一対一宣言。
「ダーテング！アレをやるぞ！」
「ダァッ！」
天候「日照り」の下でのみ効果を発揮する特性『葉緑素』。ダーテングの全身が活性化されて恐るべき速度を手に入れている今、しかし、ノマのダーテングはピタリと動きを止めた。
「いい加減、鬱陶しいのよ……！」
動きを止めた以上、フェローチェにとってダーテングは脅威でなくなった。ポリゴンZに迫り来るズルズキンへと標的を変えればルリミゾの勝ちは確定する。くだらない愚策だ。
しかし、ルリミゾは「捻じ伏せたい」と思った。思ってしまった。
凡才の我儘に付き合う必要はない。それなのに、戦いを好む天性が、今までに積み重ねてきた時間が、この戦いを正面から制することを望んだ。
一手、詰みが遅くなったところで勝ちに変わりはない。
だから、ヒステリックに形相を歪めたまま、ルリミゾはフェローチェに合図を送った。
「やれ！」
「かぶりん」
目で追えなかった速度が、さらに加速する。右、左、天井、背後……。

残像すら置き去りにして、攪乱しながらの『とびかかる』。草／悪タイプのダーテングに当たってしまえば、恐ろしいほどのダメージになることは必至。

素早く、しかし走馬灯のようにゆっくりと『とびかかる』が迫る。

しかし、先に間合いで動いたのはダーテングの扇子だった。

「『辻斬り』」

元々は、素早いチラチーノを仕留めるために、秘密裏に磨いてきた大技。

特性『葉緑素』で限界まで活性化された全身の細胞で、わずかな空気の流れを知覚する離れ業。遥か昔、まだカントーの人間が刀を握っていた頃、達人が間合いにて抜刀する太刀。極限まで研ぎ澄ました集中によって、一振りに尋常ではない威力を込める技。

秘伝技『居合切り』を取り入れた『辻斬り』。

一瞬に振り下ろされた扇子。

――されど、この世における異物たるウルトラビーストの速度には届かない。

「遅い」

人は、速度に憧れる。人間が発明するあらゆる乗り物は、速度への憧れが形を得たものである。ポケモンと同じ速さで動くために、わざわざポケモンに掴まって移動する。ひ弱な人間は、何よりもわかりやすい〝速度〟に憧れた。

（才能には敵わない。あなたがどれだけ努力したって、あたしには追いつけないでしょう。闘争に慣れていないフェローチェは、生まれ持った物だけでこの世界のポケモンを圧倒している）

まさに空振り。

（さよなら、キルクスジム）

そう思って、ルリミゾが目を閉じようとしたときだった。

振り下ろされたダーテングの扇子、剣先がピクリと動いた。

ダーテングは、飛行タイプの技をいくつか習得できる。『エアカッター』、『エアスラッシュ』、『とびはねる』……。前者二つは特殊技で、ノマのダーテングは得意としていない。『とびはねる』がこの状況で

使えないのも明らかだ。

さて、残るひとつの技は、原義で使われることがほとんどない。ただ、ひこうタイプの力を乗せただけの斬りつけを技とするばかりである。

だから、ダーテングがこの状況で用いたこの技は、まさに原義での使われ方であった。

一度大きく振り下ろした太刀を、そのまま返して振り抜く技。

またの名を――

「――『燕返し』」

音はなかった。

置き去りにするほど速い決着だったからだ。

効果は抜群だ。

ふらり、と世界の異物が打ち倒された。

６９―それすらできない

倒れていく。
スローモーションで倒れていく、薄ら白の美。
この世界における異物。余所者。理解不可能性。他者。はぐれ者。
あの子は、私。私は、あの子。
迷い込んで、どこにも行けずにいる私たち。
（だけど、私は全てをフェローチェに委ねてしまった）
ダーテングの鋭い一撃が、細く柔らかい身体を斬り伏せた。
折れてしまいそうな薄白を目で追った。
その幻想的な姿と相まって、ひどく儚い光景だった。
狭いオフィスと不釣り合いな美しさが、崩れていく。桜が散るような、そんな妖しさがあった。
「あ、」
現実味はなかった。
決行から今までずっとぼんやりしていて、とてもまともではいられなかったから。
すべてがひどくスローに見えて、内的意識だけが淡々と動き出す。
何が悪かったのだろうか。
指示？　決行のタイミング？　意地を張ったこと？
ああ、私は全てを委ねて、現実から逃げようとした。
関係性を理解していないであろうフェローチェに、代わりに清算してもらおうとした。
きっと簡単に勝って、私を楽に帰してくれると思ったのだ。
共に戦った相棒たちに足止めされることなど、考えたことがなかったのだ。
正面から、本気で瀕死にさせる指示を細かく出せるはずがなかったのだ。
苦しみは覚悟したところで避けられない。
分かっていた。分かっていた。

だけど、
「まって……」
地面に倒れ伏すフェローチェ。
流れていた血が全部抜け出てしまったかのように身体が冷えていく。
かくん、と脚の力が抜けて、鈍い衝撃が膝を打つ。
視線が一段と低くなる。
そうして、戦い争うポケモンたちを見た。
『トライアタック』を放つポリゴンZ。苦し気に『光の壁』で受けるチラチーノ。サイコキネシスを放つイエッサン。
クロバットとウォーグルが、互いを傷だらけにしながら絡み合って飛んでいた。
この光景を作り出したのは、私。
――迷うな。
覚悟が揺らぐ。
「なあ、理由を……、理由を聞かせてくれよ」
――耳を貸すな。
「ジムのことも、カシワさんのことも、夢のことも全部ウソ！」
「いまのあたしだけが、本当！」
半狂乱で、紫色のボールを掴んだ。
そのとき。
「……」
チラチーノと目が合った。
戦闘のさなか、ただ、悲しそうに此方を見ていた。
過ごした日々は、嘘ではなかったのに。
――ピピピピピ
電子音が無機質に響いて、ポリゴンZから光線が放たれた。
私の指示で戦っている最中だから。
零れた水は戻らない。吐き捨てた言葉も、取り消せない。
放たれた光線も、止まらない。
無抵抗に、チラチーノは光線に直撃して吹き飛んで行った。

隙を見せれば当然、命取りとなるのは知っているだろう。
避けることも、防ぐことも、本当ならできたはずなのに。
それでも私を見つめていたのは。動けなかったのは。
「あ、違うの、」
「嘘じゃない、嘘なんかじゃ、」
私が吐き捨てた言葉のせいじゃないか。

決着は、感情の激しさに反して静かなものだった。
フェローチェが倒れ、チラチーノが吹き飛んだ。
そうして、ルリミゾは戦える状態ではなくなっていた。
誰もが、自然と動きを止めていた。
ポケモンたちは、戦いたくなかったから。
状況を解さないポリゴンZは『破壊光線』の反動で動けず。
瓦礫に埋もれたチラチーノを必死に掘り起こすルリミゾを、黙って見守っていた。
爪が割れるのも気にせず、指先を血まみれにして、一心不乱に瓦礫を退ける。
そして漸く、瀕死の小さな身体を抱きかかえた。
「……戻って」
ポリゴンZとドータクンをボールに戻して、ルリミゾは戦いを止めた。
ノマは何も言えずに、不似合いなリュックの肩紐を握るばかりだった。ポケモンたちに戦いの意志がないことは明白で、あとは人間たちの言葉の問題だとノマは理解していた。
淡々と、幽鬼のように、ルリミゾはポケモンたちの治療を始めた。

激しく戦っていたとは思えないほど、二人は静かだった。
「……」
沈黙が、二人の間を風になって通り抜ける。
戦いによって空いたあちこちの穴から、嵐がごうごうと唸っている。赤黒いグロテスクな空と、薄らぼんやりと見える赤い光柱。世界が終わるなら、今日以外にありえないだろう景色だった。
ノマは、外の状況が一刻を争うのをなんとなく直感していた。
（ローズ委員長が何か起こしたのはわかる。だけど、ルリミゾは何をしてたんだ……？　委員長を止めるためなら、俺から逃げる必要もないはず）
ノマは、わからないことを、わからないままに推理した。とても、たかだかひとりのジムトレーナーに理解できる問題ではないことだけはわかっていた。

「あぁ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」
薄灰色の、手入れされて艶やかなチラチーノの毛が、ルリミゾの血でべっとりと汚れる。
それも構わないで、ルリミゾは手当をし続けた。
そして、あらゆる傷ついたポケモンに手当をして回った。
一度もルリミゾはノマに顔を見せなかった。
時折鼻をすする音と、目元を擦る仕草があったような気がした。ノマは、追求することも、考えることもしなかった。
心を整理する時間が必要なのだろう。
とうに擦り切れていることは目に見えていたが、ノマは待った。
そして、最後――軽傷だったウォーグルに包帯を巻き終えるのを見て、問いかけた。
「ワケを、教えてくれよ」
「……」
震える唇は、何かに耐えるようにかたく結ばれていた。
拒絶ではなく、躊躇。
「俺は、理由が知りたいだけだ。お前のことだから何か考えてるんだ

ろうし、止める気もない」
諭すように、ゆっくりと言葉を重ねた。
「でも、あんな隙を見せるほど憔悴するくらいならさ、何か相談してくれよ……」
「同じ町の、ジムのメンバーだろう……？」